十月一日

女學世界

第十一巻

第十三號




『アラこんな歌が書いてあるわ
明け暮れに忘れず今をレートもて
化粧する人みな美しき
色白く肌理細やかに膚清く
いとも麗はしレートの化粧
『みんな私しの心持と同なじよ
乳白化粧水レート

女學世界 第拾壹巻第拾參號 十月號目次



跡見玉枝女史書　吉住春子著

實用造花自在

吉住春子著

實用造花圖譜

總クロース製
金文字入美本
定價壹圓廿錢
郵稅八錢

四六二倍判
全頁色彩刷
正價壹圓
郵稅六錢

造花原料

東京九段坂

吉住商店

電話番町二〇五六番
振替東京六六七九番

發行所　吉住商店

大賣捌所
東京神田區神保町　東京堂
東京日本橋本石町　至誠堂

本書内容御入用の方は實費として郵券五錢造花原料營業目錄御入用の方は郵券貳錢封入東京九段坂吉住商店宛申込まるべし

女(いの二)

宮中御歌所寄人
中邨秋香先生著

文鑑 千草の錦

増訂八版

菊判和裝美本
定價金七十錢
郵税十錢

本書は男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる最良の文鑑也

帝國大學文科敎授
宮中御歌所寄人 佐々木信綱先生著
宮中御歌所寄人 大口鯛二先生書

女子消息文のゆきかひ

鏑木清方意匠
木版上半紙摺
定價金六十錢
郵税六錢

本書は現代歌學の大家佐々木信綱先生が多年苦心の末に成りたる消息文を優雅なる書體の師として鳴る大口鯛二先生が習字用にと特に書かれたるものなり、先生が獨得の艶麗なる文章は簡單にして明瞭に而も文例盡く振假名付となし直ちに採りて實用に適す、高尙優美なる製本は文と書と相待ちて錦上更に花を添たるが如し、世の令孃淑女方必ず一本を机上に備へざるべからざる絶好の女子消息文範なり。

女子大學校敎授 鹽井雨江先生著
學習院女學部敎授 小野鵞堂先生著
女子大學校敎授 中村春堂先生著

新體女子用文

大倉耕濤意匠
木版上半紙摺
定價七十五錢
郵税八錢

本書は作者鹽井雨江先生が在來の書翰文の陳腐、冗長、輕薄、無趣味なる弊を打破せんとの苦心に成るもの、詞藻の清新、眞情の流露、趣味の津々、眞に書翰文の好模範たり上欄には諸種の手紙の作方をも示さる書は斯道の大家小野鵞堂、中村春堂兩先生が靈妙の手腕を以て大字小字に書き分けられ特に振がな付にせられたるものにして其艶麗優美の筆は習字の龜鑑たり、斬新なる文筆と相俟つて明治新時代を飾るの花たるべし乞ふ江湖の令孃淑女方疾く机上の好伴侶として朝夕愛讀の榮をたまはらむ事を

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女學部敎授 小野鵞堂先生書

新編手紙

女子消息文の手ほどき

男子用 木版半紙摺無類の美本
男女各一冊
定價四十五錢
郵税六錢

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例

新編女子書簡文例

男子用 木版半紙 摺頗高尙優美
男女各一冊
定價六十錢
郵税八錢

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる、趣味あり繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同ぜずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を揭け書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文諸式と相俟て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番
振替貯金口座四千百〇九番
前川文榮閣

煉香油



パール

▲女學生の方は

必ず一度お讀みなさい

毛髪にパール煉香油を附けるといふ事は美髪にせむが爲めのお化粧とのみ誤解してはいけません、香油は髪の爲には與へなければならぬ最も大切なる事で此營養分が足りないと毛髪が老衰して早く赤毛、白髪となり又脱毛其他尖端が裂けたりいたします故に必ず香油中の模範品と稱せらるゝパール煉香油又はスミレ黒香油の使用を怠つてはなりませぬ

スミレ黒香油本舗

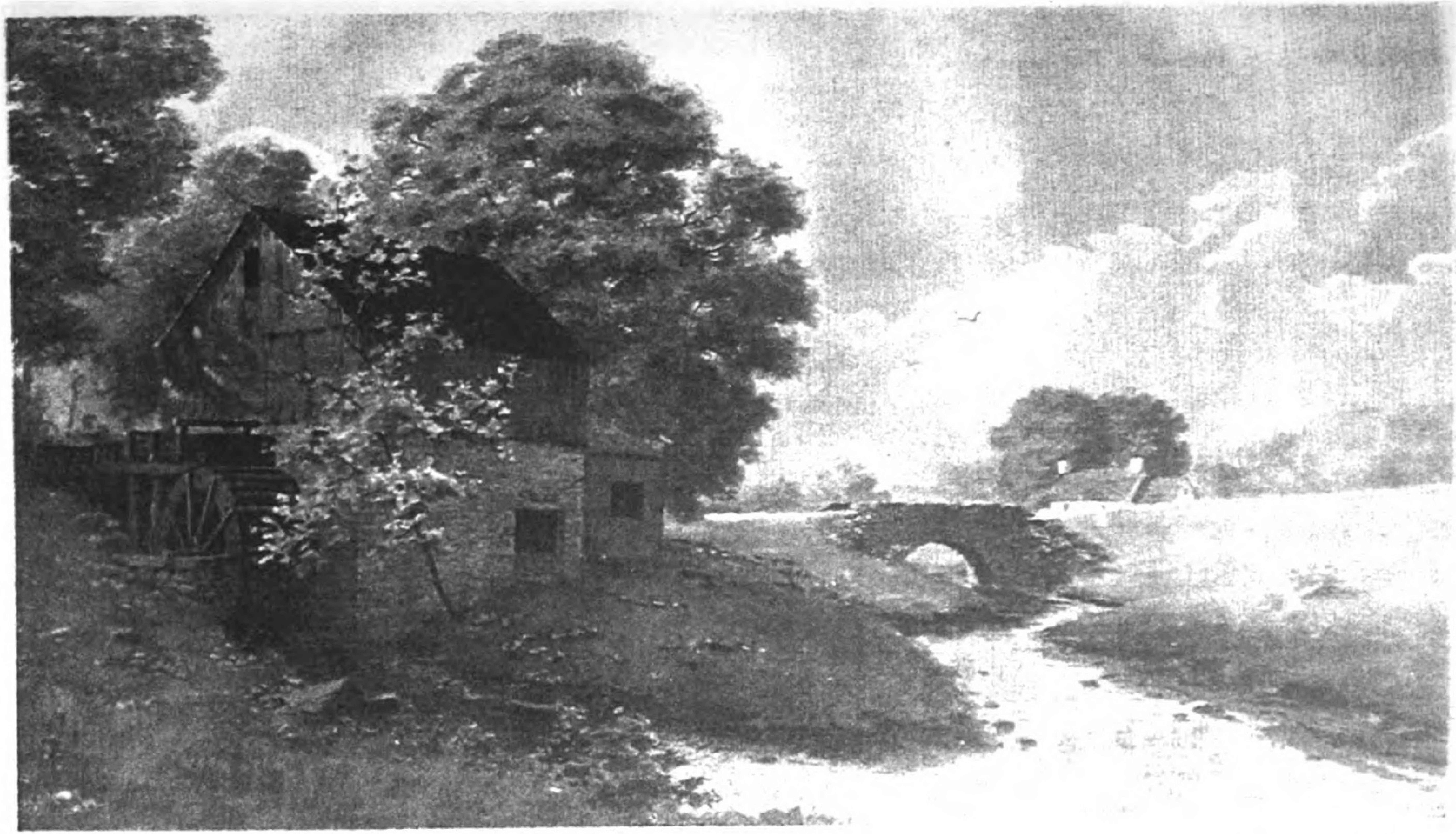
東京市日本橋區横山町三

平尾銑也商店

電話浪花百十番
振替東京百十番

女(いの四)

黃葉



田中製版所三色版

女(ろの一)

●●十月の卷發行●●

新婦人

本誌は絶對再版せず

第一年第七號　定價　一冊二十八錢郵稅二錢五厘　六冊前金郵稅共壹圓七拾錢

かへり咲　油繪極彩色……川村清雄筆

針のあと　誰家の遊俠兒か佳人をして空閨に泣かしむ（石版極彩色）…鹽崎逸陵筆

一笑百媚生　豐頰香膩滴らんとす　コロタイプ　實寫眞

閑院宮妃殿下●井上正詮氏夫人●伊藤男夫人●杉子爵夫人●勝伯夫人●阿部東京府知事夫人●大島男夫人●伊知男令孃●北村透谷未亡人　新歸朝者中島操子孃　糖業家保井氏夫人久子●丸山照子●大倉文二氏令孃文子孃●岩原謙二氏夫人武夫子●小寺氏夫人貞子●内山もと子孃●原六郎氏令孃●太田儀平氏令孃かと子●閨秀書家松林雪貞女史　女流木版彫刻師川村艶子孃●野口小蕙女史　嫉妬研究起草者檀花子女史同藤野愛子女史●下谷電話交換局別所ふく子孃同あい子孃●歌澤芝金女史　歌劇練習生木村駒子同山中貞子　小泉紫影孃●新藤若子孃●石橋法學士夫人德子●濱田さゆり孃●齋藤かつ子孃

嫉妬之研究

各方面より嫉妬のあらゆるものを研究したる名家の意見奇拔料峭の氣紙上に橫溢す

嫉妬と舊道德（大隈伯）法律より見たる嫉妬（花井博士）嫉妬は愛の興奮（源文學士）恐るべき嫉妬（田中舍身）嫉妬は女の武器（檀花子）嫉妬の味は苦い（青柳有美）嫉妬は愛の變化（藤野愛子）其他學界耆宿數十家の研究を滿載す

附錄　家庭日記

十月分　溫度表・晴雨表・獻立表　來客表竝に九星曆附

新婦人見本　郵券三十錢　賣捌所　全國著名の書林雜誌店

發行所　東京市本鄉區龍岡町　振替東京三〇五八番　聚精堂　電話下谷一六七二番　電話下谷四〇七九番



千代田香油

交際場裡に文明の美花を開かる紳士も奥さんもお孃さんも香り好き千代田香油に限るとの高評盛なり

定價
七十錢
三十五錢
二十五錢
十七錢

英國製スワン石鹸日本一手發賣元
東京日本橋區馬喰町四丁目

本舖 山岸三之助

振替口座東京二〇五〇〇番
電話浪花三七九三番

スワン石鹸

純良なる
家庭用浮石鹸
定價（二個續一本）廿二錢

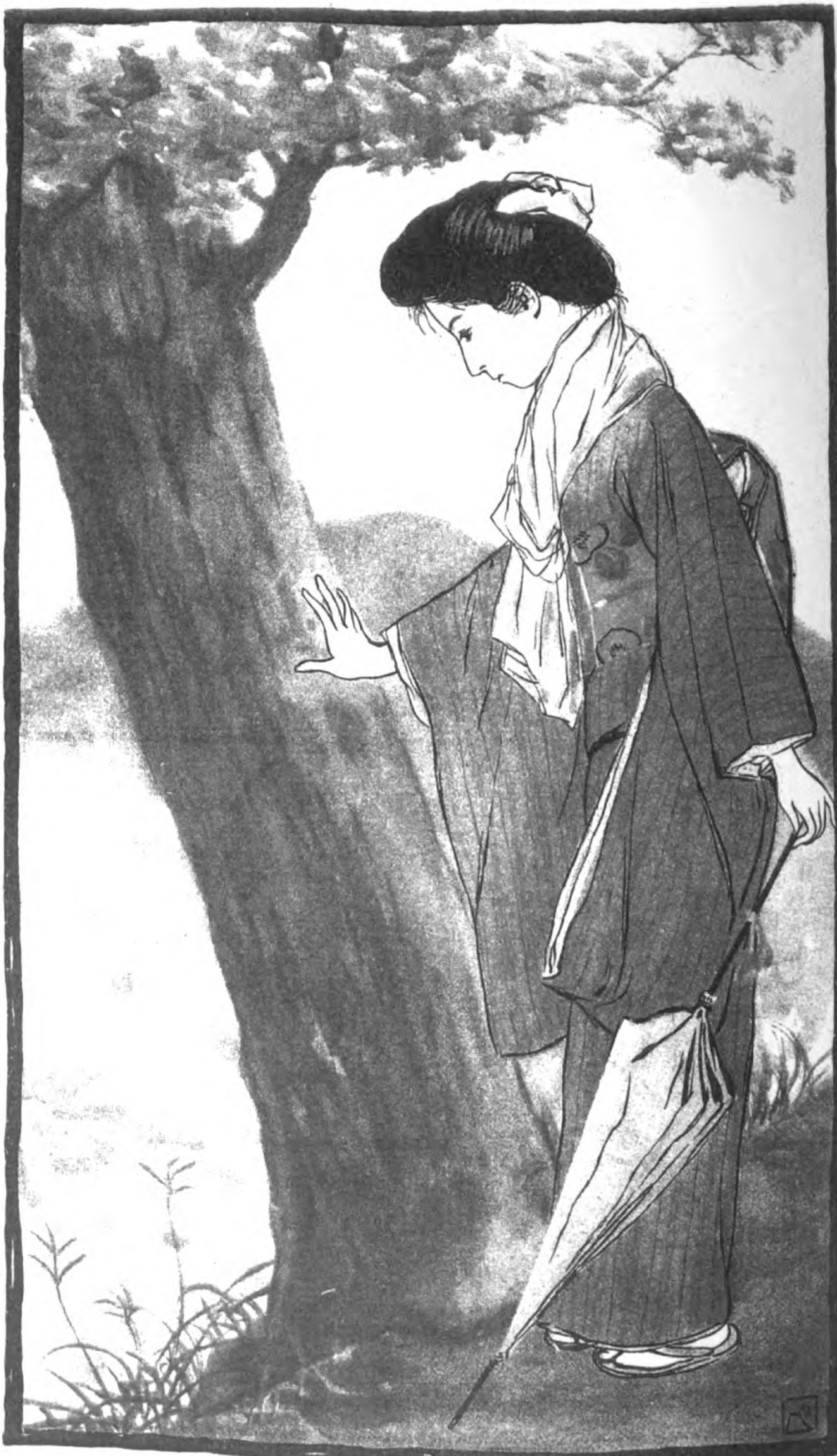
製造所
英國ポルトサンライト市
レバー兄器商會



英國製スワン石鹸日本一手發賣元
東京日本橋馬喰町四丁目
山岸三之助
電話浪花三七九三
振替口座二〇五〇〇

女（ろの四）

紅葉



日高島助筆


開業貳百六拾七年
内外國金銀名譽賞受領
米國太平洋博覽會
日英大博覽會に於て
最高名譽大賞受領
最上醬油
元祖
宮内省御用達
千葉縣銚子町
濱口合名會社
電話銚子二一番　振替口座五〇二一番

女子大學家政講義

（其の二）

會員募集！

東京小石川區高田目白臺 日本女子大學校通信教育會

新學期開講

會則附き 内容見本 申越次第 進呈

◎途中入會者の福音!! 第二回新學期は開れたり!!
家庭の和樂と、幸福なる生涯は家政講義に得らるべし開講以來空前の好評を博したるは本講義の優秀なる所以也、講述が如何に懇切に平易實際的なるか、科目の撰擇と解説の方法に如何に注意せるか、先づ内容見本によりて本會趣旨と講義録内容の一斑を知られよ

■入會の絶好機！特典あり！直に申込まれよ

發行所 東京小石川區久堅町一〇八 精美堂
電話番町九三二●振替東京二八三八

通經新劑
月やく下し
名藥リルピン

此藥は子宮を痛めず如何程長き月經止りも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひ速に**流經**す本劑は效能極て**峻烈**なるも身體に毒なくたやすく下る月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別精製貳圓參拾錢

色の白くなる
ハンドコロン溶液

本劑は歐米貴紳淑女粹士間に大高評を博したる新材料に依り組織したる新成液にして有觸たる白色藥と大に性狀を異にし**本劑の力**に依り皮膚の新陳代謝を盛にし且つ**漂白性**あるを以て其新陳代謝と共に次第々々に**白色艶美**となる 價A印並製壹圓 B印特製壹圓五拾錢

全治無痛
確證
ぢを治す
特效藥 Haemorrhoidal

本劑は近世醫學界の貴重なる新發見藥を以て座藥に調製したるものにして是れを肛門內に挿入するも少しも**疼痛を覺えず**體溫の爲め徐々適切に溶解して直接病患部に作用し內痔外痔疣痔裂痔脫肛又痔瘻の初期等痔病一切に對して**神效**を奏す 半劑八拾錢壹劑一圓五拾錢特別製二圓八拾錢

毛のはへる
毛髮生養液 原名ベグネス

本劑は最も進步せる發毛劑にして藥液を塗擦すれば皮下に吸收せられ毛根を刺戟し毛芽の發育を速にし完全なる毛髮叢生す又本劑は拔毛を止むる效能著しく又常に香油に混用すれば生際惡しきを直す●眉毛●口ひげ●其他すべて毛の乏しき人は速に試みられよ學理に適合せざる怪しき無名の賣藥に迷ふ勿れ 價並製壹圓卅錢特別製貳圓

注意
各藥共に小包料拾貳錢とラビョン●ハンドコロン●ベグネス●ぢの藥を御注文の方は外に小包實費三錢と都合十五錢藥價の外に拂込下され度 爲替は神田猿樂町局振宛

全治確證
わきが
新治療藥ラピヨン

本劑を塗擦すれば主ヶ分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織内にある**毒素**を**潔淸驅**逐し**惡臭**を**止**むる作用を有する最近發見の有力劑にして如何程劇烈の難重症も特別製を用ひよ忽ち臭氣を止め病根を全滅せしむ速に用て苦惱を脫せよ 內價七拾錢乙價壹圓卅錢特別製貳圓五拾錢

獨逸撰方效驗一夜に顯る
りん病
新治療藥キーロシ

本劑は最新の治淋藥にして急性慢性の淋病ぜうかちも速に輕快を覺え膿血次第々々に止り痛を止め輕きは一劑重きは二劑分服慢性には特製を用よ速に奏效す本劑を內服すれば強度の殺菌防腐液となりて小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を驅逐し人知れず病根を斷絕す輕症用六十五錢重症用一圓廿錢特製頑固症用貳圓卅錢

新治療藥 根治確證
梅毒
GINEL ギネール

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる新劑にして忽ち全身の毒も大小便にとり**如何なる劇烈の**梅毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこね●かんそう●骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必大效あり輕症は半劑急性重症は二劑用よ瞥て奏效す藥價半劑八拾五錢一劑一圓六拾錢二劑參圓

新治療藥
らい病
DERVIN ダービンの發見

本劑は最近歐洲の大家が最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服し得る樣幾多の實驗に鑑み丸藥となしたる者なる本劑に優る者なしとして其有效**確實**なるを試に一劑分丈け用ゐよ**必ず大效**あり一劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

理想的新劑
肺血精藥

本劑は故樫村醫學博士の處方に基き調製したる合劑にして根本的に病因を全治せしむる適中新劑なり末期の患者即ち既に肺臟の缺損せる者に向ては病の進行を止め患部を閉癒せしめ初期の人は七八日目より効顯れ一二ヶ月にて全く快癒せしむ 肺結核●肺炎●肋膜炎●喀血其他呼吸器病全治 半劑壹圓五拾錢壹劑貳圓八拾錢貳劑五圓特製七圓

專賣 東京神田區小川町四十
オリエンタル藥館



ピアノ・オルガンはまだしもヴァイオリンにてもこれを備へ難き方もあるならん然るに爰に「ユーホン」なる物出來てピアノ、オルガン、ヴァイオリンに於る世界の妙技を初め世界の大劇場に於る高名の聲曲を聴くべき機會を與へたり該器の價格は低廉にして音譜と共に全國最新式の蓄音器店に備へあり貴讀は之を購ふて家庭又は郊外に於ける幸福を進めらるべし

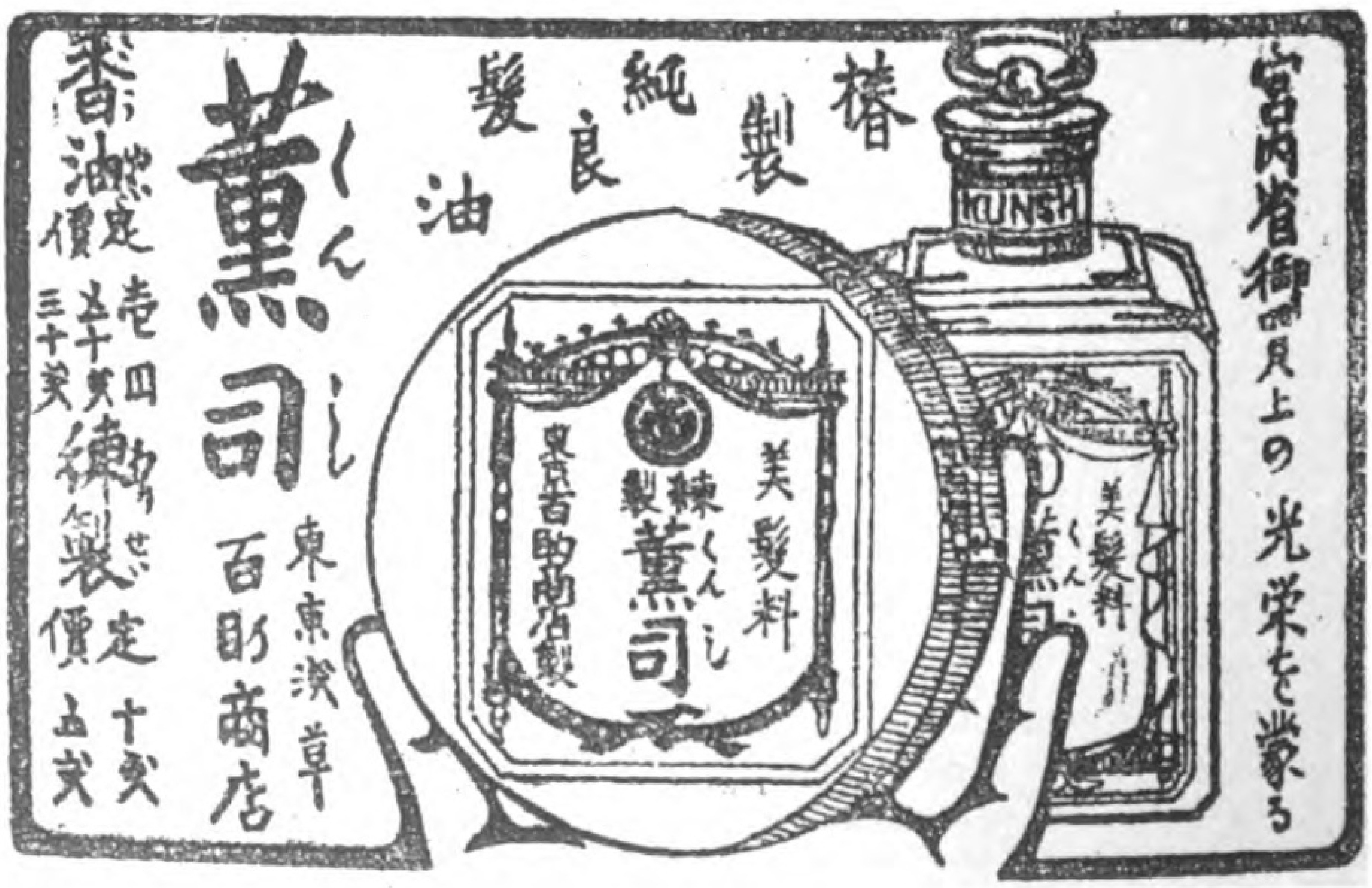


畫家の秋

冬物新荷着

婦人帽子
肩掛類
小供帽子
小供洋服
リボン
造花各種
ネグレツト
ボアー
其外
種々

東京銀座
三枝小賣部
電話京橋十一



女（にの一）

女界

一冊十五錢

▲如何なる場合も絶對に禁物　東京女學校長　棚橋絢子

▲苦痛の蔭に快樂あり……精華學校長　寺田勇吉

▲戰慄すべき一實例……大審院判事　今村恭太郎

▲心を新にして相信ぜよ　農學博士法學博士　新渡部稻造

▲日本は世界一の離婚國　衆議院書記官長　林田龜太郎

◎小説　雲……伊藤左千夫

◎小説　走りし妻……大倉桃郎

▲子供の寐巻と夜着

▲重寶な家具のいろ〳〵

▲衣服と色との關係

▲半襟の調和と美

▲十月の料理色々

▲京阪印象記　素莽生

▲英詩と理想の婦人　若月紫蘭

▲泰西名畫解説　瀧村霞山

▲初秋の新裝……

▲海外婦女界……

▲毛髪の美を保つ心得

▲石鹸の撰擇と價格の程度

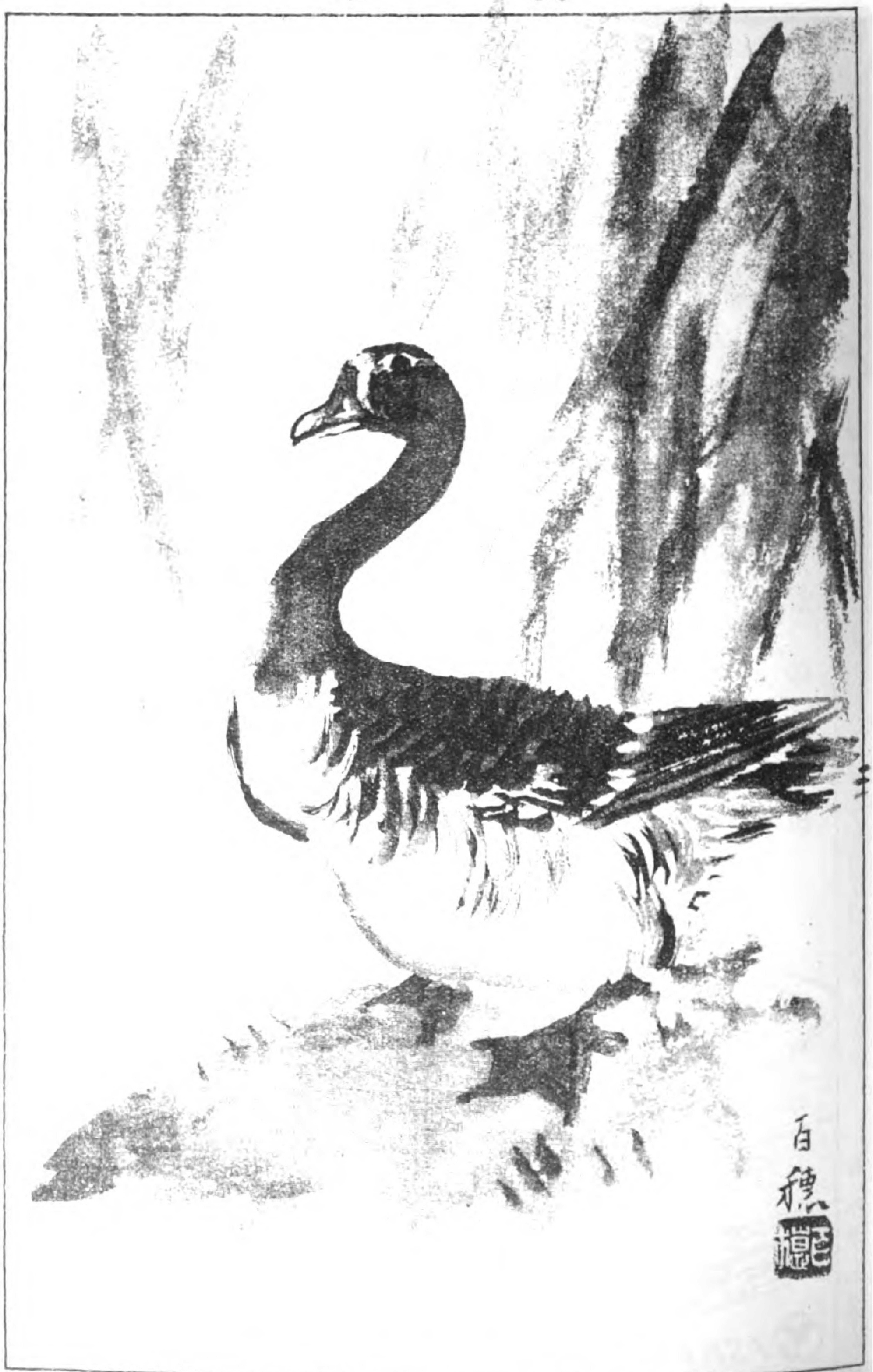
◎衣服を着こなす工夫と呼吸

▲產褥熱と産時の注意　大瀬醫學士

◎小兒の口中に恐しい病氣　豐福醫學士

女(にの三)

蘆雁



平福百穗筆

鳩



竹久夢二筆


秋の風情
黄菊白菊を花壇に愛するも、野菊山菊を郊外に賞するも、何れ秋の深みを味ふには變りなけれど、扨これを一括して、身儘氣儘に樂むには造花に加かず。而も其研究は今が好時季！
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
造花材料商 合資會社 天野卯兵衛商店
特長電話浪花(一六四三番)
振替口座(東京)四九七〇番

結婚媒約

御來談は午前に限る

書面御照會は返信料御封入の事

東京本郷區森川町一番地表北裏九〇

槇廼舍

●本法は

女髮結師安部歌子女史

多年の實驗を經たる證明秘法劑にして是迄の使用者を悉く滿足せしめたる奇劑なり往復端書紹介詳報す

ちゞれ毛くせ毛 毛はへうけあい

二大奇方劑

●東京市麴町區三番町六十七　**濟世園**

やせる藥

多血症●脂肪過多●中氣●便秘●酒ぶとり●凡てふとりすぎて御困りの人に害なく●やせて●中肉美容となる新藥なり試みたき方は郵券二錢送れ詳細報知す

東京市牛込區赤城元町三三

池田製藥所

あざ

●なまず●そばかす●にきび●ほくろ

いぼ全治保險の新藥發賣す三錢送れ說明書進呈す

東京市牛込區赤城元町

池田兵三郎

見よ●月經なき女子●める婦人

▲勿驚……藥力最精實…効能確保…有効無害…

●本劑は專門博士が學理と實驗より發見せられたる物其主藥は最新唯一の通經藥にて帝國大學病院及各病院にて專用する最良藥なり二三月の月經閉止り月經滯り經不順は一二劑にて必ず流下し四五ヶ月又は血塊にても特製或は別製分服用せば安心に忽ち流經す女子十七八歲になり月經なき人は二劑又每月月經困難は三日分にて通經す



藥價一劑六十錢二劑一圓十錢[illegible]送料各四錢宛

●**肥滿病新藥**（米國新輸入）

子供の折美愛と賞せられし人も年頃になりてより醜婦となる人少なしとせず本劑は獨乙ペンツオルト氏の發見藥にて脂肪多き人●ぶと〲ふとり●血太り●肉太り●酒太り●水太り●顏赤●にきび●ふき出物多き輕症一二劑如何程の惡性も四劑迄連服せば色は艶となり賢て美顏窈窕たる美人となる事を保證す肥滿性の人は試みよ

諸孃姉の福音



一劑一圓五十錢	三劑四圓卅錢
二劑二圓九十錢	四劑五圓[illegible]
	送料十錢

發賣元　東京々橋中橋和泉町　振替第壹〇六七七番

小宮愛生堂

婦人世界

拾一月一日發行 六卷第拾壹號 一冊十五錢郵稅一錢五厘 半年分郵稅共壹圓五錢 一年分貳圓五錢

發行所 東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 郵便振替貯金口座三二六番

新撰

女大學

一女は朝夕身のたしなみを忘る可らず

一大學白粉と大學化粧水とは鉛氣なく匂ひの貴き美顔料なれば常に之を用ふることを心がくべし



おゝはの四)

名流婦人



三井男爵夫人苞子

令嬢かゞみ



紳商（深川 黒田善太郎氏令妹愛子
紳商 青山）佐野令三氏令嬢よし子
紳商 新潟縣）齋藤善太郎氏令嬢とみ子

女(への一)

巖谷小波先生序●松美佐雄君著
太田三郎先生書口繪●表紙●包紙共）

少女小說 花籠（ハナカゴ）

四六判二百六十頁
定價五十錢
今の中は送料六錢まけ升

本書は少年雜誌の記者で少年小說、少女小說等の作を以て有名なる松美佐雄君の著にて、著者が得意の言文體短篇小說十八編對話四編を集めたる物にて訓話もあれば慰安もある小波先生の序文中に「されば世の少女連この床しくも賴もしい著者の心盡しを仇にせず常に此書を座右に置て氣を慰める友として心を錬る便とする」云々と書かれし如く少年少女諸君の愛讀を玉はるべきは勿論一家をして和樂ならしめんには是非子女の保護者たる御家庭の方々にも一讀願ふべき良書なり

東京神田區錦町三の七
振替口座二〇一二三番
發行所 好文堂

らい病

此らい病藥は有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分析し當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる有力藥なれば一度其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむるは難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脫力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする[illegible]主義の賣藥に非ず

●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ゲノサール　一ヶ月分　貳圓
强方ゲノサール　一ヶ月分　參圓

三河國碧海郡刈谷町
醫科大學卒業藥劑士
從七位勳六等
本舖 中島龜之丞鑑製
電話 刈谷參拾貳番
振替口座東京七參壹壹

◉見よ!!!若き男女の必讀書出づ!!!

第三版

最新美人法

第一 白色法　色白くなるべけ藥飮み藥等實驗有効の方法十餘種を分りやすく詳說す外に藥品等を用ゐぬ簡短の良法數種あり
第二 美髮法　髮の毛を美しく柔かにツヤをよくし長くする十餘種の方法と縮れ毛癖毛薄毛赤毛白毛等を治す良法其他種々詳述す
第三 美顏法　顏を洗ふ最良の方法眼口唇等の注意油顏赤顏青顏等を治する方法シワのよらぬ法齒を白くする方法等を詳記せり
第四 治療法　やせる法こえる法鼻高くする法聲をよくする法イボあざワキガひぜん田蟲ナマズ其他秘密病の必治法を記述せり
第五 養生法　根本的美人となる平生の養生法食物と美人との關係婦人病と顏色との關係其他睡眠運動の注意等を面白く記せり
第六 化粧法　化粧品の撰び方最新の化粧法鼻高く見せる法目を大きく又は小さく見せる法唇を薄く又は厚く見せる法其他色々
第七 服裝法　衣服の色合や縞柄の見分け法衣服裁縫の注意より着物の……皆……中に分りよく記述す

●學理實驗上必ず有効なるを證す
●定價送料共　金廿七錢　振替廿八錢　切手三十錢

結婚前後 女王手箱

●目次●夫は妻を選ぶ注意●財產と學問●血統の善惡●自由結婚●無理結婚●早婚の弊害●晚婚の弊害●夫婦の年齡の差●近親結婚●美人ならぬ妻●如何なる妻の學問の利害●夫婦の相性●夫婦將來の和不和を期知する方法●見合の方法●如何なる結婚は最幸福なりや：●結婚の習慣●結婚と法律●結婚と媒妁●結婚屆の方法●結納の贈答●結婚と衣裳●結婚式の順序●結婚後の心得●結婚後の夫婦身體上の差異●結婚後夫の衛生上の注意十二件●結婚後妻の衛生上の注意十五件●月經と月經時の注意●其他順面白し●子を持つ月のくり方●姙娠せし事は如何にして知るか●姙娠中各月の變化●姙娠中の心得●姙娠中の惡食物●產の日を前知する法●生む時の注意●出產時の子の大きさ●子の生れた時の注意●安產するには●夫婦の圓滿を害する出產●子宮病の話●出產失敗談●產子の取扱法●授乳の注意●種々の病氣の原因及療法：●ある若き女のザンゲ談●ある女の日記等皆面白し

右外目次數十項皆青年男女必讀の好文字委細本書に就て見よ

●本書は有益にして且甚面白し
●定價送料共　金卅四錢　振替卅五錢　切手卅八錢

東京神田錦町三ノ二
振替東京一六一八番
發行所 學友社書店

婦人画報

十月一日 十月の巻 本號に限 卅八錢 郵税二錢五厘 一冊廿五錢 六冊一、五〇錢 十二冊二、八八錢

◎東伏見宮兩殿下英皇戴冠式御參列御服裝御眞影
◎姿見ノ前◎單騎旅行の婦人……◎女の富士登山◎諸國婦人風俗……
◎梨本宮二女王殿下最近御眞影……
◎白き傘◎田舍乙女
◎柳原典侍と和歌◎節婦かゞみ……◎よみ賣の孝女◎風流な蟲放ち……
◎踊り手振◎如花令孃鑑
◎佛光寺裏方◎生蕃の觀光……◎令孃と書◎若葉會幹事諸孃……
◎新任各大臣夫人の面影……
◎女工生活◎母の愛◎井戸端◎新婚の土屋子爵夫妻……
◎黑田邸の客間◎秋の植物園……◎京阪の女學校◎盆栽のいろいろ……
◎燈下可親長夜美人の書見
◎書室に於る岡田氏と夫人……◎三井夫人と令孃其他……

秋季特別號

鏡 中澤弘光筆 二頁大三色版
夜 井川洗厓筆 廿度刷美人畫

紙數增加 光彩燦爛

◎婦人が家庭を離るゝ非……添田博士
◎新大臣夫人にお目にかゝる記……みつ子
◎新婚の披露にまねかれて……
◎秋の感想……跡見花蹊 三輪田眞佐子 棚橋絢子 下田歌子
◎蟲干の半日……野上八重子
◎琴と婦人の體……榊博士
◎新時代の夫婦の關係……福來博士
◎德川時代の女の鑑……關根博士
◎男女競爭……今井學士◎踊……田邊學士
◎萬引をする婦人……杉江學士
◎秋の化粧は如何にすべき……
◎其日其日……三宅花圃
◎一本杉……小金井喜美
◎家庭運命論……遠藤博士
◎自分と責任……安井哲◎泣……源學士
◎女權擴張……榊博士
◎婦人と子供の食物……井上秀子
◎月見の話し……藤懸學士
◎我寫眞帖……時雨
◎番町便……晶子
◎利己と利他の交際……中島德藏
◎この頃のお惣菜色々……里子
◎十月の趣味と物語……しづか

東京麹町區飯田町四丁目四番地　東京社　電話番町二三三九番　振替東京一一八一八

女(その三)


天の成せる水晶は月の雫が凝つて不断の光りを放ち太和屋製の・・・水晶おしろいは秋の夜の露を湛へて下草の茂る巌間に湧く清水の如く而も用ゆる人の面に春の霞か冬の白雪の美くしさを優す。

假裝日本の花嫁







圖は先年日本を漫遊して歸りし米國の一妙齡婦人が日本の結婚式を見て頗る興味を感じ歸來其地寺院にて餘興として演じたるものなり、圖中右より四人目はブライドメードにして五人目が花嫁、六人目が花婿、次は花少女、次は婿の母　次は牧師、次は婿の父といふ順序也、今しも盃事終りて牧師より父に結婚の式を司りたる謝禮を催促する處なりといふに至りては花嫁の態度の洒落なると共に一座噴飯の材料とすべし、米人の本領發揮日本を誤解し盡したり。（上圖の建物はその寺院なり）

令嬢かゞみ



上、今西榮子（大井町）
下、米村葉子（青山）
中央、湯本ちせ子（四谷）
上、今津たか子（麹町）
下、平塚金子（芝）

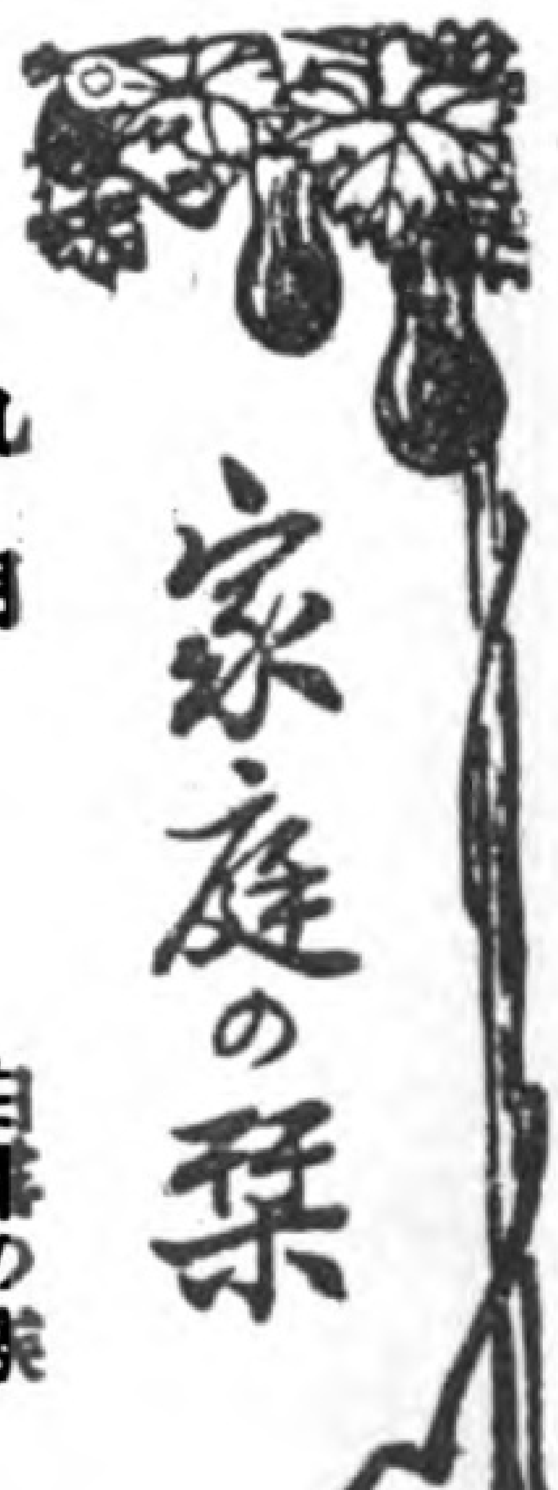
宮内省御用達

ヒゲタ醤油

伊國皇室御用

千葉縣銚子港

田中玄蕃釀造



家庭の栞

九月　白露の候

皆樣の御臺所はいよ／＼賑敷なりました暑もおい／＼退ぞきはじめ御召上り物は秋風と共に益々おいしくなります、なれど其材料を一層おいしく御調理遊ばすには色々と御工夫になる所ですがこの時

万上味淋は

是非お備になるべき唯一の調味料です、之を御使ひになれば、御趣向も御工夫もいりません、思ひのまゝにお好み通のおいしい御料理が直ちに出來ます

女(との一)

五七〇三

羽仁もと子主筆

婦人之友

▲夫婦號

十月一日發行

定價十五錢郵稅一錢半
六册前金郵稅共九十錢
十二册同一圓七十五錢

夫と妻との關係は、嫁と姑との關係よりも、モット切實な、モット眞劍な問題です。『夫婦號』は、今の多くの家庭の苦んでゐる、此切實にして眞劍なる問題に向つて最も深き且つ正しき解釋を與ふるものであります。

● 夫道、婦道、母道 ………… 羽仁もと子
● 夫婦喧嘩 ………… 文學博士 三宅雪嶺
● 未亡人論 ………… 羽仁もと子
● 男子の罪か婦人の罪か ………… 綱島佳吉
● 眞にうるはしい夫婦 ………… 小崎千代子
● 虫のよい家族主義と個人主義 ………… 栗塚龍子
● 全く思想の違ふ私共夫婦 ………… 某實業家夫人
● かうして氣むつかしき夫に事へました ………… 某官吏夫人
● 家庭は理窟の無いのがよい ………… 某女流教育家

▲ピースメーカー(夫婦喧嘩を描きたる泰西名畫) …………

▲結婚當時の寫眞と今の寫眞(附たり結婚生活に就ての追懷談、感想談) ………… 當代名士十數氏

▍本誌の特色たる實用向記事は例によりて一々有用●●●●●●●●●●●●一々適切

東京小石川雜司ヶ谷町
電話番町三六九八番
婦人之友社
振替口座東京壹壹六六〇〇番



女(との四)

令嬢かゞみ



上、高梨文子（大久保）
下、松岡梅子（下谷）
中央　加藤俊子（中野町）
上、高橋しづ子（四谷）
下、牧野禮子（赤坂）

令嬢かゞみ



右、海軍中佐黒澤定明氏令嬢けい子
中、衆議院議員横山一平氏令嬢とし子
左、柳悦多氏令嬢すみ子

女(ちの一)

女（ちの四）

令孃かゞみ



上圖 杉村藤子（牛込）
中央 飯田とな子（四谷）
下圖 服部せき子（麻布）
上圖 内海節子（麹町）
下圖 今西茂登子（大井町）

中野華洲園のダリヤ





山路のすゝき

○子宮病自宅療法と姙娠法

子宮病の一般の容態は、手足が冷え惡寒がする、逆上や頭痛がする、肩凝り眩暈もする、そして内股や腰の邊りに索張る樣な疼痛を覺え、勿論子宮も多少の痛を感じ、下腹が重苦しく條張り、小便に度々行き、或は便通が惡くなり、局部の周圍が痛痒く不潔で惡臭がある、斯くて間もなく（或は初めより俄に）稀薄な水樣の物、又は濃い粘りある膿の樣な下物（白帶下）がする、斯うなると月經は多量になつて、經行前には疼痛を覺え、且月經時で無い時も出血し、白帶下は續いて有つたり無かつたり、而して腰部が何時も痛い、これが永く續くと一生涯不姙となり、辛い淋しい月日を送るばかりか、段々身體が衰弱して、取返へしの附かぬ重症を惹起し、遂には命迄失ふ樣になるのです。

▲子寶を得る最も良法 斯樣に子宮病は恐るべき疾病ですから、一旦本病に罹ると、どんなに輕症のものでも、全く根治しない間は何うしても、子供が出來ません、世間には子寶がないと、自分等夫婦には子種かないのだと、斷念めて居る方も尠くない樣ですが、決してそんな道理はない、中には其罪が良人にある事も御座いますが、十中の九迄は婦人方が、本病に犯されて居るのが多いのです、又子宮病の治療は多く手術をいたしますが、手術をすると治りが早い代りに再發し易く、殊に全快した後でも姙娠する事が極て稀で御座います、それに手術を受くるには、身體の餘程强壯な方でないと到底堪へられません、然らば

▲何うするのが一番よろしいかと云に、それは婦人科專門の大家醫學士北畠佐藤兩先生の御書になりました『婦人病者心得』を讀んで其通りに養生なさるのが、最も安全で最も確實な療法で御座います、此方法によると大概の子宮病血の道は、自宅で容易に根治せられ、御希望通り姙娠が出來ます、皆樣、理窟では病氣は治りません、物は試しと云へば、現に身體に異狀ある方は勿論、何んともなくて、是迄一度も姙娠した事のない方、又は流産難産の癖ある方は、兎も角婦人病者心得を御覽になつて、成程と得心が出來たら、速かに本療法を試みなさい、後悔は先に立たずです。

記者曰く婦人病者心得はハガキにて東京京橋新榮町笹岡省三氏宛申込めば無代送附せらる

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる秘密藥を當舗主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多々苦心研究の後其有効成分を檢出し生毛に關する諸説を參考し有力藥を配合したる世界無比の學理的最良藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き贋山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れは普通に醫師の處方する芫菁丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗惡の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪、はへぎは、まゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早め、ナケド、デキモノ、ハッポー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

●●●●●●●●●●●●●●●●●取次所なき地方は直接本舗へ注文あれ

三河國碧海郡刈谷町

本舗 醫科大學卒業藥劑士 從七位勳六等 中島龜之丞鑑製

振替口座東京貳參零壹 長電話刈谷三拾貳番

●●大取次左の通り●●

東京市
本郷六丁目赤門前 瓜生藥局
麹町區紀尾井町三 寄藤藥局
日本橋檜物町十八 龜田藥局
京橋區八官町八 野田藥局
神田淡路町二の四 桑田藥局
芝田町四の二 加藤藥局
芝愛宕下町一ノ二 岩本支店
赤坂田町四の一 竹内藥局
同青山北町五 西井藥局
本所吉岡町廿五 小島藥局
四ツ谷人傳馬町一ノ二 永野藥局
神田旅籠町一ノ一 瓜生支店
堺市大寺南門東入 一色藥局
京都市上京區寺町通り 石藥師角
京都市下京區五條通り 富小路行當り

●●大取次附近の各藥店にあり●●

大阪市平野町二 丹平商會
丸龜市本町 櫻井藥局
名古屋京町三丁目 飯田藤七
同 同 同 荒川長太郎
高松市片原町 新明藥局
神戸元町一丁目 西村關更局
廣島市橋本町 萬代藥堂
神奈川青木七軒町 水崎藥店
仙臺市新傳馬町 櫻井藥局
岡山市橋本町 加藤藥店
弘前市下土手町角 菊地藥店
大津市茶屋町 磯崎藥局
福知 藥局
安江洋反物店

毛ぬき 新劑

從來脱毛劑の類頗多きも之が製劑の原料は洋の東西を通じて硫化劑を配合して發賣せられつゝありと雖も皮膚に有害にして惡臭を有する不利あり先年所主數種の脱毛劑を研究して皮膚に無害なる一新脱毛劑ヘールピンを發明せるに多數の實驗成功者を生じたり本劑は皮膚に害なく根本より脱毛せしむる唯一の良劑なり毛深き人毛多くして苦む人達は速に本劑を試用せられよ

原名ヘールピン
定價 壹圓
特製 參圓
內地 送料 十五錢
海外 三十五錢

飲んで色白くなる藥

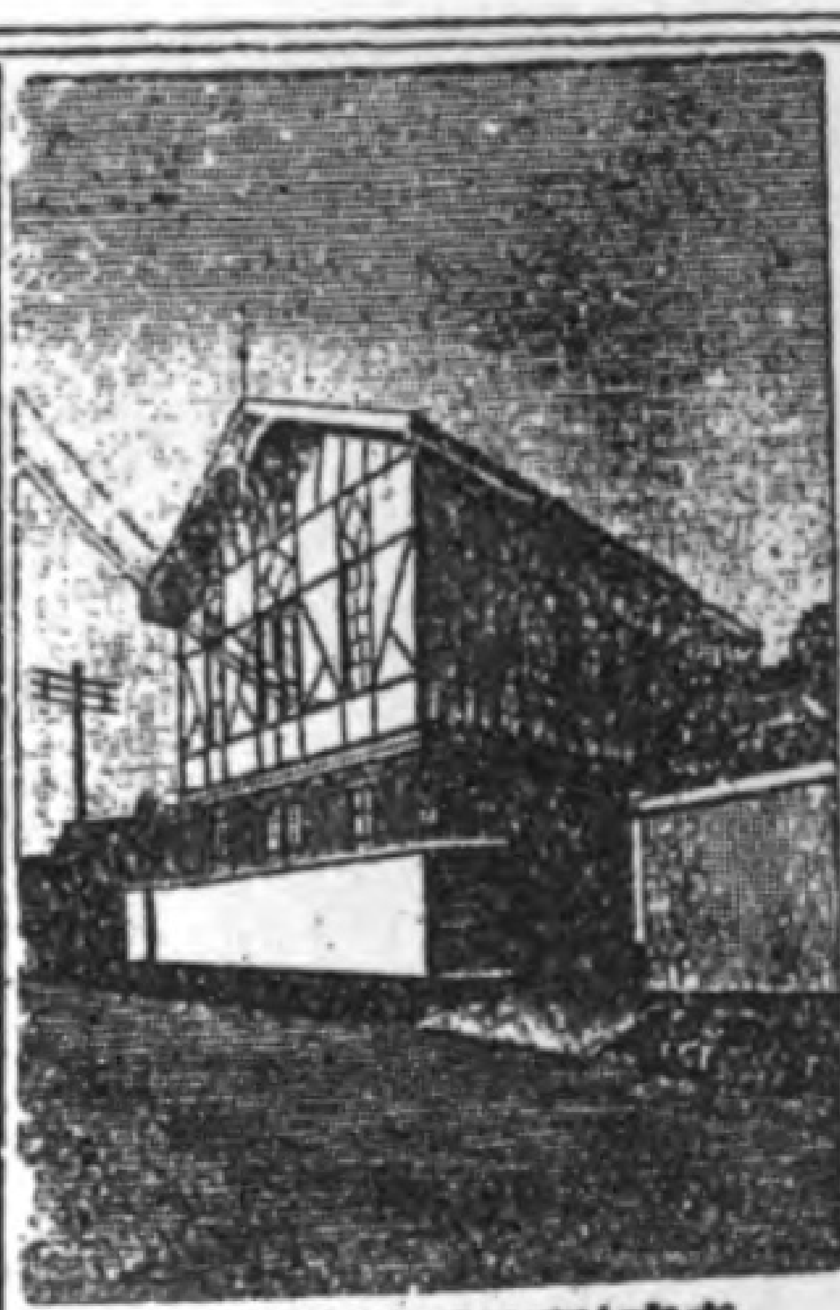
藥名ピオール錠
壹劑 壹圓
參劑半 參圓
內地送費十五錢

近來美白劑としては外用的化粧水の類頗る多きも其確效あるものなく色黑き人の種々なる藥劑に迷ふの時代は過去り日進の醫藥學は一日も休止する事なく美白劑の製法も已に一變し内服劑應用の時代となれり當所製藥の惡液排泄劑ピオール錠は極て强度の清血劑にして一般惡血惡液性の人本劑を服用するときは血液を清淨となし惡液を排泄して皮膚を艶麗美白ならしむる根本的美白劑なりあらゆる賣藥に外用的化粧水を用ゆるも目的を達せざる人速に本劑を愛用して天賦の美白を保存せられよ

東京市牛込區北山伏町壹番地

百合園製藥所

女(りの二)



東京神田區猿樂町
東洋音樂學校
電話本局三八五四番

生徒募集
九月六日始業

本科、特別科、本校及東京音樂學校入學豫科

等 ピアノ、オルガン。バイオリン。唱歌。其他管絃樂器及理論

入學志願者ハ本校ヘ照會アレ

●小兒五かん驚風●蟲おさへ

登録商標 八

本方 小兒藥一切妙藥
奇應丸

定價 金五錢 金拾錢 金廿錢（遠國送料金貳錢）

發賣本舖 八 松澤商店
東京市京橋區銀座三丁目

御用は全國諸々藥舖賣藥店に特約あり（電新[illegible]）

男 女
ちゞれ くせ毛 赤毛
は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髮に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

東京音樂學校琴曲科教授大檢校山口菊次郎先生御賛助
箏曲通信教授所御撰定●坂本湖月先生發明（保險附）

新案特許 二一四〇四號
琴調子笛

體裁高尚優美 桐箱入

定價金壹圓五拾錢
特別製金貳圓
竹製壹圓
平調子專用五拾錢
詳細說明書添附

（送料不要）

調子三年と云ふ諺は最早取除けられたり 此調子笛によるときは平調子本雲井半雲井古今曙中空岩戸さては小督秋風ラッパ軍人御製ほとゝぎす等如何なるむかしき新舊歌曲の調子をも初心の人にて容易に合はす事を得るなり又專門家は教授用作曲用に且つは自己音聲の調子を知り置く等應用無限眞に箏曲界の明星なり苟も琴曲にたづさわる人は必らず座右の珍とせられよ

新案特許
正則十二律調子笛
坂本湖月先生考案（保險附）

體裁高尚優美桐箱入 送料不要

定價
六本竹製 壹圓
三本竹製 五十五錢
ニツケル製 一圓五十錢
ニツケル製 八十錢
特別製……一圓八十錢
特別製……一圓

從來行はるゝ調子笛は音律不正確にして狂ひ易きは音樂家の一般に認むる處なり此度新考案の正則十二律調子笛は音律極めて嚴正にして尚獨特の裝置あれば調律永年變化する事なし而して使用輕便爽快を極む且つ組替又は取外し等自由自在にして實に理想的なり 笛には一々和洋の音名を記し尚調子の合せ方及音聲に關する詳細なる說明書を添附す

新案特許
新式バイオリン調子笛
坂本湖月先生考案（保險附）

體裁高尚優美

四連（桐箱入）
定價 六十錢
送料 不要

在來の調子笛は使用頗る困難加ふるに高調子なるため初學者は調律の際屢々糸を切り駒を倒す事あり本調新式調子笛は遺憾無之等の缺點を補ひたるものなり使用輕便にして律誠に愉快なり

琴曲振興會編纂
琴曲歌集

梅の卷—舊歌曲三百四十五曲を集む 定價金四十五錢 郵稅六錢
櫻の卷—新歌曲二百四十三曲を集む 定價金四拾錢 郵稅四錢

發賣元 積善館樂器部
福岡市博多中島町 振替福八一 電話四三

增築落成

十月一日より

○秋季新製品大陳列會開會

○藤原模樣圖案應用衣裳陳列

○よせぎれ見切反物數千種

○新商品 美術工藝品、陶磁器 漆器食料品、履物 陳列販賣

創業貳百五拾年

增築落成

紀念大賣出し

○餘興場と少女音樂隊設備

○寫眞室の新經營と假裝衣裳の用意

○藤原式休憩室新設と食堂の改良

○東京市第一の大窓飾と昇降機完成

東京日本橋

白木屋呉服店

丈（りの画）



女學世界

第拾壹卷第拾參號

十月號



新徒然草（九）

磯千鳥

○

綿入より遷る袷は清々しき心地すれど、單衣は肌寒ければとて着る袷はいとも、うら悲し。浴衣の頃は肌につくる物皆暑くるしく、蟲干す折たま〳〵裏着けたる物等見れば、かゝる物着る時あるまじき心地すれど何時しかと黒地に重ねたる襦袢の襟の白さ、眼につく頃となるもをかし。

二葉のころは垣根に美はしく纏はせむと思ひし朝顔の彌が上にもからみ合ひて、先つ方なる蔓はもはや便とする竹も盡きたれば、誘ふ手も欲しげに、二筋三筋宛一つになりて吹く風になびきたる。露に濡れたる葉の下に花いと小くなりて晝の頃迄咲き居たるもあはれに、また物乾す竿の端などに赤き蜻蛉の止りたるなども何となく秋の心地すなり。

九月の末の方ともなれば日中の暑さは衰へねど、朝夕の風の冷々したるに、「あゝもはや秋風の立ち初めしにや」と心無き輩の語合ふも何となく身に沁むなり。況して家離るゝ事遠き身は、肩させと蟋蟀の鳴くを聞けば、爲す事手につかずひたぶるに故郷の事思ふもゆゆし。その外籬に垂るゝ瓜糸、燈火を慕ひ來る蛾――秋の風物いづれかゝなしからぬはなき。

學校に在る頃は、休暇の月の過ぐると思へば秋風も一入哀に覺え、殘る日幾日也など指折り懐しみ、母等も「今の中に心ゆく迄遊べ」と宣ひしも胸に沁みぬ。九月の學期は何人に向ひても人懐しく、僅二月あまり相見ざりし友の言葉いたく改りて覺ゆるもをかしく、その一日二日の授業の樂しかりしこそ忘れ難けれ。」

昔より人の生の墓なきを說くには秋の哀をなどらふるが常なり。されど年老いたる人の死するはさして悲しとも思はず、是日頃老幼不定の例を目前に見る事多ければ也。物の亡ぶる哀を深く感ずるはかへりて小さき蟲魚の身の上にあり。秋更き谷川を落ち行く鮎の哀は何人も知るらむ。夏の半より鳴き初めたる蟋蟀の一日一日聲も細りて、冬の初には、かの破瓦、古板の下に人知れず死ぬよと思へば誰か一掬の涙を落さずやあらむ。況して、人の手に育ちし松蟲鈴蟲などの廣き世界のありとも知らず、さゝやかなる籠の中に、味も無き茄子食ひ、夜毎夜毎を鳴明して、儚き一生を送るよと思へば、何となく女の生涯さへ想ひ合されて涙落つる心地す。

夏と秋との命なるは大方の蟲皆然れど、轡蟲、きりぎりす、馬追の如き大聲擧げて鳴く蟲は、哀とも思はず、聲細き蟲をのみ、痛ましく覺ゆるも、げに可笑きは女心也。

○

世には、おどけたる字、可笑しき字、厭はしき字、いと多し。愛嬌のしるしなるゑくぼを瘤と書くはゆゝし。禿と云ふ眞名は禿とも讀む、禿と禿とは似るべくもあらぬに……。

七夕をたなばたと訓じ、心太をところてんとよむは凄じ。見るも厭はしき字は姦。嬲の字。「孕」の字を解けば、乃ち子也とする等いとおどけたり。

○

女心の淺ましきにや物の本にありと言へば何事に依らず論爭ひ難き眞の樣思ふもをかし。此頃の本は價いづれも高く姿美はしけれど、是ぞ購ひたしと思ふは少なく、中には題聞くのみにて淺しと思ふがあり、紙縱樣に束ね厚き表紙附したるは何れも書籍と呼ぶべきにや。されど職員錄、官報の綴ぢたる等はしか思はず。

書籍は冬の日に明り障子の許に火鉢置き手焙りつゝ讀むこそ眞の書籍なれ。教科書は裝如何に美はしくとも親しむべき友の如き心地せず、何時も机の下等に隱し置くよ。また姿おどろ〳〵しく大なるもわろし。家

庭字彙、百科全書、日本地名字書は一眼見て胸つい ゆる心地す。文藝百科字典は枕にこそしつべけれ。

今様の書籍は立て並ぶるに便よけれど、頂の處に塵黒く溜まり、肩の邊の綴目ゆるみ、紙葉醜くはみ出づるなどわろし。和本は萬事きらびやかならねど風姿何處となく棄て難し。桐の書箱に横様に重ねたる、徒然なる折に一部とり出でゝ讀む程に、絹絲もてしたる綴目も床しく、今の世にはなき美濃紙の香の微にするも懐し。況して處々紙魚食ひたる痕見出すはよし。

今の世の女は和本好まざめり。こちたく頽したる假名文字讀み得ざれば也。さる老人の申しゝか。今様は女の外國の言葉まじへて話せば其道にすぐれたるにやと思へば然らず。また漢語など遣へば、手紙等には誤字書くまじけれと思ふに然らず辛抱を心棒と書く。されば知らぬ文字は假名使せばやと思ふに、假名の誤多く、他人の草書は讀み習はず、何れにも通せざること昔者の一つ知りたるに如かずとなむ申しぬ。何れを善とすべきにや。

○

淺ましき男、働き人等の淺ましき流行歌大聲に歌ひたるはさして咎むべきにあらねど、罪なき幼兒などの片言聞覺えたるを人の前をも憚らず歌ひ出でたるは聽くものゝ顔を赧くす。さるを端女などは、いと興がり「今一度」等と所望して笑ひくづれたるも忌々し。端歌唱歌の命も短き物の内に數ふべし。かの煙も見えずと言ひしは何時しかと消だり。元寇の歌も姿を隠しぬ。「海の彼方に臼が住む」と詠じけむ鐵道唱歌も今は忘れられたるもをかし。

○

さる處に男ありけり。女とりて暫ある程に美はしき男兒生れければ手の中の玉と愛で稱へ、名さへいとみやびて附けぬ。一年あまり經ぬれば亦男子生れぬ。一人子にては萬一の折心元なければとて是をも歡び迎へいと心きゝたる名附けぬ。斯くて一年程經ぬれば亦も妻みもごりぬ。此度は女也、女はいと珍かなりとて兩親の寵愛下にも置かず、男二人に女一人は子寶の上乘

なりと人に誇りぬ。

　さる程に亦も生れぬ。男也此度は兩親さして喜ばず、三男は無きには勝るらむとて、名をも工夫せず只三郎として育てぬ。かくて來る年も來る年も子生れいで〻四郎五郎とつけたり。

　さる程に、六郎の生れし折は、律氣者の子寶と人も笑ひ、家の內は常に耳も崩ゆる許喧しく、兄弟爭の絶間もあらざれば、親いと蒼蠅く覺えて、腹立たしき折は、今少し數少かりせばと歎きぬ。さるに末の子の物言ひ初むる頃より女親の氣合唯ならず。此度は男も容易ならず思ひて「我、三郎四郎と物の數にて名呼びたれば、腹の子いと興がりて生れ來にやあらむ。此上十人二十人世に數のある限り生れぬとも限らじ。よしよし．此度は捨つるとも宜しき子なれば女ならば捨、男ならば捨吉と呼ばなむと待居たり。軈て女子生れにしが、それ以來、はたと其氣合も無きに、男、己が策略當れりと嬉しく、遇ふ人毎に智慧の程を打誇りぬ。

　さる程に捨と呼びたる末の子、四つ許りになりていと健なるが、かりそめの枕に就くよと見る間に墓なくみまかり終んぬ。

　子喪ひし事知らぬ母親は身も世もあらせず打歎き、「か〻る名つけ給ひしかば死してけり」と夫を詐むに男親も流石に後悔すれど詮方なく其後は、斯る事生れし子に言ふまじき事呉々も人に語りけり。

○

　女を淺墓なる物と思ひなすは西も東も變りなく口惜しき事の限なるが、折にふれてさ思ふ事無きにしもあらず。讀者倶樂部にいと愚しき事書きたるにも知るべし。妾は何地の者に侍り何々の書給はりたし、御禮は繪葉書にて……などしたるは、何と言ふ事なけれど淺し〻。

　此頃の雜誌の日早く出るもげに淺ましき物の內に數へつべし。殊に少年少女の雜誌は定の日より半月も前に出でたるがあり。腹の子と雜誌は月滿ちて生る〻こそ目出度けれ。

○

僧の妻に限りて權妻と呼ぶはいかなる故にやきかまほし。僧に在せばとて身木石にあらねば妻も欲しかるべし。されど妻蓄へ子多く持ちたる僧の說く道は何となく信心の心も薄きぞ詮なき。世に怠けて暮す人多しと雖も僧の君程怠けたるはあらず。歌唄ふごと經讀み暇には碁のみ打ち居れる、說敎などし給ふとも今の世の若き者を感せしむる力なし。況して陰には善からぬ事し給ひて陽には道を說き給ふなど却々に罪深き心地すなり。三人四人の僧職は一人にて勤め得べし、何處の都にも數多き汚げなる寺は打毀ち、數少きを淸げに繕ひ、行正しき僧を置きたるこそ、なか〳〵世の爲にも佛の道にもよろしからむと思ふなり。

〇

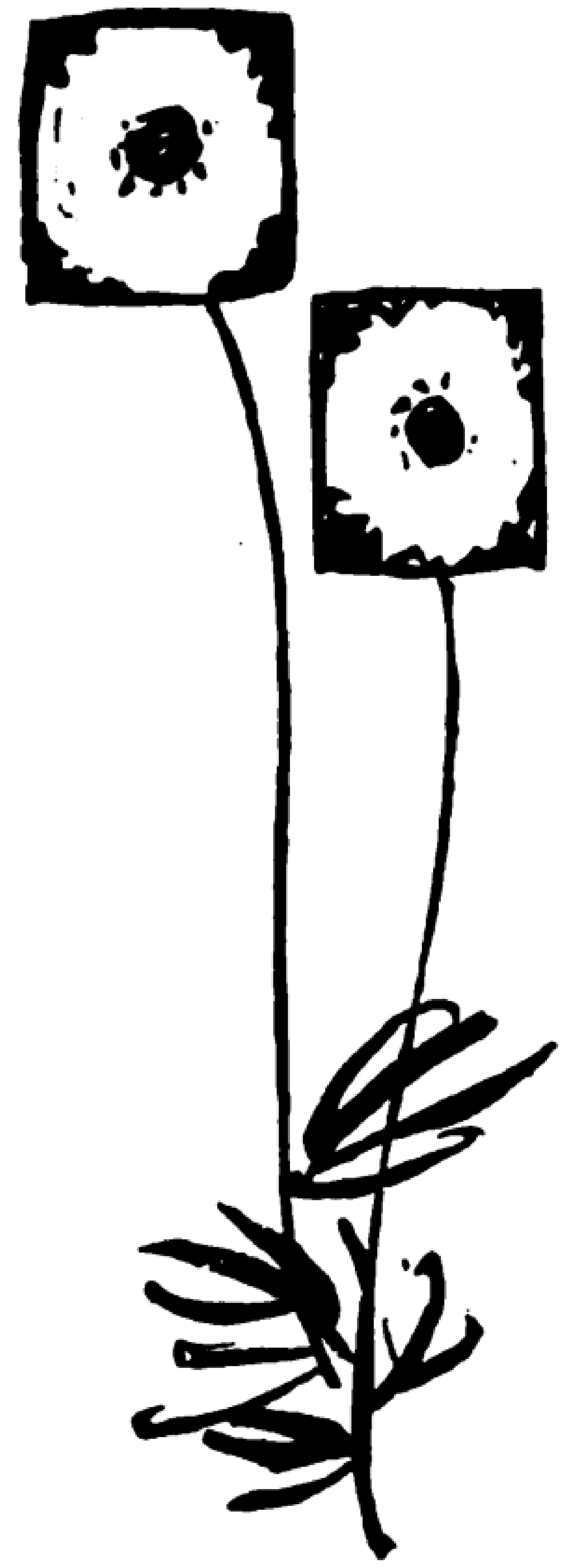
此地の女學校にて薙刀を敎へたるがあり。亦按摩の道をも敎へたり。按摩の師の君は盲の刀自にて、數多き生徒は一人宛師の君をさすり、此處を揉むべきぞ、其處揉むは非也等宣ふを他の一人は團扇持ちて傍よりあふぎ參らすなり。夫に對しては薙刀、姑に對しては按摩之二つを用ふれば嫁君の意通らずと言ふ事無し。今樣の學校は此上なう考へてけりと嘲するもをかし。

〇

こすもすと申す花は譬もなく優しけれ。秋更けし頃垣根の邊に力なくなよ〳〵と咲き出でたる。何となく病める手弱女を想出づるも哀也。冬も近きぬれば何時とはなしにはら〳〵と散り行く風情、我國の花ならねど詩にも歌にもあるべき花と思はるゝもをかし。

◎蜂蜘に復讐す

大和怪異記に曰く、相州小田原の蓮池に船を入れて盆前に蓮花を切るとて、舟に乘り居ける者ふなばたに手うちかけ、しばらく休らひけるに、蜂一つ來て花をすひけるが、蜘の網にかゝりけるを、葉の下より蜘出で糸にてまきけるに、蜂もしばしは其れを破りかれしが、兎角して漸う〳〵逃げ去りける、其後此の蜘、蓮花の中開きたるにのぼり糸を以てまきよせ、花の上をとぢ合せ、其の中にかくる、いかに斯くはするぞと心をつけ見ける處に、暫くありて蜂一つ來ると思へばあとより百ばかりどつと來て、蜘のかくれゐたる花のあたりを尋ると見えけるが蜘の隱れたる花に取りつき、みるうちに花をあみの如くに刺し破り、ぱつと立つて去りぬ、人々舟をよせて此花の中を見るに、隱れたる蜘すた〳〵になりて死けり。



筆のすさび

斐

×

トルストイ伯の童話の一節に

「――太郎がいつか汚れた雑巾で卓子を拭いて居た女の事を思ひ出して、さうだ彼の女が汚れた雑巾で卓子を拭いても落ちなかつたやうに、自分も始めは汚れた心で人に意見をしたのだから、其人が綺麗になる筈はなかつたのだ、と考へた――」

とあるが、この一節こそ私共常に頭に刻みつけて置かねばならぬ教訓である。實にその通り、己まづ清うならないで何うして他を清うする事が出來やう。釋迦基督の胸中には、深大無限なる清がひそんで居たればこそ、よく衆生を動かし得て、未來永劫にその靈魂を殘すことができたのである。

子女の師たる父母たる人々には、取り分け右の汚れた雑巾のたとへは、眞面目に味はう價値があるだらう。

隣家の女先生が、髪ふり亂した鬼のやうな形相で、妹さんを手荒くいびつて居る。小さい生徒が三四人こはごは窺見して居る。今朝の修身の時間はたしかに「弟妹をいつくしめ」と云ふお話だつた。

親自身はつまみ喰ひをさかんにして、兒女に買食ひのいやしきをとくものがある。

×

年下き友より

姉様？、秋とは申せ、殘んの御暑さなか〳〵に堪へがたき昨日今日、如何に過ぐさせ給ふや、さて私事皆々様の御親切なる御いましめによりて、やう〳〵一人娘と生れたる自分の境遇を悟り、ひたぶるに慕

ひ憧憬れたる上京の念も全く失せ果てゝ、近頃ではもう泣いたり拗ねたりして父樣母樣よわらすやうの事も絶えてなくなり候間何卒みこゝろ安う願上候。げに姉樣がいつやら仰せられし通り、世間を見ればこそ煩悶も多けれ、なんの浮世はこの山又山の奥深き、擂鉢の底に過ぎぬもの、とあきらめてしまへば山家は常世に春の國、まことに平和なる樂土に候。

　世をさとり身をかへりみて父母の
　　傍を永久のやどりとやせん。

近來の感想など委しう聞え上げたうは候へど、最早秋蠶も四眠起のことゝて、いとゞ忙しげに母樣桑きりたまふ音の彼方にきこへ候まゝ、いづれ次便にとかき殘し申候。かしこ。

けなげにもよくこそみ心ひるがへし得たまひしよ。父母君への御孝養それにましたる事あらじと存じ候。

×

越後の酒屋が來ての話だが、先日この男が諏訪地方へ行商に行つたら、そこらのお内儀さん達が、越後の海は隨分廣いさうなが、諏訪の湖程もあるかいつて、聞いたとかで「ふむ、馬鹿々々しくつて返事も出來やあせんかつた、恐ろしく譯の分らん奴も今の世の中にあつたもんだよなあ」と若い酒屋さん大に憤激して居るのをきいて、私はいつだつたかひとに「アメリカと米國とはどの位離れているでせうね」とまじめに問はれて困つた時の事を思ひ出し一寸面白い對照ぢやないかと、一人でほゝ笑んだ。

×

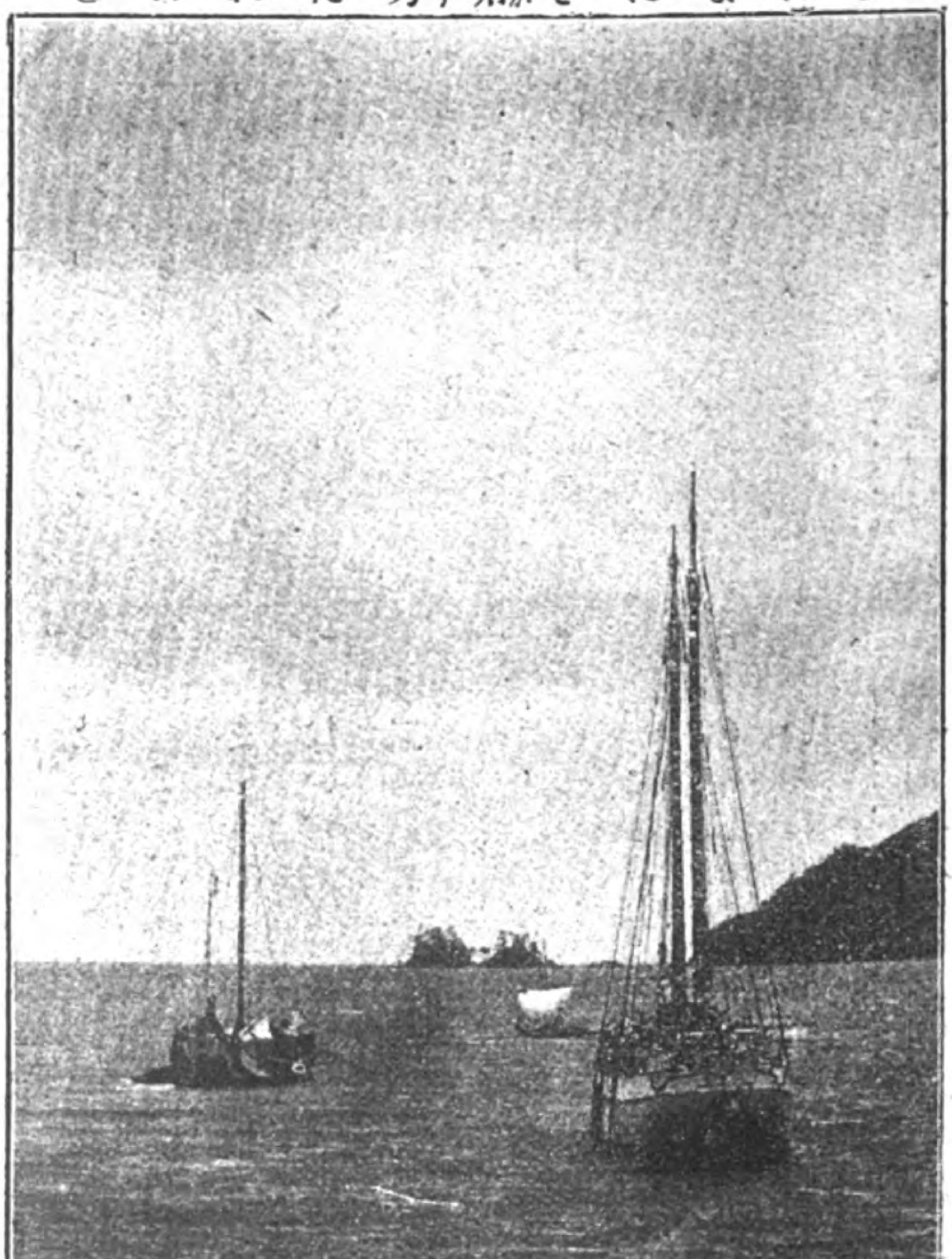
名家の令夫人や令孃方を、羽左や蓉峯や萬龍や靜江等と一緒に、化粧品屋の廣告に使ふのはよした方がよい。

×

「保險が附いて居りましたか、ふむそれはよかつた、なに人間は晩かれ早かれどうせ一度は死ぬものだ、神

様が御召にはなつたのです」是れは英國人が、他人の父の死去を弔ふ言葉であると人から聞いたそして其葬式がすむともう親の事でもなんでも忘れ果てゝ、墓場などはまるで沙漠同前、死者に對する崇敬の念の如きは此國の人には爪の垢ほどもない、商賣の方が多忙しいから死んだ者などかまつて居られない、と云ふ主義であると、或は事實かもしれぬ。

世は今や二十世紀、日に〳〵激しうなり行く生存競爭の風浪、英人ならぬ吾等とても遂にはその恐ろしき渦中に捲き込まれて、親兄弟の死去を沁々愁傷する餘地をさへ、心の隅から奪はれてしまふのではなからうかと思ふと私は云ふに云はれぬ心淋しさを感ぜずには居られない。



そらの海雲の浮浪はやけれは
月のみ舟もこきかへるらん　（景樹）

×

「私ね今度お召の重ねを拵へてよ、秋の同窓會に着やうと思つて、自分で見立てたんだけど、そりやいゝ柄よ、また見て頂戴ねえ」

「さう、私はあの日本文學全書を買つたの、竹取物語から増鏡まで全部二十四冊よ、なか〳〵私などにや文章がむづかし

くつてしやうが無けれど、欲はりながら讀まうと思ふの、貴女も何か御覧なさいな」

「難有う、だけど……私いろ〳〵忙しくつて、羽織も帯も縫はなけりやならないし……」

「夜見たらいゝでせう、太平記あたりになると私等にも大抵解るの、俊基朝臣の東下りなんかの文章の實にいゝことつたら……時雨もいたく森山の、木の下露に袖ぬれて、風につゆ散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば

鏡の山はありとても、涙に曇りて見え分かず物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧る古郷くもや……」

「ホヽヽ、何言つてるの？、それよりも私先日〇〇勸工場へ行つたらね、三圓で竹模様のそれはとびつくやうな前櫛があつてよ、ほしくつてねほんとに……」

「まあたつた一枚の櫛なんかに三圓……、馬鹿らしいけ、そんなこと言つてずに何か雑誌でもお取りなさいよ」

「オヽ嫌々、雑誌なんてたゞお金を捨てる様なものよそれよりも平常着の一枚も餘計こしらへた方が氣が利いてるんですもの」

「私何でもいゝから、新刊の書物が自分の脊丈ほしいと思ふわ」

　この二人は性格は全然ちがつて居るのだから、どこまでも云ふ事が並行してゆくばかり合することは出來ない、しかしかくても末長くもつとも仲よき友として、二人は睦み交すのである。

×

　たしか四五年前の「趣味」だつたと思ふが、その雑誌の中にある「夜は暗いから」と云ふ題の小品文の一節がいかにもやさしかつたので今だによく記憶して居る。

……　………、

「うむ、一羽位いたつて仕方がないぢやないか、直に放してやるがいゝ」

長男は直に籠を抱へて來た。雛の間餘程待かされた

と見えて、鶉は人影を見て頻りに不安の翅を搏ちつゝ逃げ廻つては狭い籠の彼方此方に頭を打ち尾を打ちつける。末なる娘は突如として意見を挿さんだ

「お父様駄目よ今放すのは」

「なぜだ」

「だつて夜は暗いからオツカナイわ、裏のお山に猫が居てよ、今朝も黒い泥棒猫が……」

末娘の意見は忽ち全家族の賛同を得た、殊に雨催ひであると云ふ理由も附け加へられて今夜放すことは延期せられた。

籠は一夜親子の枕元に近く安置せられて、其翌天明を待つて裏の藪に向つて戸が開かれた。

…………………



秋風の松なしらふる度毎に岡への尾はな袖かへすなり　（春滿）

まあ何と云ふ、やさしい文章だらう殊に殊に「裏のお山の猫が：：」と氣づかうところ實に一點のちりにも染まぬ無邪氣な少女の、美しく暖かい胸より、自然に迸ばしる眞情の泉である。

女としての美點は、こんな一寸した場合にも遺憾なく發揮さるゝものである。

×

水は流れ花は逝きぬ、私はこの世に出でゝ最早二十

有餘の歳月を送り迎へた。思へば夢の如かりし半生よ。さりながら苦痛と煩悶と不安とに戰ひつゝ辿り來たりし惡夢の途は長かつた。人は若き日の思出程なつかしいものはないと云ふ。私は我身の昔を思ふにも身慄ひせずには居られない。早くも慈母に先立たれ幼くして人の世の辛さ悲しさを深く／＼味はふべく餘儀なくされた自分は、鬼も十七八の靑春期を、あはれや花もなく鳥も無くなるまで木枯すさぶかれ野に似たるみじめさに通り越してしまつた。再び來たらぬ人世の春を、知らで過した私の昔は哀れである。惜しかりし過去である。

あゝ我身の淋しき昔を思ふにつけても、たつた一人のあの妹にはどうか私のあとを辿らせたくない。身も心も若やかにうらゝかに、出來得るかぎりは春うつくしき我世の花を摘ませてやらうと思ふ。母亡き少女の姉として……。又一つにはこれがあの世にいます母君へのせめての心づくしである……。

かく語つて淋しくほゝ笑んだ。

實に友が前半生は涙の歴史であつた。苦悶の頁であつた。が、その悲慘極まる過去の夢によつて得たる賜は、他より奪うべからざる終生の寶ではあるまいか。友はそがために早くも既に人生の何ものをも達觀してしまつた。

母はなくともかゝる姉をいたゞく妹は幸福である。隨つて友自身の後半生は如何ばかり淸く心安けき旅路であらう。

×

世は泡沫のはかなくて
　消ゆるもまたぬ朝露の
光るは人の命かな
　幸なきものとやどりきて
幼きよりのろはれつ
　此世の光見てしより
墓に入るまで片時も
憂とおそれと戰慄の

たゆるまもなく老ゆるかな
水に書けるうつしゑや
塵にかきたる文字のあと
たのまむすべも有るべしや
あぢきなき世の人の身に……。

これはロードベーコンと云ふ人の歌だつたと覺えて居るが、人生のあぢきなさを實に痛切にうたひ現はしてある。まことに不幸不遇の子と生れた身は餘りに酷き事のみ多き世の中をどうして悲觀せずに居られやうなまじい生れて來なかつたらと悶へ泣くのも決して無理ならぬ。さはさりながら同じ運命のもとにいます君達よ、暫しなげきを止めて此の大なる自然の懐に抱かれたまへや。

世の人心は冷たくとも、自然の母はいつも情暖かう吾等を迎へ給ふではないか。

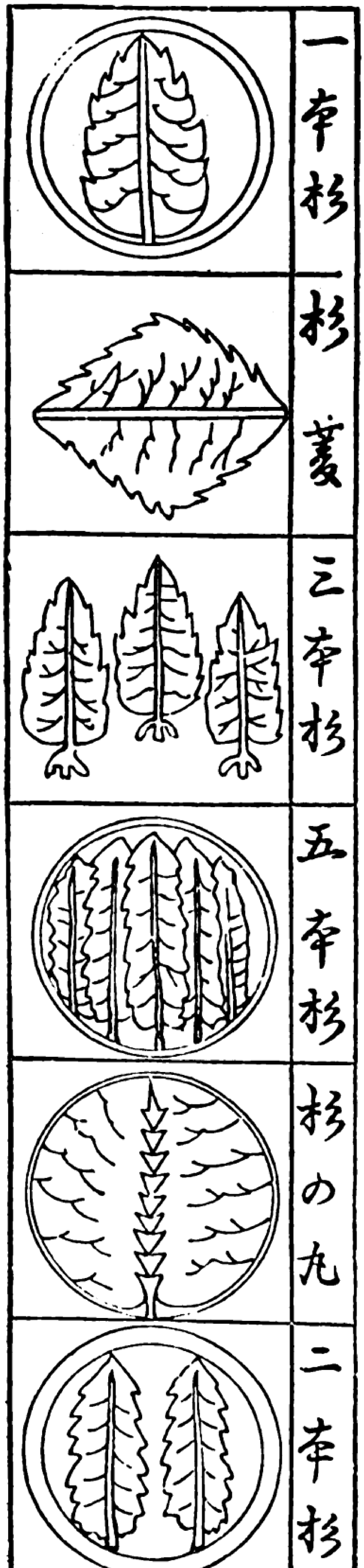
水の流れや月の風情、山の姿や雲の色、あゝ麗しからずや大宇宙の慈悲こもる笑顔よ……。

暗中に光明を見出すとか閑寂のうちに愉快を感ずるとか云ふのもつまりは天地萬物との接觸を云ふのではなからうか。

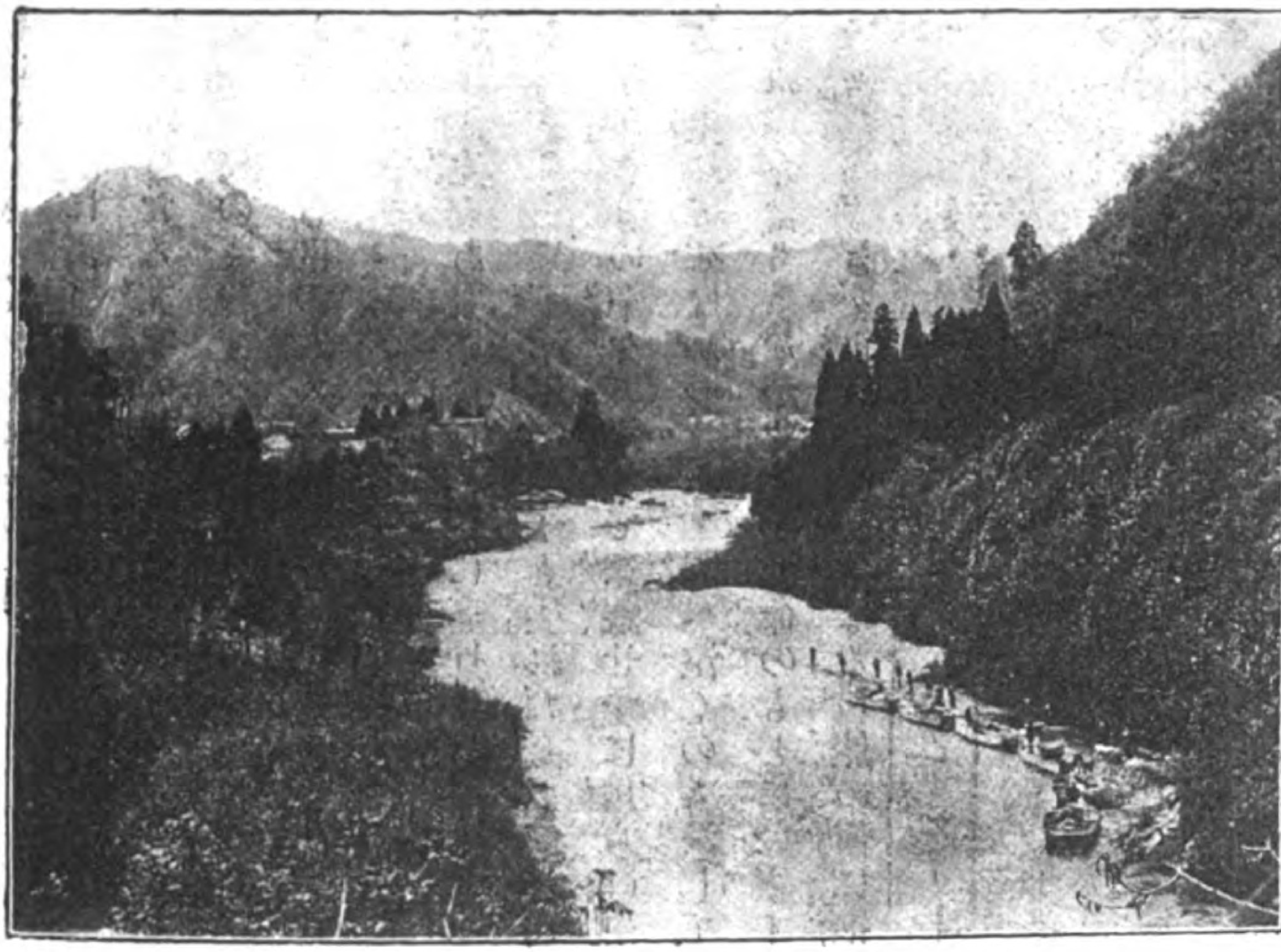
塵界を解脱して、自然の笑と一致し得たる人の生涯程樂しく安全なものはあるまいと思ふ。

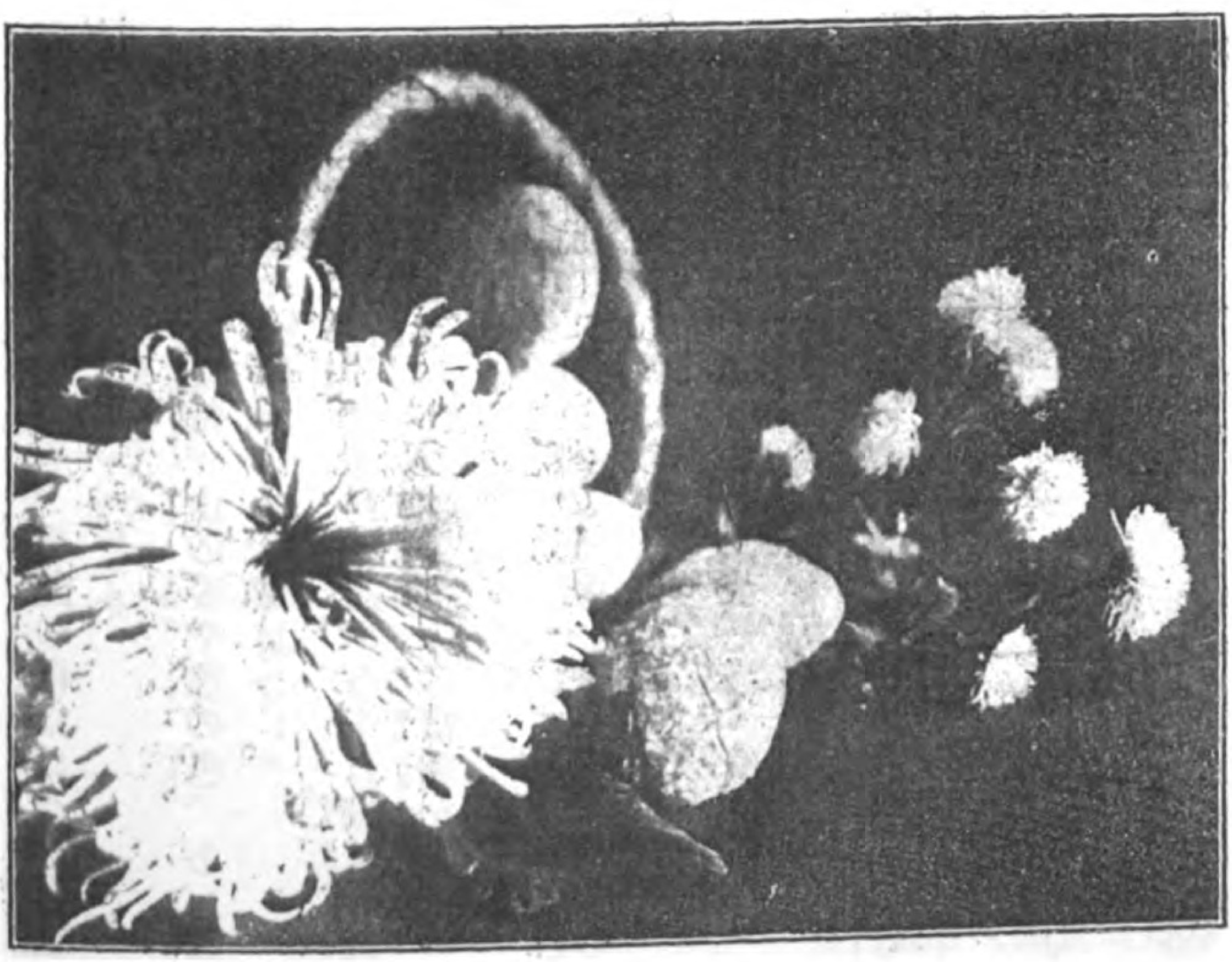
幸うすき身をなげきそ笑へ君
見よとこしへにゑむ天地を……。

杉の意匠



旅すれば足元よりぞ秋の暮（升六）





黄菊白菊その外に名はなくもがな（芭蕉）

人格論

虚霊

△人格の意義と特徴ある人

何か物の本に、道徳上人格といふ事は、知情意が働く上に一定の統一した傾向が有つてそれが言語動作となつて現れるもので、其の統一を指して人格といふ、と云ふ様に書いてありました。つまり人に色々の性癖等があり、一貫した傾向のある意志の活動が有るとすれば、そこに一の人格が成立することになるのです。或人の前に出ると、何となく襟を正さなければならない様な氣がしますが、これは其人の人格が高いからです。委しくいへば、其人の精神活動の上に一定統一した傾向があつて、その爲めにこちらの方で壓伏せられる様な氣持ちがするからなのです。此の精神の傾向は行爲となつて現はれ、言語となつて出で、やがて一種の感化力となります。そして又人格は一種の「力」で、此力が確乎として居れば、如何なる困難悲境に沈んでも其力が働いて不動の進路が開かれます。

又人格が確立しないと云ふことがありますが、それは統一した精神的傾向がないのを云ふので、或る時は樂觀するかと思へば、其次には大變悲觀したりする様に、萬事いろ／＼に變ずるのがそれであります。

さて人格は知情意の統一圓滿と云ふ様に申しましたが、人間の實際の有様にてらして考へて見ますと、「知」が特に活動して他の「情」や「意」が附けたりになつて居る様に知情意の中何れか一つすぐれて其の特徴を發揮して居るのが却てよいかも知れません。三拍子揃つて等分になつて居る人、換言すれば何といふ角もなく圓滿な人もよいかも知れませんが、知の方面が特にすぐれて居る思想家、情の方面の詩人美術家、意の方面に於ける力行主義家即ち道徳家、これ等も何れもそれ／＼に棄てがたいものでせう。而かも情意のない思想家もなく、知意のない詩人もなく、知情のかけた徳行家もなく、知情意は矢張り各自相應に統一して居ります。

若し統一して居なければ思想家が時々詩人の樣なことをしたり、感じたり、道德家が急に哲學者か仙人の樣なことになつて、滅茶々々になつて了ふ譯です。

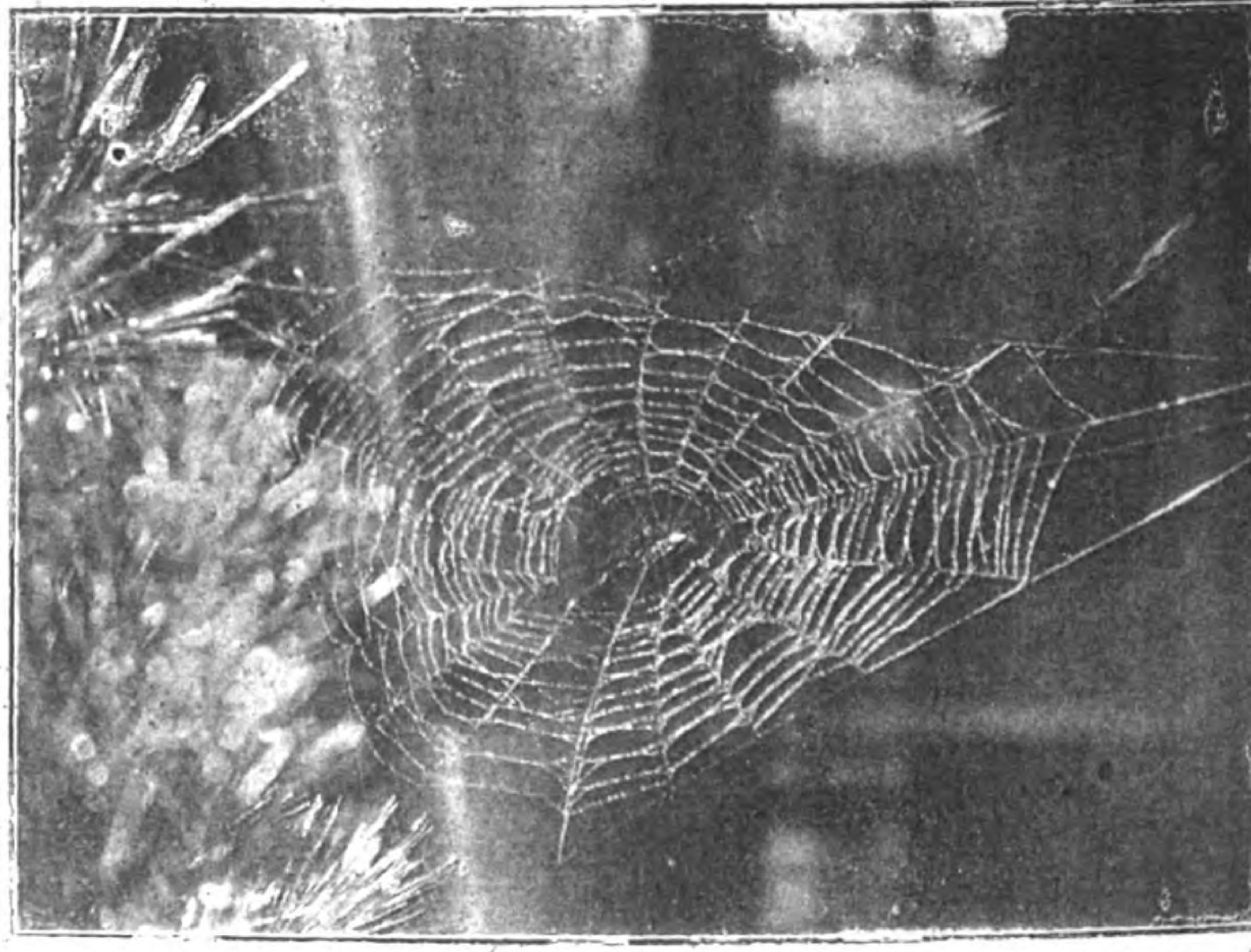
此樣に統一の中に知を主とするもの、情を主とするもの、意を主とするものとありますが、普通道德上人格と云ふのは、意を主とするもの即ち有德者を指す樣に思はれます。實は道德上人格を云々する場合だとても、眞即美即善と申したやうな譯で、第一第二、それぞれ第三と同じく歎稱すべきでありませうが、行爲と云ふ方面から人格と云ふ事を考へるのが普通の意義の樣に思はれます。かうなると道德上人格といふ事は特徴を持つた統一圓滿それも具體的の意味で意の方面に重きを措いたものを云ふと定義したらよろしいかと思ひます。一口に申せば人の人たる所以、又は價値とでも言つたらよろしいでせう。

△人格の特色

これより人格の特色について少し述べませう。第一は自覺といふことであります。全體自分即ち「我」と云ふ者を意識しなければ、自分の缺點短所などを認める事も出來ず、從つて改善といふこともなくなり、進步向上などもありません。此の自覺がなかつたなら、昨の我、今の我、の上に統一の意識がなく、過去の我を提げて現在に立つ事が出來ず、主義も何もあつたものでありません。支離滅裂到底統一と云ふ事が見られず、自然盲目的になり、只本能に從ふのみになる譯で人の人たる所以、即ち人格といふ事が全く缺けて參ります。

第二の特色は自己活動といふ事です。即ち自ら己れの行動を引き起して自己の目的を達せんとすることです。私共が意志的活動(行爲)をとる場合には、過去の製產物によることは勿論です。斯くして意志の活動が一定の習慣となつて一の品性を形成し、其品性が又行爲の上に現はれて來るものですから、私共の意志活動は品性の發現と申しても差支ありません。けれども全く品性そのまゝの現ればかりならば進步發展といふ事

朝露



はないことになります。尙ほ一方に人間には自由意志といふものがあつて自分の品性よりしてはかうしてはわるいといふ命令がありませうが、併し其事をなし得る餘地、即ち何か物を作るにも今迄覺え得た型以外に創作的に作り得る餘地があり、又之を爲すから進歩があるのです。人格の上に於ても同樣で、頭が複雜になるにつれて、色々の新らしい事迄も考へ判斷して行くのは、今迄の思想によるのみでは到底出來ません。そこですべて、行爲をなす場合には自己選擇といふことが行はれます。甲にせんか乙にせんかと考へて甲なら甲と選擇します。つまり品性は品性として其上に此の自由選擇があつて自己活動といふ事があればこそ道德上責任とか何とか八かましい事も出來、又修養改善も出來墮落と云ふ事もある譯であります。故に自己活動といふ事も人格の特色で、そこに人の人たる所以があると申されませう。

第三は自己實現といふことであります。自分で色々と考へ選擇決定の結果として、自分の目的を實現して現在の我よりも一段良い我たらしめるといふ事であります。此の特色此向上發展があればこそ修養の甲斐があるわけであります。尤も此の自己實現はどこ迄進むものかといふに、福來博士はメンタルポシビリチーは

廣大無邊であると言はれて居ります。成程人によつては第六感とも言ひたい樣な千里眼的の不思議な能力が現はれて來ますが、乍去普通はいくら修養しても到底思ふ通りには達し得られません。修養して孔子の樣な立派な人格になれる人もありませうが、なれない人も澤山あります。たゞ幾分たりとも向上進歩が出來るところが一の特色であります。自然現象を見るに、其の繼續する現象の中に、意志的の選擇決定といふ事がなく、從て創作も進歩向上もありませんが、たゞ精神現象の人格のみに之れがあります。又人間以外の動物を見るに、皆本能的に活動する丈で、意志的に活動して向上を計つて行くといふことは殆ど認められませんされば人格の特色も人の人たる所以の一として自己實現を擧げるのも適當と思はれます。

以上述べた所によつて、人格といふ事は自然的、器械的、本能的、盲目的なものと區別されて居る事は明でありませう。

△人格の高下と矛盾

次に人格には高下があります。知情意の統一の仕方に依つて品性の高潔なものは人格が高尚で、品性の下劣なものは下等であるといふのです。これは人間の遺傳にもよるが、又教育の程度にもよつて別れて來ますその他人の人たる價値と云ふ點より見れば色々に分けられます。或は偉大な人格と、つまらぬ人格といふ風に見る事も出來ます。かうして人格といふ語は、人間を他の者と區別するときにも用ゐ、人間相互の比較にも用ゐ、又人格が出來上つたとか出來上らないとかいふ風に用ゐても行きます。小兒の樣なものは、人としての價値人の人たる所以が未だ確立しない即ち未成品と見るのです。又人格の矛盾といふ事がありますが、これは一方に道德堅固の樣に見えるが、他の場合には墮落の生活をなすといふ樣に、前の時の人格と後の時の人格と相矛盾することを云ふのです。これは人格が眞に確立して統一が常に完全な人でない以上は、普通

あり勝ちの事で、比較的出來上つた人格にでも往々之を見ます。立派に主義も出來、意志の堅固な有德の君子でも、造次にも其通りにあると云ふ事は困難なのでせう。聖人ならば兎も角、十中八九はどこかに矛盾が見えます。「定水をこらすといへども、識浪しきりに動き、心月を觀ずといへども、妄雲なほ蔽ふ」と古人の悲しんだのも尤な事でせう。これで見ても人格を完全にする事の難しい事が分ります。つまり意志は自由なもので、惡いと知つても一つやつて見ようかなどといたづらが出たり、好奇心にかられたりするからです。心理學に云ふ二重人格の例には、隨分甚しいのがあるさうです。聖德太子が一時に何人もの訴訟を裁斷されたといふ事が實際ならば、何重人格も具へて居られたのでせうし、又狐つきの樣なものは二重人格の例にあたると思ひますが、さういふのは常態ではないこととして、こゝには普通の場合の事丈述べきました。

△人格の修養

これより人格の修養の事について述べて見ませう。



初汐や磯山もとの家いくつ　（泥岸）

この人格の修養といふことは品性の修養に關係し、品性の修養は意志的活動の繰り返しで習慣を養成するにあるのです。即ちこの修養は德育といふことに見て差

支ありません。そして人格の形式は第一に外界の影響を受けるもので、朱に交はれば赤くなるのためしもある如く、下等の人間の間に居れば、人格も下等になり高潔の人格の者の中に居れば、多少高潔の者になれます。又他の人格のみならず自身の境遇地位によつても大に制限せられます。よく自覺といふ事を云ひますが放蕩息子も一度自分は父母を養はねばならぬ身であると自覺するときは、翻然今迄の非行を改めることがよくあります。

第二には其人自身の天賦によります。いくら磨いてももくろじはどこ迄も黑いと云ふ事を云ひますがいくら修養をしても人格の發展には限があつて、五の者なら五以上には發達しないといふ樣な傾もある樣に思はれます。此點よりいへば、精神一到何事か成らざらんといふ事は餘り名言とは申されません。又甲の人は思索に得意だとか乙は美術だとか云ふ工合に、其人々に本來の得手不得手があります。其他年齡とか職業とかによつても修養の上に便不便があり、効果にも差等を生ずることがあります。

以上の二つの制限を受ける範圍內で修養進歩があるのです。

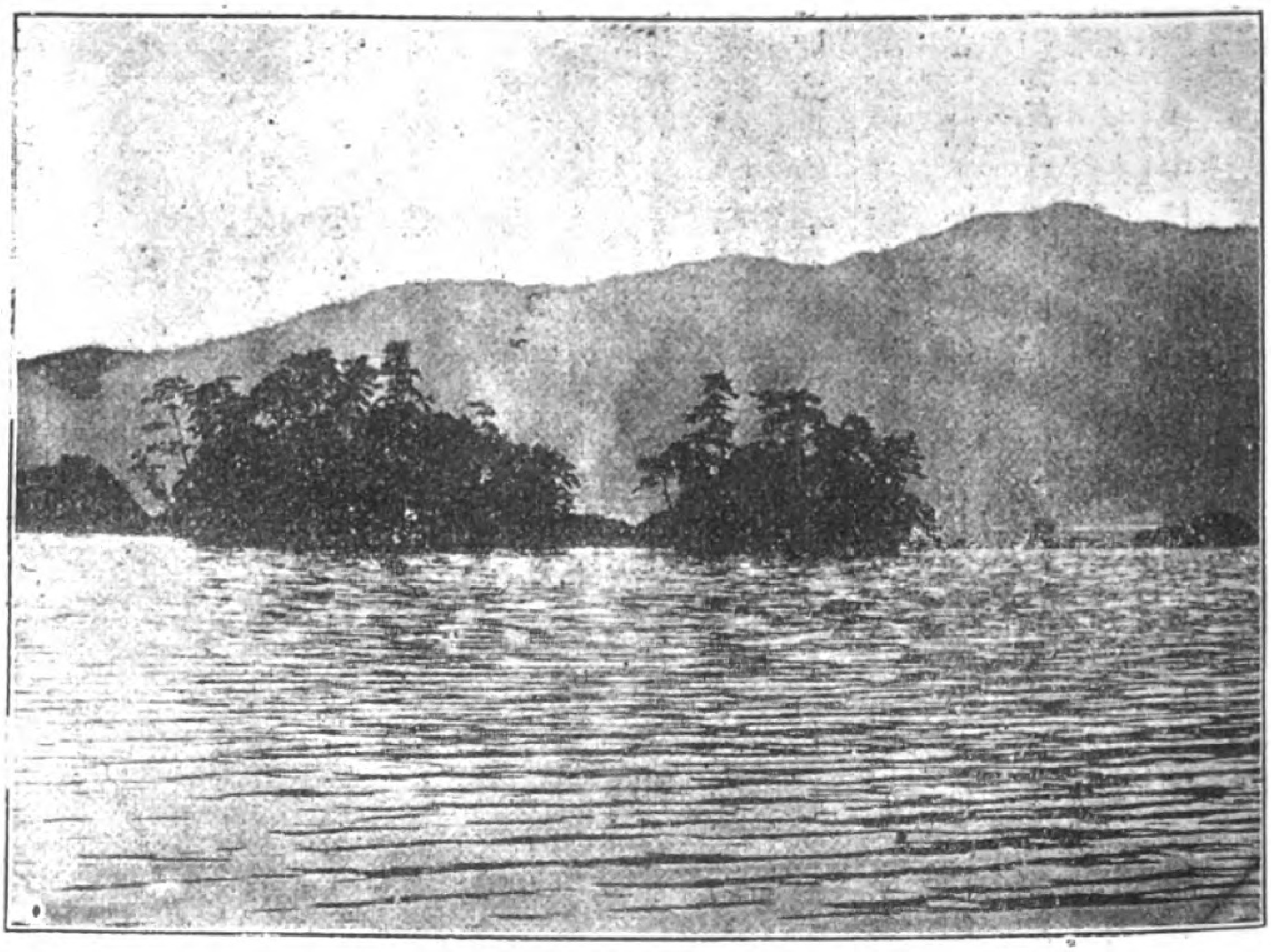
さて修養の內容に入つて申しますと、これは知情意の三者別々に働くものではなく、相關聯して行く事は明かですが、而かも之を三方面から別々に見る事も出來ます。

第一良習慣の養成(意志の方面)。同じ事に意志を用ゐて行けば、それが第二の天性になつて、常に同一の傾向を有する意志活動が養成され、習慣となるものでこれが品性を形づくる本元であります。故に良習慣の養成は殊に幼少の頃に大切です。

第二趣味の養成(情の方面)。有德の行爲をなすのには、一方に趣味が高尚になつて居る事が大に助けになります。之に反して惡い下等なものに趣味を有すれば人格の要素となつて居る情の方が下等になつて、自然人格が下等になります。從つて井戸端會議、人の惡口などに趣味を有して居るよりは生花とか音樂とかに趣

味を持つがましです。下等の趣味の周圍には不德の空

初汐や細いところに帆掛舟（嵐閣）



氣が充滿して居るものと見えます。但し高等の趣味と申しても、自分の務をも忘れて詩歌管絃にあこがれ、趣味に耽溺する樣では、立派な人格とは申されません多忙な間で而も貧乏な暮をして居つても趣味が高尙な人は、其間に悲んでやぶらぬ美の天地に住することが出來ます。それを無やみにハイカラぶつて、親のいふことも耳にはかけないと云ふ樣な人間は、詩の神には喜ばれても、人格としては不完全なものと申さねばなりません。これによつても趣味は又多方面でなければならぬことゝ思ひます。趣味が多方面にわたつて居れば、隨所に春風駘蕩の天地を開いて、悲境にある時にも慰藉を見出すことが出來ます。趣味の中でも道德に趣味を持つ（妙な言ひ方でせうが）と云ふ事は大切と思ひます。武士は食はねど高楊枝と云つた樣な處に、又俯仰天地に恥ぢずと云ふ中には、一種云ふに云はれぬ樂みが、含まれて居ります。

第三に知の方面の修養即ち智識を磨くことの道德を守る上にも大なる助けとなり、趣味の上にも光を放ち

大切なことは申す迄もありません。

△修養の指南車

尚人格の修養としては、前に述べた外界の影響の原則に基づき、他の高い人格に接して其感化に浴する事も必要とおもはれます。又古人の傳記や言行錄等は私共のよき指南車となるものと思ひます。又自覺は人格修養の根本でもあるからして、日に己れを三省すると云ふ風に自省を怠らぬ事も大に有益の事と思ひます。

又平素規則的に又時間的に萬事きまりをつけて活動するといふ事も有益の事と思ひます。これは精神修養には勿論、又身體の修養にもなり、殊に神經衰弱ヒステリなどにはよい療法になるとの事です。殊に意志の薄弱なのを治するには、この規則的に物事をする事が大に効果ある樣に覺えます。其他身心相關の原理に本づき身體を丈夫にする事も勿論必要と思ひます。此等の事に趣味を以て、忍耐の御世話になつて修養して行けば終には立派な人格に達する事が出來るのです。乍去只一つ遺憾なことには人には天禀といふものがありまして、修養其物すらも立派にやつて行かれぬ者もあります。又境遇が修養を妨げる場合もありませう。かくして立派な人格が出來上る見込の立たない時には、どうしませうか。茲に至つて私は宗敎の必要を認めるのであります。又一方人格其物より見ても人格の圓滿といふ以上は其中には安心立命といふ樣なものがなければならぬ譯と思ひます。

△人格修養の極致

宗敎にも色々ありますが、他の偉大なる力を賴むといふ事は何れにも通じて居ります。他の力を賴むと云ふのは、自分の力では思ふ通りには行かぬ、到底駄目であるといふ自覺が出た時の事で、所謂苦い時の神だのみは此の消息の一端を傳へて居ります。宇宙の大靈力と云ふ者を離れては、私共は一秒間たりとも存在し得ないのが事實であります。我々の精神の活動も同樣であります。人格の修養は人間がやつて行く樣に見え

ますが、其まゝ既に大靈力の活動であります。孔子が天命に安んずると云ふ事を申されましたが、日常の活動皆天命といふ事を考へて行きますと、理想が實現せずとも、其時に至つて煩悶苦惱する必要もないのであります。名譽心にかられての修養も利慾にかられての修養も、絶對的に排斥し得るものでもないし、又修養其物が既に一種の慾(善惡は別として)ですが、只修養によつて向上する事が幾分か出來、又一方に絶對と相對界との關係を知つた時には、惡い欲望はなくなり、眞正の滿足が得られます。此に至つて眞の活動も出來ると思ひます。己れを知らずに事に處すると非常に危險ですが、たとひ大悟の域には達せずとも、天命に安んずる事が大體出來て居れば、それが本になつて精神修養も比較的らくにやつて行かれます、此の天命を知るといふ事は己れを知る事、即ち自覺に須たなければなりません。そして此自覺といふ事は人格養成の出發點であります。

次に人格の終局の原理を形づくる安心立命といふ點から見ても、宗教は無限の力を持つて居ると思ひます

蘆の穗



蘆の穗や來て吹まてな風の音　(文路)

貧困に苦み病苦に攻められ、己が良心にも惱まされ、不運に沈み、社會や知人には棄てられ、親兄弟の救ひもないといふ時に當つて一層燦然たる光明を放つものはなんでありませうか。

懷疑に悶へ、哲學に迷ひ、道德に苦しみ、我と我が身を疑ふ時、直下に閃めく絶大の光は何でせうか。生死岸頭に立つてニッコリ照らす微笑の光、白刃の下に坐して神色變せず、電光影裏春風を斬ると歌つた雅量は、全體どこから湧いて來るのでせうか。德育の上から見ても宗教の力は多大であります。大體宗教は感恩であります。忠君愛國の情、孝悌相和の心いづれについても可ならざるなしであります。



旅ころもかたのまよひもおほえけり草の枕の秋の朝風　（千　濱）

宗教上より見れば、人格といふものを全く無價値に下して他力を仰ぎますが其邊の消息は信仰に入つての事でせう。向上の一路、光明輝々、此世は主觀の製造物とせば、主觀其物の整頓發展を計ることは人世觀にも至大の影響を與へ誠に結構な事と思はれます。要するに修養の極致は、宗教の極意に合する事にありませう。

○ぬれて折る袖の月かげ更にけり籬の菊の花の上のつゆ　（鎌倉右府）

○殊更に下ゆく水も秋すみてうつる紅葉のかけを待けり　（千　蔭）



母親教育の必要

現代の文明は一種のなぞであります。此間に生活する人々の思想は動ひ動搖を免かれません。記者一日實業界の名士早川千吉郎氏を訪ふて這般の質疑を發す。又當代に處する一種の見解で、殊に婦人に益する所が多からうと思ひますから、茲に大意を揭げます。

△戰國時代の觀

二千年來門戸を閉鎖し來つた我が國が、明治の御代となり一度其門戸を開放するや、歐米先進國の制度文物は、恰も堤を決したやうに滔々として浸入して來た。而して僅々五十年も經ない間に物質的文明、精神的文明を能く吸收し、燦爛たる文化の光は、東方の天地を輝かして西方の其れと相對照するに至つた。けれども其の光は燈臺から發する光のやうなもので、燦たる光輝も徒らに遠く外の暗闇を照破した故、之れを遙かに眺めた者は、皆な、闇に輝く美しき光よ、曚昧を照らす文明の光よと、一同に其の光と輝とを讃美したが、其の燈臺の下は、美しき光と輝とを得ず、依然として暗黒であつた。而して其の暗黒の裡には種々なる思想上の爭鬪が行はれた。

我が國は斯くの如くにして歐米文明諸國と比較して遜色なき文明國と世界から見られて居るが、思想界は文明國といふにはあまりに混沌として亂れて居る。二千年來人心を支配し來つた舊思想と、歐米諸國より輸入し來つた新思想とは絶えず暗闇の裡に爭鬪を續けて居る。そして新舊思想の衝突に依りて生ずる波瀾は常に堅實なる國民思想を搖亂させ、思想界は爲めに紛糾に紛糾を重ねて恰も現代は思想界の戰國時代の觀がある。

思想界の戰國時代――新舊思想の衝突によりて生ず



精華學校幼稚園（九段坂下）

る幾多の小主義、小主張が各々自己の權威を認めさせやうとして混戰し、其處に何等の統御も、調整もない故、民衆は絕えず動搖し、各自の歸向に迷ひ、恰も曠漠たる沙漠に主なき犬が、何處を目當となく、彷徨いて歩くやうである。

△沙漠の中に迷ふ人

紛糾又紛糾、混亂又混亂を重ねつゝある現代の思想界を統裁し、統一するに足るべき絕大の權威を有する思想若しくば主義が現はれて、常に迷ひつゝある現代の民衆に、辿り行くべき正しき道を敎へなければ、如何に堅牢を矜つた從來の國民思想と雖も、除々と壞れかゝつて、國家は累卵の危きに遭遇するやも知れない現代の識者は常に此の點に注目し、堅實なる國民思想を完成し、社會民衆の歸向を一にする事に努めなければなるまいと思ふ。

殊に精神的、肉體的に男子よりも繊弱な婦人は、斯ういふ動搖の烈しい社會にあつては常に迷はざるを得な

いのである。現代の女子教育家、また子女の教養に當つて居る現代の母は此點に尤も注意しなければなるまいと思ふ。

人は動ともすれば現代の高等女子教育の價値を疑ひ無用を叫ぶやうであるが、私は寧ろ女子教育の任に當つて絶えず社會から攻撃を受けて居る現代の女子教育家に同情する。それは現代の社會は、一般に女子教育に對して間違つた考を持つて、現代の女子教育家に對し間違つた要求を敢てし、其の要求を果さないからといつて社會から絶えず攻撃されるからである。

△家庭に勢力のない母親

一般の人々は、自分の娘がたとへ無智、無能な低能兒であつても、女學校に通はせて四五年間も勉強すれば人並優れた女となつて、立派な處へ嫁入りが出來るものと思つて居る。而して自分の娘が女學校に通つて居るといふ事を非常な矜として母親などは吹聽し、學校への往復には附添女や、または車でして、三度の食



愛住小學校幼稚園（四谷）

事も母親自ら調へ、而かも据膳といふ有様である故、自然と家庭向の仕事を輕蔑して仕ないやうになり、母親など左程難有くも思はなくなり、甚だしきに至つは學校で學んだ淺薄な學問を鼻にかけて、無學な母親を脅喝し、輕蔑し恰も自分の生母を下女の如く思ひなすものすらある。それでも母親は自分の娘が女學校に通つて勉強して居る故自分よりも遥かに學者であるやうに思ひ別に怪ます、また嚴格な態度に出で娘の愆うした間違を戒めやうとも仕ない。實際現代の母ほど家庭に勢力のないものはない。現代の家庭に於ける母の權威は全く零であるといつても差支ないのである。



秋風の松なしらふる度毎に岡への尾花袖かへすなり（春滿）

△同情すべき敎育家

母たるの權威を失した人が、娘を完全に敎育し、正しい方面に導いて行くといふ事は素より不可能である故、現代の社會は女子敎育の全責任を女學校に負はせ、女子の墮落、女學校卒業生の無能の責を一に女學校に歸するがこれは現代の女子敎育家に對して同情に堪へない次第である。僅かに四五年の間に、女學校は如何様の智識を與へ得やう。數十年の永い生涯から畫した僅か四五年の敎育期。其の間に女子は如何程の修養が出來よう。現代の社會は僅か四五年の敎育期に於て、完全なる女たれと要求するのである。之より過大なる

要求があらうか。現代の女子教育家は、此の過大なる要求を受けつゝあるのである。

△女學校のなかつた平安朝時代

　茲に於て思ひ出されるのは平安朝時代の事どもである。源氏物語や。枕の草紙といふやうな不朽な大作を著した紫式部や、清少納言などの宮仕へ仕かうまつる才女達が、歌や、文の上に、强烈濃厚な色彩や、枯淡な、輕い皮肉などを見せ、また雲井の奥に深く閉されて居つた醜い現實の姿を、美しい筆で巧に描き出した其等の作品は、遠く西鶴に其他の作者、殊に種彦の諺紫田舍源氏を生み、近くは紅葉露伴より樗牛の瀧口入道に至るまでひとつとして、作家の頭に強い響を與へないものはなかつた。



玉とみて手にはとられぬ白つゆや月の桂の雫なるらん（契沖）

　斯うした才女の生れた平安朝時代には一つの女學校もなかつた。また女學校を設けて自分の娘を其處で教育しやうと思つた親もなかつた。當時の教育は今日のやうに學校萬能教育でもなく、文部省令に依つて支配せられる枯淡なる畫一教育でもなく、家庭が自然に高等教育の機關であつた。家庭の中に宗教もあり、政治もあり學問もあり、歌舞音樂も戀愛もあつた。それ等のものが都合よく調和せられた中に教育せられたのである。

　而して其等の家庭の中堅は皆な母にあつたのである

即ち當時の女性は家庭といふ學校の中に母なる人が敎師となつて常に導かれて行つたのである。

△前代に權威ありし道德

其後ずつと下つて德川時代となつては、男子本位となり、女性の權威が認められなくなり、從つて家庭に於ける母の權威も認められないやうな有樣であつた。其故當時の女性は手頼になるものを求めた。幸ひ其處へ女大學といふ權威ある道德が生れた。

實際當時の女性は女大學に依つて自己の行を律した自分の辿り行くべき道を求めた。また自分を導くものは女大學であると信じてそれを頼りにした。而して當時の女性には迷とか憂ひとか不安とかいふものはなくて、いと安らかに、平和に日を送つた。

△現代女性の立場

家庭は單に雨露を凌ぐに過ぎない。母は養つて與れるに過ぎない。婦人を導いた女大學も今は其の面影だにない。一代の女性を導く權威ある主義もない。此の混沌たる社會に生きつゝある現代の女性は、何物を信じ、何物に依つて導かれやう。三界に家なき哀れなる女は、たとへ溫かいホームがあつても、其れは單に肉體を安らかに置くに止つて、精神は矢張り路傍に何物かを求めながら彷徨つて居るのである。

「求めよ、然らば與へられん」とは聖者の言葉であるされど絕えず求めつゝある現代の女性は、現代の社會より何物を與へられたるか。女は弱いもの、泣くもの、笑ふもの、悲しみ嘆くもの、怒れないもの、動けないもの、思想のないもの、欺され易いもの、とは皆な女性を罵つた言葉である。而して此の言葉は何時の世にも繰り返される言葉であらうか。

「弱き者よ、汝の名は女なり」と言つたシエークスピーヤの言葉は、之れを永へに打消し能はぬであらうか

△何故迷ふか

要するに迷ふとか弱いとかいふ事は、皆な自己の全



横濱植木株式會社の庭

精神を支配する鞏固な道德・堅實な思想とかいふものを絶えず己が念頭に置いて、それに絶大なる權威を認めないからである。己れの信ずる宗敎、思想、主義若くば主張に絶大なる權威を認めて、其に從つて行動する以上は、其處に迷ひとか、疑ひとかいふやうなものは絶對にないのである。

信ずる宗敎もなく、主義もなき人は、無靈無心の形骸に過ぎない。幽靈に過ぎない。

幽靈は昔は靑暗い森や、腥い墓などにもの凄い姿をして現はれたが、現代の幽靈は、往來、電車の中、劇場などに美しい姿をして現はれる。

己れの信ずる宗敎に依つて救はれず、常に迷ひ、疑ふやうな人は、宗敎をば祈禱や何かのやうに單に日常の儀式と思ひなして、それ以上宗敎に絶大の權威を認めない人、また認むる事の出來ない人なのである。

△導く一つの光明

私は現代の婦人を宗敎に依つて救ひ、宗敎に依つて

導き度いと思つて居る。

宗教も佛教に依つて導き度いと思ふ。基督教も好いと思ふが、基督教は現代人に滿足が出來ない處があるやうで、佛教は基督教で滿足が出來ない處をも、滿足を與へて居るやうである。佛教の中の大乘佛教にある禪などは、現代の婦人に是非お勸めし度いと思ふ。

佛教——禪——といふ言葉は、何となく實生活を離れた、山里の黝ずんだ森から諸行無常の鐘の鳴り響く寂びしい山寺を思ひ出させ、刺戟の多い、忙しい都會生活を營む人には全く緣の遠いもののやうに思はれるが眞に禪といふものは、實生活と乖け離れたものではない。

△我が貴重な時間

私が坐禪を初めたのは大學時代からで、二十四五年になるが、土曜日などには必ず鎌倉の圓覺寺まで草鞋で通つて、當時の管長 今北上人 に就いて禪を敎つた上人は禪には却々熱心で、其當時は上人の門に集まるものは非常に多かつたので大勢の人々が寺の廣々した座敷に集つて上人から與へられた問題に就いて靜坐し默想し、やがて三十分も過ぎると上人に解答するので然うして日曜日まで殆んど二十回も繰り返し、それから上人に禪學上の講話を聞いて歸へつた。

坐禪する時間は、私にとつて最も純潔な、最も貴重な時間である。靜坐し、默想する瞬間には世俗の榮華も、歡樂も、名譽も、財貨も皆な影もなく消え失せて吾が心は佛の心と渾融し、吾が靈と、佛の靈とはいと潔らげに談り合ふのを感ずる。然ういふ感じは蓋し基督教信者が祈禱する時にもあると思ふ。

禪は佛教の結晶と言つてもよい。佛教の何千卷の敎文も禪では、直指人心、見性成佛の八字に現はして居る。人心といひ、性といひ共に正しき道を指したので正しい道が見えれば立派に成佛する事が出來るといふ意味である。我々は坐禪に依つて精神を修練し、正しい道を見出し、而して其の道を辿つて行けばよいのである。禪をやるに何も靜かな奥座敷には限らない。汽車の中、電車の中、人力車の上でも隨時隨所に之れをなす事が出來る。

女(15の一)

美術

造花材料

東京市淺草區駒形町十四番地

三國屋

關口商店

電話下谷四〇五一番
振替口座東京一一六四二一番

定價表御入用ノ節ハ郵券貳錢御送ノ事

女（ぬの二）

◎産婦人科 宅診 午前
◎小兒科 往診 午後

病室並ニ産室ノ設備アリ隨時入院ノ需ニ應ズ

院長 女醫 吉岡彌生（鷲山改姓）

東京市麹町區飯田町四丁目卅一番地

東京至誠病院

電話番町（二二五七）

●婦人科 産科

明治療院

殊に月經障害、ヒステリー（診察午前）

淺草區七軒町二

入院隨時 院長 平田東一（章之丞改）

外科◎生殖器科（診察午前）

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

東京皮膚病院醫明山崎製

毛生液（モウセイエキ）



禿（はげ）、脱毛（ぬけげ）、薄毛（うすげ）、生際（はえぎは）惡（あし）き人（ひと）試（こゝろ）みよ……

本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髮の毛はへぎは眉毛髮等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

東京高等師範學校講師 山松鶴吉先生著

教育界の一大燈明出づ

最新刊

小學校に聯絡せる 家庭の教育

菊判函入製本頗優美 定價壹圓 郵稅八錢

家庭教育は學校教育と相俟ちて極めて大切な事であるにも拘らず從來此の方面を指導する書物に乏しく偶々あつても多くは教育の專門家でない人々が唯面白く表面的のことを書いたのに過ぎない有樣であつたのは家庭教育に對する非常な缺陷であつたのである ▲本書は之と全く其の撰を異にし教育の專門家として其の理論に精通し且つ豐富なる實際上の經驗を有せらるる先生が教育の根本義より推して學校教育の十分なる連絡を保てる家庭教育の實際方法を懇切周到に詳述せられたるものである。▲故に苟くも子女の教育を思ふ父母は勿論小學教師幼稚園保姆並に高等女學校、師範學校生徒諸子の必す一本を備へて精讀を要する家庭教育に關する無二の良書である。

文學博士 遠藤隆吉先生
東京府立第一高等女學校教頭 市川源三先生 共著

男女 青年之眞理及教育

(好評再版) 定價金壹圓 郵稅八錢

醫學博士 三宅鑛一先生著

通俗病的 兒童心理講話

(好評再版) 定價金壹圓 郵稅八錢

女(めの三)

發行所 東京神田小川町 (振替一二三三六) 敬文館

月やく下し

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も迅速最も安全に快通

流下する特効あり貳參ケ月間滯りたる月經は二劑分にてキレーに流下す又半年以上の月經閉止分にても五劑分にて必ず完全流下す且月經、及び血塊不通月經不順より起る子宮病血の道を全治しも年滯りの古血及び惡血毒血を一掃する事確證す但し本劑は其奏功極めて確實顯著なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ

藥價一劑壹圓二劑壹圓九十錢三劑貳圓七十五錢五劑四圓

大阪市安堂寺町二丁目四二

本舖 渡邊順治

たむし　おまつ　錢がさ

にきび　そばかす　わきが

には何様頑惡劇烈の難症も必ず病素を絶滅し決て再發内攻他病等に變ずるの恐なき皮膚病斷治液を發賣す本液は 不肖が 半生の心血を凝ぎ有ゆる歐文成書を涉獵し苦心の末創めて發見せる者にして其効顯の的確なる世既に定評あり謝辭を述ぶるに遑あらず以て信用の厚きを知るに足る即皮膚は自然の美を害ふ事甚敷立身出世の妨けとなる者なれば一刻の猶豫を逸せず試よ年來の痼若しく拭ふが如く除く事を得べし盡油斷あるべからず少額の費を惜み後れて悔とも又及ばず 特製貳圓甲瓶壹圓乙瓶五十錢送料八錢

色黑く醜き婦人令孃と雖

悲歎するに足らず香粧化學に造詣深く斯道に自信を有する當館發賣の塗布料或洗料を常用せば肉體を美白艷麗ならしめきめを細かくし艶を出し皺の生ずる事なく口やけ白粉やけ發賞の爲色黑き人と雖も突たる美人と化する事疑なし塗布料及洗料 各大壹圓小五十錢送料八錢

專賣 堺大寺南門 電話四六三番 振替口座大阪一三五〇番 藥劑師 一色直太郎

各十月號出來

女子文壇

月刊

少女

天下[illegible]

每月一日發刊

◎女子文壇價拾五錢 大き婦人の絶好伴侶

◎少女價拾錢 子女の爲に成を賜一

◎百聞一見に如かず◎全國書店取次販賣速に試讀あれ

◎出版元には取揃わり

東京京橋女子文壇社發行

十月十日 女子文壇 第三增刊

二百餘頁材料豐富 定價廿錢 送料壹錢半

娘時代

發行所 東京京橋大鋸町 女子文壇社

▲賣捌所 全國雜誌書店取次販賣す

女（ぬの八）



克己精勵の模範的婦人

婦人記者

宗教界の名士、松村介石氏及び昆蟲學者として夙々の聞えある松村松年博士の母堂せい子刀自は、本年七十三で老人會中のすぐれたお方です。刀自の閲歴の中で著名なのは松年博士の幼時、博士が學業に身の入らぬのを歎いて十年に亘る山上の祈りをつゞけられたことでございます。こんなに克己精勵主義の刀自は一面誠に洒々落々偏屈のところが少しもありません。老婦人の模範であるのは申すまでもなく若い婦人もかうありたいものと敬服の餘りそのお咄しぞ。

▲苦心された松年博士の幼時

末子の松年が育つ頃は御維新後、親が實業に働らく時代でしたから親は同じやうに仕込むつもりでも自然兩人の兄のやうに學問に身が入りませんで、嚴しい父親に隨分酷い目に遇ひました。本氣になつて掛れば出來る方の性質ですのに惡戲ばかり夢中になつて一度落第までした上に、次の試驗の時には如何しても學校へ往かぬと强情を張り出し、いくら諭しても叱つても聽きません。私は仕方がないから下駄を片ちんばに履いたまゝの兒を引摺て、學校へ連れて往き、敎師に賴んだこともありました。私はこの兒の行末を案じて眠られぬ夜も多うございました。熟々考へますと、ずつと以前實母が腹膜炎でむづかしかつた折、赤兒の長男を負ふて寒中三七日天王へ跣足まゐりして念願が成就したのは唯一の神を知なかつた祈りでも親を思ふ誠心が天に通じたのであらう況して全能の神を認めた今日、唯クヨクヨとして居る時でないと決心して、それから毎朝

城山へ祈禱に通ひ始めたのです。尤もその頃、郷里の基督教信者仲間でこの城山の祈りを企てた者が大分ありましたが、對手のない人達ばかりと見えて皆三日坊主でしたから十年間お連れは一人も有ませんでした。

▲家族も心付かなかつた

城山は御承知の通り明石城の御天主の址で、鬱蒼とした木立の間から播磨の景色を一目に眺める靜かな良いところです。丁度私の家から十町の道程でございますが、毎朝未明に此處に登り、聖書を讀み、讃美歌を唱へ暫らく默禱して歸る頃、漸く東が白らみました。郷里ではその頃大抵の家では下婢を置きませんでしたから、朝飯の支度は山から歸つていたし、丁度御飯も御汁も出來た時分家族が起ると云ふ都合で永い間誰も私の山通ひを知りませんでした。一心と云ふものは妙なもので、晝の間は子供を相手に授産場の仕事を手傳ひ、機の下拵や、下職に渡す紡糸の出入を受合ふたりしまして可なり勞働もしましたけれども寢過して山へ往かれなかつたことは一度もありません。いくら夜深した時でもその刻限にはチャンと眼が醒め、前夜に揃へて置く聖書と讃美歌の本を抱へてスタ〳〵出掛けたのです。イヱ元日だつて休みませんでした。

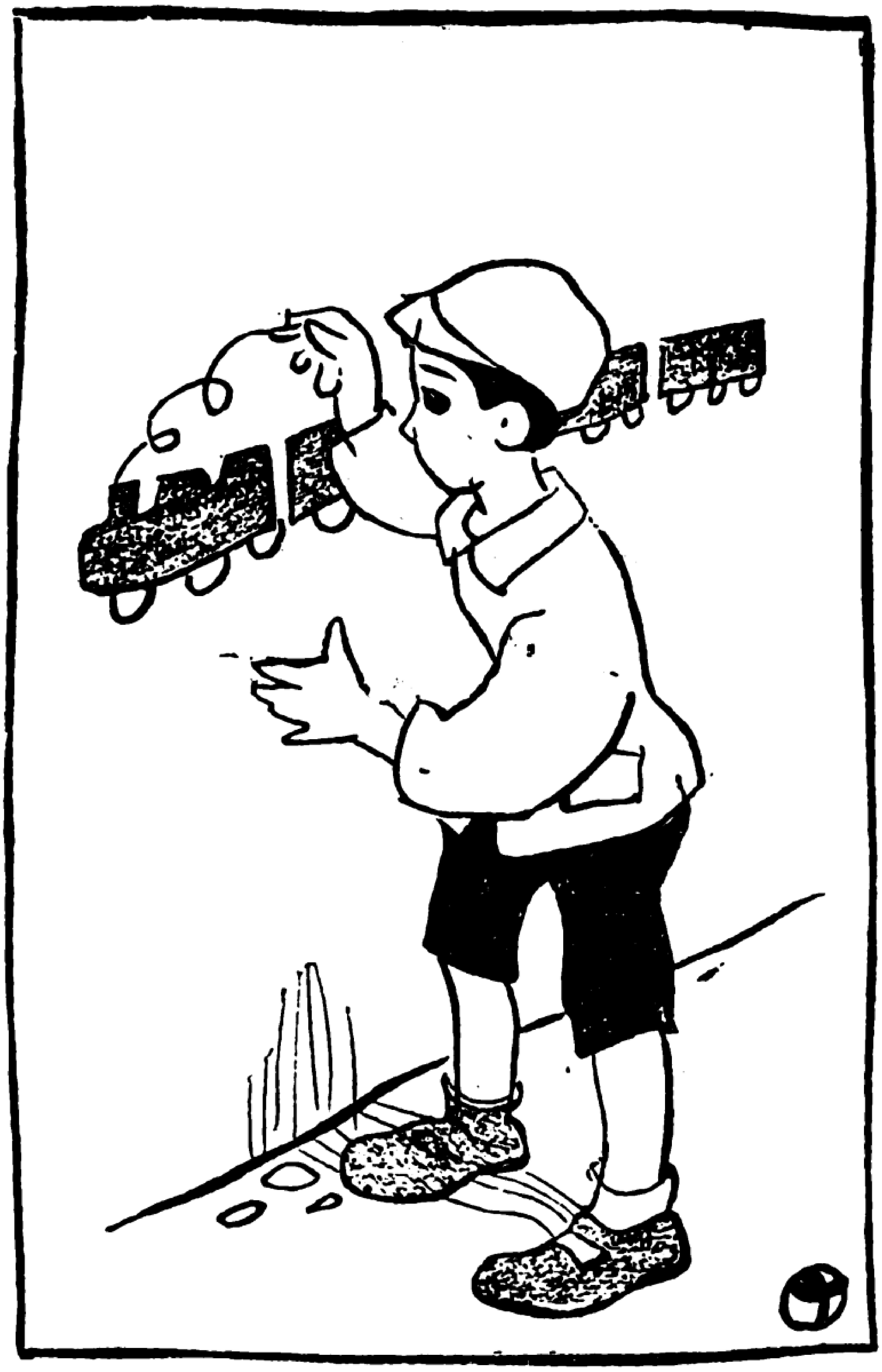
▲悦んだり悲しんだり

毎朝山から歸る折、嬉しくて〳〵堪らん時は、悲しくなつてホロ〳〵と涙を流しながら戻る時もありましたこの涙は足らぬ我身を悔ゆる涙、身に餘る惠みに浴する嬉れし涙でございませう。吾兒がどうやら人並になつた難有さは申すまでもありませんが、この十年間の祈りのおかげで聖書の意味も悉皆分り、その日〳〵の心得を毎朝暗示された樣に思はれます。お說敎じみて居ると仰いませうが私は確かにかう信じて居ります。

▲狐の惡戯と稻荷のお供物

時候の宜い頃の晴れた日は、ほの〳〵と明け初る舞子の海や赤紫色の淡路島あたりに白帆が見えかくれす

る風情を城山から眺めますと眞實に繪のやうで不思恍惚しましたが、足駄の齒がごろ〳〵する雪の朝や、傘むす雨風の朝は可なり山通ひも難儀でした。併しそんなことは一年の中に數へる程しかなく、又慣れゝば却つて興味も湧いて來ました。可笑しいのは狐の惡戯で、提灯の蠟燭を横領されたことは何遍か知れません。全く狐の技術は馬鹿に出來ぬものでございます。狐ではもう一つ可笑しいお咄がございます。城山の上には何箇處



も稻荷の祠がありまして、毎年寒施行をいたしますが狐の眷族の數に應じて祠毎に赤の御飯を油揚に載せ、木の葉を敷て供へてあります。私はこの供物を土まびれに凍させて了ふのが惜しく、持つて戻つて乞食にやりましたがお粥にして悦んで食べました。可笑な廢物利用をやつたものだと唯今以て一つ話になつて居ります

それから或朝山へ登り着く途端に大地震があつて、松の木につかまつて居たことなぞがありました。

▲子供は怖がらずに育つた

子供の躾について良人の苦心は一通りでなかつたのでございます。藩の儒者に相談して嚴重の方針に定めましてから、至らぬ私は惡いと知りつゝ子供の味方に廻はることもある位でした。良人は盆踊のある折なぞ自分で籠を張つて大きな被りものを子供に拵へてやつて踊らせ、遊ばせる時には十分遊ばせましたけれども、平生は實に寸分も手綱を緩めず、又臆病未練の振舞を第一に禁じました。私も子供の小さい内から世の中に怖い物は一つもないと云ふことだけは教へこみましたので、小さい内から夜中に暗い長廊下を傳つて便所に往く位は平氣でした。私は同胞がありませんから四人の兒を人一倍大切に思ひましたけれども一寸した病氣に醫者を呼んだり、持藥を飲ませたりすることは爲ませんでした。と云ふのは藩の家中に美しい獨り娘を持つた人があつて、大切の餘り毎日醫者に診せ、毎日藥をお膳にのせて缺かさず飲ませて居た。その中毒でその娘は遂に發狂した例を見たからでございます。

▲六十七から畫筆を持つ

宗教に入らなかつた昔を考へますと我儘で煩悶が多かつたものと思ひます。どんなことが湧いて來ても唯御旨に任せて重荷を下ろす今日に比べましたら丸で人が異つたやうなもので感謝の他はございません。そのお蔭か身體が丈夫で二三年前までは針仕事もセツセといたしました。近頃は眼が疲れますので綿細工押繪なぞ拵へて老人會の折、皆樣のお孫さん方に買つて頂き、これを會の寄附金に爲て居ります。お金は僅かでも自分の手で作つたのは快よいものですから……。いゝえ私は何一つ師匠についたことはありません。横好の我流でやつて居るのです。葉書へかく可笑しい繪なぞは六十七から始めました。六十の手習ひよりもつとかうじて居ますが、六十七の時、手の指を怪我して針仕事も洗濯も出來ず、退屈の餘り筆を持つて見たら一番痛みに障らなさうなので、屏風の岩を見てかいて見ま

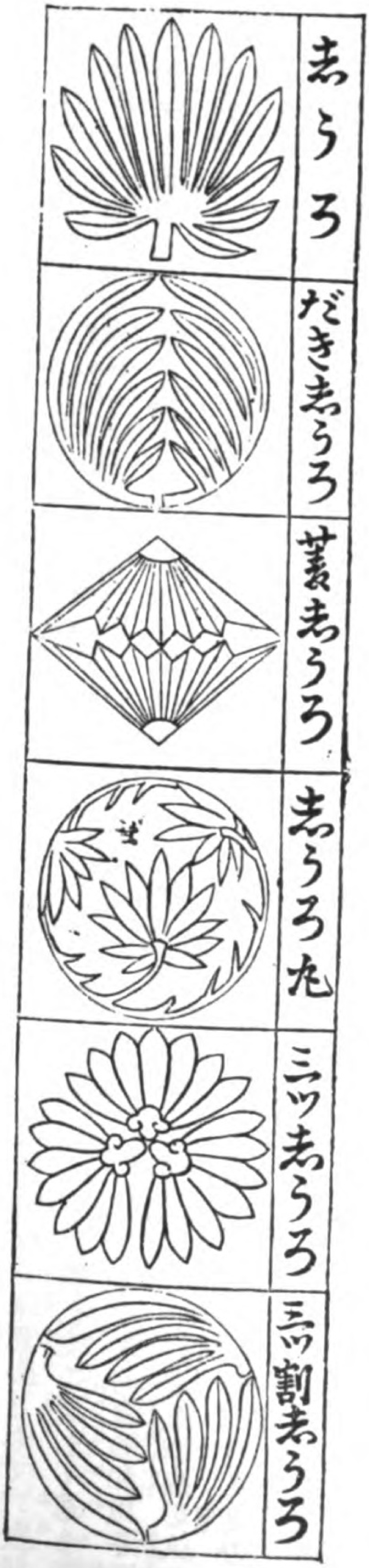
したところいつか蛙の形になつて了つた。そこで、下手な繪は岩も蛙となりにけりと云ふ自贊を爲たのが手始めでお腹の皮のよれる名畫を數知れずかきまして、介石から松婆の號を貰らひました。「折角なさるなら師にお就きになつたら」と嫁が勸めてくれますけれども先生に見て頂いて、あちこちを直されると折角の我流を失ひますから入門いたしません。和歌でも俳句でも師匠に縛られるのはうるさいと思ひまして、矢張自己流で通して居ますですから私の和歌や俳句は屹度氣鬱症の人の妙藥にならうと思ひます。



▲芝居見物の所感

先達思ひがけなく或人に誘はれて帝國劇場で女優の芝居を觀て來ました。泣いて肩を張らした昔の芝居と違つて暢氣に笑つて見物が出來たのですが、家の者に話が仕度ても實もつかまへどころもないの

で話が出來ないので手眞似身振で説明するさわぎでした。昔の芝居はどんなのを見ても一とつづゝは感ずるところがあつたものです。忠臣藏や宗五郎なぞは勿論小次郎を斬て敦盛を助ける熊谷、妻子を身代りに立る歪の權太、夫のために身賣りする稻川の女房、其外何の芝居でも見物の血を湧せる節々は必らずありました勿論厭なところはあつたけれども忠孝とか節義とかの筋が通つて居ましたから娘子供に話しも出來たかと思ひます。或人が、西洋の芝居は目をむいて睨み、後は踊るばかりだと仰つたが、先達の帝國劇場のも全くこれでした。小説類も今のは白湯を呑だやうで昔者には物足ません。白湯呑んだゞけなら良が、惡い黴菌も追追若い人のお腹に入りはいたしますまいか。私の娘が嫁に往く時、私は短冊に、貞と孝、愛と誠は常にあれ忍ぶ心に平和おだやかと云ふ歌をかいて與へましたが或時何にかの席でグリンさんの奥樣にこの話を爲ましたところ、奥さんが、それは間違てます。私の國では夫婦互に相愛せよとは云ひますが、親に仕へよとは申しませんと云はれました。かう云ふ頭腦が芝居にも小說にも現はれて居る風が段々這入て來ましたから、今の婦人方は餘程中毒して居るやうに思ひます。





今様門田の早苗

古歌に現はれたる女子處世訓

物集梧水

○

万葉集

あさか山影さへ見ゆる山の井の、あさき心は我が
思はなくに　前采女

伴蒿蹊大人が「門田の早苗」にまねびて、些か書きつく。なべて女は、心厚く、思ひやり深きこそよけれ。或は智的にのみ教育せられて、よろづ物識り顔に擧動へる、或は天晴れの男勝りよ、女丈夫よなどゝ呼ばれて、甚とゞ得意げに悦べる、實に小面憎くも片腹痛き極みなり。女、女らしからずば、その價値何處にかある。今は昔、奈良の舊都の、咲く花の匂へる如く賑りなりし頃、葛城王、陸奥へ遣ひして安積山の邊に至り給ひぬ。抑や幾夜の草枕ぞ。貴き御身づからなれば、一入憂きこと茂く思召されけむ。國司の御接待にも絶えて喜ばせ給はざりしに、その折、思ひやり深き前采女ありて、片手に土器を捧げながら、軈てこの歌を口吟みぬれば、葛城王、欣然として終日宴飲したまひけりとかや。實に女は思ひやりが第一なり。別きても人の妻は、明け暮れ夫の苦勞を思ひて、この歌の心、さらさら忘るべからず。

○

古今集

女郎花憂しと見つゝぞ行きすぐる、男山にし立て
りと思へば　布留今道

若き女の、男の間に立交るは、危險此上もなきぞか

し。縦や己れだにと堅く心に思ひても、他の蔭口そば、如何にせむ。李下に冠を整し、瓜田に沓を入るゝは、身をあやまる原因と知るべし。男女交際などのこと、損は毎時も女の方に在りと知るべし。

○

後撰集

無き名ぞと人には言ひてありぬべし、心の問はゞいかゞ答へむ　　詠人不知

欺きても、欺かれぬは、己が良心なり。他に對ひてこそ、然ることは絶えてなしなど、誠しやかに言ひくるめ了せめ、我れと我が心に對ひては、ひそかに顔の赤らむこともあるめり。表面を飾るは人の常なれども良心を磨くぞ、更に美しき。孔子が愼獨の戒め、司馬光が俯仰天地に愧ぢぬ言葉、斯くありてこそ、人は始めて尊くおぼゆれ。

○

古今集

かたちこそ深山がくれの朽木なれ、心は花になさばなりなむ　　兼藝法師

眉目麗はしければとて、其れにのみ頼りなば、災禍やがて踵を接して來りぬべく、容姿醜ければとて、ゆめゆめ失望するに足らず。心をだにいよ／＼磨きなば、終には一生の幸福、必ず其門を訪るゝぞかし。美人に薄命者多く、醜婦に思はぬ出世するもののあるは、皆なこの心掛け一つに依れるにこそ。

○

金葉集

いたづらに過ぐる月日を數ふれば、昔を偲ぶ音ぞ泣かれける　　参議師頼

光陰一度過ぐれば又來らず、年のみ徒らに長けて、何の藝能もなく、何の事業をも爲さゞるほど、口惜しきはなし。夏の禹王は一寸の光陰を重んじ、和蘭のウイルヘルム王は金錢よりも時間を貴びしこと、實に道理ぞかし。さりながら若き人達は、概ね明日の日を頼みて、其日々々を宛ら胡蝶のやうに遊び暮すが多けれど、軈て額に皺を數ふる時にぞ、熟々と胸を打つて後

悔ずめる。何事を學びても樂み多きは、唯だ若き時のことなり。

○

古今集

底ひなき淵やはさわぐ山川の、淺き瀬にこそ仇浪は立て

素性法師

世の中のこと何くれとなく、初めて覺えし時には、萬づ己れに興



深く思はるゝものから、然こそは他も面白からめと、口を極めて喋喋しく饒舌り立つれど、世の經驗も學問も深き人の耳には、何の興味もなくて、唯だ饒舌る人の幼稚なるを憫み顔なるぞ淺猿しき。今日學びたるばかりの事を、己れのみ知り

たらんやうに、誇らしげに他に敎ふるをば、これを口耳の學問と云ひて、古への人も痛く恥めりき。彼の紫式部は、日來然まで才學も無かりしやうなるに、折節源氏物語を著はして、數多の學者を驚かしたりとかや。斯くてこそ其人の品位も奧床しさも一入におぼゆるなれ。

○

古今集

色見えでうつろふものは世の中の、人の心の花にぞありける　　小野小町

人の心ほど移ろひやすく頼みがたきはなし。別きても年若き人達は、心未だ定まらず、今日は好しと思ひても、明日は直ちに嫌ひになりて、心の移り變りゆくさま、宛ら秋の空に似たり。されば配偶を求むるにも能く〳〵其性質を確めざれば、口惜しとも口惜しき事の出で來ぬべし。配偶を選ぶは學校を擇ぶよりも難しく、一生の苦樂偏へに其れに懸りぬれば、心を籠めて考ふる上にも考へ、小野小町が歎息なきやうに計ることそ肝要なれ。

○

古今集

紫の一本ゆゑに武藏野の、草は皆なから哀れとぞ見る　　詠人不知

立身出世は己れ一人の爲めならず、一家のもの、一鄕のもの、皆なその餘澤に潤はざるべきかは。されば己れ一人の進退にも、その及ぼせる影響の廣きを思ひて、何事に拘らず分別するが第一なり。此節の若き人人、動もすれば口を開きて、個人主義とやらむ、自然主義とやらむ、理窟めかしう言ひのゝしりて、己れは己れだけにて始末の着く如く思ふめれど、一家一鄕の喜悲は扨て如何にすべき。坊主が憎ければ袈裟まで憎く、善き人の一家は皆な善く思はるゝが人情の常なり。

○

後撰集

夕暮れの淋しきものは朝顏の、花をたのめる宿にぞありける　　詠人不知

人生、青春の時期ほど面白く樂しきはなし。それ結婚よ、それ新婚旅行よと、歡樂は宛ら天國に遊べる心地ぞすめれど、榮華を盡して醒めたる後は、限りなき寂寞の情ひし／＼と胸に沁みて、あるにも堪へず覺ゆるぞかし。然れば歡樂には必ず十分を盡さで、後の淋しさを招かぬ用心することこそ、これも心を惱ましめぬ法にてあるなれ。

○

拾遺集

手枕の隙間の風も寒かりき、身はならはしのものにぞありける　　詠人不知

諺にも、習ふより馴れよとぞいふなる。憂し辛しと思ふは、未だ身に馴れぬが故ぞかし。往時、或る富豪の俄かに零落れて、駕籠など舁くやうになりたるがありき。舊友に甚とゞ憐れがられしに、其人微笑みて、以前は釣夜具すら重たしと思ひしが、今は駕籠さへ然のみに重からず、身は習はしのものなりと答へぬとかや。實に身は習はしのものなり。憂し辛しと思へば、何處までも際限なけれど、其れを耐ふれば、何時しか樂天地に至りぬべし。世には折節、若き嫁などの、舅姑に事へ、夫を慰むるわざ、心に沁々辛しなど歎くもあれど、其は多く我儘に育ちて、辛抱が足らぬ故にぞ有なる。

○

古今集

ねぎごとをさのみ聽きけむ社こそ、果ては歎きの森となるらめ　　讃岐

世に義理人情は却々に難しきものなり。未だ處女時代には、然までのこともなけれど、身の出世、他にも敬まるゝやうになりては、人情交際、義理交際、愈よ繁くなりゆき、斷るにも斷りかぬること多く出で來るぞかし。難しきは此折なり。他の賴み、直だに引受けて、首尾よく爲遂ぐれば、此上なき功德なれど、萬一も成らぬ時には、却つて他には恨まれ、己れも苦むなど、算盤に合はぬ懊惱も多かりめる。然れば他を世話するにも、大凡そ己れの力を計りて、輕々しく引受け

ぬやう、心すべきわざなりかし。

○

万葉集

吉野なる夏箕の川の河淀に、鴨ぞ鳴くなる山蔭にして　湯原王

下を御するほど難しきはなし。愛すれば侮り、叱れば恨む。然りながら手加減一つに依りては、主婦の命令、如何やうにも聽くものぞかし。上に立つものは、能く其呼吸を呑み込みて、侮られず恨まれぬやう心すべし。假令彼等に些かの過失ありぬとも、又は煩き蔭口きゝぬとも、其は山蔭の河淀に鴨の鳴きわめくに等しと思ひて、大概は見脱し聞き脱しすることをよけれ。蔭にて爲すこと、餘り抉り出さむとすれば、徒らに人望を失ふものなり。實に深淵は窺ふまじきものぞ。

○

古今集

世の中はなにか常なる飛鳥川、きのふの淵ぞ今日は瀬になる　詠人不知

有爲轉變は世の習ひなり。昨日まで美しき衣着たる人の、今日は俄かに襤褸被くもあれば、然ばかりとは思はざりし者の、忽ち威勢よく自動車にて駈けあるくもあり。されば世の中のこと、何くれとなく宛ら淵瀬變る飛鳥川と心得て、常にその心掛けするが第一なり。假令その身の不自由なき時にも、必ず他を侮るべからず。假令その家の榮ゆる時にも、必ず油斷あるべからず。萬一の折を慮りて、施恩、貯金のことなど、決して忘るゝこと勿れ。災禍は何時如何なる時に其窓を覗くやも知るべからず。

○

新勅撰集

己が音に辛き別れはありとだに、思ひも知らず鷄や鳴くらむ　中宮少將

心なき鷄の、唯だ晨を告げて鳴くとばかり思ひきや、後朝の惜しき名殘に、其音を恨む人もあるめり。己れは唯だ何の心もなく爲したる所爲の、計らずも他の迷惑となること、世には往々あり。別きても、己れは

興に任せて無駄口叩きたることの、端なく他の迷惑を醸して、思ひがけなき怨恨を買ふこと甚と多し。言動を慎むは實に淺からぬ心得にぞある

○

拾遺集

春の野にあさる雉子の妻戀に、己がありかを人に知れつゝ　大伴家持　歌にこそ。

雉子も鳴かずば射たれはすまじ。人も餘計のことし○



て其身を滅すが多かり。諺にも、過ぎたるは猶ほ及ばざるが如しとかや。出過ぎもの〻、能く〳〵味ふべき

詞花集

身を知らで人を恨むる心こそ、散る花よりも果敢なかりけれ　堀川右大臣

己れに暗きは人の常なり。己れのことは棚にあげ置きて、他の仕向けにのみ憂し辛しと歎くは、人情に疎き心ぞかし。此は夫婦の間にもあることなり。己れは然まで夫に盡さずありながら、その愛を擅まゝにせむと思ふは、大なる誤りとや云ふべき。他は得手勝手のもの、夫は我儘のものと、豫め胸に相場を立て置きて扨て其人にも悦ばれ、己れも樂むやうに取計らふこそ世渡り上手の婦人とは云ふべけれ。徒らに他を恨むるは、返す〴〵も阿呆のわざなり。

○

新古今集

深き夜の窓うつ雨に音せぬは、うき世を軒のしのぶなりけり　寂蓮法師

一家の主婦たるもの、能くつゝましやかに耐へ忍べば、何の風波も起らず、此上なく穏かに暮すを得べし。其れを然は得耐へで、夫に叱られては口答へし、姑に戒められては口惜しく泣きさけぶなど、以ての外の心得違ひなり。斯くては一家の内騒々めきて、家庭も圓く治まらねば、他にも侮らるゝ節も多かり。彼の軒端に生ふる忍草を見よ。夜深き頃、雨はら〳〵と落し來ぬれど、甚と柔らかに其れを受くればこそ、喧しき聲もなくて濟むなれ。柔よく剛を制し、負けて勝つが女の秘傳ぞかし。事毎に荒立てゝ泣きさけび、罵りさわぐは、下々の下の女と知るべし。

○

古今集

蜑の刈る藻にすむ蟲のわれからと、音をこそ泣かめ世をば恨みじ　藤原直子朝臣

世を怨み人を呪ふは、見るだに見にくき心地ぞせらる。縦や如何ほど辛きことありぬとも、唯だ獨り忍音に泣き沈む風情こそ、哀れさも可憐しさも一入まさりて、鬼拉ぐべき男子の腸をも斷つらめ、何處いかなる世にも、美人一掬の涙ぞ、千萬の兵士よりも力強き。

今古集　◎

世の中の憂きたびごとに身を投げば、深き谷こそ浅くなるらめ　詠人不知

意思よわければ、苟且のことにも屈して、天地の間に身を措く所なきやうに思ひ込み、可惜悲観の淵に沈むこそ、果敢なきわざなれ。浅間の山、華厳の瀑、此頃の流行ものゝやうなれども、遠き昔にも斯かる例のありけむ、今古集の中に其れと見えにき。あはれ笑止ぞや。

今古集　◎

世を捨てゝ山に入る人山にても、なほ憂き時はいづちゆくらむ　凡河内躬恒

何事に依らず努めて能く忍びぬれば、軈て其處に楽天地を見出し得べきに、些かなることにも腹立たしく、口惜しく、恨めしく、悲しく、有るにも堪へず辛く思ひなば、扨て何處へゆくとも、娑婆の輪廻、皆な地獄ぞかし。女の嫁げるを見るに、辛抱気なる者は、大概其儘にて納まるなれど、一度離縁する者は、何處の家も気に入らず、其家も厭なり、彼家も思はしくなしとて、入りては出で、出でゝは入り、軈て四十五十の老坂越ゆるまで、六道の辻を彷徨ふやうなるぞ常なる。思ふだに心寒からずや。

古今集　◎

古への野中の清水ぬるけれど、もとの心を知る人ぞ汲む　詠人不知

人の親切ほど嬉しきはなし。時折その親切を想ひ出しては、身も世もあらぬ思ひに、其人に憧憬るゝぞかし。夫婦の間にも然ることこそあれ。假令苟且のことより端なく離縁すればとて、妻の親切忘れかねては、再び舊の鞘に納まる例多かり。親切は他の為めのみかは。往時、播州印南野に、野中の清水とて、めでたき清水ありき。星霜経るに従ひて、其清水も悪くなり、人も汲まずなりぬれど、昔を知れる者は、なほ折節来

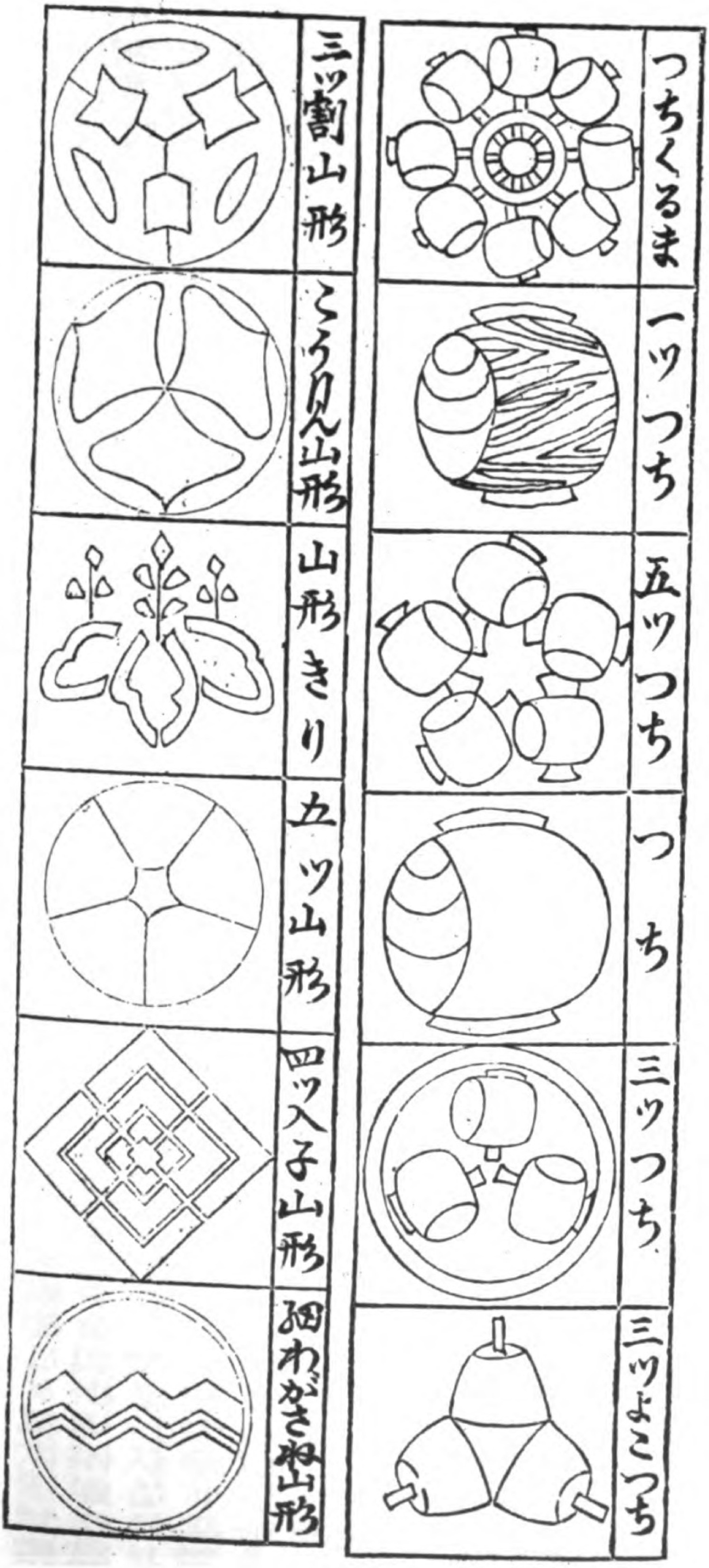
りて汲みけるとかや。

○

詞花集

三日月のまた有明になりぬるや、浮世を廻るため
しなるらむ　藤原敦長

禍福は糾へる繩の如く、世は塞翁が馬に似たり。然れば喜きことも悦ぶに足らず、惡しきことも悲しむに及ばず。ひそかに月の盈虚を見て、禍福轉換の理を考へ、榮枯盛衰の妙を悟りなば、浮世の波に漂ひながらも、心は苦樂の外に超えて、些か安心立命の地をや得べからむ。漫りに喜び、漫りに悲しむは、修養足らぬ故ぞかし。





石本陸相夫人の遠巻主義

婦人記者

建仁寺垣に添ふて百日紅の亂れ咲く石本陸相の御邸に夫人を訪問した時は、丁度他婦人記者が辭し去らうとするところで、「御贔屓分に良く書て下さい、惡く書て下さると御目に掛りませんよ」と晴々と笑つていらつしやる夫人は相變らず鷹揚な御樣子でした。

▲尋ねられて困る事

私は多勢男の子を持て居ますので、皆樣が「男の兒をよく育てるのは骨が折れるものだが、貴女はどう云ふ風になさるとか、中學二三年頃は發育の工合が變る時で却々心配なものだが、貴女はどんな風に注意なさいますか」なぞとお尋ねになりますけれども、私は今までそんな事に就て心配した經驗がないものですから御返事に困るのでございます。年頃だと申して特別に監督したり、難かしい講釋を聞せたりいたさないでも何のこだはりもなく先づ順當に進んで往きますのは親仕合と申すのでせう。皆極無邪氣な性質ですが、マア活潑な運動好と云ふ方ではございません。各自に樣々な書物を買て來て讀むとか、器械を工夫して拵へて見るとか始終そんなことばかり爲て居まして、何でも彼でも研究好でございます。

▲遠巻主義

私共の敎育法は放任主義だと皆樣が仰しやいますが丸つきり放任して置くのではございません。唯餘り斯う爲てはいけぬ彼あしてはならぬと、コセ〳〵叱言を申さぬだけで、根本の括りはつけて居ますから、子供等も兩親も尊敬しないで氣儘するやうなことは無いので

す。畢竟道徳に背て其範圍の内で自由を與へて置くのでございます。唯一番大切と思ふのは、事情の許す限りは子供を親の手元に置くことで私は嫁を取るまで家へ置たいと思つて居ます。

▲父兄懇話會に缺席せず

私は仕合に身體が丈夫ですから、子供達の小學時代から中學時代まで父兄懇話會に一度も缺席したことはありません。父兄懇話會出席者が點を頂けるなら、私なぞは最高點を頂けると申していつも笑ふのですが、全くあれは一度出て見ますと、先生方の御思召も分り子供等に就ての樣々な利益を深く感じまして、今後必らず參らねばならぬと思ひ込むものでございます。尤も附屬小學は父兄懇話會を非常に重ずる處で、入學の時理事が生徒の保護者に向つて、吾々がかやうに熱心になつて居るのだから必らず會に出席して貰ひたい。若し親の名代に雇人を使はされるやうな御方は入學をお斷りいたします」と手厳しく言ひ渡されます。その所爲か懇話會は却々盛んで廣い講堂は一ぱいになる位です。中學になると會も年に一回ですし、出席者も割合少くなるやうですが、この時代には益々この會の必要があらうと思ひます。ハイ女の兒は七人の中たつた一人で學習院女子部へ遣はせてありますが、私は此校へ出ますと、今まで飾り氣のなかつた男兒の學校へばかり入つて見た眼や、自分の學生時代の印象が殘つて居る頭腦には、何も彼も物珍らしく感ずるのでございます。

▲興味の深い同窓會

私の居つたお茶の水の高等女學校時代の方や最少しお古い方々なぞが寄つて毎年四回同窓會を催します。會員は至て僅かではありますが、極飾氣のないしんみりとした會で、而して年毎に段々興味が深くなります皆樣追々お子さんも御手が離れ、お舅姑さんもお見送りになつて、會にお出掛なさい良い都合もありますし一つには衣服の何のと誇らぬ心づかひも無くなり、お

互に奥底のないお話が出來るやうになつて益〻親しみが深くなるやうでございます。お手前味噌か知れませんが、婦人の會合の中では實のあるものと信じて居ります。

▲私共の衛生法

衛生會は良いものに違ひありませんが、私は未だ入會いたしませんこの會で一滴の水にも黴菌が何の位あると云ふやうなお講義を精しく伺ふと何でも彼でも恐ろしくなつて非常に神經が過敏になる



と或方が仰やいましたが、私も左樣考へて居ます。勿論研究するのは必要ですが、其人々の體質に依て實行爲なくて濟むならそれで宜いので、私のやうに何を喰べても障らぬ身體ならこの儘で平氣で居た方が結句氣樂かと思います。身體が健かなら黴菌位に抵抗することも出來ませうし、それに吾々は盃一杯の水を検査して飲む藝當が出來るにしても、子供達がそんな事言つて居ては手も足も出ません。特に私

共の子供は皆旅行好ですから、どんな旅籠屋で御飯を食るか、何處の山中で清水を飲むか分らず、その度に黴菌々々と心配するやうでは、迚も心身の力を壯にすることは出來ません。私はかう云ふ主義ですから子供達も自然平氣でございます。先達私が高等學校の寄宿舍へ參つて見ました時、餘りそこらが汚いので倅に

『良く注意しなくてはいけない』とつひうつかり申しましたところ、倅が『お母樣何を仰るのです。この中には傳染性の病質ある人も居やうし心配したら種々なことがあるでせうが、そんな事を怖がつて居ちやア何だつて出來や爲ません』と申しましたので、何時の間にか倅の方が先生になつたと可笑しくなりました。

髪切蟲の事

諸國俚人談に曰く、元祿のはじめ、夜中に往來の人の髪を切ることあり。男女ともに結ひたるまゝにて元結ぎわよりきれて結ひたる形にて土に落ちてありける。切られたる人曾つて覺えなく、何時切られたるといふことを知らず。この事國々にありける中に、伊勢の松坂にもつとも多かり。江戸にても切られたる人あり。それは紺屋町金物屋の下女、夜物買に行きけるが、髪を切られたる事いさゝか知らず宿に歸る。人々髪の無き由をいふに、驚きて氣を失ひたり。其の道を求むるに、人のいふに違はず、結ひたるまゝにて落てありけると。又或書に曰く、寛永十四年の頃かとよ、髪切蟲といへる妖蘖ありといひならし、誰こそ一定切られたりといへる人はあられど、かしこの御達こゝの局もと下女までも恐れあり云々。其事日を重ね月をわたりて、言ひ止まざりつるに、いづくともなく呪ひごとに『異國より惡鬼の風の吹きくるにそゝふさもとせ伊勢の神風』といへる歌を寫し來りて、門戸に張り簪にまとへり。されども猶言ひ止まざりけるに、又いづくともなく髪切蟲は剃刀の牙、鐵の手足翁・瓦の下にかくれけりと言ひふらせり。かくてぞ此のもの打ち破りすてよと言ひつるほどこそあれ、町々家々門前に焚ち、道路にはふらかして、行かふ人も踏る足をそばだつに及べりと。こは近く慶應年間にも一時流行せりといひ、尚ほ近くは富山市等にもありたる由にて、誠に不思議の事なるが、今より見れば一種の病氣なるべしといへり。

衛　生

歯牙の健全法

如何にして歯を強健ならしむ可きか

ドクトル　志村誠麿

▲鋼鐵の如き生蕃の歯

嘗て米國の大學教授が「歯の減るのは、粗惡な歯磨を使ふためである。試みにブラシへ房州砂を附け、拔いた歯を擦つて見ると、一時間に半分位減る」と云ふ講釋を爲た。私はこれを是認した一人であつたが、後に黒奴やアイヌの歯を檢査したり、貧民窟の兒供と學習院生徒の歯とを比較したり、その他樣々の研究を積むに從ひ、歯磨の選擇や姑息な養生法位で歯を强くすることは出來ぬ。もつと積極的の方法を執つて根本から堅めなければならぬ事を深く感じた。尙近頃渡來した彼の生蕃の歯を調査して益々これを確信したのであります。三十九人の生蕃の内、老人十人の拔け歯缺歯が合計三十一本、一人前たつた三本づゝの割合で、三十前後の生蕃は缺歯が一本もなく、且少しも減つて居ない實に立派なものであつた。彼等は常に羽だけむしり取つた鷄を骨ぐるみ生でガリ／＼嚙り、獰猛な奴は牛を殺して血を啜り、豆腐のやうな凝結した血は煮て食ふ。而して骨や皮に附着した肉を前歯でメリ／＼剝すと云ふ風で、歯牙を亂暴に使つて居るのに、琺瑯質が少しも減つて居ないし、器械で敲いて見ても百錬の鋼鐵のやうでビクとも爲ない。彼等は素より含嗽一つ爲る術も知るまいが、かうなると歯糞の酸化作用もトンと受付けぬと見えて齲歯が少しも無かつた。彼等の歯が如斯强健であるのは自然の鍛錬より得たる賜であります

▲文明に非ずして文盲

貧民は富者より確に歯が丈夫である。萬年町や新網

の學齡兒童などは二人よせて齲齒は高々一本位だが、學習院の生徒は一人に付四、二五の齲齒を持つて居るつまり豌豆、蠶豆の堅煎、鷄の足、乾物の頭、牛の切出し等粗末な堅い物を常食とする貧兒よりも牛乳、玉子、刺身、カステラ、ビスケットの如き上品な軟い物を選食する公達の方が八倍も齒が惡い勘定です。贅澤な軟らか物を喰て居る西洋人の齒も一般に弱い。これらの實例に徴しても堅い物を喰て抵抗力を强めるのは齒牙衞生の根本であることが分ります。云ふまでも無いが、物質的の進歩は益々人間の身體を脆弱にする。七十餘のお爺さんが下駄がけで越す箱根も、若い者は汽車や電車の御厄介になるものと定め込で居る。病人でもない癖に避暑の避寒のと騷ぎ廻つて居る。斯くして鍛錬を忘れ肝心の抵抗力を失ひ、何處も彼も脆弱な身體になつて、それで文明〳〵と得意がつて居るのは、文明でなくつて文盲ではありませんか。

▲「齒打つべし」の養生法

私の知人の嚴父に非常に齒の强い人があつて、七十以上で堅い物をゴリ〳〵喰べて居る。此の人は昔から堅い物をよく咀嚼し、毎日七度づゝ、上下の齒をカッカッ打つけて鍛錬的養生法を勵行したと云ふことだ。貝原益軒先生の「齒可打」と云ふ養生訓によく叶つて居ると思ふ。益軒先生は生理的に研究したのか如何か知らぬが、他の學問の推理から一言を以て齒牙養生法の訣を盡したので、爰に至れば齒醫者も何も要たものぢやあない。私は虛弱な兒なぞもハラ〳〵と育てずに常識を外れぬだけ、難行苦行を爲せて須らく可打可鍛であると思つて居ります。

▲齒の患者は婦人に多し

齒醫者の御得意は七八分通り婦人である。婦人は惡い癖がある。兎角甘い軟かいものを嗜食するから顎の筋肉が弱いのです。男には十五貫目の消化力が顎の筋肉に具つて居るものなら、婦人は七八貫目の消化力しかない。從つて齒が締つて居ないで一寸動かして見て

も動くと云ふ風であるから、成る可く堅い物を嚙しめて強くすることを鍛錬しなければならぬ。併し差當り齒の弱い婦人のために年頃に應じた注意を一寸咄して置きます。

▲齒根の黑い少女

八歳位の女兒に齒の根が黑くなつて居る者がよくある。これは齒の根の掃除が行届かぬために、齒肉が慢性に爛れ、炎症を起して膨れ上つた處へ、血中に含める黑いヘマチン色素が沈着するのです。（ヘマチン色素は身體の何處でも炎症を起した場所へ沈着するもの）



斯うなると粘液の酸性が強くなつて、齒の琺瑯質を腐らし、折角生代つた齒を生涯臺なしに爲て了ふことがあるから、子供の齒が汚いのは當然だ位で放擲て置かずに、早くなほすに限ります。先づ素人療法としては、良く齒を拭てヨヂム丁幾を塗り、鑿形に削つた箸の先へ齒磨粉を附けて擦ると大抵奇麗になる。又一法は酸化水素の薄めたのを綿に浸し、齒肉を拭ふのであるこの酸化水素は齒の表面の汚物を酸化させて炭酸瓦斯にして了ふだけで、害は少しもありません尤も多量に飲むと胃の内容物と化合して腹が膨れ

横隔膜を推上げて呼吸が困難となるが、齒を拭く液位が咽喉に通つても決して差支ないから、藥店か醫者から少し取寄てやつて御覧なさい。倘豫防法としては、常に鹽を右の拇指に附けて竪に齒を擦るが宜しい。鹽は實に齒肉を强くする靈藥で、私なぞも始終鹽を使つて居るから肉が硬くつて色が鮮紅です。

▲齒肉の充血する乙女時代

十四五歳の婦人は生理的變化を來す頃で、口中の唾液が粘つて酸性が多くなり、自然齒肉に充血して齲齒が出來、一體に抵抗力が弱くなるから、アルカリ性の含嗽を勉めてするが宜しい。含嗽劑には、茶匙一杯の重曹をコップ一杯の水に溶かし、グリスリンを二三十滴たらし込んだのを用ゐる。重曹はよく酸性を中和して齲齒を防ぐ効があります。

▲妊娠中は齒の厄年

一人の兒を生む度に一枚の齒を失ふと云ふ西洋の俚諺の通り、妊娠中は殊に齒の迫害を受る時である。口中は爛れ易く、唾液は酸性になつて齲齒を作り、胎兒に石灰質を奪はれて齒が總體に脆弱となる。これを防ぐには矢張頻りに重曹の含嗽をやるに限る。而して石灰質の食物を取て、奪はれた不足を補ひ、御腹の内で發育しつゝある胎兒の齒や骨を丈夫に爲なければならぬ。ところが吾々の食物にはどうも石灰質が少くつて困る。玄米が良いと云つても實際一寸臆劫だから差當り副食物に求めるより仕方がない。先づ昆布、若芽、ひじき、海苔の如き海草類、名古屋産の切干、味噌汁なぞは石灰質に富んで居るが、妊娠中は成る可く消化良き物を選ぶべきであるから、切干を水に浸してよく煮たのや、若芽の味噌汁なぞは妊婦の齒に最も適當な食物でせう。殊に若芽は三歳の兒にも消化し得るもので、私の家ではこれを種々に料理して常に用ひて居ます。但しいくら石灰質の食物を選んでも齒をセッセッと使つて石灰質を齒に沈着させなければ効能がない。丁度滋養物を喰つても運動しなければ肉や骨にならぬ

と同じ理窟です。

▲嫁入道具の一つ

齲歯の淺いのは重曹を穴の中へ入れ、微温湯で含嗽すれば、穴の中の汚物に含む酸性と中和して痛が止るが、抜き去らなければならぬ齲歯となると妊娠中は流産の心配があるからうつかり施術は出來ない。故に婦人は身體の變化なき前に療治して置く必要がある。併し人妻となれば舅姑や夫に氣兼して出來兼る場合も往往あるから、一般に嫁入道具の一つとして處女時代によく全體を直して置くのが良からうと思ひます。

▲歯並を直す時期

歯並の善惡は大いに婦人の容貌に關係する。目鼻立が滿足でも外歯やねぢ歯では口元を臺なしに爲るし、下歯が突出てゐるのは顔がしやくれて見えますが。歯の拔代る時に親が氣をつけて順序よく拔て貰へば大抵さうはならぬもので、西洋婦人が歯並の良いのは全くこれがためです。又已に歯並惡く育つた兒でも十三四五位の内ならどうにでも直る、外歯は植直し、下顎の出たのは顎全體を改良することが出來る。併し二十歳となると大分手術が困難になつて來ます。普通齲歯に關する注意箇條は大凡如此であるが、呉々も諸姉に望むのは、平生努力して堅い物をよく咀嚼し根柢から歯を强めること、副業としては掃除含嗽を勵行する事であります。（日本橋區上槇町十一志村ドクトル談）

△女子大學家政講義

來る十月中途入學者の爲め新學期を開き五日更に初號より發行の豫定なり、同講義は豫て紹介せし如く、女子大學の科目に應じ、法制、經濟、心理學、應用理科、其他手藝、料理等凡そ高等女學校三四年の程度以上の學力ある婦人にして家庭の主婦たるべき人の爲めに一般智識を習得せしむる樣工夫したる講義にして擔當諸師はいづれも同校の講師なり每月二回發行一ケ月會費五十錢



氣の働らかぬ細君へ忠告

高野復一

△主人が外より歸つた時の感

一日の勤めを終つて家に歸つて來る主人は、其の位置の高下と職業の種類を問はず、先づガッカリと疲れて居るものと見なければならない。此の疲れ切つて自分の家に歸つて來る主人に慰安を與へるのが主婦の至大なる任務なので、此の任務が果されなければ、主人が不滿に思ふのも道理である。從つて家に歸り着ひた時の主婦の氣轉と用意が、主人の氣に入ると氣に入らないの分れ道であらうと思ふ。

氣轉と云ひ用意と云つた處で、何も特別の方法を施す要はない。只歸つて來る主人の心持になつて行動すれば可いのである。歸つて來る主人は、一日中繁閑何れの務を問はず、多少なり簿冊の間に立ち、氣に入らぬ人にも會ひ、面白くもない交話もし、冷たい中食を氣急はしく呑込み、汚ない椅子の上で執務して居たので、要するに、喧囂不潔の世界に起居して居つたのである。此の世界から脫し來つて我家に歸る主人であつて見れば、其の求むる所は問はずして、知れる。曰く整頓と淸潔。

處が家へ歸つて見ると、玄關に古下駄の陳列會と乳母車の雨ざらしとあつては、先づ第一に怒氣心頭に發せざるを得ない。勿論孰れの家でも新しい下駄ばかりあるものではなく、古い下駄の方が多いに違ひない。殊に子供の下駄と來ると、勢ひ汚れがちのものである。又乳母車も立派な物を持て居る人ばかりではない。即

ち下駄の古いのと乳母車の汚れて居るのは止むを得ないが、只之を主人の歸り時分に玄關に雜然と陳列し、雨ざらし的に道路防害をして置くのは、實に氣の無い仕方と言ふのである。

下駄が並べられて主人の脫いだ靴の置處が無いのを見て始めて氣が着いて、大騷ぎに下女を呼んで取方附ける時分には、不滿の印象は深刻に主人の腦中に收められて居る。續いて目に着くのは玄關に燈火がついて居ない事である。ガスならば歸り時分にはつけて置かねばならぬ。電氣ならば頃合の時刻にヒネつて置くのが當り前。それに何ぞや歸つて見れば暗の世界。折角「御歸り」と迎へに出た妻の顏も子供の顏も何が何だか分らぬ始末。此の精神的の損失はなか〳〵容易に償はれないのである。

△最も不滿に思はるゝ事

飯前に御極りの一風呂湧いて居るのは宜いが、手をつゝ込めばしびれる位の熱湯。此際に主人の怒氣は直鳴り聲となつて發するのが例である。湯を沸して置いて加減もせずに人を導く程氣の利かない事はない。殊に萬事言葉を勞せずして己が意の通りになるを好むが萬人の情、まして主人と主婦との間である、何年も連れ添ふて居て尚且つ一々指圖をして始めて自分の思ふ通りに事が運ぶと云ふ風では、主人の不滿は道理である。斯かる際に處するの道は實に簡單の事である。即ち能く主人の氣を吞込み、其の嗜好を察し、言ひ附けられぬ前に其通り運んで置くと云ふに過ぎない。

此れより以下は最も肝要な事柄である。

一家の愉快は團欒してする夕食にある。殊に主人の身として其の然を覺ゆる。其の肝腎の夕食の手筈が下手であつたら、それこそ主人の最大不滿を來たす所以である。先づ第一に料理法の巧拙であるが、此れは多くを言はぬ。完全な料理をするには少額な材料で行はれぬ場合が多いから、主人の方からも求め得られる譯ではない。主婦に渡す經費を節して置いて「旨い物を

喰はせよ」とは難題である。故に料理の巧拙に就ては、主婦は其の最上を盡すを旨とすと云ふに止めて置いて、其の以外に誰人にも出來可くして而も常に徒爾に附せられて問題を持出して見ない。

△面倒を見る氣がない



其れは一通り揃へ可き物が落ちて居る事である。此れは最も主人の氣に入らぬことで、又同時に主婦の用意の缺けたる事を證明するものである。湯から上つて膳がテーブルの前に坐つてコップを手に取らうとすると、盆の上にビール冷し器に注けたビールが人待顏に置れてあるは流石に嬉しいが、何事ぞコロップ拔きが附けてない。此れ其の適切なる一例である。西洋料理擬ひの二皿三皿出來たのは主婦の心遣ひは採る可しであるが、肝腎のカスタード（藥味臺）は臺所に殘されて居る、此れ其の二例。香の物は靑々と人の食氣を奮はしむるに、醤油注ぎは戸棚の中よりまた出で來ら

ず、此れ其の三例。茶の香氣は鼻を衝きて、飲まんとすれば湯呑みなし、此れ其の四例。其他枝豆をつけながら殻の皿を附せざる、果物を持來りながらナイフを添へざる、ゆで玉子は出來たれ共食鹽の伴はざる五六七八九十例、擧げんとすれば幾らでもある。

ツマリ主婦の用意が不十分である。此の種の事は料理の巧拙とは譯が違ふ。彼れは多少經費其他の事項に關聯して必ずしも主婦の全責任と言へない場合があるが、此れは用意十分なら誰人にも避け得らるゝ事なので、之がため主人の機嫌を損ぞると云ふのは、要するに主婦に面倒を見ると云ふ氣が少ないためである。膳を出す前に一度目を通したら、此の故障は全く起らぬのである。只夫れ目を通す丈けである。處が大抵な主婦は此點の注意が足りない。大抵は下女に言ひ附けて其爲すが儘にして置き、膳を出してから始めて何が足りない彼が足りないと云ふ事に氣が注くと云ふ風である。

△心に映る世帶じみた女

女の容貌だの姿勢だのと云ふものは、無論天與の物であるから、人爲で著しく更へて見ると云ふ事も出來ぬが、身だしなみが善いと惡いとに依つて天與の容姿を上下する事は甚しいものである。キチンとして居ると云ふのと、ダラシなくして居ると云ふのとは、非常に婦人の品位を昇降せしめるから、希はくは誰人もキチンとして居て欲しいと思ふ。殊に一家の主婦たる者が此用意の缺けた場合に、主人の感ずる不快の程度は實に非常なものである。

誰人と雖も醜よりも美を好む。美の益ゝ美ならん事を望むのである。主人と主婦の間は他人同志の間でないから、唯容姿の美と云ふ事丈けで滿足す可き物でないのは無論であるが、最初結婚する時に此點も條件として大に心中に畜いて居つたに相違ない。即ち美と云ふ事は好ましい物には相違なく、幾年經つた迚美であ

らん事を望むのは人情である。

處が何年か經つと、主婦は必要上世帶染みて來る。



無論世帶染みなければ一家の主婦たる資格はなく、世帶染みるから產を興し家を保ち、即ち內助の功と云ふ一段となるのであるが、然し注意すべきは此所である。內に世帶染みて外に世帶染みざる事を旨とせねばならぬ。內に世帶みるは可し。之を外面まで及ぼして、『妾は一日勞働づくめで斯の如し』と云ふ風に其事を標榜する樣な事は如何であらうか。働き詰めは可いが、主人は家へ歸つて來ても、身だしなみなく汗に塗れた顏と黒くなつた指先で迎へられると云ふ風では、たとへ今月の『通ひ』の總計が少なかつたと聞いても、當座の不快は夥しいものと思ふ。否世間は知らず自分は最も不快である。

△おしやれと身だしなみ

敢てヲシヤレを勸めるに非ず、主婦を床の間の置物とせよと云ふに非ず、ヲシヤレと身だしなみとは、全く別である。上ッ張りの衣物ばかり何度も更へたとて下着が汗染みて居たり眞黒な足袋をはいて居ては、身だしなみが宜いとは言へない。又樣子は床の間の置物然として居ても、心の働き一つで一角の內助をなす主婦である事がある。要は內剛にして外柔(?)とでも言はうか、換言すれば『モ少し身仕舞をしては如何か』と言はれた時に、『女中一人ぢやア此れが關の山ですよ』とか、『衣物がモ少しなきやアソウは參りませんよ』とか云ふ樣な返事を口に出すのを見合はせるが宜いと言ふのである。

然し、衣物がなければソウは參らないといふは至言である。恐らく此の名言は大抵な家で一週間に一遍位は聞かされて居ると思ふ。玆に於てか主人の側の注意も必要になつて來る。主人は何故に主婦に着物を買つて遣らぬのであるか。若し夫唱婦隨で如何な風をしても老後の計を立てれば善いと云ふならば議論は別であるが、若し主婦に多少なり身だしなみを求めるならば、自分の快樂趣味は幾分之を犧牲にしても四季一通りの物は年々買つて與へる義務がある。此事なくして只主婦にブツ／＼言つて居るのは無理も甚しい。要するに吳服店の『通ひ』がモウ少し金高の昇る樣になつて更に差支へないと信ずる。と世の婦人方の爲に氣を吐いて置く。

○難有迷惑

電車の中は一杯の人で少しも空席が無い。ふと中年の婦人が乘り込むと恰度前の席に居た男が立たうとするので、女は直ぐそれと察し、

「いえもう結構でございますよ。平氣で立つて居られますのですから……」

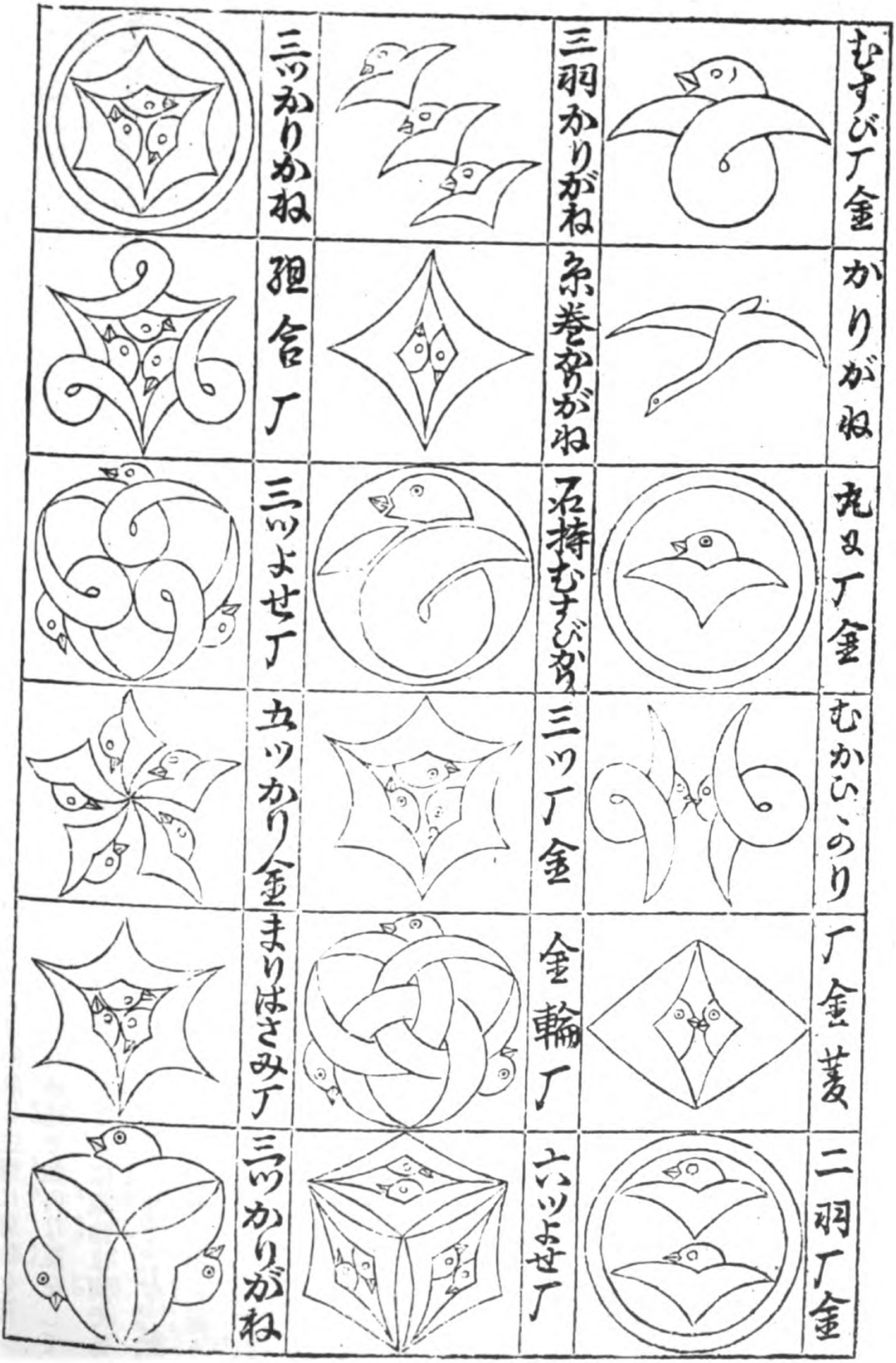
「……」男が何か言はうとするのを女は直ぐに遮つて

「何卒其儘で……」と無理に坐らせる。

斯うやつて立たうとすると肩を押へられるので、到頭男は溜り兼ねて

「何卒下して下さいませんか、もう停留所を二つ乘り越して居るのですから……」

雁の意匠


むすび丆金
三羽かりがね
三ツかりかね
かりがね
糸巻かりがね
組合丆
丸ニ丆金
石持むすびかり
三ツよせ丆
むかひ、のり
三ツ丆金
五ツかり丆金
丆金菱
金輪丆
まりはさみ丆
二羽丆金
六ツよせ丆
三ツかりがね

家庭科學

臺所と料理の智識

田寺寛二

近頃出來た實科高等女學校では、家事科と理科とを一つにして、日常遭遇する家事上の事柄を、理科で說明する仕組になつて居ります。生活上必須な事物についての理科の智識は、全く缺くことの出來ないもので、女學校の理科は實際の家事とは離すことの出來ないものと思ひます。私はそれと同じ樣な主意で、玆で料理と理科との關係やら、理科を基礎にして見た料理の事やらに就いて少しく述べようと思ひます。

△實際生活上の大切な智識

料理とは、食物を吾々の口腹に適當する樣に處理することを申します。生の儘でも、煮ても燒いても、或は炒つても、漬けても、乾してもよろしい、吾々の口腹に適する樣に準備するのは、皆料理であります。生の魚から刺身を作るのも、茄子を煮るのも、卵を燒くのも、皆料理であります。しかし料理と云ふことは、嚴密に言へば、副食物を作ることを指して、御飯を炊くのや、麵包を燒くのを料理とは申しませぬ。且つ嗜好品以外の副食物を作る事に限られて、小麥粉からカステイラを作つても、果物の皮を剝き、種子を去つても、料理とは申しませぬ、又茶を點れても、珈琲湯を作つても、料理とは申しませぬ。故に料理とは、嗜好品以外の副食物を口腹に適する樣に處理することであると思へばよいのです。

次に女學校で理科と云ふものゝ中には、動物、植物、鑛物の樣な自然物の學問と物理化學の樣な自然現象の學問との二つが含まれて居ります。其の目的は、此等の自然物自然現象を知得すると、今日此等の事物を應

用して居る開化事業を了解するとにあるが、女學校では殊に日常の生活に必要のものを先とし、實際生活の理科上の智識を得る樣にするのが大切です。斯う云ふ智識が十分にあれば、料理には素より、其他生活上に種々の利便が得られます、

△味を鑑別する鋭敏な舌

さて料理は技術であるから、其の方法は敎へもし敎へられもするけれども、此處と云ふ呼吸は、練習と經驗とで自得するより外なく、同じ樣に敎はつて、同じ樣に練習しても、人に依つて結果に非常の相違があります。此點は料理も繪畫も彫刻も同一で料理も技術であるから、其人の天賦の性質によつて左右せられるのであります。委しくいへば料理は切つたり、裂いたり、刻んだりして、形の上で色々に變化させるばかりでなく、種々の調味料を加へて、煮たり、燒いたり、漬けたりして、味の上にも種々の變化を與へるものであります。それ故料理をするものは、味を十分に味ひ分ける鋭敏な舌がなくてはならぬが、此の舌で種々の味を感知するといふ事が一つの技術で、何人にも一樣に出來るとは申されません。料理は斯樣に技術であるから庖厨に立つ人は十分に練習と經驗とを積んで、此特殊な技術を獲得する樣に努めねばなりませぬ。鋭敏な味覺を持つた人は、種々の鑛石を舐めて、其中に含まれて居る鑛物を鑑別します。更に又含有の分量までも、大約感知する位であります。料理にも斯る技術が大切です。

△融通のきかぬ料理人

技術は練習と經驗とで得る能力で、理窟以外のものであります。理窟は斯うであると申しましても、決して其通りに出來るものではなく、云ふことも、書き表はすことも出來ない極緻な所がある者であります。例へば一と云ふ字を書くのにも、理窟の上から云へば、筆を直立させて、紙に筆が直角になる樣にして、筆の當りをつけ、左から右に眞一文字に引き、止まる所で

力を入れて、十分に筆勢を込めて書くと云ふのですが、これが實際になると、十人十色の字が出來る如く、其人の經驗上の悟了によつて、技術に差異を生じます。それゆゑ技術の極級は、全く各人の悟了によるより外はありませぬ。けれども亦理窟の伴はぬ技術は、役に立ちませぬ。よし其れ程でなくとも、甚だ怪しいものであります。素より理窟を知らなくとも、技術は相當に上達し得らるゝもので、料理人などは六ヶ敷い理窟を知らずに、立派に仕事をしてゐるが、斯る理窟の伴はぬ技術はそのこと以外には應用が出來ませぬ。然るに料理の理窟、技術の理論を十分に知つて居ると、融通がきく外に、極級の程度に達することが出來ます。



△料理の先生と理科の先生

ところが料理の先生は、技術の先生だから、料理の技術と其技術に對する方法との外は教へず、また理科の先生は、事物の理窟の先生だから、自然物と自然現象との實際と理窟との外は、教へぬから、理科を基礎とした、料理の理窟は、今日の女學校では全く忘れられて居る樣であ

ります。一例を擧ぐれば、或る學校で教師が鯉の料理法の說明中に、「鯉を料理するには、其の胃を破らぬ樣に臟腑を取り出すことが肝腎であります。それは胃には甚だ苦い汁があつて、これが肉に着くと、幾等洗つても苦味が取れず、遂には食べられなくなるからです」と言つて居たのを聞いた事があるが、實に滑稽な事だと思つた。此人が胃と云つて居るのは肝臟の膽囊のことで、苦い汁といふのは膽汁の事です。決して胃に苦い汁があるのではありませぬ。此等も理科の智識があれば、胃が苦いなど、そんな妙な間違をすることは無いのであります。

△料理する人

で料理する人は其の方式を知ると云ふ智識が四分、技術が七分位でなければなりません。今料理人の具ふべき特質を擧げて見ると、次の通りであります。

一　味覺が鋭敏なること、
二　常に心情が靜平なること、
三　健康なること、
四　綿密なること、
五　丁寧なること、
六　敏捷なること、
七　配合に對する考があること、
八　手際のよいこと、

味覺が鋭敏でないと、僅かな味の差が感知せられぬから、食物に十分な味が與へられません。また心情が靜平でないと、味が十分に覺知せられないから、適當な料理が出來ません。

次に料理人は大切な人の食物を取り扱ふのであるから、健康を必要とするのは、當然のことであります。また食物の取り扱ひが不綿密では、不經濟のみならず危險で仕方がありませぬ。尙ほ食物を取り扱ふのは、丁寧でなくては、危險で而も十分の調理が出來ませぬ。其他食物の調理は敏捷でないと變味の恐れがあります。何事にも敏捷は必要ですが、料理には特に大切であります。又配合に對する考がないと、調味の上に大

變な損があります。色彩のみならず、凡べての材料は、配合によつて非常に味を左右するものであるから、料理人は、此に對する考が最も肝要であります。尚ほ料理は手際が甚だ大切であります。同一の材料でも、手際のよいのと惡いのとで、食ふ人に與へる味感が違ひます。

△料理方法の原則

料理の方法は、其材料によつて夫々獨得の方法があるから、一概には言へぬが、其原則としての方法を擧ぐ



れば次の如くであります。

一 汁を閉ぢ込めること、

二 汁を煮出すこと、

三 徐々に料理すること、

四 一種づゝ料理すること、

五 低溫度で料理すること、

六 早く燒くこと、

固體の食物に固有の味を失はせぬ樣にするには、其含んで居る甘い汁を其食物の中へ閉ぢ込めてしまふのが大切であります。それには、先づ煮る液をよく沸騰させて、それに材料を入れ

ます。さうすると、外面の蛋白質が早く凝固つて、內部の汁液を閉ぢ込め、其食物の固有の風味を失ひませぬ。しかし汁を甘くして食べようと云ふ時には、材料の中に含まれて居る甘い味を、よく煮出す必要があるから、水の時分から材料を入れて、漸次に煮出して、甘い味を汁の中へ煮取る樣にいたします。また料理は一般に徐々にするのがよい樣であります。急激に早くしたのは味がよくありませぬ。これは急激な變化を與へる爲めに、材料の素質を惡くするからであります。其外料理は原則として一種づゝするのがよろしい。これは其材料固有の性質に從つて、それ〲適當した料理法を施すことが出來るからであります。固有の性質に從つて、適當な料理法が行へれば、それ〲特有の風味を發揮せしめることは、容易であります。故に材料を一種づゝ料理することは、調理上大切なことであります。しかし手間がかゝり、手輕でないと云ふ點からは、少々申分がない譯でもありませぬ。次に料理は、總じてあまり高い温度でするよりも、低い温度でした方が宜しいのであります。素より材料と其性質とによつては、熱い温度でする方が適當なものもあるが、普通は低温度でした方が材料の性質に變化を與へずにうまく出來ます。唯、燒くものは高温度で早く燒くことが必要であります。これは緩々と燒くと、內部の甘い汁液が滲出して、それが燒かれて終ふからであります。尙ほ料理の原則として述べ度いことが澤山あるが、詳しいことは、後に說きます。

△料理と食物の成分

料理によつて食物の成分は多少變化します。即ち

一　水分が減る、

二　蛋白質が固まる、

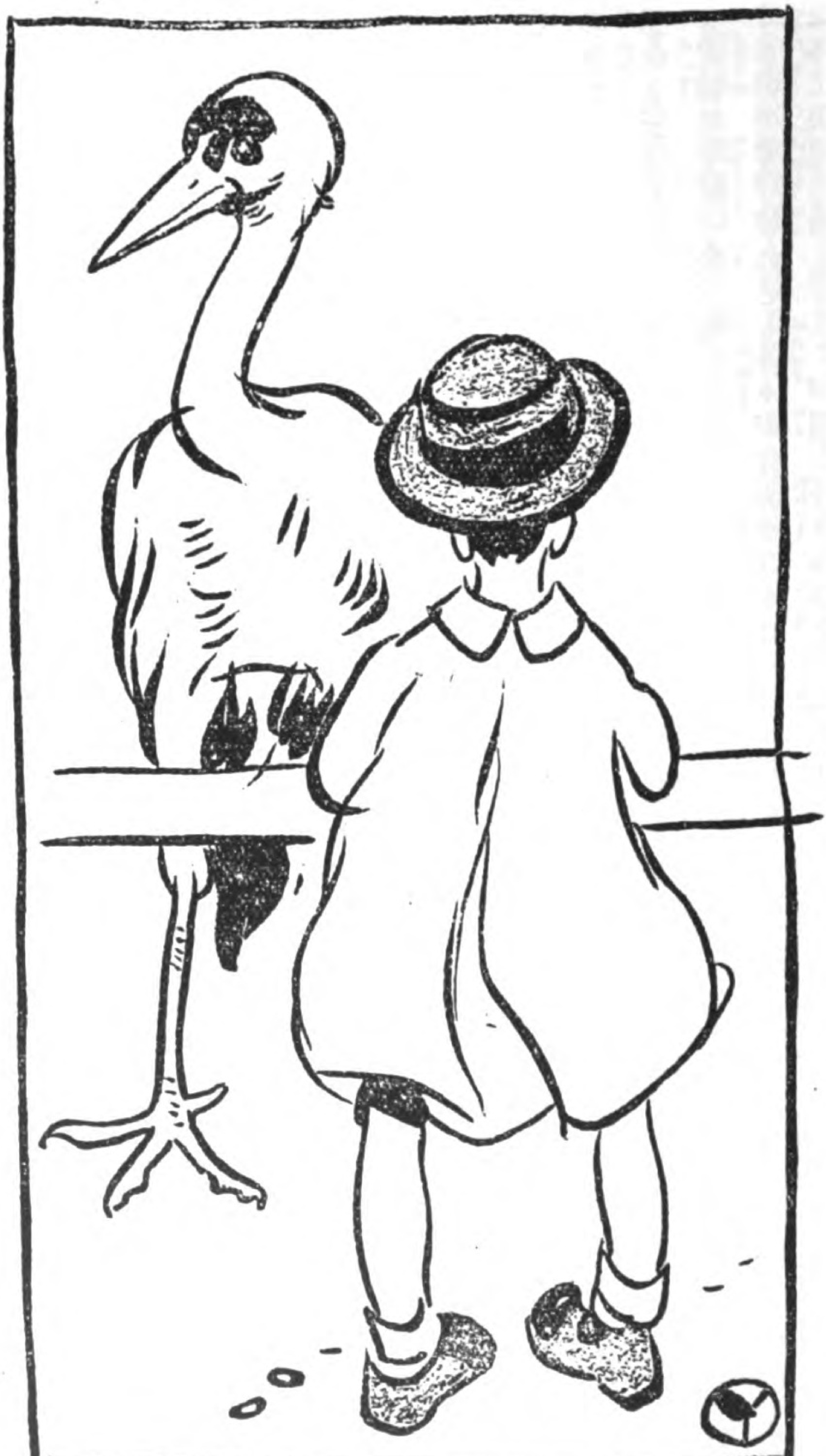
三　脂肪原質が無くなる、

四　含水炭素が轉化する、

五　毒素を去る、

生の儘の料理には其方法の如何に拘らず、成分に變化はないが、煮たり燒いたりすると或特別のものを除

いた外は、大變水分が減じます。次に煮たり燒いたりすると、材料の中に含まれて居る蛋白質は、凝固つての性質を失つてしまひます。從つて其のものは、最早脂肪としての効用がありませぬ。次に含水炭素中の澱粉と砂糖とは、屢〻煮燒の爲めに性質の異つたものに轉化することがあります。例へば澱粉が糊精に轉化したり、砂糖がカロメルに轉化したりするのは此類であります。カロメルは砂糖を強く熱すると出來るもので、焦茶色で少し苦味のあるもの



不消化な成分となります。また脂肪は其一部分は脂肪

です。砂糖で出來たカロメルと云ふ菓子は、これから來た名であります。また死肉の中に出來る猛毒のあるプトマインが、煮たり燒いたりすると全く無くなります。

△良い料理と惡い料理

料理の良否を定める標準に二通りあります。一つは普通に良い惡いといふもので、味と匂と口當りと形狀色彩、即ち味覺と嗅覺と觸覺と視覺とが基となつて居ります。つまり吾々の口鼻に良い感じを與へるものが、良いと云ふことになつて居ります。今一つは生理衛生の方からいふ良否で、味よりも、胃腸に對する消化の工合と云ふものが貴重なのであります。素より味も匂も大切ですが、味、匂よりも、消化と云ふことを主とするのです。けれども吾々が食物を取る時には、必要以外に快感と云ふことが強く吾々の心を支配するから、消化さへよければ、匂や味などは、何うでも良いと云ふ事は出來ませぬゆゑ味や匂の惡いものは精神上から胃に受け付けませぬ。其れゆゑ生理衛生の方からいふ良い料理といふのも、匂ひ味の良い上に尚ほ消化の良い料理でなければなりませぬ。斯う二つ揃ふと云ふ事は、甚だ難かしいことですが、理科を習ひ、生理衛生を教はつた人の料理は、先づ此點に注意が向かねばなりませぬ。

△調味料の性質

料理を食べて吾々が甘いと舌鼓打つのは、多く鹽、酢、醬油、砂糖等の調味料を加へて鹽梅してあるからです。

食鹽は食物に鹹味をつける大切な調味料で、食物の自然の味を發揮せしめるには之を措いて他に良いものはありませぬ。食物を調理することを鹽梅すると云ふのも之れが爲めであります。鹽梅と云ふ意味は、鹽又は梅の樣な味を以て、食物を調へると云ふことから來たのであります。

酢は人によりて好惡があるが、之れも有力な調味料

であります。しかし酢は材料の質を收縮させて、硬くするもので、植物性の食物には特に其作用が著しく、甚だしく細胞膜を剛強するから、味の方は兎に角、消化の方は餘程惡くなる傾があります。

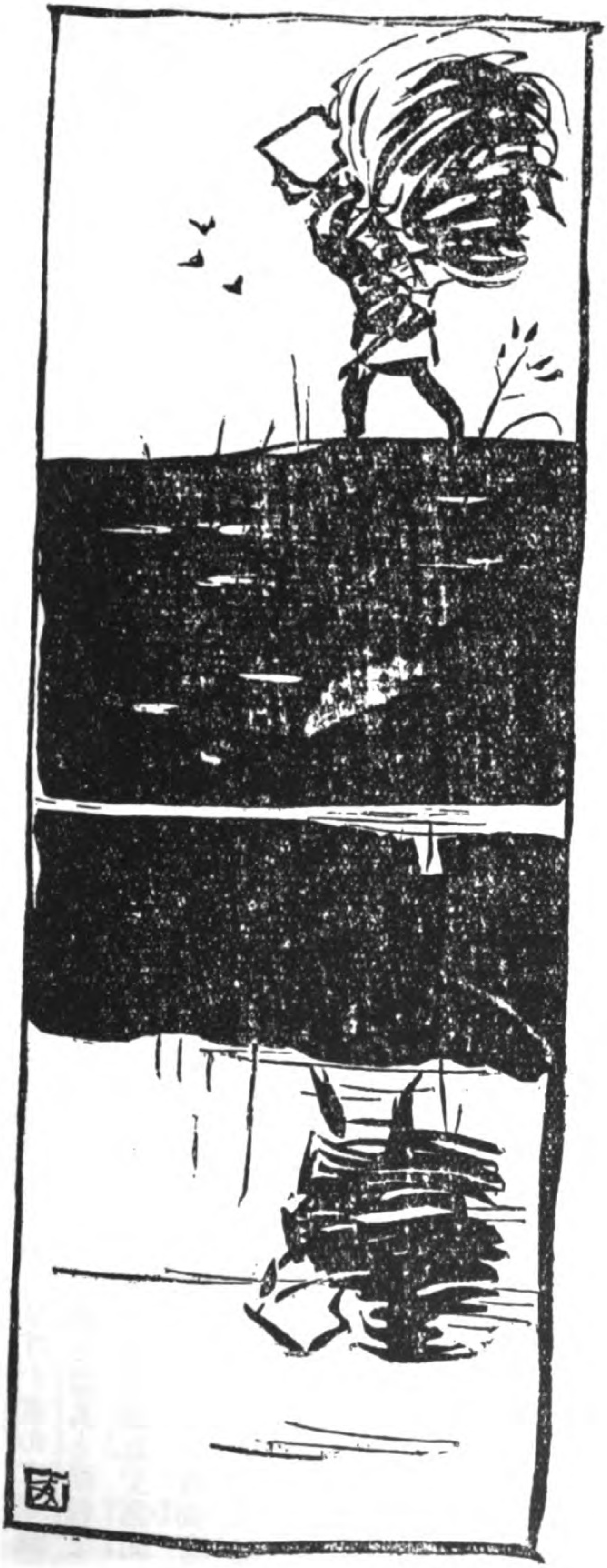
醬油は我國固有の調味料で、食物の料理には全く缺くことの出來ない貴重なものであります。其の種類は頗る多く、普通醬油、結晶醬油、昆布醬油、牡蠣醬油、豌豆醬油、隱元醬油、糟醬油等其他色々あります。

砂糖は甘味を與へる貴重な調味料で、普通に用ゐるのは甘蔗甘菜から取る蔗糖と云ふものであります。砂糖に見る面白い現象は、之に食鹽を加へると一層甘味を増すことで、しる粉善哉を作る時、必ず少しばかりの食鹽を加へるのは此の爲です。斯く甘いものに鹹いものを加へて一層甘くなると云ふことは、甚だ不思議なことですが、其理由は今日はまだ分りませぬ。

△學校の割烹と家庭の料理

學校で先生から教はる割烹は、料理としては、原則的であります。また模範的であります。從つて家庭でする料理から見ると、不經濟で時間と道具と準備とに十分な餘裕があります。ですから此儘を家庭で應用されては、甚だ困ります。一皿のカツレツに一時間を費やし、一杯の吸物に四五十分を費やす樣では、家庭に取ては甚だ迷惑であります。又鍋、釜、竈、流し、其他の道具に學校の樣な贅を盡されては、到底家庭に行ふ譯にまゐりませぬ。故に學校で習ふ時と家庭で自ら處理する時とは餘程相違がなくてはなりませぬ。學校では根柢を教はり、規則を習ふのだから、準備と時間とを十分にして、模範的のものを作るのが良いが、實際に當つて作るには、却てさうはして居られません。

世間には、女學校卒業生が直ぐ間に合はぬと云つて、叱言を言ふものがあり、更に女學校の教育を輕んずるものがあり。甚だしきは、女子教育の不必要を叫ぶ人さへあります。これは甚だしい間違で、女學校を卒業したのは、唯その緒ばかりを覺えたので、實際の練習と應用とは實社會に、出てからのことであります。實



社會の經驗で、色々と工夫するので、仕上つて行くのであります。それを女學校を卒業したものは、萬事を心得て居る、何事でも出來るとおもつて、色々の役に立てようとするから、女學校卒業生の無能を叫ぶ樣になるのであります。これはあまりに多く卒業生に期待する誤であります。之と同時に、女學校を卒業したら何事も出來ます、何でも心得て居ますと云ふ風に、女學校卒業生でございと澄し込む人々にも、更に大なる誤があります。

話は横路に入りましたが、要するに學校で敎はる料理と、家庭で實際に行ふ料理とは、其間に大に差があると云ふことを心掛けて、家庭の人となりては、經濟と衛生と云ふことを常に念頭に置いて、厨房に立たねばなりません。



旅行と和歌

佐佐木信綱



歌はいかなる時でも詠まるゝものでは有るが、殊に旅行に行つた時などはよく詠まれます。新橋の停車場を出て品川川崎邊になると、もう何となく旅に出たといふ氣がして來ます。それと共に何となく歌心が動いて來て、窓の外の海や森や家などにも注意がされて來ます。斯ういふ風で自然歌が出來る事がよく有ます。斯ういふのは、多少稽古のつんだ人の事で有ますがさうでなくて極く初めての人でも、旅に出れば自然と旅の心になつて、隨つて歌が詠みたいやうな心持になるものですから、常に氣をつけて歌になるものを捕へやうとして居ると、平常よりは樂によい歌が出來ます、これから秋になつて時候がよくなれば、學校に通つて居る若い人たちには、遠足や修學旅行が有ませう。さういふ時には、この心掛を忘れずに、名所でも古跡でもたゞ空に見過して仕舞ふことなく、二首でも三首でも歌を詠んで御覧なさい。さうすると恰も自分だけで其處へ記念碑を建てゝ來たやうに、後の思ひ出の種にもなります。

歌は思つたまゝを飾らずに言ふのが却つてよいといふことは、古人もしば〳〵言つた事ですが、これは旅の歌に於いて殊にさうです。旅に出て美しい海や山の景色を見たり、又は歷史上の由緒のあつた場所などを訪うた時、見た景色、其場で興じた感じなどは、其儘に詠むと、生中考へたのよりはよい歌が出來るものです。平生作例についたり書物によつたりして、造花のやうなこしらへ物の歌を詠んで居た人が、旅では却つて眞情のあふれた歌をよむことは往々見うけます。旅

の歌は殊に實景實情を詠むのが宜しいのです。

さうかと言つて、海邊は松風に波の音、古戰場では草葉をわたる風に矢叫の聲を思ふといふやうな趣向ばかり詠んでは、面白く有ませぬ。鎌倉の海で詠んだのも、須磨で詠んだのも、銚子で詠んだのも、少しも變らないやうではいけません。七里が濱で詠んだのも、矢口の渡で詠んだのも同じやうではいけません。何でも其場所は其場所らしい特色を捕へて、そこを詠まねば成ませぬ。鎌倉の海で詠んだ歌には、鎌倉の海といふものがよく現はれて居て、決して須磨や銚子にもつて行つて其まゝ融通が出來ないといふ所が無ければ成ませぬ。旅行の歌には、實情實景を主とする餘り、ともすれば平々凡々型にはいつたやうな歌が出來るものです。これでは却つて旅行の歌の目的に違ふので、旅行の歌は凡て生々した實際の景色や感情を述べるのが大切で、又さういふ歌は旅行の時に多く出來るものです。こゝを考へて、旅行をする時には、よい景色を見たり、古跡を尋ねたりして、その感じた所をとらへてよい歌を詠まれむことを御すゝめします。それについて昔の人のすぐれた旅の歌を少し御話して見ませう

賀茂眞淵の歌に、

　はりま潟いかで都のつとにせむ繪島の波よかく
　よしもがな

これは播磨の海邊の景色があまり美しいので、どうかして都の土産にしたい、あの向うに見える淡路の繪島に波の寄せてゐる美しい景色よ、どうか畫にかきたいものであると言つたのです。今は畫にかけずとも、寫眞もあれば繪葉書もある。繪葉書などに歌でもかいて送れば、貰つた人は如何に喜ぶであらう。

眞淵の弟子で、假字文字を巧みに書いた橘千蔭の歌に、

　昨日まで雲井に見えし山の端も波路に消ゆるふね
　の道かな

海路はるかに渡つてゆく船の上から、昨日迄は遠くに見えた山の姿が、段々幽かになつて、今日は終に隱れてしまつた旅のさみしみを歌つた歌です。

同じく眞淵の弟子で、千蔭と親しくて、千蔭春海と江戸で一双の歌人とたたへられた村田春海の歌に、

ぬるがうちは忘れむものを海山のうきを又みる夢ぞわりなき

宿屋へ着いて入浴もすみ床に入つて、漸う安らかな眠につき、せめて寝てゐる間丈けでも旅路の苦しさを忘れようと思つたのに、其甲斐もなく、又海山の路の苦しさを夢に見る事の情なさよといふので、旅の苦しさを詠んだ歌です。昔の旅はいかにも斯うであつたのですが今の旅はこれと違つて、海を渡るには汽船あり、山を行くには汽車あり、苦しいやうなことは少ない、今でも昔の人の口真似をして、草枕とか何とか、わけもなしに旅路の苦しさを歌ふ人が有ますが、さういふのは造りものです



併し蕃海のは、徳川時代の歌としては却々よく詠んで有る。

京都で新しい歌風を唱へた小澤蘆菴の歌に、

山邊ゆき野ゆき里行き行けどなほ行末とほき陸奥の旅

此歌の意味はよく解りますから、説明する迄も有ますまい。いかにも昔の奥州あたりの旅行のさまや感じが想像されます。

蘆菴に交はつて、文章家として名高い、雨月物語の作者上田秋成が攝津有馬の温泉でよんだ歌に

みぞれ降り夜のふけゆけば有馬山出湯の室に人の音もせぬ

冬の寒い夜の温泉場のさまが、よく詠んで有る。

蘆菴よりは年が若かつたが、同じく京都の岡崎——今の京都大學近邊に住んで居た香川景樹の歌に、

興津より夕越くれば山松の梢にかゝる富士のしら雪

東海道での作。

夕づく日今はとしづむ波の上にあらはれそむる淡路しま山

畫のやうな景色です。

明石潟松の木蔭に道はあれど磯づたひしてわかめ拾はむ

淡路島を眺めつゝ磯草を拾ふ、のどかな羨ましい旅です。

景樹の弟子でよくその自然淡泊の趣を得た木下幸文の歌に、

淀川を夜舟にのりて我くれば燈火みゆる牧方のさと

朝立ちて我が越えくれば雨まじり竹葉みだるゝ山しなの里

一は夜舟、一は朝の旅立であるが、共に京都附近の實景です。

旅も今一日二日になる時ぞいよ〳〵家は戀しかりける

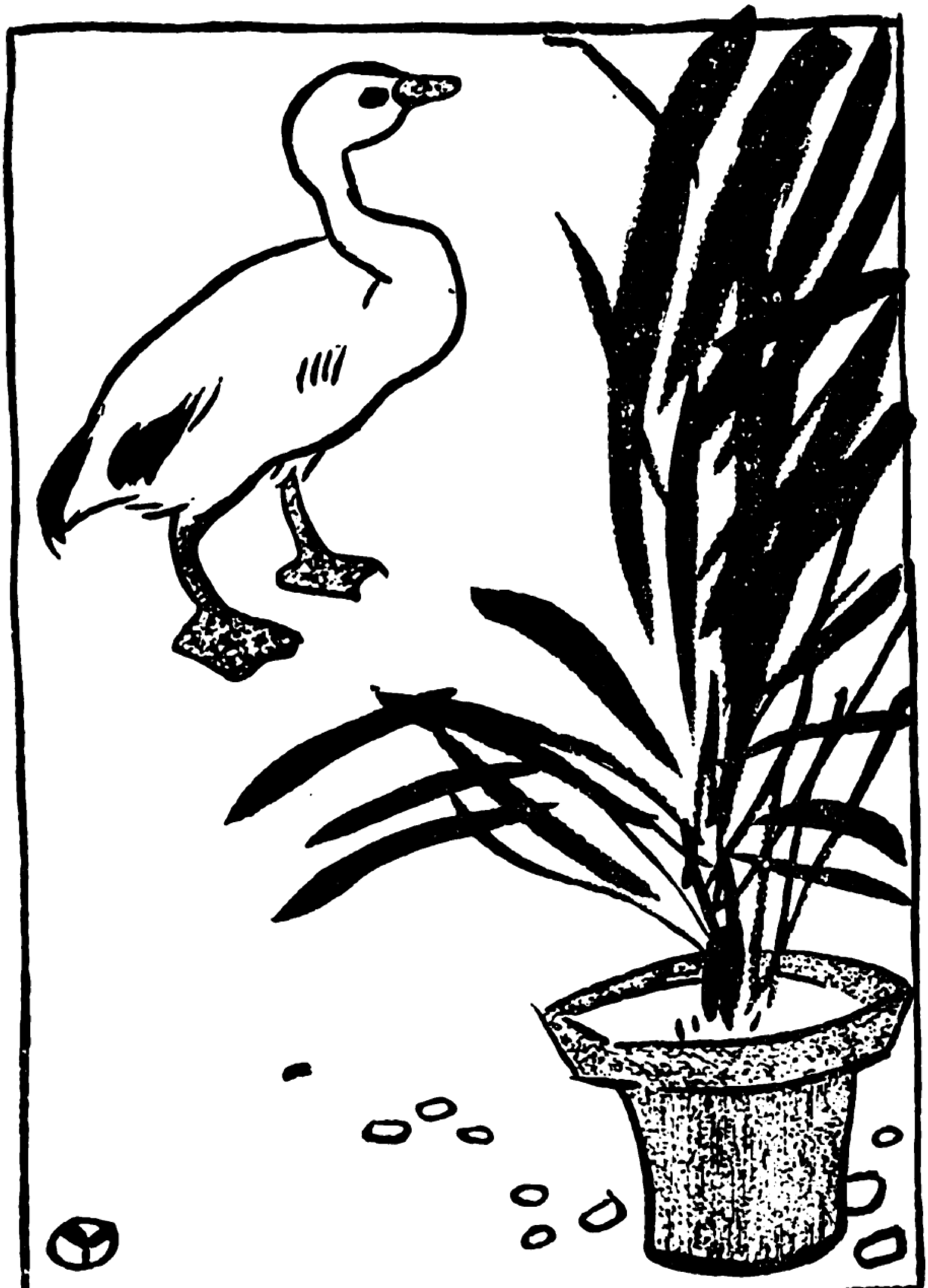
これは旅の實情をよくうかがつた歌で、長い旅をして

家に歸る時は、誰も斯うであらうと思はれる。

和歌山の歌人加納諸平の歌に、

霧の上に雁がねなきて秋の日のかたぶく空を一人かも見む

家にありて妻子と共に眺めなば、秋の夕べのさびしさもかくはあらじと思ふ秋曉の旅愁を歌つたのです。



姫島の松の夕日に雁鳴てわが子戀しきあき風ぞふく

所は遙い海中の島、時は秋の夕べ、聞ゆるは雁の聲、實に故郷の妻子らが忍ばれたであらうと思ふ。

福井の歌人井手曙覧の歌に、

影たる〻星にせまりて薄黒き色た〻なはるおぼろ夜の山

春のおぼろ夜、星の光もおぼろであるに、くつきりと輪廓の見える高い山、これらを有聲の畫といふのであらうと思ふ。

福岡の歌人大隈言道の歌に、

末遠くまがひ路もなき一筋ぞ見てもつかるゝ旅心かな

二三句は、たゞ眞直な一本道を云うので、西那須野から鹽原にゆく道などてかういふ風に感じられる。

窓に窓むかひあひたる大舟の一夜どなりのなつかしげなる

瀨戸內海の船の旅でよんだ歌で「一夜どなり」といふ句がおもしろい。

こし方に冬の日數は盡きはてゝこゝより春の船路なりけり

これは海上の船の中で冬が過ぎて、正月元日を迎へたことを詠んだので「こゝより春の船路」といふ句がいかにも面白い。冬の船路春の船路と言つて別に變りがあると云ふのでは無いが、冬の日數が盡きて春の船路になつたと言つたところに、長い航海のさまが浮んで來ます。

最後に近世の女歌人として有名な太田垣蓮月の歌を一首御話します。

朝風にうばらかをりて時鳥なくや四月の志賀の山越

これは旅というても近い旅、京都から近江の方へ出る道でよんだのですが、朝風にばらの花がかをつてといふ句が、いかにも實境をよんでわざとらしく有ません、自ら旅の歌の趣を得たものと言へます。

○今尾を振つて居る

妻思ひの感な亭主、旅行先で家の事が心配になつて溜らぬので、一策を按じ八卦見に今妻は何をしてるかを見て貰ふ事にした。八卦見は庬爪らしく、「今奥樣は窓から覗いて居る處だ。何か待つ者でもあるらしい」と言ふので

「誰を待つてるのだらう」訝ると、八卦見

「ア今戶口から入つた物がある。奥樣は嬉し相に類 廉りせん許にして居られる……」男は色を變へて

「そんな馬鹿な事。彼女に限つてそんな事は無い」

「それでもじつと顏と顏を見合して入來いますよ」

「顏と顏と?!」男は物も言へない。八卦見は最早頁い時分と、獨り言の樣に

「ハーア、大奴嬉し相に尾を振つてゐるわ」



西洋婦人のお産

能勢かね子

近來はお産の仕方が殆んど西洋風になつて來て、舊式の仕方は只だ多少の餘命を保つて居るに過ぎません從つて産前産後の衛生法は元より、産時の手當などは純然たる西洋式です。西洋式には西洋式の特長がありますし、舊式とても滿更善い所が無いとも限りません併しその優劣などはどうでもよろしい、こゝには唯西洋婦人は何んな風にお産をするか、その詳細を知るのは極めて興味あることゝおもひます。

然るに西洋人特にその婦人は他人の前で、皮膚を現すのを一代の恥辱とし居ます。況して前後を取亂しかねもしない産時のごときは、容易に他人殊に日本人の與り知るを得られない事です。日本に滯在して居る幾千の西洋婦人の中でも、これまで日本の産婆に依頼するのは極めて稀有の事ですから、一層その眞相を極むるに困難ですが、私は幸にして米國婦人ハーン氏の家庭に永らく居て、數回お産に立合ひ、彼地の習慣など見もし、聞きもし致しましたので、多少參考ともなり、又興味ある事と思ひましてこゝにお話する事に致しました。

△産醫

産婆の制度は實に日本の誇りとして宜いことゝ思ひます。由來西洋には日本のやうな産婆は無いのであります。併し日本の産婆と普通の醫者との中間にある專門の産醫と云ふのがありますが、これは日本の産科醫とは違つて、云はゞ産婆と産科醫とを一緒にして、新たに造り出したやうなものです。それで一方から云へば學力が高い丈け、安心の度は强いやうなものゝ、産

婆に特有な助產的技術、即ち親切と、便利と、其から心が設けない點は日本の產婆の特色で、これは世界一と云ふてもよいのであります。

如何なる下級の人でも、日本婦人が產婆にかゝるやうに、西洋ではどんな貧乏人でも矢張り產醫を招くのであるが、但し極々貧乏人は例外である事は東西同じである。西洋の產醫は日本の產婆のやうに、時々見舞つてくれるでも無ければ、親切でもなく、そして威張つて居る事は普通の醫者と同じである。それで彼地でも段々日本產婆の特長が認められるやうになり、早晚何とかの形式で出來るであらう、兎に角日本の產婆が世界一と聞けば聊か快いのである。

△惡阻と苹果

假令風俗習慣の上には大きな差違があつても、同じ生理上の許に支配されて居る婦人のことであるから、姙娠の初期にある惡阻、即ち胸が惡くて嘔氣を催すことは西洋婦人も同じ事であるが、日本婦人に比べると烈しい人は馬鹿に烈しい代りに、全く其氣の無い人も多いやうです。併し之は正確な比較の出來るものでないから、能くは分りませぬが、今云つたやうな傾向は確に見えるのであります。

西洋では此惡阻期中の手當として、消化し易い「メリーフード」又は「オートミール」及び牛乳などを用ゐて、專ら衰弱をしないように豫防して居ます。而して此期間中は働かないで家に寢て居る人が多いのであります。

日本では姙娠の初期に酸い物を極めて好むので、此が姙娠の善いバロメートルに爲つて居るのですが、西洋婦人でも同じ事です。併し同じ酸い物と云つても、日本婦人は重もに梅干を食べますが、西洋婦人は大抵苹果を食するのが例で、此も例の學理から割出して、消化し易いものと云ふ所から、這麼風に爲つたのでせう。尤も日本のやうに梅干は無いからでもあらうが、或る婦人は凡ての西洋人は絕對に梅干を食べ得ないと云つて居ました。

△正反對の岩田帯

日本では五月目にお腹を帯のやうな布で捲き、之を岩田帯と稱してお祝をするのが一般の例ですが、西洋には決して左樣なことはありません而かも日本とは全く反對に、お腹を捲くよりも、却て今までコルセットで堅く締めて居たのを、四五ケ月頃から取放してお腹を廣くし、自由に任すので、獨りコルセットを取除けるのみでなく、衣類も出來る限り緩く着るのでありますから、誠に格構が惡い。此點は東西婦人の思想と慣習とが大に違つて居る所で、日本婦人はタシナミを主とするに反し、西洋婦人は衞生を主として居るやうであります。

併しながら如何に衞生上から斯くダラシない風をしますものゝ、由來西洋婦人は腰の締つた蜂のやうなのを好む風習であるのに、夫が全く反對になるのでありますから、餘程恥しいと見えて、殆んど家にのみ居て外出しないのであります。併し家に居て遊んで居る



空の色のみどりにしげる杉林も時雨ひまなき蟬の聲かな

のでは無い、感心に仕事に從事するのであります。
序でながら、お腹を締めると、緩めるとで產の時何んなに結果が違ふかと云ふに、此の正反對の仕方は矢張り產時に正反對となつて現はれるのである。
要するに西洋婦人のお產は大層苦しむのである。大きい女がオイ／＼と泣き出すことは決して珍らしくないことですが、日本では「案じるよりも生むが易い」と云ふ諺さへあつて、如何に苦しくも產の時に取亂さないのを婦人のたしなみとしてゐるにも由る事ですが西洋人は決して生むが易くはないのであります―日本婦人よりも確に一層苦しむのであります。
その原因に就ては平常肉食するからだとも云ひ、又コルセットでお腹を締めつけるからだとも云ひ、或は婦人の學問が進んで居るからだとも云ふのである。何れが果して眞理であるかは知りませんが、コルセットがお腹を締めつける害は何人も認めて居る所であります。夫れから四五ヶ月目から急にお腹を締めて自由にする爲めとの說もあるが、此も頭から排斥は出來ないのであります。

△產時と產後

いよ／＼お產の時は出產專門の產醫を呼ぶのですが實際手にかけて恰度日本の產婆のやうな役目をつとめるのは看護婦です。尤も上流の家でも人によると母親にのみ賴む婦人も多いやうです。
夫から產醫も看護婦も雇へない貧しい人々は友人と隣人との世話になるのでありますが、友人より多く世話をするのは隣りの人々であつて、此は殆んど神が命じた習慣のやうになつて居ります。それは／＼親切のもので、到底產醫や、看護婦などの及ぶ所でなく、日本の產婆などよりも遙か上手なやうであります。
日本でも向ふ三軒兩隣りは親族並の交際をするのであります。近來特に東京其他の都會などは全く形式一片のやうですが、西洋では隣家近所の親密が日本よりズット深い上に、特にお產の時は大騷ぎして世話を仕合ふのであります。

右はお產に就ての一般のふり合であります。話の順序としてお產の時の實況を詳しくお話したいのでありますが、何分叙景的の筆がありませんから、これは略することゝしました。併し臨月近くなると產室に主人が付ききりで、最愛の妻と分娩時の苦を共にするやうな風のあることと、日本のやうに產婦がタシナミなどに重きを置かないで、オイ〳〵と泣き出すことが多いこと丈けは日本と非常に違ひまして、却々大變な大騷ぎを演ずるのであります。

近江名勝石山寺



夫から分娩の道具でありますが、產醫の方のは別として、產婦の方には別に取立てゝ云ふ程の道具はありません。上流社會の人は、新らしい脫脂綿を、貧しい人は古切れを洗濯したのと、日本の油紙の代りにゴムびきの布を要意する丈けである。

次に未だ產褥に居る間は牛乳を主食とし、玉子とパンとを副食とするのでありますが、十日目から後は何でも食べます。西洋ではどんな貧乏人でも此食事のとり方丈けは必ず嚴しく守るやうであります。

△沐湯と授乳

嬰兒が生れると、すぐ產湯をつかはします。夫れから約一週間は湯に入れないで、石鹸をなすり付けて、只だ微湯で拭くばかりです。此は日本とやり方が違つて居ます。

乳は最初から牛乳で育てる人もありますが、牛乳で育てた子供よりも、母乳で育てる方が自然で、發育もよく、腦の働きもよいとの統計が發表されて以來、次第に母乳に依るの傾向となつてまゐりました。

西洋婦人は自分の美の少しも衰へないことばかりに氣をもみ、赤ん坊も主人も犧牲にまでして居るやうに思ふ人が多いやうですが、併し此は實際に通じない人の觀察です。赤ん坊から子兒、青年に至るまでの母親の愛と教育とは眞の愛、眞の教育と思はれるほど、實にその極度に達して居ると思ひます。

△宮參りと寺參り

三十日目の宮參りは西洋には勿論ありませんが、此に換ふべきものは寺參りでせう。新教の人と舊教の人とは全く違ひますが、舊教の人々は嬰坊が生れてから三十日前後に、僧侶を家に迎へて其子の祝福を祈禱して貰ひ、新教では六月の第三の日曜日を「花の日」と唱へて、前年の此日以後に產れた子供一同を自分の屬する教會に連れて行つて洗禮を受けさすのであります。即ち宮參りで無くて、寺參りなのであります。



秋一週間の献立

磯　栄

△水曜日

(一)鯛の刺身(生姜)　(二)焼松茸　(三)ビフステーキ　(四)芋蛸　(五)蕪菁のふろふき

(一)鯛を一百五十目許りの内良い處を刺身に作り、生姜をすりて添へる、鯛の残りを薄塩あて置く、

(二)これは、松茸を灰火の中へ埋めて焼き、灰を洗ふて指にて裂き、柚の汁を絞り醤油と和せて注けるなり。

(三)ビフステーキは、牛肉を薄く切りこれに塩と胡椒とを付け、なほメメを塗り十五六分間おき、製へたる油を鍋に入れ煎り付け切りたる牛肉を入れ、これを焼上げ、葱又は馬鈴薯を小口切にしてフライと為し、これを取合すなり。

(四)これは蛸を薄く平たく切り、芋をよき程に切り、鰹節のだしにて、少し甘く汁の無きやうに煮るべし。

(五)これはだいこん丸にて一寸位に切り、蒸籠にて蒸し、白味噌と少し砂糖を加へ味淋にて溶き、これに胡麻のすりたるとたうがらしとを合せてかけるなり。

△木曜日

(一)鰹のてり焼　(二)牛蒡の甘煮　(三)サラダソース　(四)鴨の玉子焼

(一)片身おろし、味淋を加へたる醤油に浸けおき取出して照焼にし、これに松茸の蒸焼にしたるをあしらふべし。

(二)太き牛蒡を中分所より根本の所にて上皮を庖刀にてこそげ、御飯の取湯と水とを等分に合せ沢山に入れ、能く湯煮し、御箸の通るやうになりたるを度とし、笊に上げ、さつと水を注け、水気を取り、鍋に御味噌四分、醤油六分の割にて牛蒡を入れ、強き火にて煎りつかぬやうに煮上げ、小口より五分ほどに切り青海苔を沢山にかけるなり、又青のりに換へて胡椒を撒りかけ、其上に華類を流しいもにして注くれば尚佳し。

(三)これは米利堅粉一合牛乳三合、水一合、玉子大三個、芥子一匙、珈琲一匙、胡椒小匙、「サラダ」油五勺、砂糖十匁、酢適宜、以上にて製するなり。其方法は先づ米利堅粉を茶碗に一杯牛乳四合の割合にて、温火にかけ、煮つめて固まるを度とし、下ろして冷めたる頃、玉子の黄みの裏漉　胡椒と砂糖と加へ、「サラダ」の油を少しづゝ入れ伸ばし、西洋酢にて煉り、これにて加減するなり。

(四)これは鴨の肉を、よきほどに作り、酒多く醤油少なき煮汁の煮つまる頃に鴨を入れ、玉子を割りて落し、焦けぬやうに焼くべし、これには胡椒などを用ふべし。

△金曜日

(一)鯛の刺身　(二)牛の舌のぬた膾　(三)鶏肉スチウ　(四)笹餅　(五)大黒湿地茸と若菜の清し汁。

(一)鯛の刺身一人前五十目の割にて製す。

(二)これは魚を三枚におろし、いかやうとも作り、塩を少しふり置て、うど、大根、木茸にて

ぬたにすべし。魚をおろすは背より兩方におろすべし。

(三)鷄肉スチウ(蒸肉)は調理した肉と骨とを分ち骨をよく洗ひ、其骨を肉と共に、スチウ鍋に入れ、水を十分に入れて、鹽と胡椒とを適度に加へ、二三時間煮るべし斯くして浮きたる泡を匕ひ去り、少量のうどん粉と刻みたる葱とを加へ、三十分間ほど煮るなり。

(四)葛に砂糖を和へ、どろどろに解きむらの出來ぬ樣に攪廻し乍ら煮つめ堅く成つた時下しガラスの小コップを濕し葛を八分目に入れ餡の丸めたのを眞中へ入れ、平らにならし(餡は殺入の團餡にて作る)水につけ、冷た時取出し熊笹を鹽水にて殺菌したるを清水にて洗ひして包み、鉢に入れ冷水を滴すべし。

(五)これは大黒濕地茸を、水にて洗ひ淡加減の澄し汁に入れさつと煮立ちたる所を火より下ろしこれに若菜の細かく切りたるを加ふ。

△土曜日

(一)鯛の炙り燒　(二)烏賊の味噌煮　(三)コロッケ　(四)甘藷の南蠻煮

(一)これは鯛の鱗を取り去り庖丁にて疵を深く入れ、鹽を撒り掛け、腹を割き、腸を出し胡椒を少し詰め、又椎茸と鳥の打ち肉の味噌にて擂りまぜたるとを詰込み、詰物の出ぬやうにして尾より頭へ串をさして燒くなり。

(二)生にて二寸ばかりの拍子木に切り白味噌を漉しほと鰹節を多く入れ、凡そ三時間餘も微火にて煮詰め割胡椒、生姜、千山椒、等を藥味にすべし。

(三)「コロッケ」は炙りたる肉を細かく刻み、葱と湯でたる馬鈴薯とを、すいなうにて裏漉にしこれへ肉と鹽と胡椒とを入れ、混ぜ合せメリケン粉を加へ形を作り、玉子の黄みを塗り、うどん粉を撒け、「フライ」の油にて揚ぐるなり。

(四)甘藷を好き程に輪切にし、葱の切りたるを鍋の中に敷きならべ、其上に入れて煮るなり。

△日曜日

(一)鯛の刺身　(二)蝦のフライ　(三)ビフカツレツの調理　(四)蛤の付燒　(五)松茸と蒲鉾　(六)こちのぬた膾　(七)鯛の葛たたき澄し汁

(一)鯛の刺身は例の通りにするのです。

(二)蝦の皮をむき尾を付て置く。まづ「メリケン」粉を能く付け玉子にくろみパン粉を付け「ラード」で揚げる。

(三)一人前の肉一斤の三ツ割とし脂肉を切り取り、庖刀の背にて軟かに打きのばし、鹽と胡椒にて味を付け、米利堅粉の中に入れて兩面に粉を付け、其上に玉子の黄みを塗り、うどん粉を撒りかけ、製へたる油をフライ鍋に入れ、煮立たして肉を入れ、焦つかぬやうに裏表を燒き、西洋紙の上に取上げ、油氣を去り、皿に盛り、菜と取合せ、「ピックルヒ」をかくるなり。

(四)大なる蛤の肉を串にさし、それを裏表より能く燒き、木の芽醬油か山椒醬油にて付燒にするもよろしい。

(五)蒲鉾は程よく切り、松茸は小粒のものを全にて横に四五分位に切り、醬油に味淋を加へて共に煮るべし。但し汁の無きまでに煮つむべし。

(六)これに魚を三枚におろして皮を引き、薄く

作りてぬたにするなり。

(七)鯛の葛たゝき清し汁は鯛の肉を平たく刺身の様に切り烏皮鹽をふり葛粉に轉して後擂木にて輕くたゝく(叩く)と薄く紙の様に成升、之を水につけ直ぐに引上げ、青味と共に吸物にす。

彼是思ふ程の御馳走も出來ませんでせうがお氣に召せば嬉しう御座います。

△月曜日

(一)鱸の刺身 (二)椎茸と鹽鮭との三杯酢、(三)オムレットの調理 (四)狸汁

(一)鱸のよき所を百八十目刺身に作る。

(二)椎茸を湯でゝ細く切り、鮭は水に浸しおき、絞りて椎茸と共に三杯酢にて浸す。

(三)これは玉子を泡きまはし、鹽と胡椒にて味を付け、少し羹汁を入れ「フライパン」にて手早く半熟に焼くなり。

(四)これは蒟蒻を爼の上にのせ、擂木にてコツコツと打き、胡麻の油を少し鍋に入れ、沸騰させ、其中へ蒟蒻を摘み取りて入れ、油にて能く煎り、これへ擂りたる味噌を入れ、さゝがき牛蒡を入れて汁とするなり。

△火曜日

(一)牛肉のたゝき揚げ (二)玉子ひし汁 (三)鯛の「ボイル」 (四)刀魚の和蘭和 (五)蜆の黒和

(一)牛肉を細かに叩き葱と生姜のみじん切を浮粉少しと鹽、胡椒を入れ平たきものを作りバタにて揚先づおぼろ豆腐を製へ、薄く切りたる蒲鉾を茶碗に入れ、青菜のゆでたるを一寸ほどに切りて上せ玉子を割りて入れ、味淋にて葛粉を溶き、それを注け、別にだしを製へ沸へ立たせおきよきほどに注ぎ、蓋を爲し、暫く蒸して取出すべし。

(三)鯛の「ボイル」これは魚を洗ひて能く水分を去り、全身にても切身にても、鹽と胡椒にて味をつけ一時間ほどおきて蒸し之を皿に盛り、玉子の黄みを裏漉にしたるを注け牛乳クルピに橙酢を少し加へて注けるなり。

(四)刀魚を能く水にて洗ひ、三枚におろし、斜に作り、それを酢に醤油を少し合せたるものに暫く浸けおき、能く絞り、其酢を味噌に和すべし。味噌は焼味噌にして擂り、右の酢にて濃く溶くなり。これには木くらげ、けづり大根、嫩豆腐、葱の小口切、蕃椒、椎茸、を共に和へるなり。

(五)から蜆を鹽湯に煮て、お箸にて肉を取出し布巾にて水氣を取り、黒胡麻味噌にて和るなり。

蜆は黒和のみならず木の芽味噌和、山椒味噌和から和、酢味噌和にもいたします。

○握飯の焼き方

握飯は焼いたのと焼かないのとを比べると、焼いた方がズッと味が好いやうです。然し之を焼くには一寸具合がありまして、握つたばかりで未だ能く乾かないのを鐵網にかけると、飯粒が鐵網に粘り着いて困ることがあります。それ故子供が學校へ持つてゆく物などを拵へるには下の様にするとよい様です。

それは綺麗に洗つた藁を二寸五分位づゝ一度に澤山切つて保つて置いて握飯を焼く時に之を鐵網の上に四五本づゝ並べて其上に握飯を載せるのです。かうすると何様に急いでも、握ると直ぐ焼いても、鐵網に粘り着くといふことがなく、自然に焼けて焦げ付かないで大層宜しうございます。



臺所雜記帳

清子

◎布類の防火

子供の衣類に火の附いた時其燃え上るのを防ぐ法は、其衣類を洗つた時濯ぎ水の中に明礬を十分程溶して置けばよい、斯うすれば火の移つた時ふす〳〵と燻つても燃え上るのは餘程遲い。此の明礬に浸す法は衣類の外、火氣に近く使用する總ての衣類に應用して妙であります。

◎梯子段を白く塗る事

暗い地下室其他物置等へ降りる梯子段は一番下の段を白く塗るが良い。斯うすれば一段上から履みはづす患はない。

◎釦の穴の埃

其他家具類の凹みに溜つた埃は鞴で吹き出せば他を損ずる事なしに最も無造作にとれる。

◎肉の堅き時

炙肉等にする肉の堅い時庖刀の脊でたゝくのは纖維を損ひ其上肝腎の味を惡くする故なるべく避ける方が良い。其代りに切つた肉にサラダ油を塗つて一時間程棄て置き、脂で燒く時は、初強い火で肉の裏表共、上皮丈を燒き次に火勢を緩くして中迄火勢の透る樣にするのである。

◎茹玉子と生卵との興味ある鑑別法

茹卵子と生卵子との二個をとり平な硝子の上に横にして廻して見る。茹卵子の廻つて居る間に輕く掌で押へると、再び手を離した時玉子はチャンと止つて居る。處が生卵になると一度止つても手を離すと同時に中の白味が動いて居る故、殼は亦動き出す。

今一つの法は斯うである。卵子を取り縦に獨樂の樣に

廻して見て、廻るのが茹卵子で、直に横に倒れるのが生玉子である。

◎ヨークシャケーキ。

メリケン粉一磅（百廿匁）牛酪一唡（八匁餘）ふかし粉四匙、鹽少々、乳一合半。最初牛乳少々をとり微温にし牛酪を溶し、後メリケン粉、鹽、ふかし粉凡てを加へ、更に殘りの乳を加へて捏ね、後小さき形に分ちて天火にかける。



◎汚點拔種々

インキの汚點は牛乳を綿或は布に浸して拭ひ取る。

朱肉、樹脂、金具類の黒油様の汚等はテレビン油、揮發油或はアルコールで洗へばよし。澁の汚點は味噌汁で洗ふか砂糖にて揉落すか或はアンモニア水硼酸液を用ゐてもよし。

◎鹽の用法

毎夜食鹽で含漱すれば咽喉病を防ぐ。　蜂其他の毒蟲

の釜したのには鹽水をつけるが良い。火鉢で物がこげた時鹽をくべれば速に臭味を除る。色物を洗ふ時、濯ぎ水に鹽を一摑入れて置けば褪色を防ぐ。鹽水を撒いて置けば雜草の生えるのを妨げる。

◎林檎をむいた時直に冷水に落せば、肉の褐色を帶びるのを避ける事が出來る。

◎葱を食べた後の臭氣は、和蘭芹と一緒に酢の物を食べれば消す事が出來る。

◎革類の黴はワセリンで磨り、後布にて拭きとるが最も簡便である。

◎簡便な輕燒の製法

不用のパンを細く切り牛乳に浸し乳鹽を加へて味をつけ、天火にて黄色になる迄燒く。そして之等の輕燒を貯へて置くのは錫壺に入れ置くに限る。

◎コーヒと消化

病人等に飲ますコーヒは、牛乳を溫め之にコーヒを入れ二三回攪亂して後モスリンの布で裏濾にすれば、普通の方法でしたのより數等消化に良い。

◎植木鉢の蟲。植木鉢の土中に蟲が湧いて植木が育たぬ時は一匙の芥子をコップ一杯の水に解き根本に注げば中の蟲は皆外に出て來る。只蟲を除つた後で十分芥子が洗流される丈に水を注いで置く事を忘れないで。

◎額緣其他損じ易き物に附着した埃を取るには食パンで拭ふが最も賢き方法である。

◎黑い手袋の効能

西洋の婦人は好んで黑い手袋の而も手に喰いついた樣なのをはめる。實際氣が附いてして居るのか如何か分らんが之には面白い理由がある。而し此理由を話す前に他の例を提供しよう。と云ふのは葉書大の白紙二枚をとり各眞中の同じ位置に同じ大さの圓或は正方角を作り、一枚の方は眞中の圓(或は正方形)を墨にて塗り他の一枚は眞中を白くして周圍を黑く塗る。斯うした二つの圓は初同形に描いたに關らず黑色の方が周圍の白い圓より著しく少さく見える・・・・茲迄言へばお分りになるだらうが、黑手袋は白手袋より手を少さく見せると云ふ點で勝つて居る。

各國人氣質の相違

獨逸人に相手に敬意を拂つて貴下といふ字を大文字で書き、自らは謙遜して我といふ字を小文字で書く。佛蘭西人はさすがに自由平等の本家だけあつて貴下も我も共に小文字で書く。然るに世界中自尊心の最も強き英人は我といふ字に大文字を使用し、貴下といふ字を小文字で書くのは面白い。更に一例を擧ぐれば、相手の話を中止する場合獨逸人は「まあ御聞きなさい」といひ、喋舌好きの佛人は「さう御喋舌りなさるな」といひ自尊の英人は傲然として「僕がいふ僕がいふ」と云ふ。

大陸の諺に「立つて居るより腰掛けたがいゝ、腰かけるより寢たがいゝ、寢たより死んだがいゝ」といふが英人は「腰掛けたより立つがいゝ、立つたより歩くがいゝ、歩くより走るがいい」といふ主義である。從て飲食店の腰掛は三本脚の粗末なもので、五分間以上は腰掛けて居られないやうに出來て居る。英人は人と時間を約束するに「十一時半まで御話しませう」といはずして、「十一時二十七分まで御話しませう」といふ流義である。

佛蘭西其他大陸諸國では、父の財產は子女の間に分配されるが、英國ではさうでない。父は其財產の全部を擧げて長男に讓り、安心して自由に社會的事業及び國家事業に盡瘁させ、次男以下は悉く之を社會に追出して奮鬪させ、自主獨立の道を講じさせる。即ち英國に於て富豪に對する反感が他國における程甚しからず、且國家が駸々として進轉する所以である。佛人は節約によつて貯金し英人は努力によつて多く儲けやうとする。英人は自己の將來に關しては生命保險に託し一意現在の大發展を試みる。



娘の婿選びの標準

娘さんは愈々婿さんを此方にと決定て了ふまでにはそれぞれ迷つたり氣を揉んだりする。然し一旦此方をと心に決定て了ふと却々動かぬものである。殊に一度見合ひをすると、智へ豫想よりは惡い婿さんでも、『先き樣でさへ御承知ならば妾には異存は御座いません』と恥かしげに云ふのが多い。それだから一旦見合ひをして婿さんの方から跳ね附けられたとなると、非常に恥のやうに考へ、『もう一生獨身で暮らすより外はないわ』等と嘆き悲しむ娘さんが多い。けれど中には又娘さんの方から擇り好みをして、十幾遍の見合に悉く婿さんの候補者を落第させて平然として居るハイカラ娘もある。上流社會の某家のお孃さんで、十三人目の見合で漸やく及第させたと云ふ娘さんがあつた。

娘さんとお母さんとは如何しても婿さんに對する理想が違

ふ。娘さんは姑の無い男振りのいゝ人の處へ行きたがる。お母さんはたとへ姑はあつても、又男振りなどは少しは惡くても資産のある處へ嫁がせたいと云ふ。其結果は娘さんが飽くまでもお母さんの云ふ事を肯かないで、お母さんと喧嘩をしてまでも我が云ひ分を通すと云ふやうなのも隨分ある。此の間も斯んなのがあつた。一人の婿さんの候補者を推薦した處が、寫眞を見ると直に此娘さんが急に惚れ込で了つて、是非此方の處へ嫁ぎたいと云ふ。然し其婿さんは近く臺灣へ赴任する事になつて居たので、お母さんが反對して、『一人娘のお前さんをそんな遠くへ行く人の處へは嫁れません』と云ふ、すると娘さんが腹を立てゝ、『此緣談はお母さんの緣談ではありません、私の緣談です、當人の私さへ承知したらそれでいゝぢやありませんか』と云ふやうな意氣込で、とう〳〵兩親を說破して不承不承に此緣談を纏めさせて了つたと云ふのがあつた。此娘さんの年は二十で、お茶の水女學校の出身である。（某氏）

酒の奇妙な作用

人間が先天的に酒を好む性を持て居るのみならず、動物及び植物に至る迄酒を喜び酒に醉はされて了ふ性を持つて居る。

これが生物のどういふ所を麻痺即ち醉はせて了ふかと言ふに人間の場合には先づ腦を冒し、漸次神經系統を冒して、人間として最も高等に發達して居る思慮分別判斷、道義的觀念等を麻痺させて了ふ。動物のうちで最も進歩して居る猿も好んで之れを飲み、飲んでは折角敎へ込まれた藝も芝居も忘れて了ふ。之も猿のうちで最も進歩した部分を冒すのである。又植物に就て言へば、俗にいふ「おじぎ草」は、人が側によつて其葉を叩けば、葉を萎めておじぎをするが、若此根にアルコールを灑げば、もうどんなに葉を叩かうと決しておじぎをしなくなる。即はち之れも此草として最も高等に發達して居る部分が麻痺されるのである。



然し又酒は醫師が藥に用ゐる材料の一つで有る。即ち適宜に之を用ゆれば精神肉體共に其効力に依つて言ふに云はれぬユーフオリヤ（快意）を憶えて、沈む氣を引立て、一種の病的狀態から全く救ふ事が出來る。茲が即ち藥用に供される所以で、男子が一日の生存競爭に勞れて歸る時一杯の酒に憂を晴らす處もこゝである、然しユーフオリヤは適宜の程度で物を止めて置かない。始めは人酒を飲み次で酒々を飲み、終ひに酒人を飲むの諺通り、飲まれる迄溺れなければ止められない恐ろしい力を持つて居る、茲が往々其害を廣く及ほす原因である。

（醫學博士林春雄氏）

日本髮と束髮

下町は云ふ迄もなく、此頃は山の手の奥様達でも、何方かと云へば上品よりも小粋に扮りたいと云ふ方が多い様ですが、孃達も粋好みが多く、假令上品でも其中に粋な處があると云ふ風のが喜ばれます。尤も下町は粋で、山の手は上品好みの多いのは勿論で、同じ桃割れに掛ける丈長でも、下町は細いもの山の手は廣いものを掛けると云ふ風です。束髪にしても、下町の孃は髱をふつくり出して何處迄も日本髪の俤を無くすまいとする。夏向になつて山の手に束髪が多くなる時分でも、下町では廻りを日本髪にして髷だけをエス卷風に薄く長目に上げた和洋折衷の髪が流行する。山の手の孃さん達は之と反對で髱などを出さないで、西洋風な處に淡白したハイカラを見せやうとする。一體孃時代に束髪を結ふのは、色々な事情があるに違ひないが、年中束髪に結つて居ると、奥様になつてから後悔する様な事になる。束髪は油を附けないから、髪が臺なしになり、惡い髪癖が付いて、急に島田なり丸髷なりに上やうとしても、却々癖が取れない。夫だから孃時代に日本髪許りで押通せぬ人は、少くとも半年位は日本髪に上げて、束髪の爲めに付く惡い髪癖を除き、椿製の滋養になる油を付ける様にしたいものです。尤も額の廣過ぎする人、生際の惡い人、縮れ毛の人などは概して日本髪よりも束髪の方が女振りを上げて見せるのは確かです。何しろ孃時代から十分髪に注意をしないと、奥様になつて眞實に女振りを上げる段になつて後悔することがあります。



健全者と狂者の中間の人

△淺草の奥山の掏摸に、なぜお前は掏摸を働くかと問ふたら、唯面白いから、と答へた。電車の中や、人込みの中などで、ぼんやり口を開いて居る人を見ると、懐中物でも何でも、一寸掏摸取つて見たくて溜らないといふ。電光石火の早業で、首尾能く奪つた獲物に對しては、案外冷淡で、自分は使ひもせず早速親分の所へ持つて行つて、少しばかりの分配に預かるのみ。つまり物が欲しくて掏摸取るのではなく、面白くてやるのである。彼は仕事が非常に巧妙で、他の掏摸の模範として遇せられて居た。無論本人は掏摸の惡い事は知つて居る。故に最初電車に乗込む時には、もう決して惡い事はしまいと思つて居ても、偶々隙の多い、掏摸には誂へ向の客を見れば、奪りたいといふ氣がムラ〳〵と起つて、自から制することが出來ないのである。言はゞ出來心の所爲である。

△出來心は精神の不健全、即ち意思の薄弱から起る。此出來心の爲めに惡事を爲す者は獨り掏摸のみでない。立派な鹿爪らしい様子をして居ながら、隨分不埒な振舞をする紳士が多い。發けば犯罪人となるやうな事をして、恬として顧みぬ高位高

官の人もある。如何にも本氣の沙汰でないやうに思はれるから精神病者かといふに、世間に相當の地位を占め、相當の職責も有する身の、全然精神病者とも思へない。然らば健全な人かといふに、これまた首肯されない節がある。健全者ともつかず精神病者ともつかぬ此種の人間を、即ち中間の人間といふのである。

△嚴格な意味では、眞に健全な人は極て少ない。多數は此中間の人間である。此種の人が厄介だといふのは、其感情に驅られて突飛な事をやり出すからである。この中間の人間を眼中に置かぬ社會政策は、全く其効力を失ふ。中間の人間を知らぬ裁判官の判決は正確なものでない。(片山醫學博士)

食前食後の注意

△食事を早く喰ふのは胃に壓迫を受け、又胃が充滿したり痛味を感ずるやうな氣持がして不可ない。遲く食ふのは無論善いに定つて居るが、忙しい人間が澤山の時間を要するから、他の關係上遲くする事が出來ない。されば此速度は何の位にしたらよいかといふに、トウチエツク氏の説に據ると、二百グラム(五十匁)の麵麭ならば十八分間位に食へと謂ふから、通常吾吾が用ゆる半斤の麵麭ならば、十七八分間に食へば善い事になる。そして食事中に水や茶を多く飲む人は、胃加答兒や消化不



良胃痙攣を起す傾向を作り、一方には胃液を涸うし、從て食物の消化を惡うする事は確かであるから、先づ飲まぬが善い。殊に卵を養べた後に多量の水分を飲むのは不可ない。

△又食事中に怒つたり、驚いたり、大に狂喜したりして喰ふのは大に惡い。食事の際には盛に胃液の分泌を計らねばならぬ而して胃液分泌中は胃中に血の多い時であらねばならぬ。然るに喜怒驚愕に際しては腦の力に血液が集るから、消化は非常に不良くなる。故に食事中は洒々たる歴史、宗教、地理などの話しでもして靜かに食べるが善い。

△食後は獨逸人は寢た方が善いと言ひ、或人は散歩せよ、或人は談話をせよと言ふが、要するに不可ないのは、下腹部又は胃部を壓へるやうにして體を置く事である。又體操をしたり、非常に激甚に勞働するなどは、大に不可ない。之れも勿論胃部を壓迫するからである。又風呂に入るのも不可ない。之れは西洋では特に禁物となつて居る。風呂に浴れば皮膚の血管を開大し血を外部に持來すから、肝腎の胃に必要な血液が減じて了ふ。然し二時も經つた後ならば宜しい。(後藤醫學博士)

子供の奮發心

子供には多少の得意を持せる事が大切である。子供のする事に無暗とケチを附けると子供は奮發心がなくなつてしまふ。



商家のムスメさんから來た手紙

無名氏

これは茨城縣下館の町にある種の客商賣をしてゐる家の娘さんから寄越した手紙ですが、讀んで見るとその日〳〵の生活上から得た敎訓樣のもので、文は幼稚ながらも物の道理をよく嚙みしめて頭が天下の大道に邁進してゐる處は一廉の敎育家も及ばない見識。そこで拙文を態と直さずその儘にして出しました（記者）

○

私の家は商家でありまして、二名の店員と、母と妹二人と亡なつた姉の兒で當年八歳になる腕白盛りの一人の甥と、家事見習に來て居る從妹二人との家族でございます。店員二名を除いては、殆ど女許りの家庭でございますから、餘所の家のやうに活氣のある譯には參りません。併し暗淡い家に居るやうな生活は致しません。生活上に活氣のあるや否やは、私の氣力一つでありますから、從つて盛衰も姉妹の長たる私の双肩に依つて左右せられてゐると感念致して居ります、責任者の覺悟は、不言不語の間に、相應の決心を示して動かない心でをりますのですが、他から見ては左程に見えないと見えまして、猶且平坦なる所謂お孃樣的生活をして居られるやうに見られて居るやうです、併し私は母を補けて其勢を幾分なりとも少からしめ、努めて安心立命させるやう又店の用も少からしめやう、妹や甥及び從妹などに成丈け愉快を與へやうと心掛けて居る心中は、他から見る程暢氣ではムいません、それ程に心掛ても、左程に見られないと言ふのは、矢張私が足らない勝なのでムいませうから、敢て殘念とも感じ

ません、憾みがましくも思ひません、いえそれは偶には母が私を叱つて、妹に何の譴責をも與へないやうな場合には、母が依怙の措置を取るやうに思はれまして、不服がましい心が出ないではありませんが、私は平常「平心」と言ふやうな素養の下に、努めて邪念を打消すやうに心掛けて居りますから、比較的人より苦痛が少ないやうに存じます、ですから暢氣にも見えるので厶いませう。

「平心」なぞと鳥滸がましう厶いますが、形に現はして言ふ不動の姿勢は、人間の品性を尙めて見せるのと同じ事、心の平かなる素養は、非常の場合にも動せずして、狼狽を防ぎ得るだらうと存じます。勢ひ品性を尙めるの素養であらうと存じます。平常見識ぶつて、如何にも我こそはと言ふ顔をなすつて居らしつても、非常に駭いて泣き騒ぎするやうでは百日の見識を只一事に損傷して了つて、人に案外の感じを抱かせます、却つてそれが反對であつたら、殊の外人の尊敬を受けるやうになるであらうと存じます。

○

毎朝私が主任に爲つて臺所の仕度を致しますが、人間の軀程譯の分らぬものはありません。非常に不愉快に感じる朝と、寔に心持の好い朝とが厶います、心持の好い朝は、自然笑顔勝で厶いますから、從妹二人も隨つてそれに伴れられて、和氣洋々として用事も捗行きますが、不愉快の朝は、何とはなしにインウツで兎もすると從妹の爲る事が眼に着き易くつて、何だか焦つたいやうに思ひまして、自然詞に平和を缺いて居りますから、勢ひ先方の笑顔を見ると言ふ事が能ません。さういふ朝に限つて用事も何か知らず爲痞へ勝なもので、若し母が起て來て、新らしい眼で見られると爲痞へた用事が直ぐ發見されて、注意されますから、不愉快な心へ鞭を當てられた如くに感じて、餘計周章して厭な氣持に成ります。

後で心が和いだ時、私は何日も考へます、主となる者の心の持ちやうで、家族の心は什麼にでも動く、そ

れでなくとも女は笑顔で人を使ふものだ、それを自身から、苦蟲を噛潰したやうな顔をして居ては、一家の平和が亂れる基だ、獨身の今は未だしでも、所天に仕へるやうになつてから、所天を慰む可き位置の自身が且つ懲う言ふ風ではなるまいとおもひます。

○

さう言ふ風では、自然と家庭に温和が喪なはれて、自分の心は益々不快に陷り行く、隨つて尙ぶ可き品性も殺れてくる。「平心」を素養として居る私らしくもない、なぞと考へますると、限りなく羞かしくなりまして——醫師でも嘔をわるくする、坊さんでも引導を渡される事があるのだ、なぞとつまらない辯かいを致しまして「平心」の素養に立歸りますのでムいますが、總て自分が機嫌を好くさへ致して居りますれば、人に第一不快を與へず、人の不快な心も又自分の心へは映りません



或場合は融和し與へて、限り知れぬ眞の歡樂を見る事が出來るのであらうと、考へましたさう言ふ事を繰返すのは、一年に幾度だか分りません、併し素養を積み、短處を修めて行く内には、明月を見るやうな心に立至る事は、疑ひないであらうと、人知れず樂みに致しては、獨り心に愉快を感ずるのが得も言はれぬ心持でムいます、而して私はさう言ふふうに、

自分の心を悩めながら従妹二人を見て居るので厶いますが、年若な従妹の爲る仕事は、勢ひ歯痒い事が有ますから、私が補ひつゝ相互に日課を修得しつゝ、母の勞を除いて居る心なので厶います。

けれども母は未だ私に對して、決して滿足らしい事は申ません、寧ろ何日でも不滿足らしく焦々しては、世話を焼きますので厶います。それ釜の下が什麽の、流しがだらしないの、未だ雑巾を掛けないのか、のと實際手の廻り切れない場合も、母の機嫌が悪い時は、やれ詰らない事を饒舌つて居るからだとか、お前の體が動かないからだとか、劈頭主任者へ落雷致しますから、其度毎に意味を廣く取りまして、處世道を歩きますには、餘程緻密に細心致さねば蹉跌を產む、なぞと處世道の倘安からざるを嘆ずる次第で厶います、自分は好いと思つて居りましても、否思ふ許りでない既に二名の従妹を指揮して居る軀で居りながら、上に上ある世の中は、母が見て、私の自負、自信を傷殘ます、否注意戒飭するので厶いまして、安心、放心、油斷なぞ言ふ大敵に襲はれる餘地の無いやうに、即ち隙を突かれるので厶いますと、母の一言も慰やうに取りますれば、寔に美しい教訓になりまして自づと自分の品性も美しく高くなるので厶いませうが、なか〳〵さうは參りません、後ではさう考へて、母の一言も仇には存じませぬが、其刹那に於ける心の中では、又缺點許り見着けて焦々する、位に感じます、後では味ひますが何うも咄嗟に味ひ兼て、何日までも母に滿足を與へられませんので困ります。併しながら、後に致せ前に致せ、さう心着くのは、さう覺悟致さねばならぬ暗示を與へられたと思つて居りますから、自分先づ實踐して早く母を欣ばせやうと思つて居ります。

○

妹は尋常一年生で、非常な腕白者で厶います外へ出ては猫のやうに柔順いさうですが、内に居りますと辨慶のやうに强う厶います。未だ理解力の無い年少者と存じて私初め皆の者も反抗ぬやうに致して居りますの

ですが、暴にして物を聞分ける事の能きぬ甥は、無茶に強うムいまして、それが爲には泣きもしたいやうな事がムいます、腹が立つて、思ひ切り叱つて、見やうかと思ひますが、子供を矯ますには叱る許が得策でないと存じますので、何日も常識に訴へて勘忍致して居りますが、それと同時に、斯うも粗暴なる甥の面倒を見るには、如何なる方法を取つたならば、甥をして十人並の子供に矯正し得るかと言ふ事を考へますが、淺薄なる思慮には、なかなか適當の措置が胸に浮びません、今尚甥の後來を危惧して心安うは思ひませんが、私はある時ふと斯樣に思ひました。



此一人の甥の爲に、斯くも言知れぬ苦痛を招くのは、天が甥をして、意味ある教訓を私に與へしめて居るのではなからうか。

何となく私は左樣に存じました、老行く母を見、一家の婦たるに

接近し行く私の身は、近き將來に所夫を迎へ母となり妻とならねばならぬので厶いますから……私が甥の粗暴なる性行に對して、慈愛的惡感情を抱くよりも先づさう言つた意味に感じますのは、誰人樣も道理だと御賛成下さるかと存じます平和なる心に、洋々たる南風を浴しつゝ、駘蕩たる春の花見に行く人に、誰か「怒」と言ふ曲者を愛しつゝ行く者がありませう「怒」と言ふ事は咄嗟の感情ですから、過去つて、見れば、益の無い心の鬼であつたと言ふ事は誰しも感じます、甥が粗暴なる素行は決して意味無きものに非ず、汝が將來の現實せしものと思ひ、責任を以て愛撫鞠育せよ……と無聲の聲が何日となく胸に通ひまして、温い血の環りは、甥の性行を憐みつゝ、善意を持つて彼を指導して行きます、諺に三歳兒の魂百迄と言ひますが、罪は決して天性の罪のみでなく、幼少よりの躾け方が第一であると考へました、誰にしても兒を躾けるに、嚴格なる許りが好い結果を生むとは決して申されません、勿論亦優しい許りではいけません子供が亂暴する時には叱言をいつても無益で厶います、子供に對して腹の立つ場合は、反對に優しい心を持たねばなりません、亦子供が嘻々として無心に喜び居る時は、訓育するに好機會で厶いまして、且つ母たり父たる責有る人の威嚴を深く印象させる好機會であると存じました私は足らぬ勝な女で厶いますが、粗暴なる甥よりは今尚日々さう言ふ敎訓を示されつゝ居ります。

顧つて應用致しますれば、其敎訓は決して子供に許りでは厶いません、昔から言ふ如く、仇に報ゆるに恩を以てせよ、賣らるゝ喧嘩は笑顏にて迎へよといひます、奉公人を使ひますにも、腹立紛れに叱言を言ふよりか、言はずに置いて、心の靜穩の時に訓戒したならば、言はるゝ者も、其温言に感ずるであらうと存じます、腹立紛れにぽん〳〵叱りますと反抗心を起させます、亦腹立紛れに言ふ時は。兎角の理非を混同する事が有ますから、勢ひ先方に理窟を拵へさして、肝腎の道理が立たない結果に成ります。

如何なる場合に處しても心の平かなる事は、其効果

の絶大である事を感じました。
一人の從兄が私に申しました。
「お前は心は正直には違ひないけれども、如何にも顏に愛嬌が無い、愛嬌を售る稼業でないから必要は無いやうなものゝ、兎に角女である、女の愛嬌は臺所に於ける飯釜誰しも米を連想する米櫃が空だらうなど、女の顏の愛嬌は假令心に愛嬌が無くとも、自然客の氣受がよいものである。と申して意見を致しました。
其時私は始めて自分は愛嬌の乏しい顏だと言ふ事が分りました、心内に有れば色外に表はるゝの譬への通り心に愛嬌さへ有ればいつかは自然と溫かい愛嬌が顏へ出るだらうと存じますから、客に接する場合は一切心を空洞にして、自己の總てを忘れて、客本位に自己を盲從させて居りませんと、自然愛嬌を缺く結



果になると存じます、人の性質にも依りますが、就中顏に愛嬌の乏しい人は、自己と言ふものを忘れて居りませんと、餘計に愛嬌が無くなりまして假令愛嬌に豐富な女でも、自己本位にして自分の氣の向くやうに客に接したならば自然愛嬌の殺がれる道理であらうと存じます、盲從すると言ふのも、極端の言で厶いますがこれにも程度が厶いまして、水稼業の浮薄な空世辭と同一視するものでは厶いません。具體的に申上れば、遠方へ行つて居る姉妹から、危篤だから直ぐに來いと言ふ通知が來る、心は忽ち憂慮にとらはれる、其處へ客が來る、客は何にも知らないから浮々して居るそれに引較べて自分の心は沈んでゐる自然愛嬌の有らう道理は無いでは厶いませんか、それを客が氣着いた時、客はどんな感念を抱くで厶いませうか。

快く來た客の機嫌までも共に沈めて了ふのは自分の淺慮を看板にして居るやうなもので厶います。乃ち恁う言ふ場合、心を空洞にして自己を忘るゝ素養が積んでありましたなら、假令盲從的愛嬌に致せ、客の心を沈めるやうな事は無くて濟むだらうと存じます。

兎角心に屈託が有れば、まじめ臭い顏をして居て、愛嬌の無くなるのは誰しも同じ事です、客に對した時即ち其屈託を忘れて居る盲從の——歸する處は「虛心」の素養であります。

○

店員が立働く後ろに、自分が帳場へ据つて居る時など十分注意致さねばなりませんのは、只一ッの挨拶で厶います。「今日は」「左樣なら」挨拶でもするとしないのは、客の心持が非常に違ふものです。私がある店へ買物に參りましても、應接する店員の世辭許り好くつて、張場に据つて居る肝腎の主人が、佛頂面で眼ばかり光らして居ては、何となく冷やかさを感じます、飜つて時候の挨拶一言でも聲を掛られた場合には、何とも知れぬ溫味を感じて、買物するにも至極氣心が宜しいもので厶います。

私が帳場に居る時は、客一人々々に努めて挨拶を實

行致して居りますが、僅かに愛嬌の一つである事を信じます。如何に顔に愛嬌の有る女でも、挨拶一つするでなかつたら、不愛憎な人だと思ふのは十人一様でムいまして前者を威の有る愛嬌とすれば、後者を愛嬌に險の含める人とも申しませう。

○

女も男も、三度の御飯を頂いて家に起居する限りは、それだけの勤務が無くてはなりません。亦何方も家相當の家族であらばそれ相當の用事の有るのは當然でムいます、ですから用事を失ふと言ふ理窟は無く、



為やうと思へば幾らでも用事の有ますのは、家の平常でムいますから、假に用事を失つたと致しますれば、それは自分の注意が足りないのでムいまして、有る用事を心着かないのでムいます、用事を失ふと題しては語弊が有りますけれども、用事を失ふの弊害は、抑々心の油斷から起ります事で、第一退屈と言ふ事を生みます、退屈には先づ欠伸居睡などが伴はれて居りまして、お臀の重くなるのも之が原因致して居ります而して之を他から見ますると、呆然して居るやうに見られ、無氣力にも無意識にも無感覺

にも見られるのでムいます。之等を品性問題に問はれましたならば甚麼でムいませう、それでも女子の人格を維持すると申されませうか、抑々女子の品性や人格は、綴術に高尚に優に美なるが、古來よりの理想に思はれます、實に心の油斷は、總てを打破致します、此弊害に作られた人間は、品性や人格問題の前には、其無資格なる事を一見して慥に證明致されます、女子としては、寔に羞づ可き事で有りまして、併せて折角受けたる今日の敎育を零にして了ふ譯でムいます、換言せば責任を知らぬ女と申ませうか、能く見受けますが、否自分なぞも經驗して居りますが、女がぺたり据つてお臀を重く構へて居りますのは、隨分見憎うムいます然も〳〵疲れましたと言ふやうに、既に心の緩みを看板に致して居るのでムいます、氣の張つて居る時には決して疲勞などが出るものではムいません、氣が緩めばこそ疲勞が出ますするもので、氣が張つてさへ居りますれば、油斷が有りませんから人が見ましても何となくてきぱき致して居るやうに見られます、さう見られますのは第一自分の利益でムいます、而已ならず健康と言ふ問題の上から見ましても、誰か其否なるを唱へませう、緩みなく日課を終へて就褥した時に、何程の快感を覺えるかと言ふ事は、退屈して遊んで居る人には迚も味ひ得られません、隨つて熟睡致します、熟睡は既に健全なる體を證明して餘りあるものでムいます思へば自分の體を健全に鍊へ得るも得ないも、實に心一つでムいまして、一擧兩得所か、心一つの爲には十得も尙易々たるものでムいます、例を引けば、市の大掃除の時、之を他から見まして人の眼に、誰が無氣力の生存者が揃つて居ると見ませう、皆生々として不景氣なんぞは那邊に居るかと言ふやうに見受られるのではムいませんか、

之を見ましても、彼の大掃除をするやうに、天井から床下、戸棚の隅から押入の隅々までも、有とあらゆる處へ手を屆かすやうに、綴術に用意する素養を怠らずに居りましたならば、人は何程に仰敬欣慕致しませうか、即ち責任を知れる女子の德行の最も大なる處と存じます、斯くて良妻とも爲り、賢母とも爲るの資格が自爲具備するのであらうと存じます。(終り)

スウヰートホーム

みさご鳥

秋！ 秋！
歩いても歌うても、詩の強き悲哀を味うべき時は來ましたけれども……あゝすが〳〵しい夕べの風！ それは病む子にはもう恐ろしい魔である、敵である。

松原の中の第△病室、長い廊下を白衣の人がゆきゝして居ます。

純白のベッドの上に横はつて、白壁にうつる自分の影を見ると寂しさにつひ涙が出ます。本院に居る時はそれほどでもなかつたけれど、此處の病室は靜かすぎて弱い私には堪へられません。

すぐそばにテーブルが置いてある。昨日第二病室のAさんにいたゞいたシンシヤーも、看護婦の松崎さんが花瓶にさして卓の上に置いてくれた。

清純なる花、香氣ある花、寂しき花。シンシヤーは可愛い花だと思ふ。



新刊の雜誌がやう〳〵とゞいた。新婦人に郷土男爵のお孃さんが出てゐる。そばに居た松崎さんに見せると、品の好い姫様！と云つた。去年青山のお邸で逢つたのを思ひ出してたまらなくなつかしかつた。戀しかつた。

ほかのは見ずに私はすぐ女學世界を開いて見た。

夢二さんの畫がこの頃變つた樣に思ふ。旅の卷、花の卷がなつかしい。

私はもう一度眼の人の時代のを書いていたゞきたい。眼の人！ あゝ眼の人……？

疲れきつてゐる私は本をよむのもいやになつた。讀むそばからすぐに忘れる。忘れては又よみつ返す。今度の女學世界をよむのが私には決してたやすい事ではなかつた。

内藤さんのが出て居る。我は貧を厭はすさは云へど……。現代の人よりをよんでこれを見ると妙な感がした。初めは内藤さんと氣づかずによんだ位です。

けれどもどうしたつて筆のつかひ方が違ひない、あの方に：：篤様は伊藤となつて居るけれど、光村の奥様とはよくお作に出た竹田夫人、△△△△出たセラニアムの松岡法學士夫人である。

現代の人より。

都會を去つて鵠沼へ歸つた千代子さんが、古なじみの机で書かれたものであろ。

千代子さん、私はいく度くり返してよんだか……同じ頁を同じ文字を……。

かつてはあの樣な子であつたけれども、今は、今はもう……何も申しますまい。

松平鏡子さんのお作がよく出てゐるが、どんなのかはまだわからない。私は作を見ても作者を知らないと物足らぬ氣が起る。

私は女學世界寄稿家の大低は想像がついて居る。

内藤さんには逢つた、綾様もお寫眞で拜見した、玉露さんや、野菊さん、百合香さんも。どういふ方位はわかつて居る



けれども鏡子さんはまだどうしてもわからない。女學世界の注意人物だ！

去年の夏、行幸が濱の長汀をさまようて心行くまで語り合つた、あゝあの宵の事が思ひ出される。

寂しい南湖院を出て、私は早く足柄病院へ歸りたいと思ふ。

内藤さんのお作が集つて「スウヰートホーム」として博文館から出版された。

健筆縦横有為男兒も爲めに顔色なからんと廣告にしてある。

女の一人は云つた。

『内藤さんのスウヰートホームが出てね、けれどあゝ云ふ事をするにはまだ早すぎはしないでせうか』

第二の聲、

『さうですね、私もあれはあんまり早すぎた樣に思ひますよ。天女降臨も、松風も、燃ゆる想ひ、もみんな雜誌に出たのだけ集めたのね、それでスウヰートホームや新年のマダムは？』

三の聲、

『あれは私も少したつてから出すのだと思ひますよ、少女の戀なんかと一緒ではをかしいから。アダム振りは又あとから……』

四の聲、

『新らしいお作は一つもないやうですね、でもお求めになる方があるんでせうか』

五の聲、

『ありますとも〳〵。あの方の甘つたるいお作に夢中になつてる袴の君たちや、いゝえそれよりもスクエーヤーだのラインの人だの……ね、屹度大もてゞすよ、そして金文字の本となんで内藤千代子女史著なんてホヽヽヽまあ大變ですはねだ……』

六の聲、

『それでも近頃はそんなに大さわぎする人もないぢやありませんか』

次の聲、

『あんなに文が月並になつて了つてはねえ……私も初めは夢中になつてよみましたけれど年中同じ事ばつかり……私は潮風さんとか晶子さんとか、野菊さんのも大好き……』

私は默つてきいて居た。話し合つてゐるその一群は東京○



○女學校の生徒、と袴の筋でわかつたのである。

手輕支那料理

◎姜絲肉

豚の肉を薄くそぎ絲のやうに長く切り、豚百匁なれば飲蓮花二つほどの油にてよくいため、纎ぎり生姜を矢張長めに切りたる葱とをまぜ、醬油にて味をつける。

◎清油丸子

豚の肉(脂肉のつかぬ所)をたゝき、微塵生姜と同樣の葱をまぜ丸めて、スープの中に入れ、(濃き煮汁を代用するもよし)、半時間ほど煮、上に浮くかすをよく掬ひ、鹽と醬油にて鹽梅し、刻みたる靑味をそへ、胡椒をふりかけて用ゐる。これは汁物であります。

◎水餃子

肉饅頭の中で最も手數のかゝらぬ、しかも最も日本人の口に合ふものであります。まづ豚の脂のない肉をたゝき、みじん生姜と同樣の葱をまぜ、醬油を少し加へ、メリケン粉を熱湯で捏ね、適當にちぎつて一つ〳〵薄くのし、前の肉を中に入れて編笠なり何なり好みの形につくり、沸湯で二十分ほどうで醬油をかけて用ゐます。



ゴム輪車

夕かげ草

秋空ほがらかに、菊の香高き日、磯子さんの知友——およそ一面識あると云ふ程の人の悉く——の家々に美しいレターが、鶴のやうに舞込みました。印刷した花文字の、インクの香もなつかしいフレンチの詞の綾

「アラ小高さんが御結婚なさるつて。」

「随分振つた御披露ねへ。」

とは、御歌所録事某の大人の歌の席でも、盆畫に茶の湯の教授をかねた子爵夫人の釜日にも、投入花の宗匠ピアニストの某孃、佛語教師のミスルースの稽古日にも、さては都下の慈善會衛生會の月並會にも、私語き交された語でした。

純洋式の婚禮を見物の氣で行かうと云ふ好奇も有つたが、當日の客人は、招待狀の數の十分の一にも滿たなかつた。しかし之を以て磯子さんの人望を兎角云ふのは早計です。一つは都と一寸離れた、横濱といふのを億劫にした足無しさんの多かつた事。それから、まあ皆様假に晴の場所へ招かれたと思召せ。第一にお互樣女の胸に浮んで來るのは何でしよう。曰く身なり。殊に派手を盡した集會であり。集る人も格別華やかで有らうと想像した時。去年染めた振袖の桔梗紫が、今年はもう廢つてしまつたり。度々締めた帶で有つたり。指輪のダイアが人中で輝くには餘りに小さかつたりして御覽なさい。出る氣も何も仕やしません。だから女は虚榮の塊だつて。まあ〳〵お聞きなさい。そんな事でためらつた人も少くは無かつたでしやう。

濱の○○教會と云へば、市中にも目に付く建築。男女の唱歌隊の一むれの讃美の聲と、御堂を飾る紅白の薔薇の香に、會集は先づ醉ひ心地になりました。と、廊下に通ふ左右の扉がすうと開いて、しづ〳〵と歩み出

でた新郎新婦。女たちは争つて磯子さんに目を向けました。些の穢無き雪白の婚衣の裾長う、薔薇と橙子花を編んで作つた花冠。女の物恥をした形は好いものねへ、さ程立まさつた御容色では無いが、今日は別人の様に見勝りがしました。扮花婿様は。

　請負師と聞けば、赤銅色の皮膚あらはな、土方の親分と思込んだ人は、少なからずまご付いた事でしょう秀でた眉に清い瞳。漆黒の髭あざやかな美丈夫。燕尾服の着こなしに五分の隙なく、磯子さんと並べては。

「過ぎ者」と心に叫んだのは私ばかりでは無かつたに違ひ有ません。

　夫から山の手の自宅で御披露の宴。見上げる白堊の三層樓は、之が東京なら、高貴のお館かと、私ども田舍者は尊く仰いで通るでしょう。此家の女王と成つて仕ふべき舅姑を頂かず、巨萬の富を左右される磯子さんの幸福は、羨んでも餘りある譯ではありませんが、京橋區内の長者鑑に載せられる身上でも、萬事質素な質屋の娘さん。お烟草盆に赤い鹿子掛けて、襟の掛つた着物着た頃のお磯ちやんを知つてる人達は、鷄の鳥屋から家鴨が飛出した程に喫驚したと聞きました。夫は幼馴染の云ふ事。昨今のお友達は然るべき家柄の令嬢と信じて、一人疑ふ人も有ません。

まあ御覽なさい。豐かな髮をふつくりと結び上げたルイザ卷。時の好みに後れぬ程の召物三日と同じ事無く。自用俥のゴム輪に輕く塵を立てゝ、築地のミスルースの許に通ふ姿を、誰が黒光りする帳場格子の質屋さんに連想しましよう。ルース孃と云へば、此の緣結ぶの神はあの人。新たに愛妻を失つた菰田さんは鰥夫住居の不自由さに、再び内助を求めると云つて、先づ目を付けたのは、名門の夫人令嬢の集ふ此スクールでした花の花なる媛たちの中に、さる伯爵家の名花一輪。是非にと所望したが許されません。何故つて菰田家の家系は至極味暖でした、夫から學歴も無かつた、腕一本脛一本で飛出した米大陸で、十餘年間の風雨に磨き上げた男前とは云ひ乍ら、日本の貴族は末だ〳〵此様な

婿君を選ぶ程の大膽を、生憎と持合せませんでした。落膽顔の菰田さんを見ては流石に浮世に遠い老孃のルースさんも、惻隱の情に動かされ自ら磯子さんを說いて婚約させました。但し密かに、極密かに或條件が付きました。曰く持參金。磯子さんの虛榮心は、高熱の絶頂に達しました。波風多い請負師の身の上とは云へ廿萬の富の主人公。出づるに馬車あり。



入るに美衣美食の有りて餘れるあり。立志傳中にも記さるべき意志の人、腕の人、しかも人品卑しからぬ此人の妻と呼るゝ身の光榮よと今迄も折々有つた緣談のあれも之も、望みを滿たすに足り無かつた幸福を悦びました。

扱世話女房の磯子さんは、朝毎事務所へ通ふ良人を玄關に見送ります。上靴の足どり輕く天使とオリーブを調刻した圓柱に片手を掛けて、入口の階段をするすると登り降りする

姿は、新演劇を見る様。美しく装飾された書斎のデスクに向つて、フレンチのお復習をして見たり、お講義を聞いた事のある物語を引張出して見る。ミシンの箱を開いて何も無い物を一寸縫つて見る。稀にはお臺所も覗いて見ます。ストーブの傍へ籐椅子据ゑさして、雪のエフロンの膝の上に繰ひろげる料理案内、お献立の世話なんぞ燒いて、數々作らしたお料理も、只獨淋しく肉刺を取り上ます。良人の歸りは定まつて十二時過、夫も歸つたり歸ら無かつたり。磯子さんはさ程頓着しませんでした。大時代に解釋して、何男の働きですもの――。



然し嫁入つて五ケ月。櫻も咲かうと云ふ三月八官町の質店の暖簾を潜つて出入る磯子さんを、再び見る樣になりました。其事については笑つて何も答へませんが、舊姓を名のつて小高磯子。もとの通り自用俥は、諸方の門を出つ入つして居ます。

菰田さんですか。さあ其後どうしましたか。濱の住居は貸家になつて行衛知れず、夜逃とも云ひます。もともと片時離さ無いあの手提一つが手品の種。山師だ詐僞師だと跡では人の批評まち〳〵。まあ〳〵其邊だと思召せ。

（特別懸賞文第三等）



女教師の性格

鈴の花

文よまで何につれ〲なぐさまむ
　　春さめのころ秋のなが夜を

とかいふ歌がございますね。この歌を一かど會得した積りで、日頃は、一瞥さへも與へない樟腦臭い源氏など、わざ〲本箱の底からとり出して、讀みはじめは始めましたが、こんな頭へ何うして入りませう……何しろ、頭の最中が、ズシン〲と、時を定めて細い長い錐でゞも、つゝかれるやうに、震動する、其の度毎に、お腹のどん底までひゞき渡るのですもの……。（響くつていへば、なにか四隣の寂寞を破つて、嚠喨たる笛の音でもひゞく樣ですけれど）そんなことなら矢張り、松蟲の聲を聞きながら、ふかしたお薩摩芋でも齧る方が可いつて仰るの？。が、そりやあお生憎樣私皆さんのやうに南瓜や、お芋はすきませんの……といつて、家の者がまだ、みんな起きてるのに、私一人お先へ御免とやすむのも可笑しいし、詮方なしの退屈まぎらし——つて云ふと失禮ですがまア、そんなものですわね——に、私の學校の先生を、一寸御紹介致しませう。

○山内先生

この先生のお髭の立派なこと〲、實際天下一品と申しても、差支へはございません。そして、いつも此の美髯を捻り乍ら、敎壇にお立ち遊ばして、教育學のお講義をなさいます。隨分六ケ敷ことを澤山お敎へ下さいますが、それが妙によく頭へ入るので見ると、矢張り敎授法に長じて被入るとでも申すのでせうね。御出身は、たしか東京の高師、昨年の四月にいらつしやつたのですが、此の先生が御來任以來、今まで眠つて

ゐたやうな學校は、すつかり面目を新めて、閉鎖せられて居た圖書室には、新刊の書籍が續々と購求せられる、運動用具なども澤山出來る、從つて、盛に運動し從來の樣に、只おとなしく、お行儀よく髪を亂さぬやうにと、いつた風の陰氣臭い御令孃は、殆どなくなり皆體格も姿勢も、よくなりました。去年の體格檢査には、私の級だけにでも弱が四人もあつたのが、今年は二人になつてしまひました。これは、ほんの一例に過ぎませんが、其の外數へあげたら、まだ幾程あるかわかりません。

まあ、兎に角、此樣な鋭い腕のおあんなさる方ですの、無論敬頭。ですから、流石の校長も、この先生には一目おいて被入います。さうですねえ、お年は三十七八……でせう、お振ひ遊ばす最中ですわ。先頃花の樣な奥樣をおむかへなさいました。「山内先生は、奥樣がいらしてから、お歸宅が早くなつたのねえ―」とは誰やらのかげ口。

〇上野先生

此學校が創まつた當時から、ずつと今まで十餘年間お務になつて居らつしやる先生で御座いますの、家政學がお受持でも何でも委しく御說明下さいますのは、結構に存じてゐますが、なににつけても、直ぐ御自分のお話を遊ばし、生徒が愼んで聞いてれば、いゝ氣になつて御自慢のかず／＼……。で、こんな時には、皆、苦りきつて、七面鳥が煙草を、喫んだやうな顏見合せて居りますのですよ。そしてね、割烹の時など、よくドロ／＼で保存しかねる樣なジャムを、おこしらへなすつたり、フライをするつて、油を煮立たゝせておいて、御自分が通りがけに、フライパンの柄をおさはりあそばし、これを轉覆しておき乍ら、みんなが見てばかりゐてしないのが惡いの、この鍋が安物だからいけないのつて、罪もない鍋にまで、さんざあたり散して、揚句の果には、「今日は、最うこれでやめますから、あとは皆さんの勝手になさい。」つてズン／＼寄宿舍へお歸り遊ばしたり……。これには眞實に大恐縮、可憐想に、こんな日には寄宿舍の舍生、犬が戯れ

るのが可笑しいつて笑つても、御逆鱗にふれるのですつて！。私なんかまあ通學で大幸福。何しろ、十何年前の師範卒業生つて云ふのですから、其の頃は大したものだつたのでせうよ。それですから、未だにその時分のお氣風がぬけない上、先天的高慢にお出來になつてゐらしつて、高師出だつて何だつて、まるで、眼中人なしといふ有樣なのですから堪りませんわね！。お年は四十路あまり、いえ、オールドミスぢやありません。女のお子さんが三人もおあり遊ばします。亡夫の君は、さる中學の



校長だつたとか、郡長だつたとか、或は、骨董屋の御亭主だとか――まさかねえ、――とりどり噂がありますが、何れが眞實やら、私のやうなアンポンタン式に生てる者には、判斷がつきかねます龜の甲より年の劫つて云ひますがその通り、この先生も、年の劫で以て、職員間では大した勢力を占めて被入います。

○加藤先生

逆螢といふニックネームの所有主で御座いますの、何故つて？　ホヽヽヽ、申しませうか…。螢はお尻が光るでせう？けれどこの先生のは頭の方が光りますの。此

尊稱を奉つたのは、同級生さつての口惡屋のA様、倫理と漢文との先生です。御前身がお僧侶さまとは、一寸振つてゐますのね、道理で倫理の時などよく三界だの、十戒だのつて、私達にはさう難有もない、お經めいたお講義をなさいます。いつでも、黒繻子の大風呂敷に、たつた一册の敎科書をお包みあそばして、それを、後生大事に敎室へ御持參になり、生徒の禮がすむとすぐに、ありがたさうに此のお包を押し頂いて、それから、鹿爪らしく風呂敷の一隅づゝをもつて、ピンピンと四方へはねて、お開きなさいます。其の時のスタイルの可笑しさ、眞に天下一品珍無類で、ございますよ。けれど私達、可笑しいことはをかしいですがまあ、其處までは、一切無關係ですからよろしいが、さア、それからが大變!! 外史を習つた時なんか、一時間に、外史氏曰くから、突進することと無慮三十頁、その速度の猛烈さ! 一瀉千里‥‥處ぢやない萬里、億里‥‥。

その長い間を、息もつかず幾程むづかしい語があらうが、字があらうが、お關ひなく所謂お經流におよみ下されます。其の上、先生つたら、私について讀めと仰いますの、誰がついてよめるものですかねえ!!! それや、はじめの一頁や二頁は讀めませうが、こんなに澤山をついて行かうと思へば、一時間五十哩位のスピードの汽車でゝも、行かなきやあ、おつゝきませんわ、こんな有様にして、十頁も進んだ頃には、よむ人は誰もなく、皆俯いて眼には玉のやうな露さへ宿して居つしやいます。この涙?、重盛の孝心に感じてゞもこぼしたのなら、少しは氣が利いてゐますが、生欠伸かみしめた結果なんて恐縮しますわね。先生はと見れば、蠅が禿辷り競爭してるのにも御頓着なく、ポッポッと湯氣をたてゝ、一所懸命に讀んで被入いますですから、この時間には、ボートレースでメタルを得度いと思ふ方は、盛にお稽古遊ばし、惡戯大將軍の命を拜せんと欲する人は、紙切に大きく「我は絶世の美人なり、若し手に入れんと思はゞ、大枚一錢五厘と大佛の首とを持參すべし。」など書いて、前のボート熱にあ

てられて被入る方の後れ毛などに結びつけて、興がつていらつしやいますの、眞實に可笑しいんですよ。この先生、別に特徴はおあんなさいまんが、只、始まれば直ぐに授業をはじめ、退ければすぐに出して下さいます。此麽に職務に忠實な先生ですから、校長先生の御信用は、厚くなければならない筈で御座いますが、何ういふものか、そんなにないのですよ、お氣毒ですわネエ。

試驗は隨分厳しい方です。漢文など、文字の一點一畫でも違はふものなら、直ぐ×これですわ、でも、其の割合に點は緩く、勿論公平無視。



◯荻野先生

高師文科卒業の女先生で御座います。御名は優子樣と仰いまして、お名の通り眞實におやさしい方誰だつて、一度先生とお呼び申した者は忘れやうたつて忘れられないのも當然、お顏の色は其樣白いといふ事はありませんが、新月の眉、きりつと締つたお口元殊に〳〵あの暖味を含んだ御眼の美しさ!!! いつもニコ〳〵遊ばして、一度だつて怒つたり、叱つたりはなさいませんが、何處

かに犯し難い威嚴をそなへて居つしやいます。お受持は、文學史と國文、よく分つて而も早く進むので、いつでも時間に餘裕があります。で、國文の時間なんかには、よく學校裏の山へ遊びに連れて行つて頂き、其處でハイネや、テニソンの詩集などを、讀んで頂きますの。

そして、作文の宿題をお出しになる時でも、決して他の先生の樣に、いつ迄に屹度して來いなんか仰つたことは御座いません。唯、出來たら出して下さい、とおつしやるばかり、でも却て皆が揃つてよく出すのは不思議なやうですわね！。まだ、お若いので御座いますが、何でもこの通りですから、校長の御信用のあついことは、女先生中第一位です。

○松田先生

お髯のあはれな、お鼻の孔が人並勝れて大きな見るから滑稽らしい先生です。そして此の鼻孔を、何う廻轉遊ばすのか、時々大風でも吹く樣な音をお立てなさいます。珠算がお得意でお持ち遊ばしますが、又、簿記の方にも妙を得て居しつて、處もあらうに、圖書室の隅などへ來て、例の通りお鼻をゴウ〳〵と、いはせ乍らなすつて被入ることもございます。彼のA樣つたら、何かの本をよみながら大きな聲で、「一つとや〳〵しほ凉しい新式のウ〳〵廿世紀の旋風器イ〳〵。」なんて仰るの‥‥ですから、以後は、みんな松田先生の事を旋風器つて申しますのですよ、ホヽヽヽ。珠算の時間は、いつでも肝腎のお稽古はそつち除け、やれオールドミスが何うの、孤獨つたらかうのつて、笑はないぢや居られないやうなことばかり。で、學期末になると大騷動、一學期中に習ふ事を、心の落つかない試驗前の三日か四日に皆詰め込まれるのですもの、一人だつて滿足に覺える方はありやあしませんわ。けれど試驗の問題は、極易いのしかお出し遊ばしませんから、皆大安心して相變らず、この時間は、遊歩時間のやうに心得て、惡戲許りしてゐます。


モデル

山本藏相夫人の面影

濱の眞砂

昨夜の雨が名殘なく霽れて、氷屋のビラ戀しく思はるる日の午前、上二番町に山本藏相の夫人を訪づれました。

お邸の近くには公卿華族の宅が多い。衣冠の昔は知らず今も尙ほ、公卿と云へばそゞろに美男の樣を思はせる。公卿ならずとも風雅心は祖先の讓り物、邸を一目見てどんな美男の住居かと、田舍漢の小首を傾けしむるも無理ならじ。

夫人のお邸は黑板塀に圍まれた、瀟洒なる平屋建の一構、正面の植込に風雅な趣を見せて、丸い小砂利を踏んで人れば、眞直に玄關の式臺。

ベルを押して待つ間ほどなく、十七八の小奇麗な小間使が、つつましやかに手を支いて『御用は…』と口籠り勝。

『奥樣お在宅でしたら一寸お目にかかりたうございます。』

と刺を通ずれ『どうぞ。』と腰を低めて先にたつ。ついて進めば廊下を曲つて、庭に面した十疊の一間、ここが夫人の應接室と見える。うす水色の絽の座蒲團が客待ち顏に、床に墨繪の軸がかゝり、金を鏤めた一振の脇差が、違い棚の下に昔その儘の光を放つてゐる靑簾を越して廣やかな庭園の紫影が迫り、雨のやうな滋き蟬の聲が聞える。

『ようこそ。』と夫人のすらりとしたお姿があらはれたお年は四十二三と承つたが、細面の痩せぎすな、氣品のある澁いお顏。

明快な口調で、

『種々なお方からお談話をと攻められますが、私のやうなものにはとても碌なお話は出來ません。經驗と申しましても、私などは割合順境に人となりまして、變化のない月日を送つて來たものですから、殆どお話しするやうな材料がないのですよ。』

と、水の流れるやうに氣持のいゝお話ぶり。

「承りますれば召使の選擇に非常に意を用ひていらつしやいます相で。」

と言ふと、夫人は考へ深い眼付をしてじつと聞いていらしつたが、

「選擇といふ程でもありませんが、成る可く容姿の整つた、氣質のやさしい、女らしい女を抱へたいと思つてゐます。召使といふものは、いはゞ家内も同樣ですから、さう易々と雇ひ入れる譯には參りません。殊に來客に對しても不快な感を與へるやうなことがあつてはなりませんから、顏立もさう醜いものを置かない意です。」

と心持につこりして、庭の面に眼を注ぎながら輕快に、

「學問の程度はとおつしやるんですか。さうですね、私の考では先づ高等小學を卒業した位の娘で、年のころなら十六七、一通り讀み書きができて裁縫の心得さへあつたらそれで澤山だと思ひます。女學校出の娘はどうかすると生意氣になりたがつて、使ふのにもなかく骨が折れます。

それに氣質が肝腎で、そそつかし家は嫌です。顏並が一通揃つてゐて、おとなしく、つゝましやかな日本風の娘であれば申分はありません……。世間では種々に申してゐるさうですが、私の宅では召使に絹物を着せたりなぞは致しません。たゞ來客に不快を覺えさせない程度で、小瀟洒した態をさして置く丈です。」

と之れでしばらく話が斷れた。お髮は束髮に結ばれ右の指にゴールドの指環が輝き、葉擦の音が涼しく聞えて室に溢るる微風がほつれ毛を輕く搖る。夫人は兩手を膝に置いてまた新しい言葉を織がれた。

夫人の女中道樂は有名なもので、出入の桂庵は常に頭を痛めると聞くが、その代り一度奉公にあがつたものは娘のやうに愛しがられる。四季のお仕着、髮飾何から何まで注意深く、いづれもその恩愛に感せぬものはないと云ふ。婦人の結婚期に就ての御話を伺ふと、

「さうですね。すくなくとも二十三四歲、學校を卒業して二三年は修養さして頂きたいものだと思ひます。わ

が國には昔から惡い習慣がありまして、十八九歳になればもうお嫁さんに行くべきものとしてありますから二十二三になつて未だ嫁がないでゐると、種々難癖をつけたがるやうでございますが。十九歳と申しますと滿十七歳何ヶ月といふ未だホンの子供で、生理的に云つても害こそあれ、決して貴むべき習慣ではなからうと思ひます。

ですから私の考では、まづ婦人の歳勘定からして嚴重にやつて貰ひたいのです。商人のやうに歳にまで掛値を云ふ必要はありますまい。それさへ嚴重になつて參りましたら、おひ／＼早婚の弊も取除かることと存じます。』

と熱心に早婚の弊を說かれた。

開放された座敷から、庭の樣が一目に見え、田舍へ行つたやうに閑寂の氣が滿ちてゐる。古い楓の下の車井戸、楓はまだ色づかず、綠の葉蔭深きところ、蟬の啼く音いと靜に、暑い日光が小砂利の上を辷る。

お庭は至つて廣い。そして一面に樹木が茂つて、如何にも清々しく、活々した感がする。樹は楓が大部分を占め、野趣橫溢、何處をついても詩材の一つや二つ位は、轉つて出さうに思はれる。

お暇をして玄關に出ると、夫人は手を拍つて小間使をお呼びになつた。と駈足で以前とは違つた召使が、

『召しまして。』とつゝましく腰を折る。

年の頃二十歳、うつすらとした化粧、着物の好も粹で品がある。肉附の豊な締のある顏付で、樣子が如何にも柔順しい。

記者と入違に馬車が一輛、小砂利を軋らせて、しづ／＼と入つて來た。中には葉卷を口にした新大臣の溫和な顏が見えた。



欣々女子と輕井澤

蝶々

日が暮れて家々に灯が匂ふ 或日の午後七時すぎ、淡路町に江木博士の夫人を訪れた。

門を入ると、とつつきが大きな玄關で、古しを偲ばせる武具が右左に置かれてある。取次の書生さんに 來意を通ずるとどうぞと 導かれて 左に、廊下に沿つた一間へ案内された

「よく入らつしやいました。妾が榮子です。」と夫人はやをら椅子を離れて、しとやかな挨拶振り、緑の お髮には眞珠が輝き、眞白いみ手にはプールドの腕飾 が 光る。すらりとしたお姿、繪を見るやうに美しく氣品が高い。山百合! 山に咲く百合は淸い。崇高な香がある。欣々女史は都に咲いた山百合である。秋海棠の如くなよやかでもなければ、青柳の嫋々たるにも過らない。淸淨なるリリーのパアフーム。都に移されたる山百合の芳香、その香は女史に接したる人々の悉く感受するところであらう。

奬めらるゝ儘に椅子につく。外に髯の來客が二人、卓を繞つて輕い爽な氣が滿ち溢れてゐる。右の壁に 沿つて籐椅子が一臺、窓のカーテンが絞られて涼しい夜氣が流れ込む。明るい電燈の光を限なく浴びて 婦人は終始笑を湛へながら、腐邇なく話される。その應接振の巧さ、始めて逢つた 私すら、舊馴染にでもめぐり逢つたやうで、すこしも 氣が置けない。行々子の喧騷に較べて鶯の啼音には一種の品があり味がある



輕井澤の方に行つていらしつた相ですがあちらは 涼しくつて結 構でしやうといふと、夫人は、

『涼しいですとも。全く氣に入つてしまひました。今も お話したところですが、ご覽なさい、この草れ』

と 卓上に置かれた數莖の草を手にとつて 指先で弄りながら

「あちらの山へ參りますと、この花が、草 深いところにポツ〳〵と匂つてゐます。他ではあまり見受けないやうに 思ひましたから、物奇に斯うして持つて歸つたのですが、全く珍らしいでしやう。さう千年草とか 申しまして、輕井澤名產の一つですよ』

と涼しき昨の山氷に 思を馳せられる。草は丈一尺あまり、一莖に十乃至二十の白い可愛らしい花がまぶれついてゐる。手に取つて嗅ぐと得ならぬ 香が胸の底まで滲み込むやう。

客の一人は

『ヒマラヤ山の頂に咲く花も、丁度こんなやうな 種類の花でしたよ。名前は?…はア〳〵千年草。』と頻にその もの 懷しい匂を吸ふ。

『原名を何とか申しました。さう〳〵エパラスチング、ピー
エパラスチング、ピー。』

と爽な音。

おゝエパラスチング、ピー。何といふ優しい名であらう。私はその花を愛すると同じ意味で、女史の趣味生活を稱へやうと思ふ。

ベルを押して、書生を呼び、

『何か冷っこいものを。』

と命じて、夫人は團扇を動かしながら、野趣深き輕井澤の夏を、例の輕い、涼しい口調でお話になる。電燈の光がその面を辷つて、指環のダイヤがチラと眼を射る。軈てビールが運ばれる。夫人はコップを二つ重れて、眼元をほんのり染めながら語を繼がれる。四脚の椅子から折々快い笑聲が起る。

壁間にはポエシスの額が懸つてゐる。後の小さな卓上には造花を挿した花筒が置いてある。煙草の煙が室内を這ふ。右の隅にデスクが一脚、その上に置時計と白い石膏の半身像！室に隣つて日本式の部屋が二間、いづれも應接室らしい。座蒲團の白いのが際立つて目につく。

女史の趣味眼に映じたる輕井澤の自然に——

『あちらへは七月の二十日に參りましたが、一ヶ月ばかりお



乳を病みまして、床に就いた儘外出もならず、然し八月の中旬には病も全快しましたので、朝から晩まで好きな馬に跨つて、山と云はず川と云はず渉り盡しました。その中で一番愉快に思ひましたのは、碓水峠を三度越えましたことで勿論馬でございますよ。

『輕井澤から一里半山奥に、小瀨といふ温泉場がありますまだ餘り人に知られてゐないやうですが、なか〳〵因緣のある温泉で、昔、鹿が傷手を受けて山中に迷ひ入つた時、この湯で傷口を温めたらすぐ治つたと云ふ、趣味のある傳說が殘つてゐます。實に寂しいところで、溪川の淙々の外、音らしい音すらもない、山中の幽寂境でございます。同地方はもう紅葉の見頃で、夕日に照り榮えた紅の色は、寂しい山村の秋を彩つて趣の深いものがあります。輕井澤から參るには三笠といふ山を越さればなりませんが、その邊の山一帶に約一尺位の松の苗木が所狹きまでに生え茂つて、水の滴るやうな綠の色が、如何にも氣持よく感ぜられます。

『輕井澤の女はすべて色の黒い方でございますそれからどんな關係ですか、あちらに長らくゐると顏に染が出ます。水の爲とも思はれませぬが、何しろ東京へ歸ると直ぐ治つて了ひますから不思議です。

風俗は質朴と云ひましやうか、とにかく外來者にとつて

は誠に住み心地のよいところで、殊に夏なんかは、暑さ知らずの別天地と申してもよいでしやう。妾は初め海が好きでしたが、今では海よりも山中の靜寂をまたなく喜ぶやうになりました。海の眺は廣くても變化に乏しい。自然に親むものにとつては、山中の方がどんなに趣が深いか判りません。

「野原を歩いてゐますと、彼所此所の草陰に昔の女郎の墓が淋しく殘つてゐます。追分、沓掛、輕井澤―と竝び稱せられた昔の三宿のあとも、今は名殘なく寂れ果てゝ、宿場女郎の嬌態も、もう見ることができません。たゞ昔の女郎屋の建物をその儘に旅館の看板を掲げてゐる家が、街道筋で折々目につくばかりでございます。

その女郎の墓も近頃は異人達によつて大部分取除かれて、今では多く見られませんが、長脇差の昔をしのぶものにとつては、名なき野末の墓石にも、またそれ相應の趣がありませう。

「それに、第一氣持のよいのは、警察の注意がよく行屆いてゐますことで、外來者にとりまして誠に都合よく出來てゐます。土着の人がすくない代りに、外國人の多いこと、その外國人も宣敎師が大分を占めてゐますから、勢ひ風俗とか氣風とかもよい方の感化を受けてゐるやうに思はれます。日曜などに街道へ出てご覽なさい異人さん達が澤山集つて種々な



遊戯をしてゐる、遊ぶにも學ぶにもこれ程都合のよいところは多くありますまい。妾は伊香保があんなに盛になつて行くのに、どうして輕井澤は世間の人々の口にのぼらないのかと寧ろ不思議に思つてゐます。全くいゝ所ですよ。すこし吹聽して下さいな』

時計が九時を指してゐる。

話はすべて斷片であるが、到るところに夫人の趣味性が窺はれる。汲んでも〱盡きないその趣味生活―私は沁々と女史の床しいお心根を羨しく思つた。

「さう〱別莊の繪がありますから、ご覽に入れましやう。」と夫人の示された絹本を開いて見ると、淡墨であつさりと別邸の様が描かれてある。棟數が四五他に小さい丘があり、流がある。そしてその一ツ一ツに趣を異にした名が附せられてゐる。

『どなたが御命名なすつたんです。』と伺うと、

「裏ですよ。下らないでしやう。」と夫人は席を離れて、にこやかな笑を湛へながら、畫面に眼を注いでいらつしやる。試にその名を記すと。

起雲洞。留歡橋。仙茅塢。
談笑室。可即軒。寫韻軒。
來星閣。吹笛臺。聽雨茅屋。

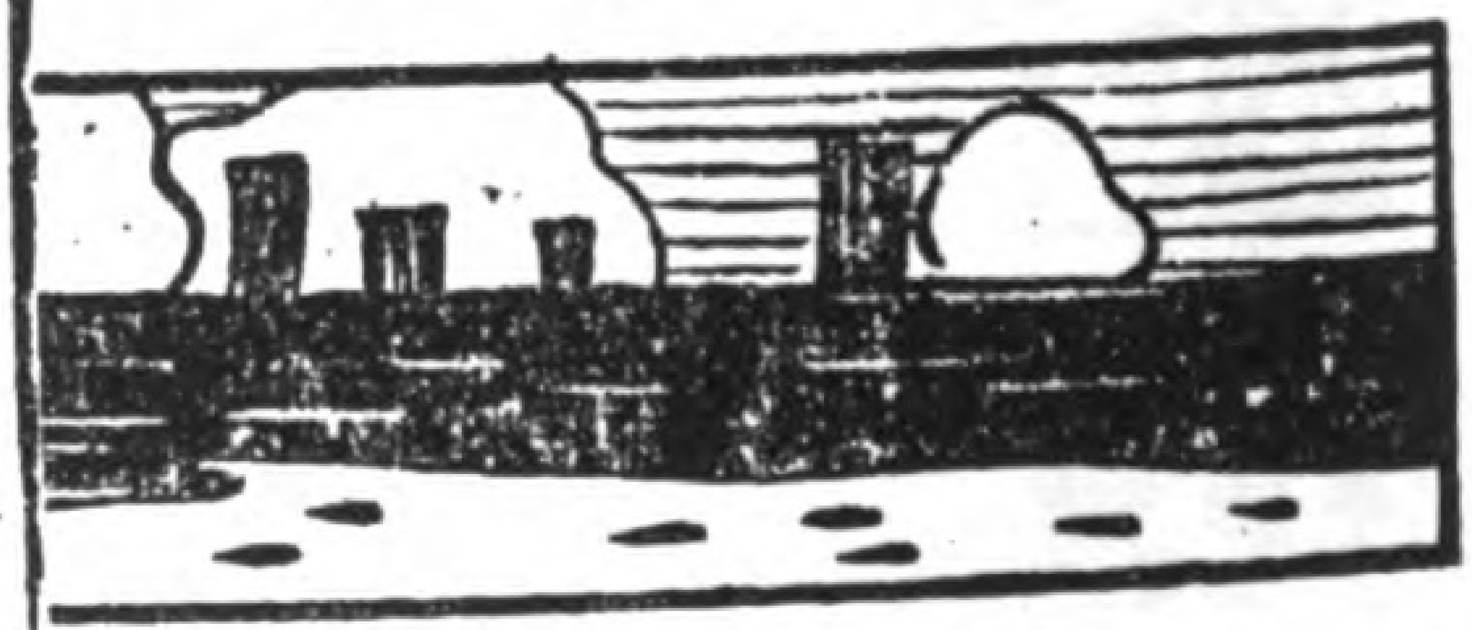


觀月臺。調鳥塔。寒塞泉。以上である。雅人の胸には盛り上げられたる一笊の土も觀月の臺となり、吹笛の臺となる。輕井澤の夏はどんなに風雅なものがあつたらう――私はかう思つて御夫婦の幸を心のなかで祈つた。

あまり遲くなつてはと。

「お忙しいなかばを、とんだお邪魔をいたしまして。』と起上ると、

『まアゆつくりしていらつしやい。折角お出下すつたのに、つまらない事ばかり申上げて、誠に失禮いたしました。』



と優しくおつしやつて、

『これを持つていらつしやい。』

と千年草の數莖を手づからとつて下すつた。

辭して外に出る。何となく裏町らしい感のする薄暗い淡路町の通を、浴衣の人のなかに交つて歩みながら、夫人のことを種々と考へた。私は今日までに逢つた御婦人のうちで、女史ほど深い印象と、夫人らしい柔な感を與へられた人に接しない。

おゝエパラスチンゲヒー。その香に相應ふかぐはしき夫人の才色、

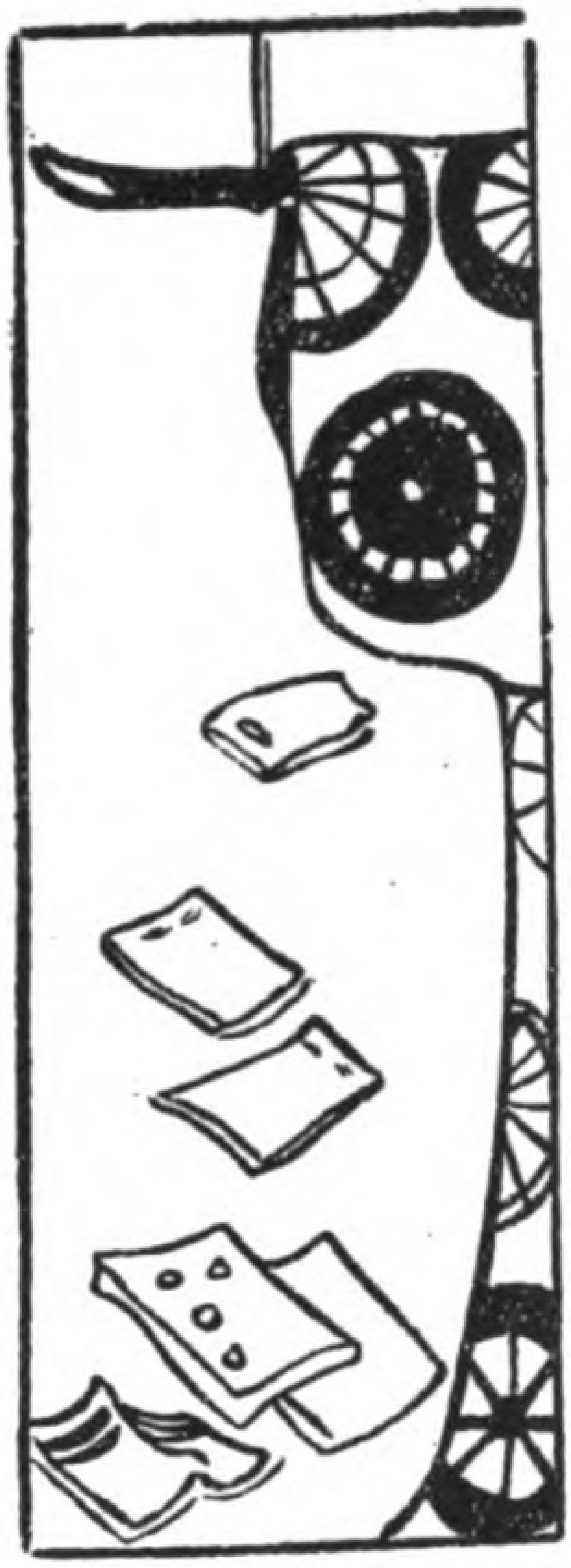
女子大學に於けるジョルダン博士

日本女子大學校にては、九月十七日、當時來遊中のジョルダン博士夫妻を招待し、成瀬校長、麻生學監を始め、同校顧問大隈伯、澁澤男等の案内にて校内を觀覽に供し、午後二時より又校友教育家等數十名を招き、同校生徒數百名と共に大講堂に於て博士の女子教育に關する意見を聽きたり。其の大要に曰く、

今より三百年前の歐羅巴は、宗教問題に付て戰爭が盛んに行はれたが、其後漸く其れが廢み、同時に平和の事業が發達し、科學的知識の進むに從ひ諸種の器械が益々進歩し、交通は自由になつて、今日の狀況は各國人とも相互に賴り合つて行かねば生活を營むことが出來なくなつて來た。日本も一時は門戸を閉ぢて、其間内に在つて靜かに繪畫、建築、風俗等に獨特の發達を遂げたこともあるが、今日はもう鎖國では立つて行かれない。例へば私が日本へ來てから方々へ招待されて其の宴會に用ゐてある器物などを見るに、或品は佛國で出來たもの、或品は英國、或品は伊太利で出來たものといふ様なわけで、日本のみの品では宴會一つ行ふにも不便である。

それと共に女子の境涯も大に異つて來て、昔は只だ家の事さへして居れば足りたものが、今は世間の事をも辨へなければならぬ様になつた。今日の生活は種々の問題を解決して行くことで、日々新しい問題が世間にも家庭内にも續々起つて來るが、豫め修養して自ら之を解決するだけの能力を備へて居らねばならぬ。中でも母としては子供の教育は特に重大なる問題である。又男子が世に立つて事業を爲すに當り、最上の助けをなすものは妻であるが、其の妻に教育のあるとないとは男子の事業の上に大なる相違がある。即ち婦人は十分教育を受けて、母親としては賢母、妻としては良妻たる事の必要あるは申すまでもないことである。

婦人は良妻賢母たることを要するのみならず、社會に於ても亦賢良なる婦人の力を要することが少なくはない。衞生の普及と教育の完全を計るには何うしても婦人の力に依らねばならぬ。就中矯風事業の發達を計り、禁酒を奬勵するには、婦人の力が最も必要である。又今日人種改良といふ事が盛んに歐米に於て研究されてゐるが、此の問題に就ても、婦人も興味を以て研究する必要があらうと思ふ。尙ほ大切な事として婦人に希ふ處は、戰爭を婦人の力を以て廢めるやうにしたいといふ事である。戰爭には避くべからざる必要戰もあらう、又義戰なるものもあらうが、其の何れにしても、其の結果は良人を亡ひ、愛兒を亡はせて、婦人を孤獨の悲慘に陷らしめ、國を貧くし、人心を腐敗せしむるものである。此の怖るべき戰爭を廢滅せしむるに就ては大に婦人の助力を要するのである云々。



猛き妻

松下壽子

子供「お母あー學校の先生がな、自分で拾うた物でも默つて持て居つてはいけないといつたよ、うそやな、盗んだのやないのだもの、拾うたんやものなあ。」

母「拾うたものを一々人にいふ奴があるかい」

此樣な境遇で此母に育てられた子が、成長して人格の何のつていつた所で始まりませんが、まだ〳〵恕すべき點はあるだらうと思ひます。ある高等教育を受けて、公然人の師表となりつゝある人や、富と位を身にまとひ、上流中流の紳士貴婦人と稱へられる人々の、何事もよく承知しながらに、一時の情を制する能はず得々として道德的犯罪を冒しつゝあるに至つては、誠に惡むべく卑むべきの限りかと思ひます。而もてらさぬ隈なき太陽も物の影迄行渡らぬと同樣に、家庭の秘事、まして閨門の紊亂はよほど烈しうならねば、世に知れませんから、巧みに表面をごまかし、世をあざむきます時は、あの方こそ立派な申分のない人格と敬ひ尊ばれ、假面をかぶつて世を終る運のいゝ人さへもないでは御座いませぬ。併し其所謂立派な人の内で眞の立派な人は果して幾人御座いませうか。私は妙齡の一少女でありますから、まだ〳〵世の事情には通じませんけれど、大切な一人の姉のいまはの際のあはれさを思ひ出づる每に、實に憤慨にたへませんのです。新時代の教育を受けた許りに、あのような悲慘な最後をとげたのかと思へば、私は女學校なんかに入つて、道德の何のつて教はりたくは御座いませぬ。今の世の男子が要求するように、理性の眼をとぢた只愛らしい娘であつた方がどれ丈終生暮らし易い事で御座いませう。

私は今姉様の日記を拜借して、讀者の批評を仰ぎ、現今家庭といふものゝ、どんなものかといふ事を後進の方にお知らせしようと思ひます。

亡き姉の日記

あゝ人生は不可解なり、良妻たる事又難い哉、人格！　人格！　そも何の人格ぞ。高く立派なる君と世も人も許しつゝある、我夫のかゝる野卑なる行のあらんとは。

げに遠くて近きは何々なりとかや。以前の下女の時にはさまでなき事々迄、目にかどたてゝ叱り飛ばし給ひ、いとあはれ深く覺えしこと度々なりしが、此度の女來りてより、夫の性質とみに變りて、いまだ嘗て叱り給ひしこともあらねば、近頃はやさしうしたまふよと打よろこび居たりし我の愚さよ。度々出變るも世間の手前惡るしと思へば、腹立しき迄に失策は日に幾度となくなせど、遂に一度も叱りしことなく、詞をつくして後來をいましめ、何一つ得せざりしものを、手をとりて料理も裁縫も習字も敎へみちびき、恰も妹の如くに、身のまはりなども氣をつけいたはりやりたりしに、思ひ及ばざりき、三月以來、百數十日間我愛する夫の妾となり居らんとは。けふ或機會より夫に打明けられし時の驚き、結婚後夫の愛は妻の獨占すべきものと信じたりし身の今更に、悲しさ口惜しさ例へん方もなく、而して今後は我にも其下女を愛しいたはりやれよとの夫の言の葉、あゝ何たる無情殘酷の宣言ぞや。

思ひ起す、三月の初旬夫の君足に負傷したまひて、日々もめば治すとの醫師の詞に、四五日下女にもませたりしはそも間違の基なりし。夜に入れば二人蚊帳に入り、毎夜貳時間ばかり、口實は足をもませるとの事なりしが、夫の君に限りさる淺ましき事はなし給ふまじ、我此手の痛みさへなくば自らもむは當然の事なれど、手を病みて自由をまかぬ悲しさ、それも適はねば氣の毒なれどの詞を幾十度もくり返して頼みたりし下女の――あゝ思へば男子ばかり淺ましきものはあらじさるにても惡くきは女よ、日頃かはかり愛憐を加へ、

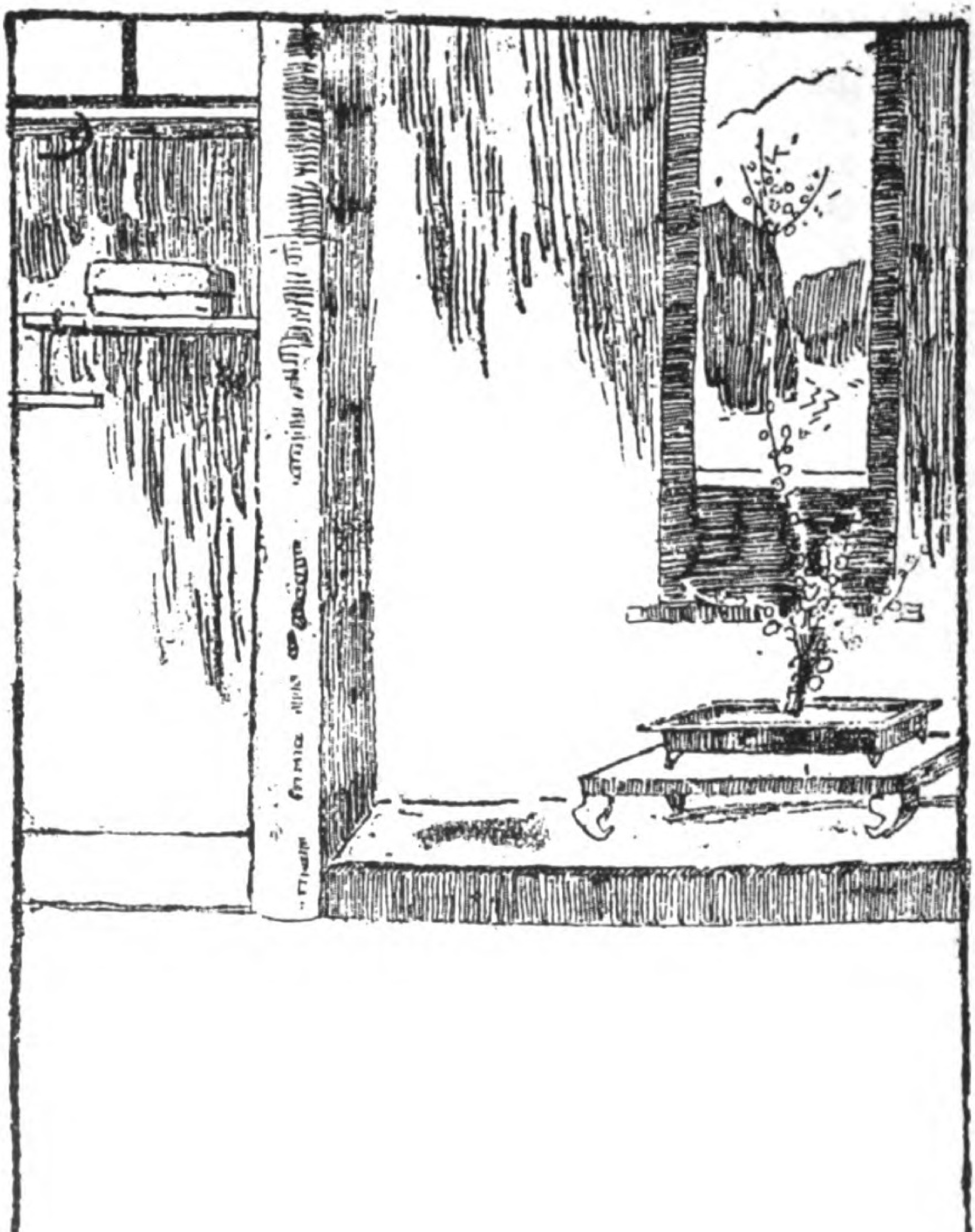
かく迄も恩をほどこしあるにも關らず仇を以て之に報い、而も平然として永き間我を僞り、日々白粉をぬりて人の夫の歡心を買ひ、不義の快樂にふけらんとする大膽さ。凡そ世に貞操なき女程あはれに惡くむべきものはあらずと兼て思ひしが、かゝる恐ろしき女の我家の雇員として召使ひつゝありしとは夢にも知らざりき夫の君も日頃かくまでに思察深き方、而も最高の學府を出でゝ名譽ある高等官の地位にある君、さばかり卑しき人格に御座さゞりしにと口惜しさのあまり申上ぐれば、此道ばかりは思案の外ぞとのたまふ。



人の妻の嫉妬といふ事愼しまねばならずとは知れど假初にも日々召使ひつゝある女の、まして我より望みて雇ひ入れしものが、永き間我にかくされたる夫の妾にて、夫婦とは只名ばかり冷淡極まりし振舞の、今更にひしひしと思ひ出され病みて夫に盡すことのうすきが爲とあきらめ居たりし身の泣くにも泣かれず。奧様は女中をお使ひになるのがお上手と見えて、よくつゞきますねなどいはれし事の今更に恥づかしく、衰弱して自ら激動をとれぬ身には、かゝる侮辱を受けつゝも、なほ忍びて使は

ねばならぬ殘念さ、胸の動氣はやみまなく、かゝる折にこそ鐵道自殺は何よりの慰安ならめと迄思ひぬ。ああさりながら、我は高等官夫人てふ資格をもつもの、一擧一動は世の注目をひきて、一言一行も忽にすれば夫の恥、家の恥はいはずもがな、亡き御兩親また母校の名迄も出さゞるべからず。而して夫の前途や尙々遼遠なり、春秋尙若き身の、もしもかゝる噂の世に知れ渡りなば、きのふ迄品行方正の君よ稀に見る人格の高き人よと尊敬せられたりし名譽は、忽ち地に落ちて世の人に呆れさげすまれやせん、夫の不名譽は尙我の不名譽なり、さすればこの忍び難なき嫉妬をおさへ、夫の命のまゝに、今我一人の胸にひめて、突然の暇を出さず、彼女をいたはり使ふの外あるべからざるか。あゝ誰か世に半身たる最愛の夫を盜まれし其者を愛するの人あらんや。併し我は其者を愛せざれば夫の名譽を維持することは能はざるの苦しき地位に今や至れり。あゝ良妻たること誠に六ケしき哉。古へ常盤御前が三人の遺兒を抱きて敵將に再縁せし苦しさと我の今夫の爲に我精神的死に至らしめられし敵の女を愛するの苦しさとそも何れぞや。げに世渡りは六ケしきもの、夫にはなれ子に先たゝれて世の貧苦と戰ふもあれば又かくの如くに人しれぬ苦しみを思はねばならぬ境遇もあり。されどつら〳〵考ふるに現時我國の男子の品行云々などは女子より强ゆべき性質のものならず、一等國の班に列すとはいへ、いまだ外國の如くに、さまで女子に權力は與へられ居らず、又男子の品性も他の文明國の人の如くに進み居らねば、世の結婚男子が品行方正なるは畢竟弱きをいたはり保護すてふ美はしの眞心より生ずる一の美德ともいふべきもの、それを自ら操縱の宜しき故などは、ひそかにほゝゑみほこれる妻の笑止さよ。されば限りなき夫の愛を一身に荷ふ世の夫人達は明暮に其偶然の幸福を神に感謝して可なると共に、いつ其愛の他にうつりゆくべき機會のなしとも限らぬ事を常に覺悟せざるべからず。女は到底弱きものなり。況して夫ある身は何事も自由にはなり難ければ、今日の場合も忍べる丈忍ぶより外に途はなからん。

さはれ我は今既に病みて、神經非常に高ぶりあれば胸の奥深くひそみし此恨みは、物にふれ事につけて時々刻々にあらはれやせん、此女の我家に居らん限りは決して寸時も忘るゝひまとてあらねば、病氣の全快することもなかるべし、殊に貞操をもて女子の生命とまで心得ふる我は、假令一椀の飯たりとも、かゝるけがれたる人のたきしものと思へば、心よく食することも出來ず。併しそは自分の勝手事なり、一旦夫に身心を捧げたるからは、夫の命なれば水火の中にも入らざるべからずと聞く、之も又夫に仕ふる務の一つと心得て、兼てより定まれる幸なき運命とあきらめんかとは思ひしものゝ夜もすがら眠る能はず、羽織引かけ、庭の飛石づたひ空氣冷たき夜風に當りて、聊思ひを他にはせんとしつ。オヽ宇宙は大なり、世間は廣し、かばかりの



秋は唯たそかれ時の淋しさにはやくかゝけよまとの灯（千浪）

殊に何かあらんと急行列車を眺めながらに、思ひ直しふしどに入りて眠らんとすれば、又明朝になれば、かのいまはしき下女は顔を見ざるべからずと思へば、少しも眠られず。時計の二時をうつ時再び外に出づ。月のなき夜半にしあれば數多の星のみきらめきて、難波行電車さへも既に終を告げ、遠くに泣ける蛙の聲もいとあはれに、橋上に輝く花やかなる電燈も思ひある身には何となく物すごし。胸の奥には、たえずぬぐひ得ざるかたまりあり。あゝ世の妻なる人の今夜幾人の同じ思ひに沈めるやらん。昨日迄嫉妬といふ事のたえて覺えざりし境遇を感謝したりし身も、今日は初めてかゝる苦しき經驗をなめつ。さりながら行末長ければまだまだ此上如何なる苦しみに逢ふやもしれじ、眼をつぶりて恐をよそほひ、夫の名譽を維持する爲に身を犠牲にして忍び難きを忍び、世の人の物笑ひとならぬ樣注意するこそ、目下の我の急務なれと。思へども／＼又も心の奥よりほのめき出づる無念の思を如何せん。あはれ此恥づべき行爲の永久に世に知れ渡らざれと神にいのりぬ。眠られぬまゝ終夜こし方行末の事など考へ明し、世になれたる貴婦人達のあるは役者を買ひ、あるは學生と親しむなど今迄は何故にやといぶかしみしが、畢竟かゝる無念の思より起るにやあらん、かつへたる愛情の自然他に求めんとせば、其瞬時、知らぬ間に甚敷罪惡と化する恐ろしさよ。此際如何に口惜しくとも貞操の二字は堅く守つて、夢にも女の道をあやまらぬようになさばや。

かく諦むる跡より百數十日間の口惜しき事實交々思ひ出で、今ははや生甲斐のなき心地せり、我は今後かくの如き精神の不安にせめられて、終に發狂にてもなさば如何、オヽそは望む所、其時こそは苦しみなき極樂の土地へ旅立ちせんかな。

此樣にして私の姉樣は永眠しましたのです、なくなります前日迄心にひめた苦しみは、私にさへ洩らしませんでした、あゝそのいぢらしさ。去年こゝで共に見た花は、變りませんけれど、もう姉樣は此世にありま

せぬ、あまりにやぼな開けない考とお笑ひ遊ばすな、女はやはり弱いもので御座います、況して病に冒された人は一層不安になり易いものです、或一部の獨立主義を稱ふる方の外は、やはり夫の愛情が第一の寶ですもの、愛なき夫妻は杖をたゝれたかづらよりも、淺ましいもので御座います。

　今の女學校で、こんな時嫉妬せざれ、自分も墮落して夫に同化せよと決して敎へてくれませぬ、それかとて昔のやうに、一夫多妻を普通の事とし、妾を愛せよなんていつても、誰もほんとうにせぬではありませんか。而も現時世の半數は、なほ舊情其まゝに、姉樣の家庭のやうな悲劇がひそんで居るのですもの、隨分女は苦しう御座いますわね。而して夫の名譽を保つ爲に、身をころして迄も、秘密を守りて、終になくつた姉樣の高い人格は、既に世に忘れられてしまつて、跡に殘つた兄樣は、やはり品行方正の人、立派な人格の紳士として、今度も十數人の候補者から〇〇勅任官の姫君を新夫人として迎へ、再び新らしい家庭を作つて



居られます、まあ何と矛盾した世の中では御座いませぬか。こんな事を考へますと、惡るい事をせねば損だといふやうな感じも起らぬでは御座いませんが、併し皆様よ、世をあざむき人を僞る事が出來ませうとも、自分の心ばかりは、あざむかれませぬ、繁多の用務に寧日なき折は兎も角も、夜半人靜まりて、枕頭の燈火かすかに良心の影をうつすの時、聊にても敎育を受けしもの、誰か身を省みない人がありませう。而して此時あゝ自分は惡るい事をした、考が間違つて居つた、實にすまない事をしたと悟つた瞬時、最早再びぬぐふ事の出來ない良心の苛責といふものは、どんなに恐しい事でありませう？、而も世間から價値以上に見られて居る人達は、それあるが爲、終生どれ程苦しむ事でありませう。さすれば失策は、永久に世に知れませんでも、本人は決して幸な境遇では御座いませぬ。之に反して、此際此時、身も心も淸く潔白に、過去に省みて、一點のやましい念も起らず、自己の力の限りを世に盡して、天に對して恥ぢず、地に伏して恐れず、悠々として行手はるかに、正義の二字を認め得らるゝの人は、假令どんな貧しい苦しい地位にありましても心の内はいつも幸福で、どんなにか樂しい事だらうと思ひます。だから周圍の空氣がどれ程にごつても、接する人々が、どんなにねじけて居つても、やはり、自分ばかりは其汚れに染まず、超然として、自己の正しい信念をつらぬき、斃れて後止むの決心を以て、丁度あの白蓮がきたない泥池に咲いてるように、女なれば貞操を堅く守つて、人様から見られての立派な人格でなく、自分の良心から、あゝ自分は如何にも立派な人格であるといつも自信の出來るような、眞の立派な人にならうでは御座いませぬか。

△コロップの釘隱し

衣服を釘に懸けて置きますと、赤い銹が着いて、洗つても脫ちませんから、コロップの栓拔をさした孔を釘の頭に押し込んで置きますと、よろしいやうです。斯う致して置けば、衣服も痛めず、大層具合が宜しうございます。皆様一つお試み遊ばしては如何。

女(ろの二)

女(るの三)

少年世界 第拾七卷 第拾四號 增刊

菊花號

菊判紙數百廿八頁
アート彩色刷寫眞四頁
最新珍奇寫眞四頁
正價金拾錢
郵稅壹錢五厘

◁ 十月十日發行 ▷

（表紙） 菊花と少年……杉浦非水
（口繪） 我家の菊……山村耕花

● お伽芝居 烏の小太郎……巖谷小波作
近く某所に於て實演する頗ろ面白きもの

● 少年對話 菊の花束……竹貫佳水

● 少年文藝 秋……全國少年諸君

⦿菊花壇の新智識 ⦿歷史に照らす月の光
⦿秋郊散步に依つて受くる利益……
⦿記憶すべき和歌 ⦿歷史上の珍らしい話
⦿古英雄の俤 ⦿人の首を賣る土人
⦿少年小說未見の友 ⦿少年彫刻家
⦿初めて上京する記 ⦿鏡が生命の親
⦿海と陸とを走る船 ⦿獅子の話虎の話

暑く無し、寒くも無し、今日此頃ほど心地の好い時は又とあるまい、田畑は豐作、柿も熟した栗も笑んだ。庭の菊花は今將に咲かうとしてゐる。夜は追々長くなつて眞に之れ燈下親しむべきの候、此の秋に當つて我が少年世界は定期增刊『菊花號』を發布す。學修の後之を繙かば一讀智囊滿り、再讀天界に登る思ひあらん！

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替口座東京二四〇番

女（ろの四）

女(ろの五)

高等化粧液

オーツー水

本液は從來の化粧水と全然製方を異にしその原料の如きは今回始めて發見せられたるものなり有名なる博士、大家の賞賛して惜かざる所縉紳淑女諸君例令一滴たりとも御試用あらんには必ず豫想外の効果を現はし肌膚の光澤を增さんこと神明の如しその効果大概左に
（特に販賣店に於て現品の見本を進呈す）



◉にきび、そばかす、色黑き御方顏面手足の吹出もの、御化粧下等

◎御使用の注意 浴あがり、洗面、顏そり後等最も可し

◉日本東京代理販賣店

白牡丹總本店、及各支店 本店 電話新 五五一・五五三 銀座一ノ九
佐々木商店 電話新橋 三九六三、四七三
株式會社 明治屋 電話新、一三九八、一三九九
神田須田町 三井屋商店 電話本局 二七七〇
上野、新橋、帝國博品館 電、下、五三六、電、新、一六二
本郷三丁目十 かねやす 電話下谷 一三三六
●其他至る處の有名なる各化粧品販賣店にあり

最新發明 肺病、肋膜

新藥に就きて

獨逸ドクトル高平氏報告（醫事週報二一七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱に本藥應用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盜汗女子三年前發病遂に末期重症の動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸瘦す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥褥せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體卅一歳男 倦怠盜汗。咳嗽（頭痛より身體羸瘦を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歷を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	無効
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	全治
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
寵谷	男	兩肺結核末期	全治
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	微効
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥大にして報告する義務あるを信ず又効力多とにして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**を以て醫藥の傍ら服用と其豫防に可驚効ある最も妙ならん吾人は病者に向つて新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勸むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勸告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく醫者にも療法あり）遠慮なく送料郵劵二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる、故是非一讀あれば益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週	金二圓
貳週	參圓九十錢
參週	五圓七拾錢
四週	七圓貳拾錢
五週	九圓

東京神田竪大工町 療養院製藥所 **村尾明治堂**
電話本局參千七百五十二番（私書函神田本局第三號）
振替口座東京壹四參壹九番

女（ろの八）

幼年時代の眞面目な興味



小山正太郎

私はこれまで可なり多くの青年を教育して見ました。高等師範で他の教育家と共にしたのは別として、家塾に於ても前後七百人ばかり手がけましたが、平等に教へて技術は略ゝ同じやうに進歩しても、結局は品性のために非常な甲乙を生じた。この品性の如何は彼等の幼時に植ゑ付られた趣味に原因することを、實驗上切に感じたのであります。

▲休日と金の遣ひ方

塾生達が、明日の休みを如何にして過さんかと話し合ふのを聞て居ると、握飯を持ち、草鞋を履て遠足に出かけやうと企つるもの、船を借りて品川沖へ釣に往うと相談するもの、評判の曲馬を見に行かうと云ふもの、芝居の立見をやらうと發議するもの等樣々であります。又少し自分達の製作品で金を得た場合にもこれを以て直に參考品を買に往くものと、飲食に出掛るものとある。同じ休日や金を得ても各ゝの趣味に依つて費消の目的が大違ひになつて來るので、この趣味の差に依つて品性の上下をよく見分ることが出來るのです。

▲手を引て歩く時代

幼稚園から小學に移る位の子供や、未だ母親が手を引て歩く年頃の子供を物見遊山に連れ往くことについて深く注意せぬ母親が多いやうに思はれます。未だ頑是ない内は愉快に遊ばせさへすれば可いと云ふ主義で、淺草へ連れ出て活動寫眞や玉乘を見せたり、芝居や寄席にも連れ往くものもある。又教育に注意する母親でも

芝居の筋に不都合のないものなら宜いとか、お伽芝居なら良い感化を與へるとか、忠孝を題にした活動寫眞なら無害有益だとか云ふ風に考へて連れ往くものが多い。成程何の興行物にしろその筋さへ宜ければ不都合はなさゝうなものですが、畢竟かやうな場所へ連れ往くことが他日の品性に影響するのであります。假令芝居の筋が高尚であらうとも、活動寫眞に映ずるものが無邪氣であらうとも、頑是ない子供は興行物の筋によつて良感化を受けるより、多勢の人が金を遣つてワイワイするお祭り騒ぎにかぶれて、深くこれに趣味を持つやうになるのであります。時と金を浪費する青年の趣味は全く手を引かれ歩く頃に胚胎するのです。

▲子供の怡ぶに任すべからず

田舎に育つ兒は盛り場を見たくても無いから、天然に接し書物を親しむ趣味に自然傾きますが、都會の兒は周圍の空氣にかぶれて道樂的に流れ易い。都會で兒を育つの困難はこゝで母親の注意が一層必要になつて來るのです。母親は決して子供の怡ぶに任せず、怡ぶ範圍内で場所を撰ぶべく、先づ野外、或は圖書館、博物館なぞは良い場所であらうと思ひます。かゝる場所でも往々悪い物を見ることありと云ふものもあらうが、例令あつたにしても、如此場所に往と云ふことが學術的研究的若くは克己的の趣味を養ふ基となるのであります。

▲幼稚園の遊戯について

幼稚園の教育法の中に、餘り人の心付かないで子供に悪感化を與へることが一つあります。ソレは音樂を奏で、烏がカア〳〵と云ふやうな躍りの眞似をやらせることです。あれは一方から云ふと優美であるし、子供を快よく樂しませる方法に違ひないが、唯困ることには子供が音樂に連れて手踊りするのが好になり、一寸博覧會を見て歸つても場内餘興の綾釣人形が一番面白かつたと浮かれます。幼い兒でも趣味の養い方でもつと眞面目の方面に興味を持つやうになるものと思ひま

す。私は濫りに幼稚園のやり方を云々する次第ではない、又音樂其物はよい物で場合に依つて必要と認めるのでありますが、日本の社會では未だ幼兒に餘りこの趣味を鼓吹せぬ方が良と考へます。子供を綺麗に愉快に遊ばせる以上に他日の品性に及ぼす導き方を今一層研究されんことを希望して居ります。



▲無言の教育

子供は子供の範圍内で物事を見聞して遊んで居ると思つて油斷するものが多い。假令ば客と酒を飲んで卑猥な獨々逸をうなり、役者の噂や他人の讒訴を平氣で喋口る兩親は恐るべき無言の教育を兒に施しつゝあるのです。又子供だけ嚴重に仕込む方針で、自分達は屢ゝ料理屋に上り、芝居寄席に出入し

ながら、お前達は今からこんなことを爲てはならぬと言ひ聞せて居る親も隨分ありますが、つまり年頃になつたら如此事を爲よと敎へるやうなものです。尙幼いからと云て親の體裁のために美服を纏はせ交際の場所に連れ往くことも多いが、日本のやうに子供を交際の場所に供ふところは西洋各國に例を見ない、例令供ふ場合でも極質素な風を爲せて居ます。日本では今のところ交際の場所へ子供を連れぬ主義も通せまいが、連れるなら西洋の親以上の注意を要するのであります。

▲青年と旅行中の感

私は靑年を多勢連れて修學旅行や寫生旅行に出掛けた度に、よく靑年の品性を見分ることが出來た。同じやうに旅行しても、宿屋の夜具の薄きを誹り、辨當の菜をつぶやき、茶がなくちや辨當が喰へぬなぞと事毎に不平を鳴らす者と、汚い宿へ泊つても淸水で握飯を食つても喜んで居る者もありますが、不平を鳴すものに限つて仕事がろくに出來ず、喜ぶ者は着々成績が上るのです。かやうな差は幼時に於る親の躾方を明らかに讀み得られるので、子供には如何なる場合にも必要以上の食物、必要以上の衣服持物を與へてはならぬことを切に感じたのです。近年物質の進步に伴ふ贅澤癖は追々增長して、年一年と靑年の忍耐力を減じ、寫景はそこ〳〵にして早く宿屋へ着て良い座敷に休みたい旨い物を食たいと考へるものが、十に一二あつた廿年前に比べると、今日は十に四五或はそれ以上にも殖えて來ました。この惰弱の風を妨ぐには、研究的や勞働的の趣味を幼時からウンと養はなければなりません。聊さか老婆心を吐露して若き母親方の反省を仰ぐのであります。



○葉末の露

碎花

○

長江の華舫のなかに見る時はふさはしからむ京の舞姫

長江は支那の楊子江のこと、華舫は美しい船といふほどの意なれど、この京の舞姫のこつてりとした厚化粧の、眼をうばふやうな姿に支那流の誇張した形容を使つて、楊子江を流れる美しい船に乗せて見るときは、さぞふさはしからうと、歌つたのである。作者の優れた才分、語彙の豐富なことを暗默裡に語ることの能きる會心の作である。

○

つけすこし野火のけむりのあか／＼と見えてゆくころぞ山はかなしき

つけすてた野を焼く煙が、折柄の夕靄を透いて、何かかう墨繪の日本畫を見るやうに、膜をへだてゝ燃ゆるのが見える。そを眺めて立てるおのれに迫つて立つ山のかなしい姿の、作者にとつてはいかに侘しいおもひを誘うたであらうか。一首のどこかゝう調子を緊張させずに、やさしく歌ひすてたところに作者の並々ならぬ手腕がうかゞはれ、盛られたる内容と、調子がこよなく溶け合うて居る。



○

わが戀ふる面影光あれかしと胸に花植う淋しき日かな

かの君は、こゝろみに虞美人草にたとへやうか、君が面影をこの花にしのび、光あれかし、光あれかしと念じながら、庭に降り立つて植ゑつゝあるやさしい人の姿も偲ばれる好もしい歌である。「淋しき日かな」とあるから、空は降りみ、降らずみ日光さへ、ときにうつすらすがれてくる五月雨ごろでゞもあらうかとおもはれる。

○

やはらかく靡きよりてはぬば玉の夜が抱ける白ばらの花

えならぬ芳香を放つ一輪の白ばらだけをくつきりと殘してその闇はもう、いつの間にか、絹のやうな夜の闇が訪れてきて包んで了つた。やはらかく靡きよる夜といふやうな纖細な感じを得感するのは一にやはらかい情緒を有つた詩人の特權である。「ぬば玉の」は夜の枕辭この場合この古語もたゞ枕辭として見るだけでは無く、何となく一首の底を貫流して居る感情を形容するのに効果があるやうにおもはれる。さうおもつてこそこの作にも新しい何ものかを有つことを明にされる。

○

風よ五月は疲れて木々の若葉にもとゞまらず吹きみだれむとすか

健康な體軀さへ、何となくけだるさを覺える夏の初め、木々の若葉をいらだたしく吹いては過ぎる青嵐の、沈靜しがたい若い心にいかに映つたことであらうぞ。風よ汝もの狂ほしげに見える……と折柄の微風におのが胸中の鬱然たるおもひを行るところに何ものかの意義ある如くに見える。

○

さながらにかくておれかし暫くは星も照るなと夕野に立ちぬ

しづかな夕野、日は疾く西に沈んで、餘光さへはや迹はすなつた。すべてのもの皆一齊に聲をひそめた。人間の世界には夜が來たのである。

この靜けさを破る何ものとてもない野に、暫くはこの靜けさのまゝ星も照るなと希はるゝ心持ちは何人も有るであらう。

○

たましひがそゞろこゝろのさすらひの名殘するかや樺のまどかけ

日も當らぬ室の、樺色の窓帳は、夢であつたか、うつゝであつたか、はつきりとはわから難いうれしいことのあつた名殘を見せてゐるやうである。窓帳の樺色なのは、この身この時が現實にこれを見てゐるが、あつたやうな、無かつたやうな夢の如うな事象を、それにまつはらして語つて居るところに、この作の生命がある。窓帳の樺といふ色彩も、この場合一層一首の夢幻的氣味を豐ならしむるに與つて力がある。



○動物を愛した女詩人

詩人ロバート、ブラウニングの女史は、幼少の時から非常に動物を愛する癖があつて、平常猿、鴉、蝟、鷹其他種々の禽獸を飼つて樂んで居た。殊に蛇類を恐しいとも思はずに可愛がつて居たなどは一寸奇な話である。そして出遊する毎に目に觸るゝ動物は何でも捕へて來ては母に管理を頼んでゐたが、其の母なる人はカーライルが、蘇格蘭貴女の眞正なる模型と賞し、プ女史自身、神女と讃へた程の賢明な婦人であつたので、女史の嗜好を知つて居て曾て之を妨げた事がなかつた。女史はわけても一疋の蝦蟇を寵愛して、後には之を馴けて女史が先に立つて歩行すれば、蝦蟇がその跡に尾いてぴよん〳〵飛んで歩くやうになつた。殊に面白いことは、此の蝦蟇の居る所は庭園の片隅の白薔薇の下の小窟であつたが、女史が之れを訪問して門をたゝく代りに小石を其處へ轉がして入れると、主人公の蝦蟇はひよこ〳〵と窟口まで出迎へるので、女史は其の頭を撫でゝ獨り喜んで居たといふ。



奈良の秋

岡　みさを

Sさま。

太古の大和の一隅に、昔ながらの秋風に吹かるゝ事こゝに三たび。住めば都とやら、住めば住むほど、秋の神秘のさゝやきは大和ならではと、夜毎枕に通ふ蟋蟀の鳴く音にも首かるゝ節々を、かいて見ました。

先づ手近の

▲石の上布留の社　から初めませう。草長い裏道を分けて、秋の調べの美しいそで布留川の木橋を渡り、ゆるく流れ來る蟲の歌に耳を傾けながら、Sさまのお好きな花薄の袖の招きの繁き丘に沿うて行きますと、蝗や機織は人の足音に歩々袖に飛び立ちます。七町許りも歩いたかと思ふ頃、こんもり茂つた綠の丘に包まれて、春ならば枝垂櫻がホロ〳〵散り、藤波が覺束なげに搖れ、躑躅が血汐の色に匂つて居ますけれど、今は目に見るものは只青葉。——永久の綠の國——上古の空氣は此處に溢れて、時にパンの焦げた色の木樵が通ります許り。

綺麗に並べられた小石を音なく踏んで廣前に打つ柏手の音、木靈を響かして侵し得ぬ神々しさ。

御池の傍の枝垂櫻の下によれば萬籟絶えて青葉のさやぎ。ホロ〳〵落つる花片を、物に動いて亂れ易い若き血汐に燃ゆる脣にあてゝ歌思つた晩春と變つて、かう、ちいつと水の底——幾千年の歷史を沈めて、木立の陰が靑く映つて丁度泰西の名畫に見る樣な——に引入れらるゝ樣に胸が落付いて、そこに「秋」といふ影が鮮やかにあらはれて來ます。

石の上布留き都の時鳥聲許りこそ昔なりけれ

と某の法師のよんだ時鳥の聲は勿論、細い蟲の聲さへ聞えませぬ。

あゝ聲なきの聲!!!

私は崇神の御代に歸つて居ました。

▲久米寺　も床しい處ですの。畝傍驛から水のない飛鳥川を渡つて、綏靖天皇の桃花鳥田丘上陵、神武天皇の畝傍山東北陵、橿原神宮に參拜して十六七町はありませう。野菊や藤袴が主なしとて秋を忘れず、優しく笑んで居ます。

さゝやかな本堂の鈴をふつて、髯白い老僧の話を聞きながら直ぐ傍の堂の久米仙人の木像を見せて貰ひました。黒光りのする古い像、私は只クラシカルな床しいものと見ました。

私達には、それが眞物とか贋物とか云ふ穿鑿は沒交渉なのです。

何處やら訛りの聞き取れない節もありますけれど、老僧の、さびのある重々しい聲は、如何にも此の秋の久米寺にふさはしいと思ひました。雲林院の菩提講に詣つた口すげみし世繼の翁も思はれて。

あの空を自由自在に飛び廻つた久米仙を羨まないでもいゝ時代が着々實現されつゝある廿世紀の世こそ誠に讃美すべきものと此の時私は考へました、又現代の諷歌者なんてお笑ひ遊すかも知れませんけど。

庭の中央には三國の煉塔が午後の靜かな日影をうけて佗しげに立つて居ます。

あゝ世の興亡の轍を語る歷史のかげ!!!

其傍には咲き初めた眞萩が紅の笑みを見せて、白い蝶が夢の國の若いフエアリーの樣に顏のあたりを飛ぶ。奥の叢からは、しきりに蟲の音が洩れて來ます。

此の時、村の裁縫通ひらしい可愛い唐人髷の娘が二人通りました。久米仙の落ちたといふ吉野川に物洗つた女はこんな女ぢやなかつたでせうか?

三輪山の上には白い雲が、ふんわりと浮いて蜩の聲が頻りと聞え、夕陽は今落ちむとして其の最後の輝を投げ、ギー〳〵と桔槹動かす翁の顏が鍾馗の樣に赤う御座いました。

香山と耳成山とあひし時立ちて見に來し印南國はら

大和三山は眠つた樣に靜かでした。

▲奈良は春夏秋冬いつもいゝ處ですけれど、私は「秋の都」と云ひ度うございます。

若い旅人が、その征衣に包む漂浪の淋しさを奈良の景色に抱かれた一日、ホロホロ落ちる木の葉に笠を打たせて限りない思ひに乘り後れた待合室の窓、星が涼しくまたゝいて薄い靄が若草山を包み行く。思ひ浮べると涙がこぼれて來ます。

コバルト色に澄んだ空、紫の春日山と黄色の滑らかな若草山とが東を限り、そこに浮んだ五重塔、南圓堂、大佛殿、春日の樓門、かう並べたてたら際限もないから名所の一つ〳〵については申しますまい、又御存知の事と思ひますから。



岸の楊柳長く絲を垂れ、秋を寫す鏡をかけた猿澤池を右に見て坂を上りますと五重の塔の「花の松」南圓堂の芝草の邊から優しい鹿のさまよひは初まり、片岡、淺茅ケ原、春日野の杉の下には、ますほの色に尾花が招き、伏した鹿、客に物乞ふ鹿が秋の風にその美しい枝角をならして居ます。悲しい秋風は、あの鹿の泣く音から吹き出

るのではございますまいか。

子規は、奈良に柿を配合しました。木の葉がやうやう龍田姫の御手に錦を染むる頃、奈良の郊外には、星の様に、珊瑚珠の様に赤く光る柿を見るでせう。確かに新しい配合と思ひます。それから初夜の事がございましたね。

月の夜、雨の夜、森羅萬象を自然に融合する様に大佛の初夜の鐘が漂ふ時、奈良の秋の尤なるものではありますまいか。

或る年の十一月だつたと思ひます。今は亡き眞田夫人に伴れられて春日神社の正遷宮のお祭の夜を、三笠山出づる月の影踏んで、昔のにほひが漂ふ奈良の町を行きますと、紅の衣美しう装うた奈良少女の一隊、三味や太鼓で囃し乍ら踊つて來るのに會ひました。私は何とも云へぬクラシカルな優美な感に打たれて其の姿の闇に消え行く迄、夢の様に見送りました。

あゝあの絃の響き!!!

イルミネーションまばゆい朱の鳥居をくゞつて夢の宮に通ふ様な小暗い森の下道に入りますと、月蝕の夜の圓い月は丁度缺け初めて、青白い凄愴なゆらめきが森の木の間を、はつきりと洩れて來ます。一秒!二秒!増して來る闇黒と物凄さとに襲はれて、尚も奥が床しかつたのですけれど、それつきり踵を返して了ひました。

あゝあの色!!!

私はあゝいふ時に林の奥で金銀の羅をまとうたフエアリーが舞踏をしてるのぢやないかしらと思はれたのです。

夜たか蕎麥の聲を聞きながら佐保山の麓に歸つて來ますと、何時かもとに歸つた月影が、佐保橋上寒い程澄んで松の蔭が黒う御座いました。何處からか砧うつ音が流れて來ました。私は永久に彼の夜を忘れる事が出來ませんのSさま。



渦巻

松平鏡子

「ま、よく…鏡様にしちやあ珍らしいわ、幸枝さんにはよくある手段だけれど、不意打なんて…ホヽ、ホヽさあどうぞ、お上り遊ばせよ」

障子さらりと引き開けて、まづとんで出て下すつた澪子様！　平常乍らの心地よい微笑みを見せて…。ほんとうに此方にお目に懸ると、氣がすつきりとしちまいますのよ。

洋傘を疊んでお玄關へ置くと、いきなり其傘を取つてさつさと奥へもつてらつしやるんでせう！！

「あら、何なさるの？」

「いゝことよ、玄關おいといちやあ貴女すぐ歸つちまふんですもの、藏つといたつて好い時分には出して上げてよ」

澄し込んで云つてるの！

「ゆつくりしてね」

「うそ！　大うそ！　僞ばつかし！　私よく知つてるわ、鏡さんはいつもさうなんだもの、人に油斷をさせるなんて、戰國時代の樣な事しちやあいけませんよ」

これですもの、もう全く堪りやしない、

「でも何處へ置てらしつて？」

「何處だつて好いぢやありませんか、さあいつもの部屋へ行きませうよ、今日はね、私眞實に寂しくつて堪らなかつたの！　だつて母樣も誰も居ないんですもの政と二人つきり…私鼠にひかれちまふかと思つたわ」

「ホヽヽヽ、誰がこんな重つたらしなもの引くもんですか…」

長廊をも一つ曲ると突當の四疊半が、澪子女王の君臨し給ふ自由圖…その障子の前までくると、
「私ね、少し散らかしてあるんですよ、笑はないで頂戴！　えゝよくつて？」
念を押して障子を開る。
…おや？　まあ雪でも降つたのかしら。澪さんのお部屋は、一體掃除したてだつて綺麗な事はないんだのに、それが念を押した所を見ると、大方この位だらうとは想像しても居たけれど、まさかこれ程迄とは思つちや居なかつた、驚いたわ、澪さん！　散らかすのもこんなに大袈裟にするには、餘程骨が折れたでせうねえ、だつて書の書きかけが、横を向いたり傍見をしたり、圓められたり折られたり、足の踏み場もない位、ところ嫌はず亂れてゐる——
「厭ねえ、どうなすつたの？　これだけみんな書き損じッ…」
「えゝ……朝から襷がけでやつてるんですよ。でもちつとも書けないの」
成程、お机のわきに緋縮緬の襷が放り出されてある。
「隨分無駄になすつてね、三帖位もつと？」
「えゝ、三帖昨日買つて來たんでせう、其紙皆なの、でも前から一帖位在つたんですよ…今ぢやあもう三枚しかないんですもの、悲觀しちまふわ」
澪さんの悲觀にもあきれて了ふけれど…。
「まあお片附なさいよ、日曜に描くなんてのが、てんで間違つてゐるんだも、一枚位、遲れたつていゝことよ」
碌でもない智慧をたきつけて、さつさとドーサの片附に取りかゝる。
「もう今日は地烈太くつてぢれつたくつて堪まらないの！　いつそ止めて了はうかと幾度思つたかしれないけれど、そいつて、止める口實がないから、根氣よくやつてましたのよ」
御自分も紙を揃へ乍ら、
「今日は餘程如何かしてるのよ、平常此樣ことつて無

いんですもの、縁起が惡いのね。もう思ひ切つちまふ……」と句を切つて「水曜迄ですもの、ゆつくりで好いわ」揃へた紙を重ねて文机に載せる、かうしてふんわりしておくと、二寸の厚みは慥かにある、この紙の一枚一枚に、御筆の蹟を慘ませ給ふたかと思ふと、心から澪様の腕前に恐れ入るわ、私が德川光圀なら、早速紙漉場へ連れて行くんだけれど……あたしなんて、他人のこと云へる柄ぢやない。



「政やお茶よ」

「あらもう先刻から來て居てよ、私頂いてるわ、ホヽヽ、ホ」

「まあ!!」と云つたがつんと取澄して、

「政、何かあつて?」

からだを半分ねぢむけて……。澪さんの聲はまるで千里を走る。

「何でもいゝわ、なるたけ澤山ね」

坐り込んでゝ蟲のよさつてありません。

……。やがて靜かに障子があく。食籠にうづ高く盛つた栗饅頭、澪さんは顏をしかめて、

「……暑いのにこんな甘いものなんて、敵も氣が利かないわねえ」

とんだところで愚痴を零してゐらつしやる、澪さんは甘い物だと、七つ位しか頂けないんでつて……。

「幸枝さんに會つて？」

澪さんが聞く、

「いゝえ……妙子さんの誕生日から三度きりよ、學校ぢやあ毎日の樣に會つてますけれど……」

「そんなら矢つ張り會つてらつしやるんだわ」

大きな聲して笑ふんですもの、

「だつて學校は仕方がないわ……えゝ相變らず大元氣よ、昨日もねそりやあ大騷ぎでしたのよ、圓木の上をね驅足するんでせう、到々見事にはねとばされて落つこつちやつたの……餘り上手でもないのに、お天狗さんなんですもの」

「ホヽヽヽ」

澪樣つてば、そんなに可笑しくもないのにすぐ笑ふのが癖、箸が轉んでもつて、きつと澪さんみたいな人をいふのかもしれません。

「今度被居しつた時、散ざそいつて上げるわ、大きな風姿してお轉婆さんはお止し遊ばせつて……」

なんていふから、

「あなたは？」つて逆襲すると、

「私なんて音なしいのゝ飛び切りよ……鏡ちやんお茶がさめやしなくつて？　代へませうか？」

眞面目臭つて話題をそらして了ふのが上手いつたら……。

「お茶呑婆さんぢやあるまいし……私もう二度目ですのよ。この上色の黑くなる心配はないけれど、お茶腹でぼこ〳〵してくると苦しいんですもの」

「お茶腹つては妙子さんはよく呑むのね、そりやあもう素的だわ……。あら、もう見つけて？　貴女は目が早いのね」

油斷がならないなんて目附をしちやあ厭よ。睨め返

して本箱のガラス戸を開ける。
「何時お買ひになつて？」
「ホヽヽ、私が何で買ふもんですか、頂き物よ、淑子さんが持つて來て下すつたの、可成面白いわ」
「持つてつても、お宜しくつて？」
「えゝえゝ、幾日でも宿めといて頂戴、御緩暇でいゝんですよ、それからね……」
と云ひかける途端、
「奥樣のお土產でございます」
涼しさうな玻璃の菓子鉢へ、冷々した葛饅頭、包んだ寄葉も心地よい。
　引退るとまたすぐ、編代のやうな器ものに、うす黃なバナヽを澤山積んでもつて來る。
　バナヽ私大好なのよ、味の好いのは云ふ迄もないけれど、メスを使はなくも皮はむけるし、種を出す面倒さへないんですもの。
　バナヽには少し滑稽話がある、澪さんの兄樣の守一さんねえ、彼方は蜜柑の當つたのと、バナヽの黑いしみのあるのが旨しいんだ、僕はしみの大い程大好だつて、買つてあらつしやる度にそりやあ素的に眞黑なのばかしなんです。「食べ給へな」つて出して下さる、お志は感謝に價するかもしれないけれど、うぢやぢやけてゝ氣味が惡くつて、手を出すことなんて出來ません。
　それが樂屋を覗くと可笑いのよ。守一さんと來たら、そのバナヽの好きなことお話にならない、まあバナヽ狂人といふ位なんでせう、八百屋水菓子屋のまへを素通りにすると氣持が惡いつていふ程ですもの……ある日ある街を通つたと思召して頂戴。すると得ならぬ戀人の香が、どこからともなく匂つてくる、もうたまらなくなつて振り向くと、八百屋の店にうづ高くバナヽの山、焦たやうに眞黑になつたのを、貪的な大藏省さらけ出して、思ひ切りたくさん懷に入り切れない程買つたんです、けれども流石に往來の立ち食ひも出來兼ねるつてので、お宅へ持つて歸つて、お机の下に首つゝ込んでむしやむしやと大車輪

の折柄、生憎なものね澪さんにみつかつちまつて‥‥それからは負け惜しみに好きだ〳〵で通してゐらつしやる。

私達こそ好い面の皮な、見ればうんざりするやうな姿だけれど、旨しさうな匂いばかりかゝせられて‥‥見てるなんて氣が利かないわ。

そんな事はどうでも好いけれど、何しろ二人して盛んに平らげたのは現在の事實です。よくつるりと二つに大きく皮を剝いて、そうつとおつゝけて、兄様のとこへお菓子鉢に入れて、持つて行つた事もありましたぶんなぐらんそくなつてあわてゝ逃げ出し乍ら、縁側から轉げ落ちたのは、十五の年のことでしたの、もう二年たちますねえ‥‥。

澪さんには全く驚くのよ、あの大きい餅をあんぐり頰張つちまふんですもの、まるで魔宮殿みたいねえ、入口が狹くつて奥へ入つたらどの位の大きいか、面積さへわからないですものを、

「艶消しだわ」つて誰かゞ云つたら、

「ちやあ白金？　プロマイドなら直よくつてよ」

こんな可愛いお唇から、よくまああんな憎まれ口が出る。

「どつかへ行つて見ませうか」澪様！

「何處へ？」

「どこでも」

「行きませうか？」これはわたくし。

「ちやあ私、一寸支度をして來ますわ、待つてらしつて頂戴よ」

氣の早いつてありやあしません、もう立ち上ると障子の外へ‥‥また引き返して、

「くず餅みんな召し上つて頂戴！　それから貴女の御本が一冊來てますから、どうぞ持つてゐらしつて」

なんて、蟲の好い事ばつかし、

仰せに隨つてくず餅を召上り乍ら本箱をあさる。

丈は二尺、横三尺餘りなのを、三段に仕切つて、磨き上げられたガラス戸の本棚、澪さんの四疊半に異彩を放つはこれである。まつたく澪様にやあ勿體ないわ

私もこんな本箱が一つ欲しい、これとあの飾り時計と……。總桐だつてお父樣の御自慢だけれど、私あんな昔臭いのはあきて了つた、新らしいの珍らしいのを求めるわけぢやあないんだが……。

「お待遠さまさあ」

うながし立てる澪子樣！

まあお支度が早いのねえ。

髮は先刻の儘だけれど、遲れ毛が撫でつけられて、丁度好いふくらみ加減、一輪さした雛芥子の燃える樣なのが、少し暑苦しい氣もするけれど、黑髮に照つて一入艶を添へる。



紅梅お召の矢絣ひとへ、お納戸の袴やゝ低目に……私はお机の上に鏡を立てゝ、前髮をも一度かいた。

——二人並んで式臺をおりる、澪さんは千代田、私は深編上げ、靴の紐を結へてゐると、お下髮の毛が顏に懸つてうつとうしい。

「お早うお歸り遊ばしませ」

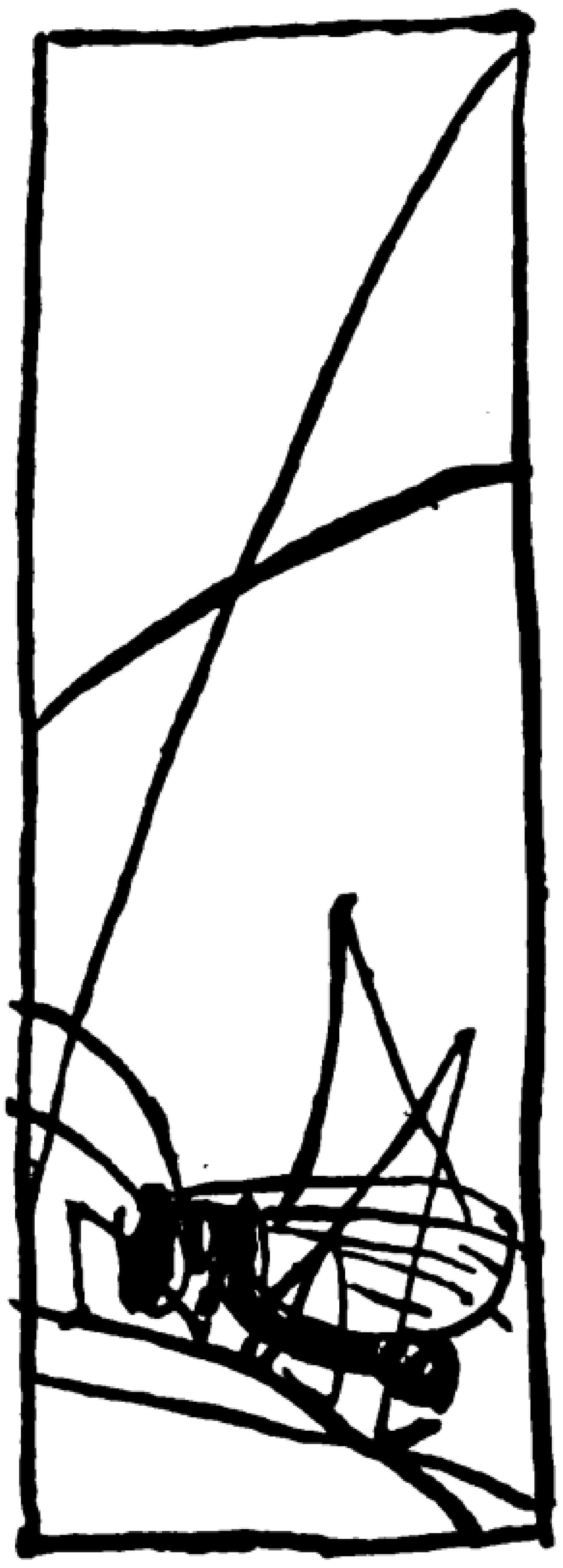
玄關に居たのは政きりだつたけれど、私が洋傘を手に持つた時、小母樣の優しい笑顏が見えた。

「お歸途には屹度お寄り遊ばせよ」

「難有う」と、つむりを下げて、
「ちやあ……」「行つて參り升」
門脇の潜戸をガラリと明ける。リ、ンと鈴が鳴つた
空は碧瑠璃の色美しう、蟠まる白雲の數も少ない、九月といへどまだ二十日の、日光は强い。風よ吹け、風よ吹け、あゝ涼風が欲しいなあ。
澤さんの洋傘の柄に、Mといふ字の花文字が、銀彫で透してある、何日お附けになつて？　つて訊くと、兄さまのに附いてあつたんだけれど、氣障に見えてお氣の毒だから、私がそつと取つちまつたの、ちつとも知らないんだから感心よ。」
櫻木町から音樂學校の傍を通つて、青葉の樹立を動物園の前からぬけるとやゝ下りめ、語り乍ら行くとはかがゆく。
銅像前の石段を降ると、
「何處へ行きませう？」「何處でも」「どこへ行つたら好いんでせうね」「私どこでもいゝんですのよ」「分らないわ」「眞實に呑氣ねえ」
斯樣わからぬ會話の末、まあ足先の向いた方にしませうよ」つて、二人並んで歩き出した。
だら〱坂の上に立つて眼を放てば、銀色に光る電車のレールは、廣小路で十字を描いて、右は湯島、左は徒歩町、直なのは萬世橋のかなたに向つて沒してゐる。群集は、從横に走る車輪をわけて、目覺しい都會の活動振り！　せはしないその渦卷の中へ、二人はあてどもなく足に任せて紛れ込んだ。（特別懸賞文第四等）

△便利な裁判法

昔印度の某州に一の奇法ありき。罪人を審判するに其の形跡を疑はしきものを悉く法廷に集め、官吏威儀を示して其の前に立ち、之れに告ぐるに罪あれば罰必ず從ふの理を以てし、乃ち之れに食を與へて其の噛みたるものを験へ、中に涎液を含むこと多きものは之を放免し、其の少きもの、又は全く無きものとを拘留し、後之を糺問するに、大抵犯人を逸がさゞりしといふ。こは心中に恐れあるときは胃の消化力を止むるが故なりと。印度人の夙に此の理を知れるは奇といふべし。



こゝろの日記

勾當内侍

○○市に居りました時、巡査が戸籍調に來まして、原籍其他の事を調べた末、職業を尋ねましたから、△▽紡績へ出で居りますと、申ますと巡査は、職工か、と聞きましたから私しは唯、ハイ、と云つて置きました、それから間も無く、當市へ轉任しまして暫らくしますと、戸籍調が來ましてそして、前と同じ樣な事を、尋ねますから例の通り、紡績へ出で居りますと申ますと今度は社長ですか、と聞きますから、イヱ社員で御座いますと、答ましたが、後で可笑しうございました。其反比例なのに、前には職工に見られ此度は社長に見られる、主人に話しますと、こちらへ來て大に人格が上つたと見える、と申て大笑しました、が私し思ひました。此兩巡査は常識の有る人ではないと常識をそなへた人なら、家のていさいや細君の風俗で、大概の見別は付きさうなもの、まして職務柄ですもの、私しなどは、別に、氣にもしませんでしたが、大ていの人は、重役して居る人に向つて、いきなり職工か、など云つたら誰しも何だ失敬な位は思ます、が又、後の巡査の樣に、社長ですかなんて云ふのも考へものです。人はむやみに、恭まはれるばかりが嬉しいものでは有りません、もし其人がひくい役をして居る人だつたら、何だか、冷かされてる樣で、人を馬鹿にしてる、と思ふでせう、ですから、こんな場合には、紡績で何をして居られますか、と尋ねるのが、常識有るもの丶至當な問ひ方だらうと思ひます、此れが、巡査だからい丶樣なもの丶、我々同等の御交際に、かう云ふ樣な事を云つたら、それこそ間違のもとです、殊に女は廻り氣の多いものですから、僅かの事ですが氣を

付けべき事だと思ひます。

○

凡そ、儉約と云ふ事には二通り有ります、即ち、毛以上の儉約と、毛以下の儉約とで、毛以上と云ふのは電車に乘るところを、歩いてすます、絲織の着物、こしらへるのを、銘仙位で辛抱する、と云ふ樣なのを云ふので、毛以下の儉約と云ふのは、鳥度庭を掃いても紙くづが落ちて居れば、拾つて、くづかごに入れる、丈夫な紙の反古は、小よりにして、置いて、小包などしばるとき、それを使ふ、また提灯の底に流れた蠟は、取つて置いて、たまつた時分に、火でとかし、太い紙よりに引いて置いて、暗まぎれの下駄捜しなどに、蠟燭がはりに使ふと云ふやうなのですが、此毛以下の方は人から、けちんばう、意地汚などの、評を受けますが、其實、毛以上の儉約の方が、吝嗇に近いのです、少しの曲りようで吝嗇になりますから氣をつけねばなりません。

○

或る夫人は話されました、他の奥樣は奥樣の留守中に、旦那が女中に、可笑しな事なさると、其女中を、虐めなさるさうですが、私しは、そんな事が有ると、其女中に氣兼をして暇をくれと云はれやしないか、旦那の事を人に告げられはしないかと、びく／＼しますのよ、どうして私しはかう氣が弱いんでせうと。

○

私しの御交際してる奥樣は小學校の教師していらした方があります、此方はとかく何かおつしやるのに命令的におつしやるのです、まあ私しなら、それはかうなさつた方がいゝ事ないでせうか、と云ふ樣な事でも、それは、さうするものでは有りません、かうするのがあたりまへですとこんなふうです、

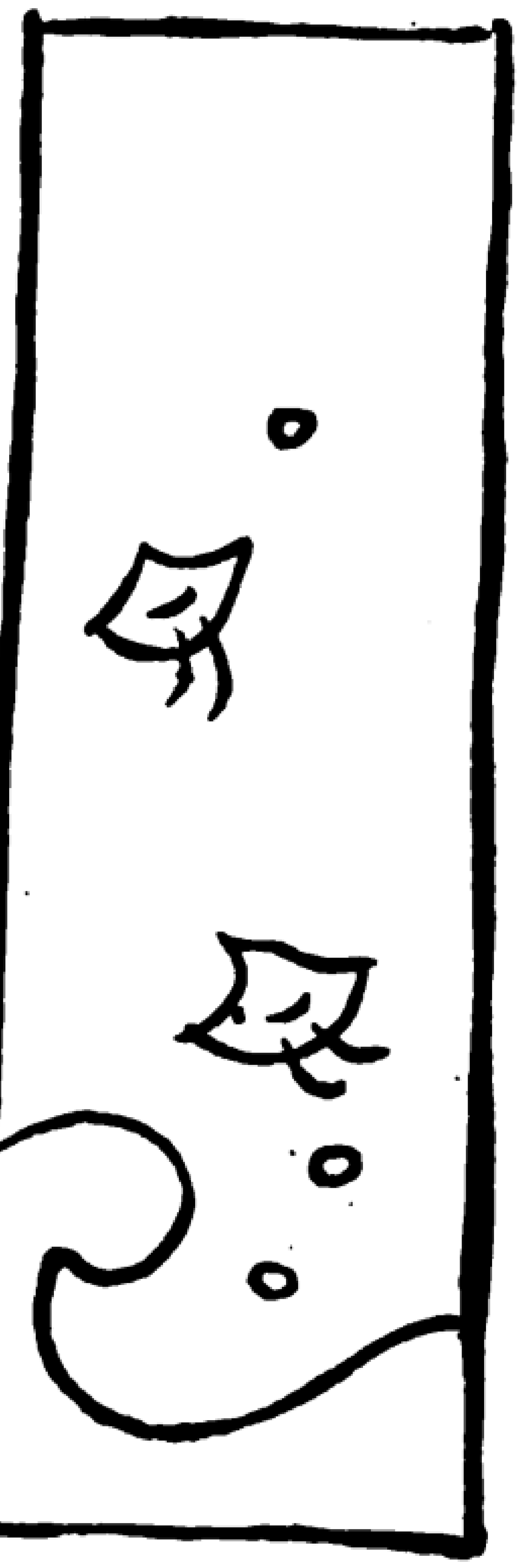
それから此度赴任して、いらした方の奥樣にも、こんな方が有りますので、主人に、あの方、きつと女教師だつたのでせうつて申ますと、そんな事がわかるもんか、と云はれましたが、後で聞きますと、やつぱり、さうでした、女教師上りの奥樣には、大抵此ふう

が有る様ですね、それはもう、何にもわからぬ生徒に、あゝしてはいけないかうよせよと、そんな事ばかり云つていらしたのですから、其習慣が殘つて、自然私しらにもさうなるのでせうが、併し生徒の前でこそ先生にえらいと思わせる必要も有りませうが細君同等としてのお交際には禁物です、まあ私しとしても、何かして居るのを、そばからそりやさうしてはいけません、かうするものですと、云はれますと折角致へて頂き乍ら、嬉しく有りませんからね、それよりか、かうした方がいゝぢやないでせうかと云はれると、成程さうだな、と感心しますからね

○

或大家の隠居、金つんぼの上に大の氣六かしやなり、或時小僧がびく／＼もので隠居の前へいつて、御隠居様お風呂がわきました、と申ますと、隠居は貴様の云ふ事は少とも聞えない、おれが、つんぼだと思つて口ばかり開いて見せると、ぷん／＼怒りますから小僧は仕方なく、手まねで、桶をこしらへて見せ、其中へ入る身ぶりをして見せますとさあ隠居は、真赤になつて怒り出し、貴様、主人に向つて死んでしまへとは何だ、棺桶に入つて仕舞へとは怪しからん事を云ふ奴だ、不忠義者めがッ、としかりとばされて小僧は驚き、番頭の許へいつて、右の次第を申ますと、番頭は、一たい、貴様、どう云ふ顔して居た、あゝそれだからいかん、そんな真面目顔してるからいかん、どれ／＼おれがいつてやると、番頭は隠居の許へ参りまして、にこ／＼と笑顔してやい、つんぼ、棺桶に片足つゝこんで居るくせに、がみ／＼云ふない、いゝかげんに棺桶に入つて仕舞へ、と手ぶり身ぶりで、棺桶に入る真似して見せますと、隠居は、さつきとは、打つて變つて上機嫌で番頭さん、風呂がわきましたかへ、よう知らせてくれた御苦勞々々々々

これは、私しの幼ない折、下女がとかく佛頂面して居りますので、ちいやが、よく此話しをして聞かせて居りました、其時はたゞ可笑しい話しとして聞いて居りましたが、今考へて見ますと、成程と思ふことが有ります。（特別懸賞文第四等）



身だしなみある病妻

汐風

立秋も過ぎ稻もめつきりのびて朝夕は風が稻の頭をすうと通ると、おたがひに秋の來たぞと、さゝやき合ふやうです、やがて、穗も出るでせう、私が此土地へ來てからもう五年目、隨分早いものとつく〴〵思ひます、私はのどの病に掛り、專門の醫師へ長々通ひましたが、すこしもよく成ませんで、まるでしめつけられるやうで、聲は少しも出ず、父初め主人も大そうに心配をしてくれましたが、主人も仕方がない、田舍へ住ひたいとしやう云つて居るから、どうせ死ものなら好む處へやつたらと、父とも相談の上、妹や下女一人と女の子供を連れて、このかりの住へ參りまして、一月經る間に聲も出て來て、大きによく成りましたが、やはり毎年冬に成ると、必ず少しづゝは出ますが、一年ましにかるく、昨年の冬はとう〳〵病氣も降參してしまつたやうです、或日かゝり付の醫師東京の宅へ參られ、妻君は此頃どうかと聞かれ、之々と主人の申ましたら、それはよかつた、命拾ひなされたと仰やつたさうで、私其事を聞いて、ほんとうにうれしく思ひました、夫れも之も皆主人が不自由を忍んで、養生をさせて下さつた御蔭と、心から御禮を申て居るのです。

今では少ばかりの土面を借りて、桃や、梨や、野菜物など作つて樂しんで居るので、私の母は病身で幼き折死りましたが、武士かた氣のおばあさんにやかましくしこまれましたのですが、それも十歳の時死りまして、其後は父一つの手に成長したのですが、元より家は商家ですから、年もいかぬ十八歳で、養子をして別家をしたのですが、丁度十六の時に父の知合で、或富豪家の家へ二年ばかり見ならいの爲御奉公致しましたが、御奧でも大そうよくして下さいまして、御女中

頭の御老人に、あれも年若でよく働くね、父親一人でよく何から何までしこんだ物だねと、仰せられたとの御話しで、不行屆の私もほんとうにうれしく思ひました、之もお祖母さんとお父さんの御蔭と難有く思て居るのです、ですから此度は私が母に代つて末の妹を保護致すやうに成つたのですが、學校も大變に進みまして、私の小學校時代とはまるでちがつて、却々子供もなまいきで、小さいくせに理窟ばかり申して居るのですもの、にくらしいではありませんか、少し叱言を申すとつんとすまして、其くせおもちやなどはいつもごちやごちや面倒くさいと申ますから、女のする事は皆面倒くさいよとよく申すのです、妹は只今でもにくらしい程落付て、よく皆さまが今時の娘にはめづらしいと仰しやいますが、子供の折とて、叱言をいわれると一日でも二日でも口をきかずに居るので、私ももて餘して、主人に申ますと、それはお前が惡いからだ、子供といふものは保護者のやり樣一つだと申事で、却て私がしかられます、それですから商業の外は、皆私の責任なのです、どちらもさうなのでせうが、特別私共の主人はうるさい事は大ぎらひ、其かはり店の事へ口でも出さうものなら大變、でもいつ何時番頭の替りもできるやう心づけて居たなら、出來ない事はないと思つて居るのです、主人はうるさい者が居なくつて、事務が思ふやうに取れると嬉んで居ます、此土地へ參つてからは人手がないので、八百や、魚やに自分で參り用を達し、魚やは魚市場が近處故、朝はやく起きて新しいのを求めて參ります、おねだんもおやすう御座います、世間見ずの私の仕事としては、餘程奮發のつもりなのですが、自然と運動が付くので、からだも丈夫に成り、今では二つに成る男の子が出來て、主人も大よろこび、なにしろ八年もあとがなかつたから、體が丈夫に成つた御陰には、朝の割引電車で少し早めに參れば、學生がたや勞働者のまだ見えぬ内に、子供をつれて月二回づゝ、東京の店へ、店には長年居る老婆が店の人のしまつをして居る者に、銘々にあとの仕事などたのみて、夕方歸るのです、東京に居た頃は親類や

兄弟なぞと芝居見物もちよい〳〵致しましたが、また着物もよく着ました主人は一體さういう事は大きらひの人、それと別に成つて居ると餘けいなものも出る事なれば、ぜいたく物は又主人の日々通ふ身をも思ひて、萬事控へ目に致し、其御金は子供の敎育費としまして、嫁入盛りの妹のあるものなればなほさら、私はほんとうにお恥かしく世間見ずにて、今までは親類や兄弟の外御交際とては致した事もなく、ちやうどこゝへ越して來た時、御隣家の一つ家主で、そこの奥様が大そう御親切土地なれぬ私に色々敎へて下さるのです、御見かけ申せば却々御立派の方



でして旦那様は御勤むきで毎朝の御出まし、家の主人が初の內は四五日づゝ店の都合で歸らぬ事が御座いますので、奥様が私に旦那は御歸りが、少しもないが、遊びにでも居らつしやるのではないのですか、なぞと仰しやるのですもの、まあ隨分ひどい事云ふ人だと思ひましたが、其時此方はと思ひました、そうすると木戸が一つなので子供さんをつれてはよく見えるので、だん〳〵御近處のお噂なぞなさいますが、へえ〳〵とだけ申て私には何といふてよいやら分りませんので、或夜女中が旦那様の御飯がなくなつたから、一寸貸して下さいと

参りましたから、それは御困り、さあ御持ち下さいて申ましたら、其後も三度も四度も、それから私どもでは決して食用の物など御隣家へかりに参つてはならぬ、不注意せんばんな事、何でも氣をつけて品のきれぬやう、さうかと申て上へ〳〵と求めるのも不經濟ですが、氣をつければ人の家へ味噌せうゆまでもかりに行く事は有るものでないと、下女にもよく申聞かせました、しまいには少しもかりに來るやうな事は無くなりました、或る時植木屋が來て、華壇を作らせて居ると、垣根ごしに「夫れは家主でしてくれるのですか」とお聞になりますから「之は私どもでするのです」と申ますと漸く御安心のていなのです、大家の人が遊びに來れば何にしにきたかとそとで御聞になる、御客があればのぞいたり、立聞したり。御子供さんが遊びに入らつしやれば．何か氣に入らぬかすぐおなきなさるし隨分困りましたが、間もなく御轉宅なさいましたので、さう申ては惡るいけれど、一安心致しました、さういう方ですから、萬づぬけ目なく、私も色々とおぼえた事もたくさんありましたが、嘸々日々氣がきでなく、御骨の折れる事でせうと思はれました、また御近處に近しくて居る方で、七十歲に近いお婆さんで、娘さん四人お有で、皆去る學校を卒業遊ばし、或會社へ御銘々御勤なされ、御立派の御暮し却々えらい御婆さん昔は會津の武士の妻とやらよく昔語を承りほんにおえらいと感心致して私なぞはまるで腰ぬけ同樣と思ひました七十に近い體で三百餘坪の畑を手一つで色々の野菜や果實を作つて其餘暇に娘さんかたの御召までも、縫て上なさるやうな勇氣がほしいと思ひました、どうぞ子供たちを無事にそだてあげ、まじめの人間に致したい其上えらく成つてくれゝばなほ結構どんな災難にかゝらうと、心懸一つて人はどうでもなる事、運不運はまた別としても．いつも〳〵は腹の底ににこ〳〵とする勇氣がほしいと、常々より深く〳〵心の底に念じて居ります。

手輕に出來るお茶菓子

信夫の里

△葛まんぢゆう

葛粉を水でといて、白砂糖を少し加へなべに入れて火に掛け、杓子にて煉り、よき程に煉れたら、冷めぬ樣に湯の中に鍋がらみ入れて置く。先づ小さい茶椀の中に、前の煉りたる葛粉を、約半分程入れ其中にあんを丸めて入れ其上より又葛粉をかぶせて杓子か何かで平になし其まゝ水の中に入れてお茶椀より取り出して直に水より出して皿に盛る。葛粉が冷めてはあんを入れて合せる時合はぬ故手早にする事をお胸に…

△鹽松風

メリケン粉へ、イスパタ又はベーキングポーダー（ふくらし粉を）少々交ぜかたまりのない樣に、目の細いフルヒでふるひましてから、砂糖と鹽とを入れて、まぜ合せます（割合はメリケン粉百匁、砂糖百匁、イスパタ一匁五分、鹽二匁位）右の合せた中へ、水を入れどろ／＼となし、宜い加減にかき交ぜ　それを折箱等へ流し込み其まゝセイロに入れてむし上る少し前に、ふたを取りて鹽漬のしその葉を細に切つて乾した物を上



面にパラ／＼とふりかけて又ふたをす。むせたを見るには角の方に箸を通して箸に生の粉が付かなければそれでよい。

△馬鈴薯の菓子

先づ大粒の馬鈴薯十五箇の皮を去り輪切りにしせんにうち水に放ち度々水を取替へ、澱粉が浮き上らなく成た時、又一度清水と取替へ、四時間程付けて置きます、それから爪が立つ位に雑と湯煮して、水に晒す事又、四時間位、さてなべに三盆白半斤を五勺許りの湯で能く溶し、前の芋の水を切つて其中へ入れ、砂糖が飴の如に成る迄かきまぜて居ますと、芋は透明に成ります、それを度として文火にかけて、砂糖一斤を擂鉢で宜くつぶし、ふろひにかけて後木鉢に移しなべの芋を其中へ入れかきまわす傍らウチワで風を入れて冷します。斯くして出來上つたものをパラ／＼にして來客等に出しますと上品で甘者の好などはノドが鳴る位でせうよ。

△バリーウオーター

普通の素湯を冷して置いて之に果物の蜜を入れるのです、之に使ふ果物は夏蜜柑の樣な物か、葡萄の樣なものが宜いかと思はれます、蜜の搾り方は、先づ葡萄なれば、それをよく絞り、其汁の量だけ清水を入れ出來上つた汁の量丈け砂糖を入

れて、十分煮るのです、斯くして拵へた蜜を 前の麥湯に入れて、飲むのです（麥湯一合に蜜二三勺位の割合）

△フルーツサラッド

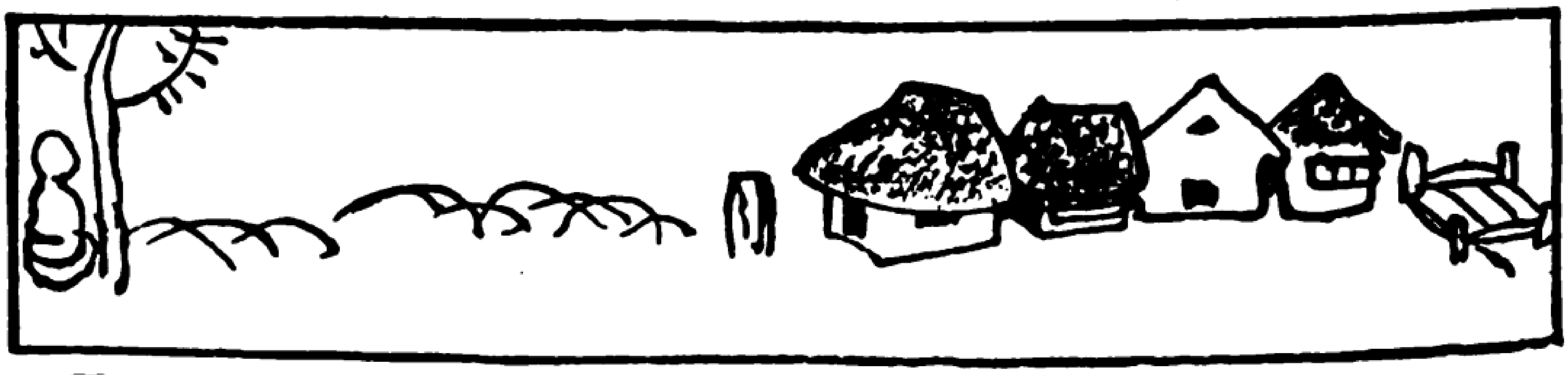
桃、林檎、甜瓜、梨、罐果等の三通か五通りの果物を同じ大きさに切り、之を果物の蜜に入れるのであります、果物の蜜はやはり前に申上げたパリー、ツナーメーと同じ様に拵へるのです、其蜜の中に十五分間放つて置きますと、蜜が果物の中に沁み込みまして旨しく成ります。

△むし芋

芋（何芋にてもよろし）を卸し、よく擂り、別に葛粉を 水に溶きて、鹽、砂糖を入れ芋に混ぜ、箱に布巾を敷きて 擂芋を詰めてふかすのです。

△芋めん

もち粉六分、うるち米（普通のお米を粉にした物）四分を、器に入れ、山の芋を卸したものを 混じて、良く両手にて捏れ合せ少しかたき加減にして、板の上にのせ、めん棒にて うすく伸し庖丁にて細く切り、鍋に湯を沸し其中に投じ 充分ゆだりたる時、笊に上げ冷水を注ぎて冷やし 蕎麥醬油をかけて食す、



△うちはし芋

山の芋を湯煮し水氣を去り、うらごしにかけ 砂糖と米粉を少し入れて青はひき茶又は青粉、赤は食用紅にて色を付け 青白赤と重ねて、セイロにてむす、

△芋飴

之は、少し手數ですが、先づ一貫匁の馬鈴薯を能く洗ひ卸して水を加へ濾して 其汁を四五時間放て、上水を捨てゝ沈むでる澱粉に糯米を少し加へ、水を注いで十分煮沸た後鍋から出して冷したものに、大麥芽一合五勺を 混じ桶に入れて布に包み、三四回攪拌して之を袋の外に絞り出し、其液汁を鍋に容れて文火で徐かに煮詰めます、淡味した飴に成ります。

△薯の團子

芋を柝く薄く煎餅の樣に切り（之れには馬鈴薯用の鉋一組五十錢位のを用ひるとよく薄く切れます、）桶に入れ五六度水を替へ晴天の日蓆に擴げて一日に乾し臼で粉にして貯へて 置く 團子にするには先づ米飯を少し擂鉢で擂り、糊の 樣にしたのに前の粉を入れて能くこれて丸めるのです。

△薯饅頭

芋の皮を去り眞く湯煮て笊に上げ、氣を取り擂鉢にて擂り潰し之れに同量の小麥粉を振り交ぜ、更に炭酸曹達一匁を少の水に溶かし極く少量の酒石酸を入れ沸騰したのを注ぎ煉り交ぜて適宜に切り、餡を包んで蒸し造るのです、

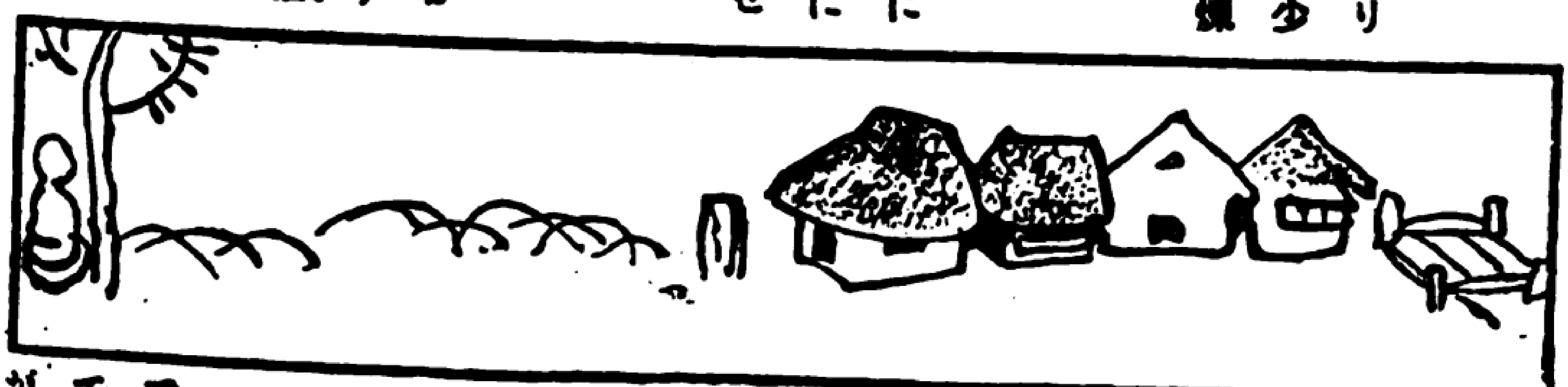
△麥やうかん

砂糖を煮溶し其中に麥コガシ（新麥を炒て臼にて引き粉にした物）を入れて木杓子にてねります、通常のよせ物の樣に寒天を煮とかしまして右の麥コガシの中へ入れ共に煉り交ぜ四角な箱へ流し入れ冷やしてかたまらせるのです。

△ふくませ栗

大きな栗のしぶをむき、鍋に入れて湯煮致します（强火にかけてゴト〳〵煮立てますと、くづれますから、弱火で氣長にゆでますと柔かに成ります）湯を少し捨て砂糖、鹽、味淋、酒を入れて、又煮込みます、頃い時分に火から下ろし其まゝ一夜置いて、汁を充分染み込ませて翌日食すのです。

△栗の梅肉あん



五合の栗を半分は炒りて、後しぶを去り半分はしぶを去りてよく湯煮するのです、別に梅干一箇の種をぬき擂鉢にて眞く擂りつぶし、前にゆでた栗をつぶして梅干の肉と共によくすりうらごしにかけ砂糖、味淋、鹽（少量）を加へ、あんばいしきんとんの、衣位になして置く、次に木茸少しをゆで繊切になし醬油、砂糖にて味を付けたるものと、前に炒りたる栗と、右の衣とをあへるのです、但し梅干の酸み强ければ折角の風味も損ずる故、加減が肝腎です。

◎洋燈を使用せらるゝ人々に

先日弟が誤つて机上の洋燈を轉覆した所が、ぱッと燃え上りましたから、驚いて、いきなり有合ふ砂を取つてかけました、すると見事に消えました。よつて洋燈を使用せらるゝ人々には、必ず砂を大きな箱に入れて、萬一の時の用心に備へて置かれますやう、實驗によつて皆樣にお勸め致します。（みさを）

◎花瓶の水

私の經驗によると、花瓶の水は時々取り換へるが宜しいやうです。花枝を挿したまゝで、久しく捨て置く時は、水が腐敗して、臭氣を生じ、木質が花瓶の口に附着して、容易に除くことが出來なくなります。（りよ女）



寂寞

山百合

△

一夜非常に沖が暴れた、明くれば水天青一碧、空を流れる白い雲、水のせゝらぎ、風の光り、海邊に秋が立ちました、功さん（從弟）達にも秋が來た、今夜は送別の茶話會がひらかれる。

花やかなる灯影にてらされて、鉢植のゼラニアムは燃ゆるやうな色である、私はゆあみすませて、そゝいだ黒髮を冷たく肩にさばいて、絹房のうちは片手に席の端につらなつた、蚊やり香の煙りゆるやかになびいて一閑張りの食卓を二つならべてずらりと取りまいたのは、晴雄ちやんに一郎さん、右隣家の清子孃、私と登志さんと妹の禮子。

どうせ尋常四年のお客様方が正賓なのですもの、中學五年の功さんは咳、一咳して今や戸隱山探檢談、いよいよ佳境に入る。

みんな小さな膝もくづさず、眞黒な眼を擧げて、熱心にきゝ入つてゐる、隣席に座をうつした登志さんは、暗號電信で私にいろ／＼なことをいどむので、一つ大きく肩をゆすると、首をちゞめて眼で笑ふ。

「功さん、お茶がはいりました。まア一息遊ばせよ、皆さん、お一つ召し上れナ、つまらないものですけれども……」

よい頃を見はからつて、かねて用意のおせんべいやおまんぢゆう、廣蓋にうづ高きを捧げいづれば、登志さんは長い袂を口にくわへて、かんばしい湯氣の立ちのぼるカヒー茶碗をみんなの前にくばる。

功さんはしきりとハンカチを袂にさぐり乍ら

「登志さんやお百合姉さんは人がわるい、眞面目くさつて一緒になつてきいてるんだもの。いくらやりにくいか知れやしないや、そら、そんな皮肉なこと云ひたさうな顏して……」

「あら功さんこそひどいわ。どうせ私たちはこんな顏で御座いますよ、だから悲觀してるんで御座いますよ。いゝわ、功さんにはこのお菓子上げないから」

「いりませんよ、その代り、皆さん、こんどはお百合姉さん達がお話して下さるさうです、」

「やア、うれしいな。お百合姉さん、お百合姉さん、……」

「登志ちやん姉さんもね、それがいゝ、それがいゝ」

手をたゝいて思ひもよらぬ包圍攻撃に

「ウソ、ウソ〳〵、私まだあちらに用事をしかけて居りますもの、」

「私も……ホ、、、、、」

クス〳〵と二人ともにげ出して來て、茶の間にかくれて笑ひ入つてると、まもなく晴雄ちやんが、天狗俳諧をするからいらつしやいつて迎ひに來た。各々に鉛筆をなめながら、目をつぶり、眉をひそめ、頭を曲げて苦吟のてい。面白くつて「芋は黑こげ」だの「鯉が食ひたい」だの「赤門前へ」だのわざといろんなことを書きつけてやる、

やがて功さんが高らかによみ上げる、

「警官が、雁飛ぶ空に、狐つき、」

どつと起こる笑聲、

「露の朝、片瀨の濱で、ねぼけ面、」「名月や、おさんねぼけて、おまんぢゆう、」「赤インキ、すみれ袴やお茶の水、」なんて奇想天外より落下する。丁度濟子樣をお迎ひがてら見えた小母樣も、あまりさわきがえらいので、感心してお緣に腰をすゑておしまひになる。

それから線香まはしが始まつて、何でも「モ」の字が頭字につくものを云はなければいけないとある。

「毛布」だの「餅」だの「紋羽二重」なんてグル〳〵まはしてる中はよかつたが、私が「木賃宿」と云つたら、秀逸だつて大喜び。登志さんは「モ、ンガア」つ

て功さんに渡さうとすると、そんなものはないつておし返す、あると云ふ。散々爭そつたら仕方なく讓歩して「モ、ンジ屋」と云ひ直す間に、登志さん「ア、熱、あつ熱、」つて三分ばかりになつたのを一間も先へ投り出して了つた。

こんどは茶碗まはし手拍子取つて、「モシモシ龜よ、龜さんよ」清子孃など赤髮お頭をふり立て丶歌ふ。

しまひには誰でも一つ丶つ歌をうたはなければならないこと丶なつて、晴雄ちやんが眞先に「少年團結白虎隊……」と可愛い吟聲をはり上げる。



お次は一郎さんが負けず劣らず「霞たなびく山々の、盛りの花をながめんと、いな丶く駒に鞍おかせ、」

「春は、春は、櫻咲く向島、ヨイコラセ、ヨイコラセ、オール持つ手に花が散る、花が散イるウ」功さんお得意のボートソング。

私は何もしなかつたので、立つて席敷中を三べんまはらなければなりませんでした。

「御苦勞樣でしたねえ、皆樣、もうお眠いでせう。おかげで面白う御座いまし

たわ、まアもう一つお茶でも召し上れな、」

「これで功さんたちが歸つて了つたら、どんなに寂しくなるでせう、ほんとにそれが思はれてなりません」登志さんがしんみり云ふと

「我儘者がゐなくなつて、がつかりするつて顔に書いてある、」

つて一郎さんがませた事を云ふので失笑した。妹は私の膝を枕にして了つた、開けはなした縁側から水のやうな夜氣が流れこむ、柱にもたれた登志さんの横顔は神々しいほど美しう御座いました。

△

「さよなら、」

「御機嫌よう。」

「御健全で？。」

打ふるハンケチ、振りむく帽子、ことし始めて袂を人形にして、襞高な小倉袴を短かく召した功さん、晴雄ちやんと一郎さんは桐の帽章、可愛らしい制服つけて小さい靴をふみならし、幾度か立ちどまつては手を上げる。

私達は高い砂山の上に立つて、夕日を浴びて田圃道を遠ざかり行く晴雄ちやんたちの姿をいつまでもいつまでも見送つてゐた、胸に抱へた袂をこぼれて、淡色色の襦袢の袖がひるがへる。妹の紅リボンがハタ／＼と鳴る。

「功さーん？」登志さんが呼ぶ。

「晴雄ちやん、さよなら。」妹が幼い聲をふりしぼる。

「一郎さーん――」

道は松山の中に入るのである、遠くの涯まで音無川が針のやうに輝いてゐる、萬頃の稲田さや／＼と葉浪ゆらいで、蜻蛉の翅に秋光る。

「仕方がないわ、晴雄ちやん達だつて明後日から學校が始まるのですもの。ネ、さ、禮ちやん！ねエ登志さん」

「禮ちやん。ね、さ、」

手を執つて歩をかへせば、清く澄んだ初秋の大空に、

夢のやうな新月がほの白く浮んでゐた。

△

お隣家の登志さんは美人である。私が華手好き、登志さんはぢみ好き、白地モスリンの單衣に變わら色の山吹色と紅のはいらぬ藤色羽二重の帯をしめてゐる、頭高な、横と後をつめた第一高女式の束髪に水色リボン、輪廓の正しい細面、濃い眉、高い鼻、細いけれども凛とした眼、母様の御秘藏子なれば、十七の年よりは幼くて、隨分我まゝも云ふけれど、私もう兩袖でぢつと抱きしめて頬ずりもしたい程可愛くて……。



世に時めき給ふ父樣をもつて、何不足ない家に生れて法科の兄様もゐらつしやれば、姉様は男爵家にお嫁ぎ遊ばした。けれど登志さんは憎い〳〵病魔のために、あたら勉強盛りを學校にも行かれず、この別莊に引こもり勝ちなのです。佳人薄命、いたましい身の上よ。

この一夏を避暑に來て居た快活な功さん達が歸京て了つてから、つまらないので今まで程うちへ遊びに見えなくなつた。

紅や花色の絹絲の糸巻をまはりに散らして、熱心にお裁縫してゐます、お庭の芙蓉の桃色のが澤山咲く。今年は色が濃過ぎて輪も大きい。

小ぢんまりした四疊のお室、まはり緣で丸窓があつて紫檀の大きなお机に青貝入りの硯箱、ガラス戸の本箱にはまだ手ずれもせぬいろ〳〵の御本が脊をならべてゐるけれど、登志さんは讀書が嫌ひ、音樂も嫌ひ、お琴にもオルガンにもちりをためたまゝ、一度も手をさへふれた事はない。

この人の一番大切なものは、簞笥の中にしまつてある――横にすると眼をつぶる、金茶色の髮渦まいた、可愛い大きなお人形さんです。「お母樣」つてからかはれてよろこんでゐる。

私は放髮の頃から、一度もお人形など持つてあそばうとしたこともなかつた荒みたる我がおひたちを思ふと悲しかつた。

お人形について好きなのはお裁縫です、お母樣のものでもお兄樣のお袴までみんな登志さんがお縫ひになる。白い顏を俯けて、チク〳〵と針をはこばせる。

あらい紫矢飛白に燃ゆるやうな紅絹うらが光る。

「何がお出來になりますの、」ときく〳〵と、

「私のお羽織よ、」

頰さしよせて、少い齒でプツンと糸を切る。

いろんなお話なかばに、お兄樣が出てゐらした、「百合ちやん……」て柱によりかゝつて膝をお抱きになる

「百合ちやん、大學でね、ことに一高出身者の間に貴女の噂さが盛んですよ。才媛男を殺すとは春秋にでもありさうですね、」

「さうですか、」

「强い、强いつて云はれてますね、」

「さうですか、」

許せ、夢なる似をすら、忘れて傳ふ頰の涙、つよいんでも何でもないんだわ、個人主義だからです、孤獨だからです。

「いつ東京へ歸へるんです、やつぱりあつちの方がいいですか、」

「よ御座んすわ、一生東京で暮したう御座んすわ、田舍へなんか折々旅行すればそれでたくさん……」

私が三ヶ月の都會生活において得たるものは、思ひ上

つた氣質と電車ののりかへにまごつかなくなつたことと、氣取つた帯の締め方である、と云つたらお兄様はお笑ひになつた。

私はお世辭と云ふものは云へない代り、口に出しただけの事はどうしても實行しなければならないものと思つてた、女學校へでも行くお孃さん達は、その反對だ、お約束したことでも何でも、みんな反古にして了つて平氣だ、つて云ふと、登志さんが、

「ぢや、お百合さん、私は?」つて仰有つた。



「貴女はねえ――」まだ肩あげのその優肩に手をかけて、莞爾顔をのぞきこむと、

「百合ちやんはどうしてそんな登志なんかと仲がいゝんです、ほとんど奇蹟のやうだ、登志公には過ぎ者なんだ、」

「なら私、捨てられるより捨てますわ?」

爪はし清い指先で私の帯どめの金牡丹をつゝきながら……。

しまつた紅の唇から、折々こんな言葉がもらされるのです、私はいつも笑つてゐると、こんな強い悲しい恐

ろしいことを云つても、お百合さんは笑つてるつてお泣きになる。

山に海に燃ゆるが如き鋭氣を養ひて、都をさしてかへり來る幾千の男女學生、ことに／＼あの本郷通りなどは、どんな活氣にみち／＼てゐるであらうと思へば、流石に胸もをどりますけれど、母と妹と、またこの可愛い人と別れて行きともない‥‥

エ、登志さんの御病氣？それはあの、あまり人中へなどお出になるといけないんですよ、腦がおわるくつてね。

こんなリボン澤山な、マガレットまがひの髪は嫌ひだつて攻撃されて、私はウキンナを渦巻に結ひかへました。二人は夕方になると、よくつれ立つて散歩します龍田山の秋草や、廣瀨河畔の夕陽や、野菊の花の薄紫、濃海老茶のわれもかう、くさむらに尾花はわびしう人をまねく。

炎のやうな紅の雲の反射を帶びて、秋の野に立つ登志さんは、花ならば丈高き薄淡紅色のコスモスか、でなければ、ゆかりの色なつかしい紫苑であらう、世ずれぬ乙女、けど何とはなしに寂しくて。

△

袖を抱きて、燃ゆる彩雲仰ぎつゝ、秋の寂默に泣く夕かな。門の柱に身を凭せて、オレンヂの夕映をながめてゐると、お隣家の兄樣と登志さんも出てゐらした、月が美しいから、今夜海岸へ散歩に行きませうとお約束した。

うれしくて、夜、手なれのハモニカを取り出したが、すぐ捨て、縁に立てば、そよ／＼と涼しい夜風面をはらつて、玲瓏玉の如き明月中空に高く、私は心ゆくまでその光りを吸ふた。ぬれたやうにチラ／＼と松葉が光つてゐる。

枝折戸のそばまで行くと、かなめもちの生垣越しに花やかなお書齋の灯火が流れて、大きな兄樣のいがぐり頭がうごく。

「登志さん、月が高くなりましてよ、お出掛なさいま

せんか、」
「百合ちやんですか、」
「はア、」
「行きませう、」とパタリと讀みさしの書物をおふせになる。
「登志さんは？」
「氣分が惡いんださうです。もう寢みました、」
と早庭へ下りてらしたので、あら兄樣だけならば、と思つたが、いまさらイヤと云ふことも出來ず、俯いておあとに從ふ。
草にうづもれた小徑を、空氣草履の音のみホク／＼と耳について、ほう／＼くだくる葉末の白露、殷々たる蟲聲、いよ／＼輝りに輝り渡る月光あまりに清ければつく息にさへ前髮の後れ毛がそよぐのである、はゞかるところはないけれど、何となく氣がとがめた、乙女心の恥かしさからではない、自重すべき我が身を思ふたからである、
ふりかへると、廣瀬河畔の松並木、枝ぶりひねた半面に白い光りを浴びて、下行く水のせゝらぎの音もきこえさう
サク／＼と心地よい砂濱をたどり乍ら
「お兄樣……」
「何、」
と近眼鏡が月にきらりとする。
はるかに黒く横たはつた江の島、キラ／＼と水にうつる灯の影、遠く豆相の山々は薄すりとして夢のやう、吹きなぶらるゝ振りの袂を、ほしひまゝにまかせて、冷たい白砂にとんと膝をつくと、少し離れて兄樣は兩手をくんできつとして立つ。
涼しい月、月から生れたやうな風、二人の影のみ黒く長く、どたう、どどう、と渚にくだくる金珠、銀珠、
………
涯もなき大海原よ無限の神祕をたゝへた沖闇、何だか魔物にでも誘はれさうで、泣きたくなつてきた、
「お兄樣……」と呼んだ私の聲はふるえてゐました。
「かへりますか、」

「登志さんがいらつしやればよかつたのねえ、」

二人はいつかすりよつて居ました、ヒタ〳〵と足もと近く金波のよするのもかまはないで、見合す瞳と瞳、…「百合ちやん？」

「お兄樣、かへりませうよ」つと身を飜へすと、懷をこぼれ落ちた桃色ハンケチの、浪打ぎわをまろび行くに、小走りに三間あまりもそこをはなれた。

△

政志樣、お手紙拜見致しました。

知らない方からのでは御座いましたけれど、至急親展とあるのにいさゝか胸さわぎもして、封おし切れば、まア思ひがけないことを有仰つて御座いますもの、政志樣。

さう、私はもう姉樣で御座いますもの、貴下より年が上ですもの。いつの間に、もう高等學校へいらつしやるやうな方から、姉さんと呼ばれるやうになつたかと思ふとほゝ笑まれます。

御失望も、御悲觀も、決して御無理ではありません、敗戰の御身を、白雲飛ぶ駿河の野に抱いて…えゝ、おさびしいでせう、文藝の道に慰藉をもとめられるのも、情的におなり遊ばすのも當然でせう。けれど政志樣、女でさへ人によつて生きやうとは思ひませぬものを、見も知らぬ一婦人からの慰藉を切望してゐらつしやる、そんな事でどうなりますものか。

お察しはいたしますのですよ、丁度その頃は私も本郷に居りました、毎朝帝國大學前の通りはまるで人で造られた道の樣で、頭の上を歩きたいやうでした。洋傘をたゝんでは少さくなつて、その人波の中をくゞりぬけ〳〵しましたが、あの中に貴君もゐらしたのでせうね。一年間――或ひは永久に――なんて悲しいことを有仰るな。無限の哀愁を抱いて、もとは理想の花のかげ、クローヴアしげる校庭を、立ち去りかねた貴君のお姿が見えるやうです。

お友人方が「意氣地がない、わづか一年の失敗で涙を出したりなんか腑甲斐ない奴だ、」つて有仰つたんです

つてね、何だかあすこを讀んだら、知らず〳〵涙に誘はれました。ほんとにね、貴君なんかまだお若いのですもの、これからですよ、私達一高の入學試驗に一度で通過する人の方がめづらしいくらゐに思つてます。どうぞ來年は見事打勝ち、天晴れな御成績で御入學の出來ますやう、私はそれまで君のおん名を忘れますまい、願くば官報紙上に、甲斐あらしめて下さいまし。お奮起遊ばせ、政志樣。

貴君は優しい、お氣がよわいのです、自暴自棄にはなられぬけれど、あまり御自分を悲觀してゐらつしやるのです。政志樣、しつかり遊ばせな、世にたのむべきはたゞ自身の大なる勇氣と自信とです。他に同情を求めるやうなことでどうします。私のなつかしい慰藉があつたら——と思ふて下さるはうれしいですけれど、ね、政志樣、知らぬ婦人に手紙をやる墮落の始めではあるまいかと思ひわずらひました、つて、ね、だからもうこれからはこんな事なさらぬ方がよう御座います。

あのお手紙が、ウソかほんとか、それは存じません、けれどもいかにも眞面目で可愛らしうございました、何誰に何と云はれても決して御返事は差上げないつもりでしたが、貴下にばかりはひかされて、この一文をしたゝめました、前途多望のおん身、御自重御成功下さいまし。さらばよ、幸多く在せ、

百合子

政志樣



金澤の女學校

曼陀羅

△朝の暫くは學生の街

他郷の人が朝仙臺の街を歩くと、乾度彼地の學生の多いのに驚くであらう。金澤がまた夫れと同じことで、朝の暫くは殆んど學生の響と音ばかりである。

私は其の數多い校帽とパラソルの波を見ながら、この青年子女は、一體何處へ吸込まれるのだらうとまで怪しんだ。如何にも蓮葉に笑ひ囀つて來る娘等は、各々校の章を入れた袴を穿ち、皆一樣に山鳥の尾のしだれ尾の長々と蹴つて歩いてゐる。聞けば當地では、運動會の前または日課に體操のある時でなければ女學生は靴を履かないさうである。まがれつとおさげは禁物の一つで、白粉と廣いリボンを用ひないのが諸孃の誇りであるとか。夫れだけに、また井口あぐり女史式の勇壯活潑はお手のもので、呉服屋のショーウインドの前には立たれど、繪葉書屋の窓硝子に美人を漁り、一人はぐれて通行する中學生を威脅する如きは日常茶飯の事である。

△縣立高等女學校

此地の教育は、どれだけの學校に於て教育されてゐるかといへば、それには縣立高等女學校と女子師範學校とのある外、私立の女學校が三と市が維持する職業學校が一つある。

金澤城の外濠の一方に面して、奇麗に水底の小石を透かしてゐる流れと淋しい武士町の長い土塀と、林檎畠と茶畠と、左樣いふものに圍繞された一つの建物が石川縣立高等女學校である。この學校は三十一二年の設立であるが、この地及びこの近縣に置かれた完備した女子教育の機關の初めてのものである。だから三四年以前までは、福井、富山の兩縣を初め、飛驒あたりからも來て隨分留學するものがあつたさうである。この學校は其の規模の點、設備の點に於て間然する處がないが、すべての公立學校のやうに、一種の人格的教化といふ樣なものは餘り見られない。校長の土師氏は、古く高等師範の前身を出た人で、極めて細心な確かな人だから、事勿れ主義を保持する金澤人に取つて最も難有い人であらう。夫れだけに極めて平隱無事で、この學校だけは消長浮沈の問題など殆ど眼中にない。

△家庭の驚愕

たゞこの學校の爲に金澤人がひどく驚かされたのは、六七年以前に小笠原といふ教師が、所謂井口式體操を輸入した時である。足音もなく靜かに歩く事を教へられてゐた金澤の娘達が、急に部屋の中で足踏みを初め號令をかけ出したので、金澤の家庭は皆一樣に驚愕の眼を見張つた。併し運動會に於ける全校生徒の活動を見た父兄は、娘子軍のすさまじい

勢ひに惡れて倒頭異端の爲すがまゝに儘せて我を折つて仕舞つた。夫れ以後春秋二期の此の學校の運動會が當地の名物となつた。

この學校が初まつてよりの一般生徒の思想を通觀すれば、刀自然、體育熱、音樂熱の三轉化があつたらしい。生徒は比較的無邪氣に輕快に騷ぐが、何處か煮切らない所もある。校章としては菊の裾に黑の一線を畫く。

△北日本のハイカラ女學校

また當市には面白い特長と對照を持つた二つの私立學校がある。一は耶蘇敎の手になり、一は佛敎の手になるものである。前者を北陸女學校と謂ひ、後者を金澤女學校と謂ふ。

北陸女學校は加賀藩七大名の一人横山男爵邸の前に、清楚な校舍があつて、北陸隨一の舊い歷史を有する學校である。開校は遠く明治十八年の昔にあつて、昨歲二十五年の記念會を催した。其舊い點に於て確かに全國有數なものと謂つていゝ。開校者は米國人ミッス、ヘツセルといふ人で、この婦人はウエスターレン、カレエヂ出身で、全校を壓した一代の才媛であつたと云ふ話である。今の校長のミッス、ジヨンストンといふ老婦人はそれより八代目に當る人である。學校の實際の仕事は明治學院出身の中澤正七氏がやつてゐる。以前は、何といつてもミッシヨンの手になつてゐるだけに、傳道に重きを置き、敎育が客と云ふ形であつたが、中澤氏の時代になつてからは、やゝ學校らしい面目を備へる樣になつて來た。氏の敎育方針は、堅實なる家庭の主婦を作る以外に尙ほ一步を進めて、智識ある進取的の女性の養成に重きを置いてゐると云ふことである。開校當時は、一向宗の信徒が頑つてゐる此の土地の事ではあり殊に二十五年も昔の事だから、この學校に子女を托するは愚か、隨分市人から迫害を蒙つた樣である。當時生徒は無慮三名だつたと聞いても大概は解る。また其の二十五年の間に產出した生徒の數は僅に二百五六十名であると云ふを聞いても解る。然し左樣いふ僅少な生徒を擁しながら尙維持が續くのは、多く財源がミッションの手に於て供給されてゐるからである。音樂と外國語とは此の學校の特色で、當地では此の學校でなければ外で之を習ふ事が出來ない。音樂科の主任はミッス、ギブンスといつてピアニストとして相當に腕のある人である。此の學校の生徒が一年中に最も幸福な遊び方としてゐるのは、クリスマスの晩と、初夏の頃に行はれる文學會の時である。若し裏日本の女學校で高襟なものを擧ぐるとすれば、第一に指折らるべきはこの學校であらう。

△本願寺派の敎育機關

金澤女學校といふは大谷派の主權のもとに存在するもので、所謂大谷派佛敎婦人法話會金澤支部といふ長い名目の團體が維持する敎育機關で、三十八年の開校である。當時の校長は社會學者として多少の名聲ある久松義典氏で、一新聞の主筆として、また篤學厚き眞敎師として、市民より皆からの尊敬を拂はれてゐたが、開校後幾何ならずして夭折した

次いで校長に二人の新たなる人を送迎して、隨分混雜した內訌其他の紛糾や擾爭があつたが、今は兎に角平穩である。この學校の特色は、假令音樂を不識とも、外國語が讀めずとも、針を動かす事を識つてゐる、飯を焦さない、所謂世間に運用の利く世話女房を養成するにある。夫れが爲めに毎年縣から補助金を八百圓ばかり頂戴してゐる。

この二つの學校の對照が一寸興味を牽く。一は進取的、一は保守的で而かも夫れが同じく或る宗教團體の手に於て行はれ、又縣立高等學校が入學志望者の四分の一に比すべき小數な娘達だけしか選拔採用しない爲に教育を受くる途を失ふ不幸なる娘達を引受けて、一人前の女に仕立上げ樣としてゐる點に於ても、相一致してゐるから面白い。そして近頃近縣の富山と高岡に二つの女學校が新設された爲めに入學者を減じ、お互に夫れの募集と吸引に塵席日も足らぬ態も、私立なるを以て生徒の一擧一動に兎角の評判が呼ばれてゐる事も似通つて居る。けれど前者は草創の歷史を有する舊家であるから何處か重みがあり、後者は出來星の新家である爲めにやゝ輕く視られてゐる傾がないでもない。前者の校章は袴の帶に紫星の金具を附し、後者は襟に二筋の黑線を附してゐる。

△評判よき職業學校

この兩校の敵として擧むべきは、三十九年に金澤市が設立した女子職業學校である。手帕の縫繍や、刺繡、造花の絢爛たる生徒製作品には實かなくとも、裁縫が出來る樣になるといふ事と、親が持餘す理屈や井口式體操をやらないと云ふ事に單純な市民の注意を惹起して、一般の評判がいゝ樣である。夫れが爲めに年每に入學志望者をこの學校の爲めに吸取される傾きがあるので、私立たる兩校は多少の頭痛を病んでゐる。殊に金澤女學校は、術科に重き置いてゐるだけに、餘計の苦痛を感じてゐるらしい。現在生徒數が北陸女學校が七十名弱、金澤女學校が百二十餘名であるのに、この學校が百七十餘名を養成し居るのを見ても其の趨勢が解る。

この外に私立金城女學校と云ふのがある。是れは其の初め師範學校及び高等女學校の入學豫備校として知られてゐたものであつたが、この頃では矢張り文部省令に據て、一般女學校程度の教育を娘達に授くる事になつた。これには未だ多くの間がないので大した特色を見出す事は出來ない。袴には白線を一本入れてゐる。生徒の中にはまだ中性近洞をいだゝかすとも差支のない樣な孃さんもゐる。

さて、また女子師範を云ひ殘したが、これは何處の國に於ても見る一種の師範學校典型と云へば充分の説明がつくであらう。

斯くの如くして、加賀百二十萬石の城下の娘達は教育されてゐるのだ。山紫水明の小天地は四時雨を斷たず、隨分陰氣な雰圍氣が常時立ち罩めてゐるので、東京の女學生氣質の樣な匂ひはあまりなく、一般に穩かに育てられて居る。

孤軍の麗人

賀壽枝

スーツとゴム輪の止つた音、サア入らしたよと私は玄關に出迎へた。

「お待たせ致しまして」

と優しいお聲、パチンと開かれた眞紅の燃ゆる樣な銀貨入から、摘み出された白い物を車夫の手に。

「最う歸つてよろしい」

と鶴の一聲は、數多度び頭を下げて梶棒を廻らした。

兼て、かく有りなんとは期して居たけれども、見れば薄納戸がゝつた地に共糸や淡い色で横に霞が織り出された、私等の名も知らぬお召に、クリーム地へトルコ模樣とやらのおみ帶胸高に、お頭は銀杏返しに、翡翠の根懸け、お指のダイヤなら、お胸の金鎖なら、耀く許りの御裝ひ、之れがまア質素を旨とする○○講習會へ出かけ樣とする、春枝さんの扮裝。私はと見れば秩父縞に羽二重の襦子の晝夜を締めて居た許り、之れじや奈うして御一緒に行かれよう、お孃樣と上女中としか、見えないだらう、だつて今更ら着替へる事も、寧そ止めにしようか知ら、いゝえ此樣な事思ふのが、女の虛榮心といふもの、私は衣服の共進會に行くんぢやない、今日はお料理の講習にゆくのだ、たとへ皆が彼の樣な姿して入らしたとて、ちつとも恥づる事は無い、私は私の身分相應といふ事を守て居るのだもの。

かう心に自問自答して、洋傘だけは、二人ともよく似た、青磁色のをパット開いて出かけました。門に近づくと、三々五々、車で駈けつける人もあれば、十七八のお孃樣やら、四十位の奧樣もあり、いよ〳〵門を入れば、さま〴〵の澤山の人でした。それが皆云ひ合せた樣に視線を春枝せんに注がれるのですもの、隣に並んで居る私迄、顔を見られる樣で、何だか、極りが惡いのに、春枝さんはと見ればすまアし込んで、靜に扇を使つてられる。

氣の小さい私なんか、とてもあれ丈の度胸は出ない嘸、一種の誇が心の中で踊つて居るのだらう。虛榮心

の塊りと云はれて居る若い婦人の集合ですもの、見渡すとなか〳〵質素どころぢやない、春枝さんの様に凝つた装した方も随分有ります、だけども春枝さんの様にパッと人目を引かない、お氣の毒乍らもつてお生れ成すつた御標緻が、さう皆々美しいと云ふ譯ぢやありませんから其處へ來ると春枝さんのお鼻は一層高くなると云ふ譯、何といつてもお面の道具が一通り揃つて入らつしやる上に、お春は高し、肉付はよし、それでお化粧はすつきり素人離れがして入らつしやるのですもの、之れには、三日とあけずお目に懸かる私も、奈うしてあんなにと、只不思議がつて居りますの、月に一二度入らつしやる歌舞伎座行は、きつと其研究に入らつしやるのでせう。舞臺と見物席と半々にお見比べ遊ばして、藝者の化粧など細かに觀察してお出でに成るに違ひ有りませんわ、ですから其表情の巧な事つたら、誰れだつて、アレが〇〇女學院の出身かと怪まない人は御座いません。お年は廿を二ッばかりも越して入らつしやいますのですが、學士で成けれや否と仰有るので、未だ御養子が極りません。世間から虚榮心の塊だの何のとつまらぬ新聞



等によく投書されて入らしても、超然として、近代的女性の美點を一身に集めて入らつしやいます。

　春枝さんの心を解剖して見ようなら、流行の魁がしたい、そして同性の誰れにも勝つた姿をして決して負けたく無い、其上で異性を魅して迷はして、二度と來ぬ人生の花の様な時代を華やかに矜つて暮したい。

『私のネ、従兄が云つてましたがネ、従兄の友が、アの歴史の○○先生の處へ遊びにゆくのですつて、するとアの六づかしいお顔をした先生が、今歸つた女生徒は美だらうの、奈うのつて批評成さるんですつて、敎師の何のと云ふても、男の心つてさうしたものネ。』と仰有つた事があつた。それに眞理が無いとは私も全く云ひきる事は出來ない、すれば虚榮々々と女ばかりを、攻撃成さいます男子の方にも幾分の罪は有りますのネ。

　ホヽヽヽ、六づかしく成つて來ました、私は早く歸つて、良人と二人の樂しい晩餐の卓に、今日の御馳走を並べませう。

　翌日からは、誘ひにわざ／＼寄つて頂かない事にして、春枝さんのゴム輪は、すぐ會場へ横づけに成ります。其度毎にお召物から、おみ帶は勿論、スッキリ御衣裳が替つて居ります、お頭の物迄。私はア、蟲干して入らつしやるのだと思つて居りました。いゝえ、負惜みぢや有りません、私は家に歸れば、春枝さんの様に、父の定期とやらで殘して逝かれた、數萬の富はなくとも、何にも代へ難い良人の愛といふものが御座います。

　私は今夏の講習會によつて、遺憾なく發揮せられた友の虚榮心を見て、反つて質實な考を持つ様に成つた事を喜んで居ります。（特別懸賞文第四等）





世間の響

胡蝶

お抱車ガラ〳〵と乘りつけて千代田草履の足許かろく、純白に刺繡入の洋傘片手に黃金鎖すつきりとした首にかけて、ホヽヽ御免遊ばせよ、一寸御門を通りましてと得意になつて舊友を訪ふて見たい、などゝ思ふのも虛榮心にはちがひないでせうけれど。

女ですもの、ちつとでも美しく見られ度い。馬子にも衣裳、かみかたち、元日や我女房に何とやら申すでは御座いませんか。美しい衣服を着、輝く寶石の少しもつけてなるべくきれいに見られたいのはあたりまへ、左樣々々わるくおつしやるものではございませんわ、どなた？　女をばかり虛榮のかたまりと仰せられるのは。

刻苦十年、天晴卒業論文が通過すると鼻下のおひげと共に新學士の肩書について意氣天を衝くといふ大得意、これで如何やら教授や其他の方面に御覺えが芽出度くあれば、幾程もなく洋行の御沙汰が下つて、滿三年の留學、最初言葉のわからぬ講義にどきもを拔かれて了ふと、もう聞きとれもしない講義を聽くなんて馬鹿らしくて出る氣にもなれず、せい〳〵圖書館位に少しかよつて、重からぬ財布を折々はビーヤ酌ぐ女に傾ける位を樂しみに無事に三年勤め上げて歸朝したものが何の某と、日本ではまたない學者、腕きゝに重んせられるのだとは、滿更行かれぬ者のそねみ口ばつかりでは無いのでせうね、それで成金の美しい令孃でも貰つて御父さんの金の御威光が輝り添へば此上もなしといふ御望、そんぢよそこらにちつとではなくおはしませう。かと思へば美しい奧樣を朋友に羨まれる御身でありながら何を不足の靑樓遊び、到る處で顏なじみの

無い處は無いといふのが御自慢だとやら、A君は豪いと皆から感歎されゝばされるほどなほます夜毎口毎の豪遊を、容色でたつて望まれて春十八を妻と呼ばれた夫人は一體何と思召してかと御いたはしう。

　何といつても未婚の男は可愛らしげがありますわ、令孃の噂なんていへばきつと耳をそばだてゝ本氣になる樣子の可笑しい事、なんて惡口云つちやあ濟まないんですけれど、よもやと思ふ男でも實際はお嫁探しに憂身やつしてるものと見えますのね、こんな連中は面白いのですよ、少し眼鼻立の揃つた十六七から上の娘ですと一切夢中ですからね、或る人が或る時上官の方を見送りに行つたのですつてね、そしたら他の見送りの連中が誰も其上官の令孃と見知越の人がなくて挨拶もしなかつた中で、其人は一寸面識があつたので近寄つて默禮をした、とたつたそれだけですの、それが當人鬼の首でも取つた樣に嬉しいと見えますの、傍も相應に君如何して知つてる？位御せつかいに氣ともむと見えますのねえ。

　同じ譯ですわ、一寸料理屋に上つて一杯呑んでもお酌の女中が御世辭の一つも云ふとすつかり御機嫌になつて不相應な御祝儀を奮發する、女中も叮嚀に御辭儀位しますと、それが大變な幅がきく事の樣に思はれて今度は友達を引ばつて行つて、あら川口さん、なんて言はれるのを無上に喜んでる人もあるつて申しますからね。

　人からちやほやされるのは惡くないものと見えるのですね、此人こそは世間の位官等には眼もつけない純粹の學者だなんて思つて居る人から案外人爵の區別をはつきりとわけた口ぶりなんかで話されますと、オヤオヤと思ひます。女ばつかり虛榮心を御せめ遊ばす方があればそれはあんまりと申すものよ。

　男のお友達間に虛榮のない御交際が、まあどれほどあるでせうね。時計の刻のきざんで居る間、電車の響の聽える間、お互に人より先に立たう、遲れまいとあせつてあせつて居る世の中ですもの、偶朋友が落ち合へばめい〳〵自分を自己以上に見られ樣と何かにつけて

虚榮をはる内心御察し申しますわ。　ですから女の方がよつぽど罪がないと思ひますの、嘘いへつて仰しやるの？　まあおひどい、全くなんで御座いますよ。ええそりやね、娘の時分は可あいさうに、まだ定まらぬ運命ですもの、ちつとでも可い運を捕へ度い、捕へ度いでね、文學士は厭だ、陸軍は野暮だ、ヤア學士にゆくならホワイトツーラインの後身でなければなんて勝手な事を申しますし、活計向の事だつてあんまりキチキチ暮しは誰だつて好みもしませんから……だけど御安心遊ばせ、文學士はのなんのと文句を云つた人が何でもないキユウ〳〵の腰辨の細君になつたつて、左樣〳〵いつまで勝手な熱をもやしては居りませんもの、たまに半襟の一つも買はうと思ふ御錢が出れば晩の御菜に御なまぐさつけて自分の事は我慢して了ふものですよ。

とまあこれだけの覺悟はまさかの時には誰でもありますと申上げましたの、えゝ虚榮心が強いと仰しやるならば何とでも御云ひなさいまし、嫁くまでは腕のきく相當の若手の紳士を夫にもつて夏の休暇には鎌倉あたりまでは遊びに連れて行つて貰つて、うつりかはりには大小に拘らず新らしい着物の少しは着られる樣にと願つて居るのですし嫁けば、それやあね、慾にはきりのないもの、早く夫が出世じて呉れゝばいゝとそればつかり願つて、舊友が時めいて訪れて來ても此方も恥をかゝないほどにはあり度いとも思ひますし、夫の同窓なんかの榮達の噂をきけば、無神經でも居られませんのよ、だん〳〵云つて來たらやつぱり女は虚榮にみちたものねえ、男も隨分虚榮坊なものだとすれば、御互樣かも知れないわと饒舌家のお久仁さんの言葉を其儘。（特別懸賞文第四等）

△鑛泉華「湯の花」

これは九州別府温泉の湯元から採つた鑛泉の華から製したもので、坪井、森島兩博士の證明によると、水一斗に華十匁乃至五十匁の割合で溶かして温浴する時は、子宮疾患、レウマチス、神經痛、皮膚病、痛風、腺病等に特効があるといふ。日本橋區本材木町栄田臥龍堂の發賣、代價は拾錢より九拾錢まで又同店から、專賣特許品の「粉末石鹸」といふ同樣な洗濯用の品を賣出してゐる。



雜記帳

（無駄な女子敎育）

與謝野晶子

×

文部省では來年度から實施する積で高等女學校の敎授細目に改正を加へようと計畫して居られると聞きました。近く內閣の交迭と共に久しく煩瑣な形式主義と偏狹な保守主義とで文敎の進展を阻害した小松原氏が隱退せられ、新しい文部大臣は文政の御經驗が皆無だとしても兎に角多少自由思想の理解が出來る事であらうと想像して、私は御參考までに次の樣な感想を述べたいと思ひます。

之は男女一般の敎育に亘る形式主義の宿弊ですが、特に女子敎育に於て甚しいのは無駄な學課の多い事です。たとへ文部省の精神は然うで無いにしても、結果は徒らに課目を多くして外見さへ完美の狀態であれば其れで好いと言ふ風に成つて居る。

其上に文部省は敎師に向つて敎授草案の調製を囂しく言ふ。敎師は其等の煩瑣な事務的の勞働に忙殺せられ、學校に於る勢力と時間との三分の一は其れに費されて居る。事務的に疲勞した敎師が其煩瑣な敎授草案に由て施す敎育が、潑剌たる熱情を減じて勢ひ機械的申譯的に傾き易いのは已むを得ないでせう。

學生は猶の事。項目ばかり多過ぎて奥行の乏しい、而も敎師初め餘り興味を持つて居ない學課に對し、唯學課の時間に追はれるのみであつて、悠揚たる態度や熱烈な研究心や、周密な注意力やを持つて涵養する事の出來ないのは當然です。

敎師の敎授も機械的、學生の勉强も機械的、之は小

學より大學に到るまでの通弊で、其源は文部省の誤つた劃一敎育に由來して居る。本年の高等學校の入學試驗に受驗者の國漢文の力が槪して缺乏して居た事が偶ま敎育界の問題に上りましたけれど、專門學者に承れば國漢文ばかりで無い、數學、語學、物理化學なども殆ど同樣だと申す事です。男子の中學卒業生の學力が然うであるとすれば、更に程度が低くて更に無駄な學課の多い高等女學校卒業生の實力の乏しい事は大抵想像致されます。

×

無駄な學課の一例を申しますと、高等女學校では「作法」と云ふ課目が修身の一部にあつて、一年級より五年級まで打通して毎週一時間を之に費して居る。普通に女禮式と呼んで居るものですが、何う云ふ事を習ふのかと云へば、煙草盆の持方とか、贈物の扱方とか、お辭儀の仕方とか、嫁入の日の杯の受方とかに過ぎない。女學校の敎育を過信して居る父兄達は、然う云ふ行儀作法を敎へて頂くのは難有い、殊に一週に一時間位なら他の學課の妨げにも成るまいと考へられるでせうが、最愛な子女に實質に富んだ文明敎育を施さうとせられる父兄達なら、もつと眞面目に成つて女學校の敎育を批判し監視なさらなければ成りません。一週に一時間は決して輕んずべき時間でない。一箇月に四時間、一年に四十八時間、五箇年の卒業までに休暇を除いて少くも百五十時間は之に費されて居るのです。

私は煙草盆の持方などを學術だとは思つて居ない。行儀作法は無論人として心得べき事に違ひありませんが、其等の事は學校（殊に『高等』と冠した學校）で敎へる迄も無く、家庭で兩親とか祖父母とか叔母さんとかゞ折に觸れて注意を與へれば一度で解る事である。家庭で注意する人が無ければ坊間の女禮式の本でも一冊買へば直ぐに領解の出來る事である。又然うまで敎へたり習つたり爲なくても、社會へ出て他人と交際すれば自然の必要から見樣見眞似で覺えられるものであると思ひます。

×

一體行儀作法と云ふものが是非高等女學校で五箇年百五十時間以上も大切な娘盛りの時間を割いて教へねば成らぬ程の學課であるなら、中學生其他の男子の學生に對しても同樣の教育を學校で授くべき筈である。世間は女同士で許り交際すると限らない。相手には男がある。女に必要な行儀作法は男にも同時に必要でありますが、男は其方の教育を少しも受けて居ないから凡て無作法かと云ふと決して然うで無い。一人前の男は皆其れ相應に行儀作法を心得て居ます。實世間の日常生活に慣れて自然に會得するのです。男は作法などをば少しも學課だなどゝ思つて居ない。格別注意すべき事だとも考へて居ない。其れで十分社交の用が足つて行く。若し婚禮の席とか何とか特別の儀式の場合は其時に臨んで一寸作法を知つた人に問へば即座に便じて仕舞ふ。男ばかりで無く、一般の學校教育を受けない婦人でも然うである。彼等は特に教へられなくても皆身分に應じた禮儀を心得て居る。大抵は女學校の教育を受けた女よりも反つて情味の溢れた、行屆いた禮儀を知つて居ます。



之は作法など〻云ふ學課をわざ〳〵女學校で施さなくても好い證據である。

×

私の最も滑稽に感じて居るのは女學校で小笠原流などの古臭い禮式を敎へる事です。禮儀は元來實際社會の必要に應じて進歩すべきものである。日本の日常生活の何處にあの樣な禮式が行はれて居るか。此忙しない日本の活動を重んずる社會に、あの樣な型に這入つた、人形の樣に靜かな禮儀の必要が假にもありませうか。自分も女學校で小笠原流を習ひましたが、今日迄學校外では少しも用をなさないのです。其れよりか家庭で習つた踊の方が、久しく自分は踊らないにしても人樣の踊を觀る時の參考として益を受けて居ります。

女ばかりが女禮式通に三つ指をついて茶や煙草盆を運んだからと云つて、男が然う云ふ迂遠な禮儀を都合よく知つて居て呉れ〻ば好いが、反對に全くそんな禮儀の必要すら感じて居ない。家庭でも社交でも用をなさない禮儀は無駄である。其れを奬勵する文部省は學生に虛榮を戒めながら一方で盛に虛禮を敎へる自家撞着に落ちて居るのが可笑しい。

時代物の芝居に出るお姬樣の樣にぞろりとした行儀作法が、靴を穿き、テニスを遊び、外國語を讀む女と何の調和があらう。修身のお話に戰國時代の武人の妻を例に引くのと好一對の滑稽である。さう云ふ時代ちがひの物を採用せずとも、纏らぬながらも現代には現代の禮儀が可成立派に行はれて居て、實世間は其れで少しも不都合を感じて居ないに拘らず、わざ〳〵女子にのみ其舊式な作法を敎へるのは無用の沙汰、煩瑣な形式敎育の一例ぢやありませんか。

×

今一つの例を申しますと割烹です。之は三年級から初つて每週大抵四時間を費す學課に成つて居る。卒業までの三年間に凡そ四百五十時間を之が爲に割くのです。

屢々申した事ですが、私は此『割烹』をも亦學術だと思つて居ない。家庭でおつ母さんとか女中とかの手助を必要に應じて爲て居れば、自然に火加減やだし加減の會得が行くものである。他の精神的の學問や物理化學などゝ違つて格別師授を要しない。日本人の食物の嗜好と富の度とが破格の激變を來さない以上、たとへ一週に二三度洋食まがひの物を膳に上すとしても、二三の料理書を參考にして多くて十度も仕損じを經驗すれば屹度出來上る事である。然樣な物を學課として、長い時間と、少からぬ財力と、貴重な精力とを費させ、わざ／＼學校の敎室で勿體振つて敎へる必要が何處にありませう。女學校を罵つて高等女中の養成所だと識者が云ふのは不當でない。



覺束な木の間にみゆる夕月も散はかりなる木枯のかせ（景樹）

日本人の大多數を占めて居る農民達は未だ凡て麥飯を用ゐて居る。甚だしきは麥飯すら取る事が出來ずに粟や甘藷を御飯代りに常食として居る階級もある。東京を一二里離れた所でさへエゴ芋を茹でゝ鹽を附けて常食として居る部落を見受ける。中流の生活と云つても副食物の八分までは野菜である。女學校で敎へる樣な洋風の料理なども匂ひも嗅がないで一生を終る中流人も地方には少くな

い。斯樣な社會の實狀を考へずに、フライ鍋やヘットや舶來の醬油やを要する高價な料理を學課として授けるのは無法である。斯う云ふ點に於ても文部省は女學生の虛榮心を煽り、且つ勤儉を奬勵する度々の訓令を自ら破つて居る。

せめて女學校で敎へる割烹が經濟的に出來上るか、手際よく敏速に出來るか、或は普通の廉料理屋で調へる丈にでも味加減が良く出來るかすれば、家庭に歸つた上で役に立つ場合もありませうが、どの女學校の先生にお尋ねしても、どの家庭で承つても、一つも此條件を滿す結果を得て居ませんのを見れば、要するに無駄な學課だと思ひます。

もと〳〵料理の巧拙は多年の熟練に俟つべき物で、學校で致す樣に時間づめで機械的に習つたからと云つて急に巧く成れる物では無い。其れに家に由て經濟事情も違へば人に由て嗜好も違ひますから、女學校の敎室に備つて居る樣な料理の器物が必ず取揃へられるもので無く、又學校で習つた通りにして調へた料理が家族の口に必ず適するとも決められません。學校の卒業式などの場合に許り役に立つて、家庭では殆ど應用が出來ないと云ふのが現在の實狀です。

×

私の提議に反對する側の論者から、「其れは高等女學校の敎育に餘り重きを置くからである。少し氣の利いた家庭では女學校の敎育のみで滿足して居ない。卒業後結婚する迄の二三年は何か本人の希望する學問技藝を更に都會へ出して學ばす事に成つて居る。又女學校で敎へる作法や割烹も何かの場合の參考に成らうから、まんざら無駄に時間を費す譯でもあるまい」と言はれるでせう。

併し私は猶聰明な父兄達の反省を乞ひたい。其理由は、現在女學校に於て右の二學課の爲に無駄に費される時間は決して少くないのみか、他の必要な學課の時間に比較して餘りに過大であるのです。女學校で重な學課と云へば誰も數學とか國文とか地理歷史とか作文

とかであらうと考へ、其等に割當てた時間が多い事であらうと想像されますが、其れが何うでせう、實際は數學が毎週に二時間、作文が一時間、國語が二時間、地理、歷史、物理化學が各ゝ一時間、裁縫が四時間と云ふ有樣です。其で前に申した一時間の作法は數學や國語の半分、裁縫を除いた他の學課と同數の時間を取つて居る譯に成ります。又四時間の割烹は數學の時間の倍であり、裁縫以外の學課の四倍に當ります。又大切だと云はれる修身は纔かに一時間ですから、作法と匹敵し、割烹の四分の一の時間しか敎育勅語の道德には費されない割台に成つて居ます。

煙草盆の持運びや不味い手料理の拵へ方などを習ふ事が、數學や、國語や、地理、歷史、作文、物理化學などに匹敵し乃至幾倍する丈の價値のある學課でせうか。苟も常識のある者は、餘り平衡を失した此時間割に驚かない者は無いでせう。之は貴重な娘盛りの時間を空費させる許でない、やがて其多大な時間丈の精力をも併せて徒消させる事なのである。若し其時間と精力とを他の有益な學課に轉用したならば、女學生の學力は現今に倍する事とも成るでせう。私は其れを惜まずに居られません。

×

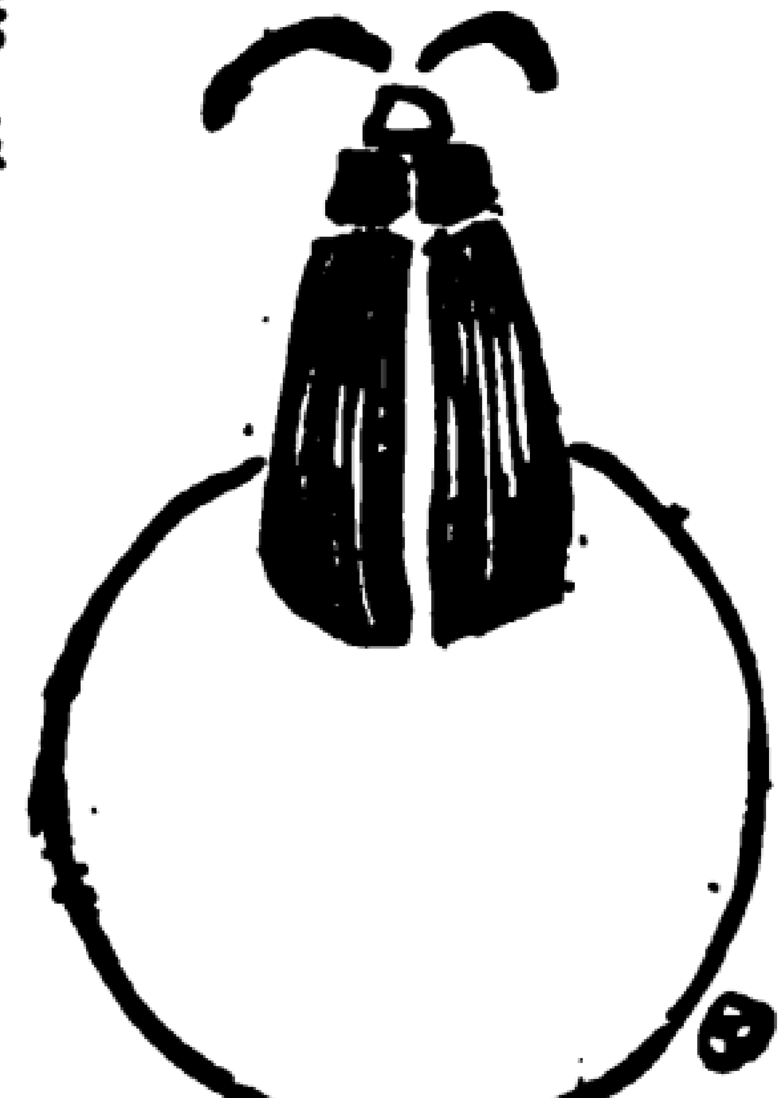
以上は一二の甚しい例證を擧げたに過ぎません。此外にも無駄な敎授法を緊縮して或學課の時間を減じたり、前の作法や割烹を削減して剩し得た時間で他の學課の程度を高めたり、いろいろ刷新を施すべき箇條が多い樣に見受けます。

作法の中で舅と嫁とに擬して婚禮の下稽古をさせるのなどは生理衛生の學課の中で純潔無垢な十五六歲の少女に對して、如何はしい生殖の話や分娩時の豫習などをさせるのと共に、未だ容易に目覺め想に無い或性情を誘發する刺戟と成る虞のある事柄ですから斷じて廢止すべきものだと思ひます。男子の敎育者は斯う云ふ事に疎い樣ですから序に一言しますが、槪して女と云ふ者の生理的關係は、野卑な家庭とか、不良な習慣



に染んだ友人とか、男子の誘惑とかに刺戟せられない以上、廿三四歳までは自發的に性の慾念を感じる物では無い樣です。周圍が清淨であつて其中にそつとして置けば、白玉の如く蕾の如き純潔な少女心を其年頃まで確かに保つて行かれる物の樣に思はれるのです。之が爲に私は近頃世に唱へられる性慾敎育論に對し容易に贊成が出來ません。のみならず前の樣な嫌のある女學校の敎育をも厭はしく思ふのです。

私の此感想は、此夏の休暇に上京せられた高等女學校の先生達の御意見をも參考とした上で認めました。



自然美 藝術美 の敎育

女學世界九月號の或る論文に「賢母良妻とは冷酷なる女の謂か」と言ふ言葉があつた。其の言葉に今の女子敎育に携はつてゐる者は何と答へるだらう。立派な答へは出來ないに極つてる。

多くの校長とか敎頭とか言はれる者は賢母良妻と言ふ言葉を知つて居りながら、女に必要な美の精神を養ふことを忘れてゐる。

灰色の敎場で朝早くから夕方迄、形式的な明るい色彩に乏しい先生の講義を聞かして、其れで賢母良妻が生れると思つてゐるから不思議だ。

成程女には裁縫が必要だ．數學も必要だ．然し其れ以上に必要なものを忘れてゐる。まさか女學校に通つてる生徒が學校を出てから後に皆が針仕事や會計方を行る譯のものでもあるまい。

女生徒の多數がスウヰトホームを夢見てるではないか、美しい夢を。

ところが學校では灰色のデリカートの氣分のない女性を作らうとしてゐる。斯く不趣味に作り上げられた女にはスウヰトホームを望んだからとて得られまい。

結婚とは不器用な女中になりて行くことだらうか。男の玩弄物となることだらうか。さうでないことは不言と知れてる。

學校で生理學を敎へ、形式的の道德を說いたからとて賢母良妻に適した者は出來ない。

私の友人で某高等女學校の圖畫科を擔當してゐる人がある。其の人は手本を敎へるのが嫌ひで多くスケッチをさせた。すると校長が來て、

「君此の學校は賢母良妻を養ふ所ですよ。スケッチなんかより手本で一ッの物の形を敎へた方がいゝ、人其

になつてから畫を描く譯でもないだらうし」と言つたさうだ。此の樣な校長は圖畫科が何の爲になるのか知らないのだ。友人の積りでは、スケッチをさせて少しでも自然に近寄らせ、自然は面白い、美しいと言ふ趣味性を養つてやる筈だつたのだ。

私も此の友人の方針には大贊成なのだ。斯く圖畫科で自然の美しく愛すべきものであることを敎へ、唱歌科では音樂と言ふものを知らせないまでも、コーラス等を聞いてゐて面白いと思ふ迄に耳を養つてやつたら高尙な趣味ある女性が生れるだらう。

高尙な趣味ある女でなければ夫と共に幸福なホームは作れまい。互の愛は冷めやすい、到底賢母良妻とは言へないのだ。論より證據三面種を供給する女に心の修養が出來てゐるか。

學校では女生徒に家政を敎へ、割烹を習はせ、其れで良妻たる資格のある女が出來ると思つてゐる。譬へ家政や料理が上手であるとも其の女が灰色の女であつたら幸福は得られまい。

此れからの女には科學的の頭も必要だ。然し其の爲に美的趣味性を消失する樣なことではいけない。完全な哲學的氣分があれば美の觀念も出てくるだらう。だけれど此の樣な行り方は遠路だ。であるから女學校の圖畫科唱歌科で直接に自然美藝術美を知らさなければ駄目なのだ。斯く趣味性のある女でなくば賢母良妻の資格はないのである。

不趣味な灰色の女には到底ロングラブは得られないであらう。灰色の女には眞の暖か味はないであらう。

趣味ある女には生が面白く味はへる。自分が苦境に落ちても其れを客觀して見ることが出來る。自分の悲しさも面白くなる、自分の怡も無意味でなくなる、總てを面白く美しく味へるのだ。

學校はなせ生徒をして斯樣な幸福な女にしてやらないのだらう。

學校とはデリカートの氣分のない、生意氣な女性を養ふ所を言ふのだらうか。

いくら女子敎育者が質素なれ、質素なれと叫んで無

駄な黒木綿の禮服を作らせ、少女に着せたからとて、少しも感心したことぢやない。美的內容のないものに美的ならざる衣服を着せるのは、唯さへ灰色のものを尙ほ灰色にする積りなのだらう。

いくら今の女學生が壯美に憧憬てゐるなんぞと言つても信じられない。壯美にあこがれるばかりが女らしい女ではないもの。

斯くて女性の女性たるロマンチックな氣分が失はれて行くのではあるまいか。

女子敎育者よ。彼等少女を灰色に作る勿れ。譬へ現代は灰色であるとも――

彼等に自然美、藝術美を知らしてもらひたい。美的趣味に富んだ女性を作つてもらひたい。もし彼等少女に幸福を與へる積りならば――

つまり、趣味ある、パッシオンに富んだ女を養なつて、女らしい高尙な女を出してもらひたいのだ。

女子敎育者よ、賢母良妻てふ意味を過る勿れ、汝美しき者名は女なりてふ女を養へ――（ＫＭ生）

文藝協會の私演

坪內博士の創意になる同協會は、去月廿二日午後三時より牛込余丁町の協會附屬試演場にて擧行せり演藝の次第は左の如し　觀覽者評其他委細は次號に譲る。

第一　式辭

第二　現代劇

人形の家　二幕

監督	島村瀧太郎
同	中村吉藏
トルヴルドヘルマー	土肥庸元
ノラ	松井すま
醫師ランク	森英治郎
リンデン	廣田はま
ニルス、クロゲスメッド	東儀季治
アンナ	佐々木積
エレン	吉田てふ
外使の男、子供等	

第三　舞踊劇

作歌及指導	坪內雄藏
作曲	吉住小三郎
同	杵屋六四郎
振附	藤間勘右衛門

甲、寒山拾得

寒山	坪內大造
拾得	田中いせ

乙、お七吉三

お七	坪內くに
吉三	吉田幸三郎

丙、鉢かつき姫

宰相	松井すま
姫	坪內くに
太郎冠者	坪內大造
次郎冠者	坪內はる

三曲共

長唄	三味線
吉住小三郎	杵屋六四郎
吉住小三藏	杵屋彦之助
吉住小四郎	杵屋和三郎

外囃子連中



和歌

一等 ○ 越後 塚野たか

上葉かれ末葉亂るゝかるかやはこの世をあきの心なるらむ

評、眼前の景ながら、秋の心と見たる所面白く、詩詞の遣ひざまもいとなだらかなり。

二等 ○ 津 濱千鳥

夢にだにまゝになる世と思はじな人にかくれて袖ぬらす身は

評、詞淺情深

二等 ○ 川越 綾部とみ子

さす傘の柄もりのしづくひやゝかに秋は來にけり雨降る中を

評、着想頗る奇

三等 ○ 門司 ちゑ子

さとゆらぐ森をおそはむけはひしていや下りくる山頂の雲

評、風雨來らむと欲するの光景、勇ましとも勇まし

三等 ○ 高輪 島泊子

しろかねの穗すゝきなびく野のはてに黄雲流るゝ秋風の國

評、瑞穗の國の秋を歌ひしものなるべし。

三等 ○ 川越 貝谷むら子

ともすれば他人の情にすがりゆくをみな心をあはれとぞ思ふ

評、調健に、想亦凡ならず

秀逸

○ 伯耆 たつ田子

美しき人の瞳のうるみはるゝ如今宵十日の雨上けの月

評、比し得て奇警

○ 埼玉 大塚伊勢子

立ちめぐる畑の行手たそかれて夕もや低し川添の家

評、繪のやう也

○ 大坂 紫 子

大長寺小春治兵衛の戀の塚夕日は落ちて何どりか飛ぶ

評、言外餘哀あり。

○ 美作 郁 子

かなしみに破れし胸を縫ふ針の絲のいろには紅ぞよき

評、奇想。

○ 伊勢 森田まさ

姉と呼びし人も嫁きて寂しくもこほろぎのなく秋風の家

評、嫁入りせし跡の寂しさ歌ひ得て遺憾なし

○ 淀橋 章 子

みだるゝは心の絲かくろかみか庭もあらしの秋のたそがれ

評、面白し。

○ 山梨 尾谷おき子

人とはゞ何と答へむ我が涙只嬉しくて只悲しくて

評、人に嫁せむとする人の涙歟。

○ 長野 前島節子

秋風はおとづれにけりさはあれど我おとづれむすべもあらなく

評、調美を以て勝る。

○ 下總 月沖百合枝

春短く母校をいでしうら若き夢そのまゝにとつぎゆく秋

評、女學生の嫁入を歌ふ。

○ 島根 中村八千代

すく／＼とコスモス延びぬ痩せ性のわが十八のたけの如くに

評、比喩妙

佳作

○ 横濱 佐野孝子

なんとなく人の戀しくなりにけり河原撫子に小雨する宵

○ 大阪 本山綾子

見かへれば艶なる人も振りむきぬ京は五條の宵うす月夜

○ 大阪 本山須磨子

いつになく姉のそぶりの氣になりて眠られざりし夜もありしかな

○ 河内 絲若柳野子

ゆく水に萩はこぼれて流れけりわが世の戀の末の如くに

○ 麹町 石井君子

づと浮きてつと沈み行く魚のごと心にうつろふさき戀しみ
○　紀伊　みさほ

人戀し亡き人戀し露光る夕べとなれば亡き人戀し
○　大塚　野村德子

日每〳〵小さうなりゆくあさがほに淋しさおぼゆ初秋のあさ
○　小石川　下田有喜子

かわきたる我が唇を撫子の露おく花にそと口づけぬ
○　東京　渡邊梅子

箱根路や八州の秋見はらして盃ふくむ髯しろき人
○　橫濱　小豆澤しげ子

こがらしは木の葉ちらしてつと過ぬ灯ともし頃の山の古寺
○　京都　渡邊房子

秋の世のそゞろ身にしむ夕くれやわがわくら葉のちるとおもへば
○　備中　植田とみ子

窓の戸を鎖し忘れて寐たる夜の寢ざめを誘ふ初秋の月
○　埼玉　林　歌子

片言を覺ゆる程に父の名を呼ばせても見つ閨のつれづれ
○　米國　村越光子

戀しらぬ天つ乙女がなよやかにさし舞ふごとき夕ばへの雲
○　本鄉　安藤君子

聖堂のかねきく夕のさびしみや木槿の花にかろき風ふく
○　三浦　林　亞會

たひまくら物思ふ秋の夜をなかみいれかてに聞く波の音哉
○　和歌山　妙子

月ふむで今宵も同じ野に出でぬかなしき蟲の音を聞かんとて
○　大塚　木原よれ子

すむ月の清き光を背にうけてならざる戀に泣く乙女かな
○　長野　夕かげ草

ならはしの朝風呂やめて鏡がんとおもひても見ず此三十路まで
○　四谷　島田あい子

もの言はぬ少女と人のうらむれどわれ十六の只はづかしうして
○　麴町　蘭の花

語らんに人こそなけれすがるべき君ゆゑつらき今日の思ひを
○　京都　大草孝子

幽玄の空を馳せゆく吾想音なき桐の一葉に破れぬ
○　埼玉　のはぎ

鬼灯は赤らみそめぬ妾と云ふさびしき名さへ身になれし頃
○　越前　靜子

有明の月をうつして其まゝに波靜かなる朝の海づら
○　小石川　うす衣

一葉すら動かぬまひるま垣より一尺高くひまわりの咲く
○　金澤　芳江

何となく歯打ち見るが羞かしく疊の目など數へてありぬ
○　島根　周藤まさの

ときはなる青葉の山も秋くれば色こそかへれさびしかりけり
○　本所　川島いし子

蚊遣の業なし終へて沐浴して竹の葉ごしに夕月を見る
○　名古屋　白ばら

おばしまにゆきかふ人の影白し四條河原の秋の月の夜
○　深川　なでしこ

色あせし紫陽の花艶失せし女の顔のさびしさ思ふ

○　京都　靜原さき

古里は父こそ居ませみの蟲のちゝよと啼くをきけば悲しき

○　兵庫　小林やゑ子

一人寝のいとさびしさにふと知りぬ我が戀はじめ歌のはじめを

○　淺草　清水美枝子

みむれをばやみておはせる背の君をさけてふきてよ秋の初風

○　長門　井上たき子

わかれ路はかなしきものよ何となく灰色のむむれおほひつゝ

○　那覇　吉永和歌子

いく十度くりかへしてもをたまきの糸のみたれのとけぬかなしさ

○　姫路　杉山靜子

嬉しきに悲しき事毎に偲ぶなり語るに母のおわしまされば

○　大阪　まさ子

幾千度同じ事のみ繰り返し遂に果つべき人の運命か

○　大阪　東濱子

弓なりの長き睫毛のその先の露の様なる涙もよけれ

○　豐前　西原千代子

立田姫月照る夜中にそと來りをしへ給ひぬこほろぎの歌

○　麻布　鈴木喜惠子

綵星の光にも淡く紅に耳朶そむる此頃のわれ

○　呉　ふじ花

すみ渡る月の夕の里の秋祭ならしの笛の音ぞする

○　備後　松下愛子

眠られぬ枕邊冴ゆる蟲の音や留守もる人のうら若きかな

○　大阪　藤田富士重

小扇蓮入日背にして星川の板橋わたる秋の夕暮

○　駿河　宮澤靜枝

秋となり月見草咲く頃となり亦もや君とわかれんとする

○　宮城　齋藤なよ子

こほろぎは秋を悲いて草に啼くわれなく秋は戀てふために

○　京都　村上光

をみなへし其ひともとは眞清水に姿やどせる比叡の山みち

○　和歌山　すゞらん

ふとさめて今見し夢を闇に描き恐怖に胸をひしと抱きぬ

○　靜岡　豐井住子

敷妙の枕に通ふすゞ蟲の聲もさやかになれるころかな

○　赤坂　幸子

別かれにし君やいづこにおはすかと思ふたびたにむれかきみたる

○　金澤　白百合

見送りて怨じても見ぬ我胸に波紋のこして歸り行く君

○　美作　出雲井たづ子

父ませど母は在せと何となくさびしさに泣く十八の秋

○　仙臺　千代岡ちよ子

森のやの池邊のぱつた音さえて月も靜かに夜は更けにけり

○　長崎　つたゑ子

うつしゑのわが眉さびし十八の若きほこりにもの思ふかな

○　靜岡　大瀧千代子

琴の音に庭の白萩ほろに散り夢のやうなる月夜となりぬ

○　豐前　小枝子



俳句

天

牢屋固め思ひ踏む紅葉ひそか夜に　神戸　壽見もと子

地

一灣の風光を飛ぶ艫かな　小石川　鳥越寛子

人

啞の子の笑へば淋し秋の暮　四谷　笹原清子

秀逸

まびき菜の籠に散りこむ柳哉　深川　増田雪恵

かゝる奇景見る舟行や月の秋　四谷　あや子

大原女や駄馬をよけ立つ萩の中　神戸　佐々房子

俳行脚野菊一途の日和かな　越後　東樹善子

霧の寺尊くおはす佛かな　埼玉　林歆子

秋晴や洲景色鹽田繪名所に　肥前　服部信代

鷄頭や閼伽桶乾き飛ぶ羽蟲　越後　東樹初子

宿題の作文も秋の夜長かな　本郷　松原鶴子

常磐木の蜘蛛巣拂ふや朝の霧　越後　櫻井こう

作り朝起菊き馴れて老いにけり　函館　横山勝子

牧場晴れや阿蘇垣遠に蜻蛉飛ぶ　香川　大井裕子

捨てゝ久し扇の骨や野菊咲く　富山　深川外喜子

水國の夕燒廣し花芒　伊豫　有田育々代

秋蝶や散り果てし萩に飛ふ哀れ　京城　川崎みつゑ

風にとぶ蝶の骸や今朝の秋　安藝　宮本好子

行秋や閨怨の叙情歌も振ふ　京都　町田てる子

稻實ばむ此頃部落祭かな　北海道　矢萩常子

露寒し野守が庵の朝煙　埼玉　野登若葉

葵咲く家に女傑の奮あり　美作　廣岡隆子

讀破しで靜思の境を蟲澄めり　本鄕　塚越はるの

秋の蚊やお針仕舞ふて雜誌讀む　三河　美枝女

雁鳴くや風となりゆく黍の雨　千葉　神崎愛子

萩原に兎さまよふ月夜かな　滋賀　草場貴志子

コスモスや雨にもつるゝ垣根草　名古屋　ひろ子

帶水の島にも見ゆる紅葉かな　但馬　古橋都富

夕風に落穗を拾ふ侘しさよ　東京　和田關子

枝豆や鄙語りも花崖に　神奈川　佐藤　月子
天高く地ひろき秋の野原哉　香川　大西　愛子
柚の灯のかなたに見えて嵐の聲　埼玉　秋山　ゆう
獣讀に耽る書齋や茶立蟲　水戸　森山　道子
初塵に聞く双胎やそゞろ寒　茨城　春野三千子
僅攀塞の島つぐ清水野萩かな　東京　秋山いのこ
客去つて夜氣靜なり秋の雨　和歌山　小瀬田富美子
月落ちて影暗き庭や桐一葉　横濱　蘇瀬よし子
峰寺のむら立つ杉や天の川　越後　東樹　末子
蟲なくや軒端幕にさす灯　本郷　在原　業子
行李ひらけば萱の香句ふ夜寒哉　札幌　俣野　恭子
朝寒や牛乳搾り放つ牧の牛　飛驒　伴　いつ子
下駄音に枕にひゞく夜寒かな　廣島　平本　恒
秋暑く障れば落る零餘子かな　石川　向井きみ枝
花野來し雨晴れぬ街夕映えて　遠江　大浦つや子
鵙鳴くや夕淋しがる湯治人　横濱　鈴　雨
流人乗せし船着くや秋風の島　大阪　稲本　白藤
朝寒や鏡にカチと櫛落ちて　島根　中村八千代
夕榮や紅葉に染みし侍女の面　大和　林　愛子
百舌鳴くや霧雲もかゝる富士　東京　竹内ふみ子
朝露や萩ほろ／＼に袖寒し　大阪　伊　志子
愁々の情に雨落つ一葉かな　本所　小池　こう
蟲鳴くや灯消えて草の月　横濱　稲毛たき子
乳足らぬ兒に泣く妹や暮の秋　長門　桃　子
爪痕もある澁柿や枝低に　香川　吟熊　咲子

字の葉の露や朝風よき程に　小石川　宮川よし女
蟷螂や布百反の染栄　神奈川　鈴　雨
このあたり關所の址や女郎花　大阪　淺野八重子
垣外の高穂や萩にもるゝ月　福島　野木　靜枝
逝く秋の怨は深し破れ團扇　相模　ゆかり
狐捕つて持ちよる灯夜寒かな　藤枝　山内　豊子
蟷螂の鎌の錆れや秋深し　牛込　小森たけ子
縁臺に痩鷄頭の殘暑哉　信濃　田中　英子
家根損ふ倒れ木伐りぬ暮の秋　肥前　服部　芳子
野邊見れば歌懐しや今朝の秋　島根　和崎トシ子
旭さす染屋干場の芙蓉哉　清國　土井かをる
葬花影慕ふて飛ぶや秋の蝶　土佐　森本　榮
雲飛ぶや詩歌幾段の秋逝きて　南洋　つき女
羊腸の一徑長し蟬時雨　小石川　中川　篤子
秋風や夏瘦せし身を喞つ歎　在米　山縣　秋子
玉簾の家の漏ぬ灯や蟲の聲　大和　西田　とよ
明月や窓際近き蘆の風　芝　篠崎セイ子
穗芒に體埋れし術馬かな　廣島　代古多光子
投げ挿しの萩美しき書齋哉　羽前　鈴木三保子
溫泉の里は暮るゝに早し初嵐　瀧の川　田島　貞子
油買うて歸る花野路雨となり　大阪　栗原　りう
白萩に崗士訪はれぬ京の宿　數橋　平岡しづ子
朝顔や式部が抱く矮狗　茨城　岩田清香子
傀船日和など友寄りや島の秋　長野　赤羽よし江
女郎花路標こ雨の靜にて　三竈　南　高子

誌友倶樂部

▲おなつかしい萩香様、朝顔の花のしぼむやうにー　とは何と云ふ淋しい心持でせう、他から理解されない私は、「現代の人より」を拜見して同じ思ひに泣きました、（東京、靜枝）

▲磯千鳥様のサラベルナールの女優になつた履歴のやうなものほんとによかつたのね、新つれづれなど御かきなさる御筆で、又、こんな現代的なハイカつた御文章を拜見して、その御思想の豐富なのに感心して仕まひました、萩香様の御文章も好きでございますが磯千鳥様の落付いたおかき振りも捨てられない味がございますことね、此ごろ野菊様は見えませんね、何う遊ばしたのでございませう、目次開いて御名のないときはがつかり致しますのよ、この方のは千代子様とは反對の御思想だと思ふて居りますが……（山形磯風あらき岩の上より）

▲始めて投書致します、私は未だ小さい者でございますが、愛讀者でございます、皆様御交際を願ひます、在米の方々は御なつかしうございます、私の御友達はミルスカレーヂですの、それで私も渡米いたしたいのですの、以後誌上で御交際を、（末子）

▲記者様、梧水先生は文學士物集高見様でゐらつしやい升か、九月號の玉藻前は大さう面白うムいました、多年不可解を抱いて居りました那須野が原の殺生石も、すつかり解りました、内藤様はいよ〳〵「スヰートホーム」と名乘を上げて見事な御成功遊したさうで誠にお目出度う存じ升、赤い鳥なお啼き遊した横笛様は、女詩人的な優美を發揮してゐらつしやい升のね、眞情がほの見えてそゞろにお慕うムい升、私はあのやうな餘韻の長い高尚な文が大好きです（山形市物河鈴子）

▲いろ〳〵の方の寫眞を持ち合せが澤山御座いますが、貴誌に出して下さいますか、一寸お知らせ下さい、（東京にてばせを）――御送り下さい、成るべく掲載致します（記者）

▲九月號に、お顔なじみで無いお名なじみの皆様方を始め、その少女なると若奥様なるとを問はず、御めい〳〵の主義やら主張やら理想やら我おとらじと例の御健筆でおのべ立て遊ばす様、凄まじい光景、……いえ秋草チヾにみだれ咲く百花爛あたりも却々これには及びますまい、次に當北海道の皆様方のお名がさつぱり見えませんのね、淺學無智なる私さへなにか筆にして見たいなんて飛んでもない事考へる時もございますものを、才あまり學深き北海の諸姉様方、どうぞ此秋は一つおふるひあそばして下さいまし。（北海道大沼湖畔岡田はる子）

▲皆様へ玉詠懇請、私の愛甥、佐藤助之丞は、八月二十二日四歳九ヶ月を一期として、永久の眠につきました、私は今般、大方の諸先生、諸兄姉に、詩、和歌、俳句の御惠送を請ひ得て、愛兒に別れし姉兄を慰め、いつ〳〵までも家寶として保存致したく、失禮を顧みず誌上にて願ひ上げます、追て料紙は短册色紙に御願ひ致します、（新潟縣南蒲原郡中野村岩本澇子）

▲久しぶりでくげ沼へ御歸省なされた内藤千代子様、今はもう東京へお歸りあそばしてゞございませう、一回毎に御上達の貴女のお作、此頃はすつかり圓熟してうれしうございます、けれど私は一昨年あの逝く春時代の萩香様がおなつかしう存じます、情死するが一番だなどゝおつしやらず、まれに見る御才筆ないよゝおみがきあそばして、信ずる所へお進みの程をかげながら……スヰートホームが出ましたさうで、ほんとうにお祝ひ申ます、あのくげ沼に淋しくおくらしのお母様が、まあどんなにか……、高木風にあたりやすきのたとへ、貴女に對する世上の評は千差萬別、そりや仙人ぢやあるまいし、さう〳〵皆様方のお氣に入る様には出來ませんわね、ずゐ分ひどい事を云はれても、ビクともせ

ず雖然とすまして相變らずつゞけてゐらつしやる所、そりや私だつてあんまりなと思ふ事もありますけれど、敬すべき所は所で外にちやんととつてあるのでございます、(北海道大沼春子)

▲宇都宮市四條町の山縣はる子の君、とは何んな御方かは存じませんが、白百合は君樣の御庭にゆるぐのじやなくつて?、一望渺茫たる關東平野を前にひかへて、テキサスではないが、秋やなじかの其の鳴く頃は、黄金の波が五萬丁も一億丁も……、ホヽヽヽヽ最も君の御宅が二荒山の方を向いて居ては駄目ね、あつ、これは失禮、御免遊ばせ、夏だ夏だと思つて居るうちに、いつか青葉のつけれが弱々しうゆるぎそめて、頬うつ風も何となくひやゝかになりましたこと、昨日まで固うとざして居た、方々の校門が、今日からはにぎはひます、この駄筆が、誌上に表れる頃には、運動會に遠足會に常には、かよわいと見た才媛も繊手健脚を思ひのまゝに動かせて、……あゝまたれます、秋の活動が、本誌の活躍も……(九月一日、三條町の宿にてふみ子)

▲九月號に「葉末の露」をお出し遊ばした砕花樣とは、ほんの一時の假の御名、實は、元、都に居らした哀歌樣ではございませんか、若し違つたら御免を……、彼の熱情籠つた、而かも哀愁極まる御歌の數々、それに御説明の御口調といひ、ひし〳〵と胸を刺される思ひが致しました、何卒次號に御名をおあかし下さいませ、私は毎號缺かさず當雜誌を愛讀して居りますから今後も度々御作を御かゝげ下さい、切に御待ち申して居ります、(京都にて芹の花)

▲萩香樣こそ永久に變られる事はあるまいかと思ふてたその人が、今月號の告白は何うでせう、けれど私はさめた千代さんはいや、もつと〳〵熱烈なさゝやきがきゝたいのです、こんな冷たい人になぜなつたの? 暖かいスウヰートな夢の中から、急に氷窟へでも投げ入れられた樣で、私はほんとに悲しう御座います、萩香さまの四邊の罪かはた年月のつみか、(つゆくさ)

▲私ね、女學校に居ります頃は、誌友の姉樣方がよく、學校卒業後友もなく何の樂しみも無くて本誌を唯一の友として居まりす、などゝ仰るのを見て、そんなはづは無いわ、これだけある同級生ですもの、と思つて居りましたの、そして自分が卒業して見ますと初めの内こそ皆樣からお手紙を下さいましたものゝ、一年の後の今月今頃、いつしか、お便りもとだえ勝となり、此の夏は、久々ぶりで母校の地を踏みましたから、思ふ樣舊情を暖めやうと存じて居りましたのに、曾ては同じクラスに朝夕を送つた舊友のお方で、道で二三度お目にかゝりましても、素知らぬおふり、御あいさつさへ受けては下さらぬ方も御座いますのですゝもの、私もう、つく〲情なくつて、家へ歸つてからも涙がとめ度なくこぼれましたの、全く女の交りなんて當になりませんわねえ、(宇都宮高等女學校卒業生の一人)

▲綠ちどりさんの「新徒然草」は、いつも〳〵面白く拜見いたします、「心情の善惡と容貌の美醜」は私等醜女の福音とでも云ひませうか、あれを讀んだ時は生甲斐のない世の中とも思ひませんでした、萩香樣のお作、此頃はなんだか悲觀的になつてきたやうに思はれますのね、私はいつかのやうに吹き出すやうなのが面白いわ今のはむづかしくつてわからないのですもの、(まがき)

▲九月號興味多く拜見いたしました、就中田中法學博士の愛情に活き「愛情に死せよ」、及び物集梧水先生の「玉藻刈」の記事は尤も興深く感じました、實に愛情は女性の天職を果す爲め必要なる命で御座いますわね、次に磯千鳥樣の「新徒然草」、萩香樣の「現代の人より」、相變らずの御才筆、實に感服の外はありません、お二方とも平安の女詩人を凌ぐばかりの御文才、誠にお羨しう存じます、ます〳〵御文藻お練り遊ばし

誌上をお飾り遊ばされんことを……、千代子樣は此度スウヰトホームてふ書物を天下に公けになされましたから、定めし好評を博する事で御座いませう、(群馬縣にて胖窩)

▲私、今月は最う華の都の東京を去つて、山紫水明の詩の都へ參りましたけれども、やつぱり華の都がなつかしいわ、此れから先はこちらの同志社へ參りますのよ、どうか姉樣方、誌上の御交際を願ひます、京都でローマに結つて居る人は一ヶ月の間にたつた一人見たきりですよ、麻布のよし子さん、相變らず彼の星を毎晩眺めて居らしやるの、海山をへだてゝ身は遠くはなれましても、やつぱり同じ靈井の同じ星を見るのね、(京都霧野)

▲誌友の皆樣、月や、蟲の音の、なつかしい、シーヅン、と、なりました、私は毎夜友と、海へ行きますの、そして、ハーモニカを合せます、足下へ、よせる波は、月の光りにすごく、でも月の夜の濱邊は私好きよ、皆樣、お出で遊ばせ、(神奈川波多野曉子)

▲末摘花樣、私をよくおわかりなさいましてね、よくあたりましたわ、先日は學校で失禮いたしました、どうぞたまにおあそびにお出あそばせな、萩の下露樣の淸少納言と其時代とおしやる文、ほんとによう御座いましたこと、又どつさりお出しあそばして頂戴、(歩のうきはし)

▲園藝同好の諸姉樣、御陰樣にて本年の花壇は素敵よ、殊に朝貌は申分なき成績でした、種子の交換又は實費分讓に應じます、實費は第五種郵便税壹錢にて、壹合も差上げられる樣なものも、壹粒壹圓以上のものもあると御承知下さい、(信濃國中央西線三留野驛青木恒子)

▲文壇の名花、上原綾子の君は此の頃少しもお書き遊しませんのね、何う遊したので御座いませう、これなりもう、當誌上を、お去りに成るのでありませんでせうね、內藤千代子樣は花の帝都にお出で遊して、健筆をお振ひになりますのに、綾樣が、お出遊さなくては何となく淋しう御座いますわ、(宇都宮にてふみ子)

▲近頃私は激しう空氣の壓迫を感ずる、もう呼吸するのも苦しい、氣息奄々たる今日、蟲聲喞喞、月光歩の樣に、冷つこい風が身にしみわたる夜、私は堪へられぬ、胸を兩手で抱きしめ齒を喰ひしばつて悶へる、床には琴があるが、柱をはめるのも物臭いつ「だしおくれた」としかみ顧の父、セカンドフアザアの運命を負つてる大人になつた弟のあの肩、私は窮屈だ、卵の殻にでも入つたらば……。(呻吟)

▲九月號浮葉樣の研究的態度、ほんとに面白く拜見いたしました、全く御説の通りつかずはなれずですわね、ホヽヽ、人生の準備期、御文章の御美しい事、感心致しました、嫁の流儀、等承るとほんとにお嫁入りするのも恐くなりますのね、だつてあき風樣のお書きになりました眞綿の蒲團の樣なお嫁樣もおありになるのですものと嫂は申して居りますのよ、(なにわ双葉子)

▲ほんとうにこの頃は御暑う御座いますのね、妾はこの夏を知火海のほとりで淋しく暮して居ります、七月號の千代子の君の御作大變面白う御座いましたね、淸風三千里な御書き遊ばした筑摩子樣、六月號に薄命の佳人を御出遊ばしたすみれ樣、御才筆の程御慕ひ申して居ります、御差支なくば、文通願ひ上ます、誌友の姉樣方にも御暇の節は御便り下されませ、ことに神戸横濱の諸姉樣にと東京と伊豫の御方に御交際願ひ上ます、(野の露)

▲誌友の皆樣、私も愛讀者の一人で、皆樣方と等しく東都の學窓に年月を過した事もある身です、たらわぬながら、世の荒波にもあてないで育てられた身ですが、或る事情の爲に、私事母の身を引受けて母の心を慰めたいと思ひますのよ、就ては相當の職業を得たいと思ひますが、皆樣の御内であはと思召して、御つかひ下さる事は出來ませんでせうか、同情ある諸嬢!!(尾道野菊)

▲もし新姉様の内に、渡米遊ばされ彼方の御様子詳しく御存じの方は、誠におそれ入りますが、下名まで詳細御一報下さいませ、私は渡米致したい一人でございます、又同志の方及び在米の皆様にも直接御交際下さいませ、それからアメリカに御在での熊谷常子様、御生地は廣島縣ですつてネー、私は遠くもない呉ですの、以後宜敷、(呉市荒神町二三七田中様方山内朝乃)

▲小田巻のまかき様、お言葉有り難う、私、伊勢子つて申しますの、お差支なくば御住所と御本名お明かし遊ばせな、何郡でいらつしやいますの、私比企郡ですの、もしやお近所でしたらおたづねいたしますわ、仰せの通り、埼玉はまつたくふるひませんのね、以後、あなたもどしどし御投書遊ばせな、私も埼玉の文字を見ますと、胸がをどりますよ、それでも、川越のお方は、二三人御投書下さいますのね、もつとも和歌ですけれども。(埼玉にて伊勢子)

▲桐生の若葉様にお返事申上ます私は桐生の四丁目安楽七のものですよ、誌友の皆様におたづね申上ますが、東京麻布の香蘭女學校卒業生酒井明枝様と申すお方の、只今はいづれにお暮しなされてかを、もしも御存じのお方がお出でしたらば、お手數ですが何卒お知らせ下さいまし、(桐の一葉)

▲三月の紙上で女子就職難お書き遊ばしたこはれ様、誠に恐れ入りますが、何卒御住所を下名まで御知らせ下さいませ、(大阪市東區玉造二間米屋一五一番地田村てる)

▲新姉様方、内地のなつかしいエハガキ御恵み下さいましな、私もきつと當地の戦跡や最後のを御送り申します、時分柄皆様方御身御いとひ遊ばせ、(新嘉坡にて森崎とき子)

▲北米シヤトルの白樺様、モンタナ州の居城様、ほんとうに御なつかしゆふ御座います、私隆ながら御慕ひ申してゐろつたない少女で御座います、どうぞ姉上様方今後ぜひ〱御交際を御願致します、いつも東の方の空を眺めて自由の風吹く北米の野なんとのうなつかしふやろ方なく、逢この誌上で、……なつかしい姉上様方、あはれと思つて御返事を御願ひいたします、なほみなさま地方の名所繪葉書交換を願ひます、(宮城縣仙臺市北町の子)

▲上海の葉山倭文子様、私この九月の下旬より御地へ参ゐります、何卒誌上にて御交際下さいまし、何れ機會が御座いましたら御目に掛かることも御座いませう、何卒末永く御交際を、(本郷駒込林町岑栄)

▲谷間の百合子様、御同情申上升、私もあなた様と同じき境遇にある者ですよ、それにこんな、

樺太の片田舎に居りまして、何樂しみもなく、たゞ〱船便を待つの外ありません、毎日〱故郷の空を仰いでは、獨り傷審の感に打たれて居りますのよ、以後は何とぞ妹と思召して、誌上にて、御交り下さいませ、姓名を申上度いが、少しく差支へますから御許し下さい、あまり勝手過ぎますが、あなた様より御打明かし下されば、直ちに、御返り事致してよ、……失禮ですれ、申上度は澤山ありますが、誌上では申上にくいのよ、どうぞ時節柄御身御大切に遊ばして下さいませ、さらば御なつかしの君よ、(樺太田舎女)

▲赤坂の入千草様、萩香様と富枝様のお寫眞お持ちでしたら本誌におのせ下さいな、(近江湖東の一少女)

▲新姉様、私は日本畫研究中のものですが、繪ハガキ(風景、草花、人物)、草花種子其の外何なりとも、御惠み下さろ方には、肉筆繪ハガキ、御返しいたします、又繪ハガキの畫紙、紙、絹、など材料さへ送つて下されば、至て下手で御恥かしい次第ですが、御望の繪をかいて差上ます、必ず(東京府下千住町中組三六〇今井殿作)

▲南湖院の柳子様、なんだか貴女が懐かしくて成りません、何卒お便り下さいませ、きつとお返事致します神(戸市中山手通二丁目深田愛子)

△イソップお伽噺　　巖谷小波著

世界で一番智慧のかしこい、おはなしの上手な人はイソップの翁であります、それ故イソップの比喩談は古くから世界各國に傳はつて鶏と水瓶の話、狐と狽の話など誰でも知つてゐる事だが、これまで日本で譯されたイソップ譯はどうかすると、むつかしい理屈に偏つて寓意譯のおかし味を失ふた憂があつた、然るに流石お伽噺の先生だけにこの邊の手心に十分注意が行屆いて至極おもしろく且つ教訓の旨意をも含めてあり且つ文章にはお伽一流の興味を添へる様に十分の潤色が加へてあるから智慧ある翁の尊き寓意が遺憾なく見へる、お母さんがこの寓意を呑込んで子供に聞かせれば家庭教訓の助にもなりませう、價一圓三十錢京橋區弓町三立社發行

△小學校に聯絡せる家庭教育　　小松鶴吉著

本書は學齢兒を有する家庭に向つて教育者の側から要求する所の家庭教育に關する注文で、少くも今日の各家庭にて是非とも斯様な用意と實行がなくてはならぬとおもふ、教育は單に學校任せで成績が得られるものでない事は何人も承知であるが、さて然らば家庭に於ては如何なる所置をなしてこの教育上の缺點を補ふかと云に、それを學理上より考へて實行してゐる家は極めて尠ないことゝおもふ、本書は即ちこれに就ての用意を示したもので、まづ食物、衣服、睡眠上の注意から、言語、動作に就ての習慣上の教育、意志の修練、秩序心の養成其の他有形無形の教育上の方針を説いてある、兒童を有てる父母は勿論將來母たるべき婦人の一讀すべき參考書である。價一圓神田小川町敬文館發行

△普通教育少年少女物語　　沼田笠峰著

小學校より中學並に高等女學校程度の少年少女の讀むに適するやうな物語二十篇餘を收む、逆まく波、第一の友、赤い髪、インキ壺、見知らぬ眞心等以下何れも教訓的にして、趣味も十分にあり、著者は其の材料を多く先に公けにしたる「子供かたぎ」に取りたるも、又全然創作にかゝるもの、或は獨逸、伊太利等の名著に依りたるもの少なからずと言ひ居れるが、兎に角通俗教育の資料として豐富の書にして、少年少女自身の好讀物たるのみならず、父兄等の子女の教育資料としても宜しき書なり。定價金六拾錢、神田區表神保町同文館發行

△楠公遺訓　　玉利紹龍著

楠公四天王の隨一として其の信任最も篤く、或時は公の寢所に入りて大事の議に與り、或時は危険を冒して敵陣を偵察して忠節を守りし恩地左近太郎の聞書を本として、誠忠無比の楠公の言行を研究解説したるものにして、其の言行には、多く世に知られざる事柄も少なからず、殊にやゝもすれば人心輕薄に傾かんとする、此かる書の出づるは尤も喜ばしき事とすべし、定價金四拾五錢、日本橋區數寄屋町六合館發行。

女學校出の女子　　西山悠治著

著者は米國人マリアン、ハード女史、ウイルソン女史の共著「彼女が大學より歸省せしとき」と題する女學小説を讀みて感ずる所あり、其の筋を採り、我國情に適する様にとて此の著をなしたりといふ、女學校の教育が如何に理論と理想とに走りて實際生活に迂遠なるか、又如何に之を實際生活と調和せしむべきかを諷したる面白き小説なり。定價金四拾錢、府下巣鴨内外出版協會發行

△少女百話　　沼田笠峰著

家庭或は學校に於ける少女の言行、境遇、性格に關する著者の實地見聞をはじめとし、著者の少女に對する希望、感想、教訓、評論等を記述したるものにして、少女の趣味の涵養と品性の修養とには至極良著なり。定價金四拾五錢、博文館發行。

△二人のやんちやん　　佐々木邦著

二人のやんちやんの外、あまりじやく、お鍋さん、仙ポコ、昔と今の數篇を集めたる面白きお伽噺なり。定價金三拾五錢、京橋區大鋸町文壇社發行

順境の人と逆境の人

〆切十月二十日

右題の下に考案したる文を募る

賞金

一等　金五拾圓　（一名）
二等　金參拾圓　（一名）
三等　金貳拾圓　（一名）
四等　金拾圓　（五名）
五等　金五圓　（十名）

△文はなるべく日記體小說體を希望す
△紙數は十五枚以上の事
△賞金は發表の當日現金にて送る
△原稿には「順境と逆境」と朱書ありたし
△名宛は「女學世界編輯部」の事
△原稿の文字は亂筆ならぬ樣に願ひます

募集（十月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞畫圖、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞畫圖、地賞五拾錢、人賞參拾錢

毎月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…金二十錢
四冊（三ケ月分）……前金七十五錢
八冊（半ケ年分）……前金一圓四十五錢
十六冊（一ケ年分）……前金二圓八十錢
内｛定刊數……十二冊　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一｝
郵税　一冊　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	五十錢			
四半頁	七圓五十錢	十圓		
半頁（卅二行）	廿三圓	十九圓	十四圓	
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用には一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十四年九月二十五日印刷納本
第拾壹卷第拾參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

通信販賣

博通社特賣品

●安心の出來る買物は博通社に限る!!

蓄―音―器―界の
レコードを破れり!!

●如斯價格低廉

●大聲蓄音器●



而も强大なる發聲を有し原音其儘にして明晰なる眞に實際の演奏に臨むが如し、

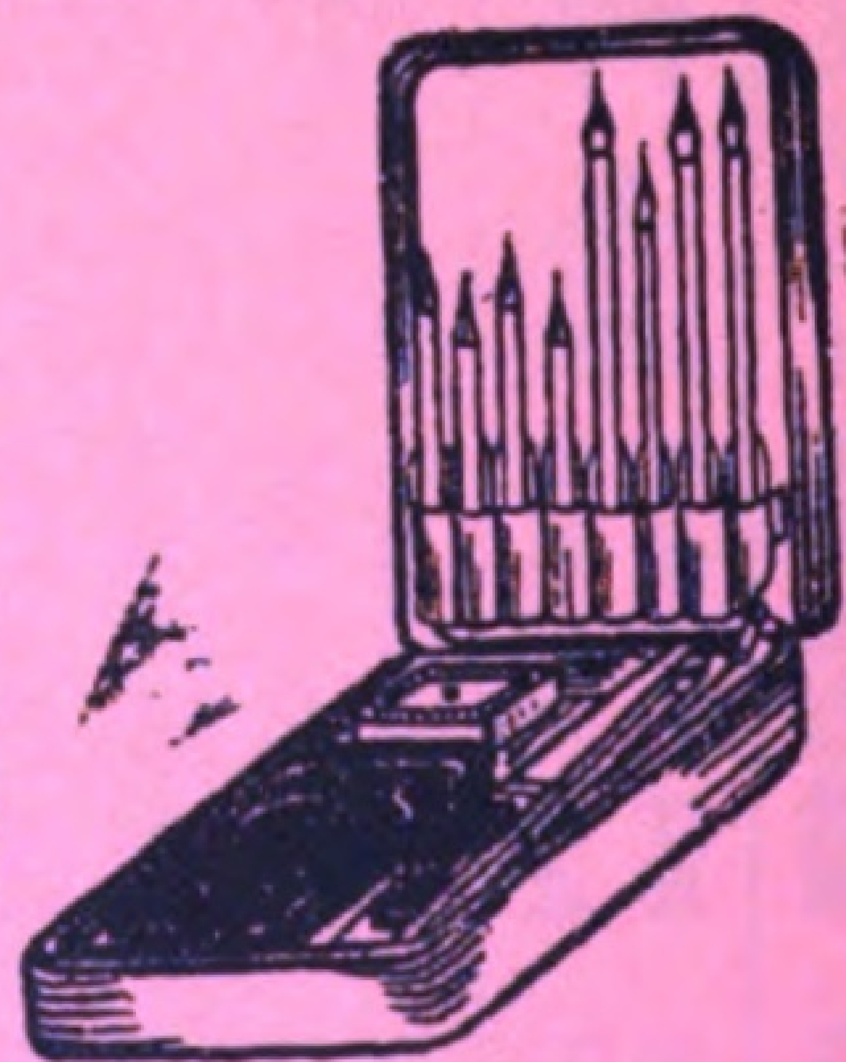
本器は蓄音器界の通弊たる一々針先を取換ゆる必要なく一本の針にて永久其の使用に耐へ其耐久力强大且つ少しも平圓盤を毀損せざるに於ては本器の尤も特長とする處なり

◎一號ラッパ付蓄音器　器械縦横八吋喇叭口徑一呎
▲一號用七吋半平圓盤音譜壹枚
壹臺　特價六圓八拾五錢
特價五拾八錢

◎二號ラッパ付蓄音器　器械縦横五吋喇叭口徑五吋半
▲二號用三吋平圓盤音譜壹枚
壹臺　特價七拾五錢
特價拾七錢
但音譜唱歌及俗曲廿餘種あり

● 一號　送料　市內無料　內地五拾錢　海外一圓
● 二號　送料　市內無料　內地廿錢　海外五拾錢

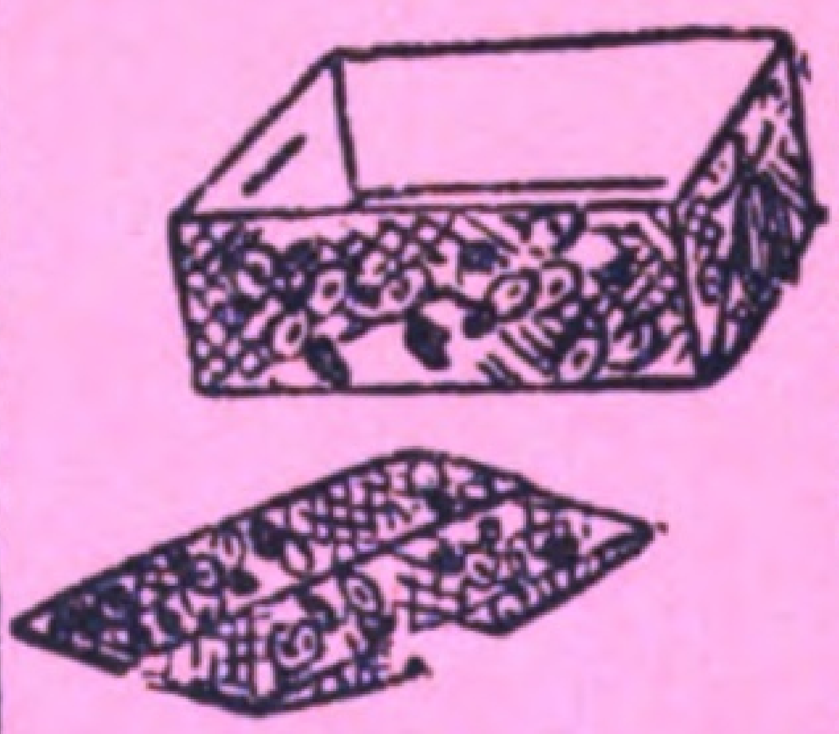
●新時代の硯箱



本器は金屬製優等漆塗蒔繪にして形狀頗る優秀而も實用的なり開けば用筆及用墨等自然に整然と現はれ決して散亂する憂なし眞に新時代の名に背かず

特價四拾五錢
▲送料內地十二錢　海外卅五錢

●新案タトウ



本具は學校用裁縫箱にして疊めばタトウとなり携帶に頗る便且つ如何に狹隘なる机上に於ても決して用具の散亂する憂なく且つ家庭用として尤も重寶なり

特價　貳拾八錢
送料凡て一個に付　金五錢

●御手紙一本で何んでも御求めに應じます!!

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

電話本局六百四十番
振替口座東京五十番

滿天下の需要を充たすべく

法學博士文學博士 有賀長雄君著	■大日本歷史 上卷	洋裝 菊判 特製 紙數一〇〇〇頁	正價二圓	小包料拾六錢
同君著	■同 下卷	洋裝 菊判 特製 紙數一二〇九頁	正價二圓五拾錢	小包料拾六錢
文學士 久保天隨君註釋	■日本外史新釋 自一至十三 全部二冊	和裝 菊判 美本 各三〇〇頁內外	正價一冊參拾錢	郵稅一冊六錢
同君著	■文章軌範精義 上中下 全三冊	和裝 菊判 美本 各四〇〇頁內外	正價一冊四拾錢	郵稅一冊八錢
同君著	■四書新釋 大學	和裝 菊判 美本 紙數一二〇頁	正價拾五錢	郵稅四錢
同君著	■四書新釋 中庸	和裝 菊判 美本 紙數一七八頁	正價貳拾錢	郵稅六錢
同君著	■四書新釋 論語 上下 全二冊	和裝 菊判 美本 各三六〇頁內外	正價一冊四拾錢	郵稅一冊八錢
同君著	■四書新釋 孟子 上下 全二冊	和裝 菊刊 美本 各五五〇頁內外	正價一冊六拾錢	郵稅一冊八錢
同君著	■古文眞寶新釋 前集	和裝 菊判 美本 紙數六三二頁	正價七拾五錢	小包料八錢
同君著	■同 後集	和裝 菊判 美本 紙數七〇〇頁	正價八拾五錢	小包料拾貳錢
同君著	■唐詩選新釋 自卷一至卷五 全部五冊	和裝 菊判 美本 各二五〇頁內外	正價一冊參拾錢	郵稅一冊六錢
坪谷水哉君著	■增訂日本女禮式大全	洋裝 菊判 特製 紙數五五二頁	正價九拾錢	小包料拾貳錢

東京日本橋 發兌元

販賣用電話 本局二六二〇番

女(後付の二)

近く全國書店に顯れん

治庖會本部教授主任 安西古滿子女史著	四季毎日三食料理法 全四册 春夏秋冬	和裝 菊判 美本	紙數一〇〇〇頁	正價一册五拾錢	郵税一册八錢
故 尾崎紅葉君著	紅葉全集 自壹至六 全計六册	洋裝 菊判 特製	紙數五五五〇頁	正價一册壹圓八拾錢	小包料一册拾貳錢
故 國木田獨歩君著	獨歩全集 前後 全二册	洋裝 菊判 特製	紙數一六七〇頁	正價一册貳圓	小包料拾貳錢
故 樋口一葉女史著	一葉全集	洋裝 菊判 美本	紙數四八六頁	正價四拾錢	郵税十錢
文學士 大町桂月君著	美文韻文 黄菊白菊	洋裝 袖珍 美本	紙數四〇二頁	正價貳拾五錢	郵税六錢
鹽井雨江君 武島羽衣君 大町桂月君 共著	花紅葉	洋裝 袖珍 美本	紙數四二二頁	正價參拾錢	郵税六錢
大和田建樹君著	散文韻文 雪月花	洋裝 袖珍 美本	紙數六二六頁	正價參拾五錢	郵税六錢
文學士 土井晩翠君著	天地有情	洋裝 袖珍 美本	紙數二三〇頁	正價貳拾五錢	郵税四錢
少年世界編輯部編	明治少年節用	洋裝三六判特製	紙數六〇〇頁	正價七拾五錢	郵税八錢
少女世界編輯部編	明治少女節用	洋裝三六判特製	紙數六四二頁	正價八拾五錢	郵税拾錢
巖谷小波君著	改訂袖珍 日本昔噺 合本	洋裝 小判 特製	紙數四四〇頁	正價八拾錢	郵税八錢
同君著	改訂袖珍 日本お伽噺 合本	洋裝 菊判 牛截	紙數六五四頁	正價壹圓拾錢	郵税八錢

女(後附の三)

本町三丁目 博文館

振替貯金口座 東京二百四十番

家庭整理の指導

家庭百科全書

全部五十册＝毎月一回發行

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、轍もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概れ理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須いざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て、編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵稅一册金八錢

- 第一編 新家庭訓 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道 水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南 琴松園文雅君・松寺齋理常君共著
- 第八編 簡易治療法 藤井靜子女史著
- 第九編 禮式と作法 佐方鎮子女史著
- 第十編 惣菜料理 赤堀吉松君・赤堀峰吉君・赤堀菊子女史共著
- 第十一編 編物指南 三木とみ子女史著
- 第十二編 婦人の生理と衛生 牧野清子女史著
- 第十三編 教育お伽噺 木村小舟君著
- 第十五編 家屋と庭園 內山正知君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養 鹿野化骨君著
- 第十七編 女子作文法 遠藤ふみ子女史・松崎ふく子女史共著
- 第十八編 子女の教養 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味 文學士大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法 高橋忠次郎君・松浦政泰君著
- 第廿二編 歌の手引 大和田建樹君著
- 第廿三編 刺繡術指南 磯村大次郎君著
- 第廿四編 摘み細工指南 山田興松君著
- 第廿五編 新式化粧法 藤波芙蓉君著
- 第廿六編 室內裝飾法 近藤正一君著
- 第廿七編 衣服の調整 石崎蓬園君著

販賣用電話 本局二六二〇
發行所
東京日本橋

名家小說

洋裝菊判總洋布特製函入美本
紙質精良印刷鮮明各冊千頁以上

第一版以下數版を重ぬ

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の[illegible]文運の變遷一にして足らず、大家相踵ぎで出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の温雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸。本館此處に思ふところあり、名家小說文庫を發刊し、每卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も誦すべきものは悉くこれを蒐め、裝釘を美にし價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

露伴叢書　全二冊

前編目次

▼自傳　▼二日物語　▼夜の雪　▲[illegible]俤
▼縁の糸　▼休暇傳　▼毒朱唇　▼ひげ男
▼新學士　▼迷[illegible]　▼和合樂　▼川舟
▼大珍話　▼縁外縁　▼夢がたり　▼是はくく
▼醉郷記　▲珍饌會　▼鄰子庵　▼伊能忠敬
▼まき筆日記　▲寄合雜筆　▼地獄谷日記　▼將棊雜考
▼將棊雜話　▼元祿時代の雜劇　▼折々草

後編目次

▼椀久物語　▼春の山　▼當世外道の面　▼斷餓
▼封じ文　▼鐵三鍛　▼自縄自縛　▼夢日記
▼冷干水　▼箱根草　▼銃獵孝行　▼日蓮上人
▼ひとよ草　▼新浦島　▼鄭成功　▼易心後語
▼二宮尊德　▼滋賀紀行　▼醉興記
▼春の一日　▼文明の庫　▼うつしゑ日記
▼遊行雜記　▼旅の心得　▼知々夫紀行

澁柿叢書　全一冊

目次

▼釜叢　▼[illegible]の心　▼猿冠者　▼鐵火
▼聚樂贓　▼鳥居左衞門　▼是非もなき　▼不老術
▼新粧法　▼夢と夢　▼流の武士　▼親の[illegible]
▼五月女叛　▼一千一　▼男の面　▼油井正雪
▼大石内藏の助　▼碧玉盤　▼人風乾之介　▼他流試合
▼脫走兵　▼振武軍　▼密告　▼此の戀

柳浪叢書　全二冊

前編目次

▼おもかげ橋　▼昇降場　▼骨ぬすみ　▼[illegible]傳
▼今戸心中　▼隅田の夜路　▼罪の闇　▼變目
▼都の夢　▼狂言娘　▼畜生腹　▼重づま
▼貯金玉　▲花ぐるひ　▼幼時

後編目次

▼非國民　▼松原饅頭　▼[illegible]多　▼[illegible]蝶嬢
▼兄の煩悶　▼七騎落　▼紫袱布　▼二人やもめ
▼女夫心中　▼八幡の狂女　▼說ごゝろ　▼そまる糸
▼[illegible]敵牢　▼中川心中　▼淺瀨の波

女　後付の六

説文庫

各冊正價 金貳圓 小包料各二十錢

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇

秋聲叢書 全一冊

目次

鏡花叢書 全一冊

目次

花袋叢書 全一冊

目次

水蔭叢書 全一冊

目次

小波叢書 全一冊

目次

美妙叢書 全一冊

目次

好評ニ各編數版に及ぶ

通俗作文全書

記事論說或は紀行叙事等の雄編大作より尺牘簡書の日用文に至るまで、齊しく是れ文なる以上は、文明社會の人は皆文を以て互に意思を通じつゝある者と謂ふべし。然るに今日の狀況を見るに、百般藝術の駸々進歩するに反し作文の技のみ獨り退歩の觀あるは洵に痛嘆の至りといふべし。是れ多數の人士が文章に重きを置かざるに由ると雖も、從來作文法を敎ふる完全なる書籍なきもの亦其一因なりといふべし。敝館之を遺憾とし、通俗作文全書を發行し聊か以て此缺點を裨補する所あらんとす。其の目次は下に列記す。

全部廿四冊洋裝四六判
並製紙數三百頁
正價一冊三十五錢
郵稅一冊六錢宛

- 第一編 大和田建樹君著 ●文章組立法
- 第二編 大和田建樹君著 ●書簡文作法
- 第三編 田山花袋君著 ●美文作法
- 第四編 天城安政君著 ●商業作文法
- 第五編 青柳篤恒君著 ●評釋支那時文軌範
- 第六編 西村醉夢君著 ●紀行文作法
- 第七編 福田琴月君著 ●寫生文範
- 第八編 河村醉茗君編著 ●論說記事文範
- 第九編 西田敬止君著 ●女子消息文範
- 第十編 桑田米松君著 ●書翰文範
- 第十一編 大和田建樹君著 ●日記文範
- 第十二編 石崎篁園君著 ●祝賀弔祭文範
- 第十三編 山川直五郎君編 ●中等學生文範
- 第十四編 生田星郊君編 ●明治時代文範
- 第十五編 堀江秀雄君編 ●言文一致文範
- 第十六編 太田才次郎君編 ●古今名家尺牘文
- 第十七編 武田櫻桃君編 ●古今名家文選
- 第十八編 河井醉茗君著 ●新體詩作法
- 第十九編 久保天隨君編 ●新體漢文軌範
- 第二十編 近藤正一君著 ●古今才媛文集
- 第廿一編 久保天隨君著 ●美辭類語集
- 第廿二編 窪田空穗君著 ●短歌作法
- 第廿三編 內藤鳴雪君著 ●俳句作法
- 第廿四編 田山花袋君著 ●小說作法

販賣用電話 本局二六二〇番　東京 博文館 本町　振替口座番號 東京二百四十番

女（綾付の九）

□英語少年 第一巻第十二號 増刊 □十月十日發行□

ABC號

■四六判二倍大判紙數四十頁挿畫寫眞版豐富■正價十錢郵稅五厘■

△大懸賞英語考へ物

秋の學期に入ってから早や一と月となりました。燈下は益ゝ親しむ可く、一年中一番よく勉强の出來る時節となりました。本誌はこゝに増刊ABC號の一册を編んで、英語熱心の少年諸君に課外の趣味と實益とを供しようとします。記事は何れも一粒ゑりの面白づくめ、挿畫は本誌獨特の善美を盡した着色もの、教科書抔では迚も覺え切れぬ活きた英語が樂しみ乍ら苦なしにすんゝく覺えて行かれる所、全く此ABC號の特色である。賣り切れぬ間に御購めなさい。

東京本町 博文館

女（後付の十二）

蠻勇と強健は日東男子の生命也

((冒險世界第十四巻第四號增刊))

蠻勇號

洋裝四六判百二十八頁 口畫三色刷一枚寫眞版四頁 （十月十五日發行） 正價金十五錢 郵税一錢五厘

△二頁大石版畫＝大沙漠中の蠻勇旅行家（小杉未醒）

武俠小說 蠻勇俠客 押川春浪

文弱浮華の世の中に、「蠻勇號」ヌッと現はれ申した。色は眞黒、渾身は黒鐵の如く、丈八の蛇矛を提げて、如何に縱横無盡に荒れ廻るかを見よ。ハイカラは逃げろ！腐敗漢は隱れろ！輕薄男子は穴の中へでも潜り込んで仕舞へ！マゴマゴして居ると踏潰されるぞ。唯だ吾黨の快男子は來つて、此勇俠痛快なる「蠻勇號」を握手せよ！

奇拔簡易 強健秘術 諸大家談

△珍奇寫眞版＝サア何が出るか 奇想天外より落っ!!!

女（後付の十三）

販賣用電話本局二六二〇番　東京本町 博文館　振替貯金口座東京二四〇番

◀臨時增刊　第五卷第十二號　實業少年▶

冒險商人

■十月十五日發行■　四六判二倍大册上等紙七十二頁　印刷美麗毎號寫眞版數十面入■　正價十錢　郵税一錢■

親の建てた雪隱に糞をたれて居るばかりが商人の本能でも無い。宜しく世界の舞臺に大踏濶歩して日章旗を五洲に輝すべしだ男兒志を商業に立てた以上は峻嶺越ゆべし洪河渡るべしだ。蠻煙瘴霧冒すべしだ。怒濤狂飈凌ぐべしだ。飛彈も毒蛇も猛鳥も商業の前には怖ろしい物の有らう筈は無い。

古今に渡り内外を通じて大商小賈の冒險的行爲に屬するものは極めて多い。增刊「冒險商人」號はこれらの人物談史談を網羅し流麗多趣味の文字で紙上に活躍せしめやう。一讀膽張り目怒って忽ち天地の小ささをかこつであらう。

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二

實業俱樂部 第壹卷第十二號 增刊

當世見立鏡

洋裝菊判
紙數百五十四頁
寫眞口繪六頁
正價金十五錢
郵税一錢五厘

十月十五日發行

▼銀行頭取が大臣となり、會社の社長が男爵となる。朝に百萬圓を提供するあれば、夕に私財を抛つて學校を興す者あり、時代の轉化なり。

▼行燈が洋燈になり電燈になり、駕が車となり汽車となり電車となり、果は自働車飛行機となる。之も時代の轉化なり。

▼『當世見立鏡』は、此の轉化した時代の反映なり。淨瑠璃の鏡なり。厭でも顔が映るなり。仕事があり〱見えるなり、大きく云へば天下の形勢が一目に解るなり。

▼鬼が出るか蛇が出るか、出た上でなければ正體は極め難し、唯だ一巾の豫め知る可きは。之を秋の夜長の徒然に繙けば、全部を見盡さずしては眠るが惜しきだけは請合なるにあり

東京 博文館 本町


柳清香油
瓊姿香油
フロラー香水
二十錢 一圓五錢 一圓八十錢
美術小間物
化粧品
東京日本橋通二
柳屋本店
電話本局二〇一


佛國メルマン會社釀造
アルコール分少く滋養豐富なる葡萄酒
マルタン赤白葡萄酒
食卓用として又藥用として到る處の家庭に愛用せられつゝあり
MEDOC SUPERIEUR
Merman & Co
BORDEAUX
R YAMADA-YA
星印マルタン葡萄酒
横濱 東京
山田屋

JOGAKU SEKAI.
PUBLISHED MONTHLY, BY THE HAKUBUNKWAN, TOKYO, JAPAN.
ENTERED AT LOS ANGELES P. O. AS SECOND CLASS MAIL MATTER.
女學世界　第拾壹卷第拾參號　(毎月一回廿三日印刷納本)
明治四十四年十月廿三日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可